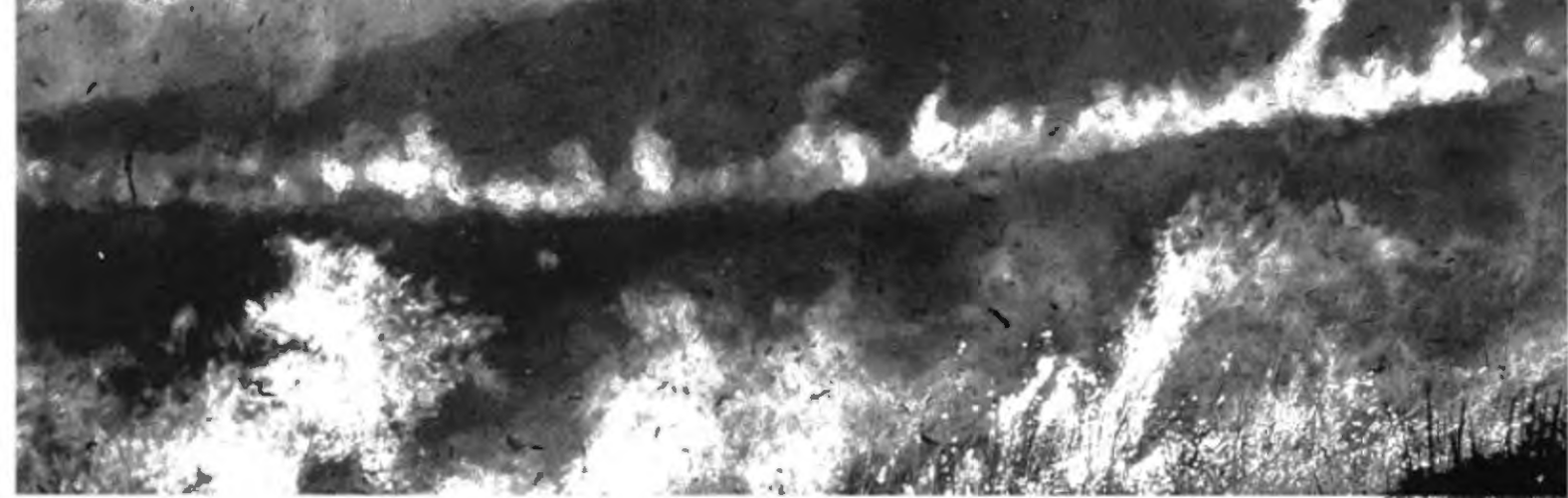


草 原 に こ こ ろ を こ が せ



秋吉台草原シンポジウム2001/全国山焼きサミットin秋吉台

AKIYOSHIDAI
GRASSLAND
SYMPOSIUM
2001 2.16_{Fri.}~18_{Sun.}

報告書

秋吉台草原シンポジウム・サミット実行委員会



秋吉台草原シンポジウム2001
全国山焼きサミットin秋吉台

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001 2.16_{Fri.}~18_{Sun.}

と き 2001年2月16日(金)~18日(日)
と ころ 秋吉台国際芸術村ほか

秋吉台宣言

今、草原景観は存亡の危機を迎えています。この危機は、そのまま草原に生きる虫や草花の絶滅の危機を招くと同時に、先人達が築いてきた草原文化を根底から揺るがそうとしています。農林業や畜産業の衰退によって、採草や放牧という利用目的が失われつつあるからです。草原景観の維持は、各地域共通の問題点です。

一方で、社会の進展と高度化によって、触まれ疲労した心の癒しの場所として、美しい草原には多くの人々が訪れるようになりました。人々の健康と安らぎにとって、草原はかけがえのない場所となってきたのです。そこには観光、福祉、健康という新たな生業も育ちつつあります。

本日「秋吉台山焼きサミット」に集う自治体は、草原景観を「地域の宝」、「国民の財産」として維持保全していくことを話し合いました。また共に、「人々の癒しの草原」を管理保全する責務も認識しながら、運営上貧窮している実状も協議しました。今後は機会あるごとに、こうした実状を国や国民に訴えかけ、「国民の財産」、「地域の宝」として、援助と支援を要請しながら、草原景観の維持保全に一層の努力を傾注することを宣言いたします。

2001年2月17日
全国山焼きサミットin秋吉台

開会あいさつ

実行委員長
阿座上 昌亮



おはようございます。こうして21世紀のはじめに、この「秋吉台国際芸術村」で「全国草原シンポジウム」、また「山焼きサミット」を開催するに当たりまして、日本全国、北は北海道から南は九州宮崎まで、数多くの皆様方にご参加いただきましたことに、大変厚くお礼を申し上げたいと思います。

「秋吉台国際芸術村」という名前でご参加いただきましたが、残念ながらここから秋吉台の草原を見ることはできません。この芸術村も計画当初には台上という計画もございましたが、色々な規制、保護等ありまして、この地に落ち着いた訳でございます。

そういった色々な規制がかけられ、秋吉台の草原も今まで守られてまいりました。一番今私どもが見ていただきたいのは、秋吉台の最高峰である「龍護峰」でございますが、あそこへ上がりますと、西側に「西台」と呼んでおります山がありますが、秋吉台と同じカルスト台地であります。しかしそちらはもう、セメント会社・石灰会社が、今、四方八方から掘り尽くしております。一步保護の手を間違うとそうなるんだというのが龍護峰へ上がると一目瞭然、よくわかる訳であります。今日明日の日経のうちにはそこまでの事は入っておりません。また機会がありましたらゆっくり見ていただいたらというふうに思っております。

こうして、昔どこにでもあった草原が、今本当に希少な価値として数少なくなっています。まあそういった中でここ秋吉台の草原も、やもすると人手不足とか高齢化とかで草原の維持が難しくなっております。まあこれは、今日お集まりの皆様方、どの地区にも同じ課題かと思いますが、しかし、「草原」というのはやはり人類の宝であるし、やはり人間の心を癒す場でもあるというふうに思っております。これを秋吉台の場合、山焼きの歴史が600年といわれておりますが、そういった中で人間の手で作られた草原、これを今からも人間の手で守って行かなければならない。これが今私どもが考えております大きな課題であります。それに向かって日本全国の同じ悩みを持つ各団体、自治体の方にお集まりいただきまして、より一層連携を取りながら、何とかこの問題が解決できればというふうな形でご案内をした訳でございます。そうした趣旨を御理解の上、本大会が最後まで有意義に終わります事をお願いいたしまして、開会の挨拶にしたいと思います。

歓迎あいさつ

秋芳町長
上利 礼昭



ご紹介いただきました地元秋芳町長の上利であります。ようこそ、ここ秋吉台国際芸術村に、北は北海道から南は九州まで、全国の各都道府県から遠路わざわざこの秋吉台にお越しいただき、美東町・秋芳町を代表いたしまして、心からご歓迎を申し上げます。ようこそいらっしゃいました。

この度、「秋吉台草原シンポジウム2001」、「全国山焼きサミット in 秋吉台」、をここ秋吉台でこのように盛大に開催できます事は、地元両町といたしまして誠に意義深く光栄に存じております。

草原を取り巻く課題は、地域によって異なっておりますが、この草原をどのようにして、今後守りながら維持・管理し、また利活用していくためには、お互いに知恵を出し合い、地域の実情に沿った取り組みをしなければならないと思っております。

こうした時に全国各地域から、草原に関わりのある方々のお集まりをこのようにいただきまして、こうした会が催されることは誠に意義深い事と思っております。どうかこうした機会にお互いに交流を深められまして、それぞれの立場で本サミットなりシンポジウムがより良い成果を上げられるよう念じて止みません。

終わりに、本会開催に当たりまして、格別のご尽力をいただきました山口県御当局、実行委員会の皆さんや、御指導いただきます関係各位に厚く厚く御礼を申し上げます。はなはだ措辞であります。歓迎なりお礼の挨拶とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございました。

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001

秋吉台草原シンポジウム2001



■基調講演

秋吉台の山焼き

—自然の利用と保護をめぐって—

講師 秋吉台科学博物館長
庫本 正



司会

これより「秋吉台草原シンポジウム2001」第1部の基調講演に移ります。

基調講演の講師は、秋吉台の「物知り博士」として有名で、現在も山口県環境教育学会会長など多くの役職をお努めの、秋吉台科学博物館館長の庫本 正様にお会いしました。

「秋吉台の山焼き 自然の利用と保護をめぐって」と題したテーマでお話しをいただきます。

それでは庫本様よろしくお聴きいたします。

庫本

只今ご紹介いただきました。庫本でございます。

今日は日本各地から草原を愛する方々がたくさんお集まりになりまして、熱のごもった様々な討論をしようという台議です。それに先立ちまして私が秋吉台の生い立ち、また利用の歴史についてご紹介しようということでこの壇上によがらせていただきました。しばらくの間ご静聴をお願いいたします。

秋吉台というのは、もうみなさんに算になった方がほとんどじゃないかと思うのですが、大変素晴らしい草原でございます。この風景というのは、ひとつは大地の歴史。秋吉台の場合でいきますと3億年という日本でも一番古い岩石からできている、非常に古い土地でございます。3億年という長い年月をかけて自然が作り上げてきた素晴らしい風景が見える訳です。ここでは「カルスト地形」という興味深い地形が見えます。

そこに縄文時代以来、人が住み着きまして、人がずっとこの秋吉台を利用して来た訳でございます。台の上を歩いておきますと、様々な人間の使った道具が落ちていますが、

今から40年前くらいでしょうかね、秋吉台で学術調査を行いました。そのときに一番古いところでは、縄文時代のごく早い時期に使われたイヤリングが出てきたり、あるいはナイフのかけらが出てきたり、いろんな道具が落ちておりました。それを拾い集めていきますと、早くからこの秋吉台の上に人が住んでいたということが分かった訳でございます。

弥生時代になりますと、農耕を伴った文化でございますから台の上の利用は非常に少ないのですが、台の周辺に広がる「ポリエ」と呼ばれる平野がございまして、そこにたくさんの人達が住み着く。これは北九州、九州から奈良に向かってですね「弥生ロード」という大きな弥生遺跡が連続に分布している地域があるのですが、この秋吉台はそのど真ん中に入ってきます。非常にたくさん人の弥生人がこの秋吉台の周辺に住み着いた訳でございます。何を求めてこの山の中に住み着くようになったのか、というので以前から議論が重ねられてきている訳ですけども、秋吉台には素晴らしい産物がある。弥生時代というのは、稲作と同時に金属の文化を持っておりますが、その金属が秋吉台から採れる。秋吉台の周辺にあります弥生遺跡を最近掘ってみますと、ほとんどが産物、例えば鉄だとか銅だとかの金属を精錬するのに必要な道具が出てまいりまして、これらを目指してみんなやって来たんだなあ、ということが分かります。人による台上の利用はあまり多くないですね。

ところが奈良時代になりますと、この秋吉台で田が、稲が支配する産物ができてですね、積極的にこの採掘が行なわれる。こういふように、秋吉台では非常に古くから人が利用をしてきております。

ですからこの「風景」を見ると、地球3億年の歴史と、そこに住み着いた人々が利用した跡がそのままずっと風景の中に刻み込まれておりまして、それがとても美しい訳でございます。3億年の大地を創った、大地生成の神はとても

思い神様であったんだなあ、またそこに住み着いてきた人々はとても優しい利用の仕方をしてきたんだなあ、ということが目に見えまして、大変気持ち良くなる訳でございます。

まあそこで、時間の許す範囲で、秋吉台の歴史の重要なポイントだけをご紹介しますと思います。お配りしましたシンポジウムの冊子の中に、11ページから豪華書きで地域史及び利用の歴史を書いておりますので、ちょっとご覧いただきなからお聞きいただければと思います。

秋吉台で一番大きなポイントになるのは何かというと、石灰岩という岩石でできた山だということです。これは今から30年前、私の先輩になりますが、秋吉台科学博物館におりました大田正道という学芸員が研究したことです。彼によると秋吉台の上にはたくさんの化石がありますが、その化石を調べていくと、秋吉台は3億年前の珊瑚礁だったということが見えてきた訳です。彼は大変細かい詳しい研究をして珊瑚礁、環礁であったということを証明しました。秋吉台の石灰岩の起源というのは当時非常に大きな海の連が彼方で誕生した珊瑚礁が、そのまま固まってこの秋吉台の石灰岩になった。ですからこの石灰岩の中にはたくさんの化石が入っておりまして、サンゴだとかウミユリだとかアンモナイトだとか、様々な生物の化石が入っておりまして、それがそのまま残されておりまして、秋吉台珊瑚礁の生成の歴史は、今から9億5千万年くらい前にですね、海の海底火山が噴き出した小さな島の上には様々な海の生物が住み着いていく訳です。そして約1億年もの長い年月を掛けて、今から2億3千万年くらい前まで約1億年くらいの年月を掛けて、厚さ900メートルという巨大な珊瑚礁の塊ができる訳でございます。まあその歴史が見えてきて、秋吉台の起源というのは前の海で、非常に暖かい前の海で、サンゴ礁という非常に静かな世界で生まれてきたもんだなあ、ということが分かってみんなとてもワクワクいたしました。

その次に非常に大きな話題をなしたものは何かと申しますと、「秋吉台の珊瑚礁がひっくり返っている」という研究が行なわれました。実はこれは大正時代の終わり、大正9年、10年頃から昭和の初めにかけての研究です。東京大学に小澤俊明という地質学の先生がいて、先生は卒業論文を書くために秋吉台にやって参りました。そして秋吉台を中心にずっと広い範囲の地質調査をしまして大変大きな発見をする。秋吉台の大地がですね、普通ですと、今お話ししましたように珊瑚礁ですから出来始めの頃は3億5千万年前に住んでいた生物が住み着く。それから次の時代の生物が住み着きそのまた次の時代の生物が住み着く、それが段々、段々と新しく上に乗っかっていって巨大な珊瑚礁になっていく訳ですが、それが全くひっくり返った状態で出てくるということ。秋吉台の北半分ですけれども見つけましてですね、これはどうしてだろうかと考えた訳です。そしてもう素晴らしい研究をなさる訳ですが、この研究が

実は、大学の卒業で始めた研究がうちに博士論文になり、学士院選考員に輝くという大変すごい研究でした。それはどういうことかという、秋吉台の大地をひっくり返すような大きな地殻変動があった。これは古生代の末期、今から2億年くらい前のこと、非常に大きな、後に「秋吉海山運動」という名付けられる地殻変動なんです。それで大きく秋吉台がひっくり返った。そしてこの秋吉台をひっくり返した地殻変動が、日本列島の一番高い峰格、屋台骨を造ったと語らうんです。小澤先生の研究は「日本列島の起源」を論じるという大変大きな仕事になりまして、高い評価を受けまして、学士院選考員に輝いたということです。それは昭和元年のことです。ところが小澤先生は大変残念なことに30歳の若さで亡くなってしまいます。小澤先生の研究以来、秋吉台は非常に有名になりまして、日本中の地質学者がどーっとやってきて、もう征々と研究を続けています。いまだにその研究は続けられています。秋吉台に取組んでおられる地質学者は本当にたくさんいらっしゃいます。毎年すごい成果を上げております。まあそういう山だということでございます。

それからもうひとつは、中生代の終わり頃になりますと秋吉台の石灰岩の中にマグマが入り込んでくる火成活動が起こりまして、火山活動の影響を受けました。石灰岩の中にマグマがどんどん入り込んでくると、それが石灰岩と接する面で侵蝕交代結晶という鉱物をたくさん湧き出してくる。長谷川山をはじめ青森山、於福山、あちこちに鉱山跡がございましてけれどもその元を造った。中生代の「地球の盛り場」でございます。同時にそれら石灰岩を温めて焼き尽くしていきますので、石灰岩から大理石がたくさん生まれるということになってくる訳です。だからとても素晴らしい珊瑚礁の山が、やがて鉱物をたくさん持った山、大理石を含む山になるということになる訳です。

今の秋吉台が出来上がってくるのは新生代の、そうですね今から数百万年前のことでございます。秋吉台で一番高い「龍護峰」というところは、あの平均面ができたのが約200万年くらい前じゃないかなあ、「長谷川山」のあの下の辺りの平坦面は100万年くらい前かなあ、という具合にだんだん下がって来て、地形が出来上がった様子を伺い知ることができる訳です。秋吉台はまあそういう非常に長い、すごい歴史を持っております。

今度は人の利用の歴史を申しますと、最初に縄文人が住み着き、弥生人が住み着き、奈良時代には龍山が栄えた。日本最初の宮宮の龍山ができた、ということをお話ししましたが、やがて中世の初め頃になりますと、秋吉台の上に人がたくさん入ってきて、農業技術の進歩とともに台を草原にしていけます。山を焼くことによって草原にいきます。何百年前の初めかということになる訳ですけども、実は考古調査をして秋吉台の上でいろんな遺物を調べていけますと、縄文時代のものは結構たくさんあるんですが、弥生時代になると非常に少なくなってきて、次に遺物がたくさん出て

くるのは中世の初め頃のものです。ああ、この時期に里の人達が里山である秋吉台の上に来て、山を焼いて草原にして、そこで草を採るようになったんだなあ。同時にドリーネ耕作が始まったんだなあ。ということが分かる訳でございます。

江戸時代になりますと、秋吉台は「千穀台」と呼ばれ、たくさん草が採れるところだということになりまして、恐らく当時の人たちはみんな互いに競争をするように草を刈っていた。この地域には「朝飯を刈る」という言葉がございますが、朝まだ暗いうちに馬や牛を連れて秋吉台の上へ上がってきて、草を刈って馬や牛の背中にたくさん積んで家へ帰る。帰ってから朝飯を食べる。というそういう生活の様式が成り立っていたということでございます。まあ江戸時代には大変草原が賑わったということが当時の記録に書いてあります。

ところが明治になりますとガラッと様子が変わってまいりまして、日本の国が誕生していく訳ですけれども、最初に目を付けるのは何かと言うと陸軍でした。帝國陸軍でございます。最初は小倉の砲兵隊がやってきて、秋吉台の上に「砲台山」という山がありますが、そこに大砲を運んで長者森に向けて大砲を撃つ。あるいは広尾から砲兵隊がやってきて長者から羅漢峠へ向かって大砲を撃つ。そういう演習を始める。山口市に連隊ができますと、大変すごい演習地になりまして、演習もできまして連日演習をしています。大正時代の陸軍の地図なんかを見ますと、今の山の名前がみんな違ってまして、「井筒山」とか「霧峰山」とかやはり源平合戦、二つに分かれて陣取り合戦の演習をする訳ですが、そういう陸軍の山の名前がきちんと記載されておりまして大変面白い訳でございます。

また同時に明治になりますと「殖産興業」、産業を興せということが各官庁になりまして、小野田セメントが最初にセメント工場の採石場を持つとか、あるいは大理石の採石が非常に盛んになります。大理石も、地元の方々が大理石の採掘をしていく。やがて国が東宮御所を通るとか国会議事堂を通るとかということになりますと役人がたくさんやって参りまして、大理石の調査をしまして、この石を持って帰りました。その中に本間俊平という、大変素晴らしいクリスチャンの方ですが、この秋吉台に住み着きまして大理石産業を興していく。そして同時に様々な教育を行ないながら、大変素晴らしい思想をたくさんの方に広めていく。そういうようなことも行なわれていきます。

やがて観光も興ってまいります。明治30年代の後半頃から極原文治郎という滋賀県の方ですが、良寛臨山を賞いにやって来るのですが、日露戦争で大儲けをする訳ですね。そのお金を今の秋芳洞に投じて観光開発をしました。今の秋芳洞、当時は「滝穴」と呼ばれていましたが、それが観光開発されるのが明治43年です。この頃に開窟式がおこなわれました。当時の滝穴を見ますと大変すごい洞窟で、身も心もとろけるような素晴らしいところだ。これを世界中の

人に見てもらわないでどうするか、というので極端開発に踏み込んでいく訳です。

第2次世界大戦中には恐ろしい利用の仕方が出てきます。銃が無くなくなったというので、秋吉台の赤土の中から鉄を採せということで、山を掘り下げて鉄を採ったり、最清河などは飛行機の格納庫として、洞窟の中に飛行機を格納しようという、あの前を飛行場にしまして飛行機の格納をしようという計画も出来ましたが、あまり使われない内に終戦になってしまいました。

そして戦後になりますと、この素晴らしい草原を何とか利用しようということで、やがて開拓団が入ります。昭和20年ですね。そして台の上を開拓します。しかしジャガイモを植えても「ジャカ豆」と言われるくらい豆粒ほどの大きさにしかならない。あまり豊地には適していないということが判ってまいります。やがてそうしているうちに渡航量が入ってまいりまして、最初山口市にはニュージーランドの農産物が入ってくるんですが、オーストラリア軍、ニュージーランド軍、一緒に入ってくるんですが、やがて秋吉台のこの草原を利用して演習を始める。毎日毎日すごい演習をする。まあこんなトラブルもあったということも聞いてますが、開拓団の人が一生懸命で畑を作っていた。そうしたところがそこへオーストラリア軍、ニュージーランド軍が畑の中を走り回って演習をする。大変被害を受けた。こんなことでどうなるかと言うので開拓団の方が言やオーストラリア軍に抗議を申し込むということになります。そうするとそこから「それは申し訳ない事をした」というので、保証を払いましょうということで保証金が下りた。「その金額がずかかったんですよ」と言っておられました。昔は「円」が非常に重かったものですから、支払う側にしてみれば大した金額ではなかったのですが、受取る側では大変たくさんのお金を頂いたという感じがしたんでしょうね。そういうことがございます。やがて高百場も米軍に移っていく。自衛隊ができますと自衛隊が演習をする。この草原の中で銃砲を持って走り回る兵隊さんがたくさん出てくる。そういうことで演習場として使われていきます。

ところが昭和31年に大変大きな事件が起こる訳です。それは何かと言うと、今の岩田の海兵隊、岩田に海兵隊の基地がありますが、そこから飛びたった飛行機が秋吉台の上に来て、剣山という山を中心に空爆、ナバーム弾を打込むという空爆演習場として使いたい。今までのように陸軍の歩兵が走り回るといふんじゃなくて、ジェット機で空爆をするという演習場にしたい、と言う申し入れがありました。これには山口県知事も困ったし、秋吉町長さんも美東町長さんもみなさんがたいへん困られた。どうするか、「反対しよう」ということになりまして反対運動を起す訳です。ところがこの反対運動は大変大きな風潮をしまして、それが成功するんです。秋吉台は、先程も申しましたように、小澤先生の研究以来日本列島の起爆を論じる大変重要な山だ。これを「たかが戦争の演習で楽しいい

のかということで、山口大学に松山基範先生という地球物理学の大家がおられまして、九州大学の先生だとかたくさんのお吉台を研究する人達が集まってきて真正面から米軍とやり合う訳でございます。当時の小児科知事さんの話を聞くと「アメリカ軍はグランドキャニオンやナイアガラの端で空爆演習をやりますか」ということを言ったというんですね。そしたら米軍の司令官は「いや、そんなことはしない」と。「秋吉台がそんなに学術的に大切なところなら、それは我々が空爆演習をするのは間違いない」ということになりました。秋吉台から米軍が撤退していったんです。今沖縄問題で大騒ぎをしていますけれども、米軍はなかなか普通のことでお断りしないのですが、いわゆる国宝のように「人類の宝」、大変重要な山だということになりますと、それは話が違ってしまうということになりましたという、日本では非常に数少ない基地反対闘争の成果じゃなかったかなと思います。

やがて米軍が去っていくと、秋が秋芳町、美東町も大変賑わって、やがて観光の新しい街づくりが進められていきます。それまで秋芳町だけでお客を集めていましたが、秋吉台の上にも上がられる。秋吉台の壮大な草原を見ることができ、楽しむことができるということで、やがて秋吉台上の観光開発が進んでいった訳でございます。

すっかりみなさんおいでになられたので、秋吉台の素晴らしい美しさというものを、今日も向こう岸でたくさんの方々の写真撮影をやっておりますので後でご覧いただきたいと思っております。地元の方々が秋吉台に取組んで一生懸命になって写真を撮っておられます。「秋吉台の自然に酔いひびき」と言う、自然に親しもうという方々が秋吉台で勉強しながら写真を撮るといって観光客をやっておりますので是非見ていただきたいと思うのですが、私もちょっとここにスライドを用意しておりますので、20分くらいちょっとスライドをご覧いただきたいと思っております。

(スライドBGM 以下は藤本氏によるナレーション)

秋吉台は石灰岩の山です。
3億年の昔、海の中の生物が珊瑚礁を築き石になりました。
秋吉台の石灰岩の中にはおびただしい数の海の生物の化石が見られます。

秋吉台の春は台地の中からやってきます。
傾げ部にフキノトウ、ペニヤマダケが芽を出します。
ペニヤマダケの赤は秋吉台の赤土の色を集めた見事な赤です。
しばらくするとたくさんのお草が芽を出し始めます。
葉も葉も十分に伸びるから、もう花をつけ始めます。

センボンヤリ、オキナグサ、こういった野草たちです。
こうなると後は野の野草たちの大洪水。赤、紫、黄色、白、色とりどりの花がカルストの野づらに溢れます。

5月を過ぎると秋吉台にはまた別の野草が花をつけます。
ジャケツイバラ、ムラサキ、カキランなどです。
そして梅雨の季節には連日の雨。「降り水」には一時的な潮もあられます。

雨が上がると猛烈な暑さが台地を支配します。
人々は大きな木の下で涼みます。
ゴキウリが美しい花をつけます。

お盆を過ぎると秋吉台に秋の気配が強まり、クズ、ネキョウ、ススキ、ハギといった秋の七草が花をつけ始めます。
後には、マツムシ、カンタン、ゴキウリなどの虫たちの大合唱。秋吉台が暖も輝く季節です。

10月になると秋吉台の主人公、アキヨシアザミが花をつけます。
そして夜の冷え込みが強くなると、草は色づき始め紅葉が始まります。
この頃になると夜明けに霧が立ち始めます。
周囲のボリエを運ぶ雲海、秋吉台の台上を南に流れる霧の川。
幻想的な風景が浮かび上がります。

12月になると秋吉台の葉は枯れ果て、只様な枯れ野が現れます。
それでも雨や雪が降ると、草は急に生氣を取り戻し芽を始める。
秋吉台の冬景色で最も心をとらえるのは雪の窟でしょう。
雪が石灰岩をすっぽりと覆うといろいろなモンスターが現れて私達を驚かせます。

2月の第3日曜日は「山焼き」です。
1,000人も地元の人々が台地を取り囲み、花火を各所に一面に火を放ちます。
火はたちまちのうちに燃え上がり大地を焦がしていき、火は風を呼び、風は火を運らせ大地は焼けていきます。

山焼きが終わると秋吉台は黒一色。
それでも時(口は名残)の雪が降ることもあります。
この地方の人は「晩山降り」と呼んで、この雪に愛情を込めます。
台地の雪は白く冬に濃くなり、草が芽生えて日に日に色づいていきます。
そして再びペニヤマダケの赤に出逢います。
こうして秋吉台の季節は繰り返してゆきます。

秋吉台は生物達の世界です。
岩の中に閉じ込められた3億年前の海の動物や植物。
そして赤土の中や洞窟から出てきたニッポンサイヤトフコ
ケツク、オオツノジカといった50万年前の動物たち。
そして今秋吉台で出逢える草や虫。
時の流れの中で命は継ぎに伝えられ、命の環が出来ました。
この命の環こそ、私たち人類を支えてくれているのです。

(スライド終了)

秋吉台の四季をちょっと見ていただきました。
山焼きが明日おこなわれますが、今のスライドで見るよ
うな、あんなちやちやなものではございません。もうホントに
すごい感動を伴うものでございます。

秋吉台の利用もやがて観光時代を迎える。世の中がこ
こ20年、30年のうちに大きく変わりましたね。

何もなかった時代から、段々と車が増えてきて車社会へ
農業も、ひとつひとつクワで耕していた、そういう農業から
機械化が進んでいきまして、やがて肥料も何も草を使う必
要はない、化学肥料でいこうというそういう時代に向かう。
大きく変化をいたしました。

それにつれて秋吉台の利用の仕方もしっかりと大きく変わ
ってまいりました。それまでみんなが競うようにして草を
刈っていた草原も段々刈る人が少なくなる。やがて観光客
が増えて、小さな道を車が走るのではどうにもならないと、
「長者ヶ森」の中に車が駐車場のように入るといった時代もあ
りました。これも困ると言うので、やがて有料道路、秋吉
台の自動車道路ができた。これも賛成、反対をめぐって盛
んに議論された訳ですが、秋吉台の中央を、現在は車が走
っております。まあそういう時代です。

やがて、「今何が起こってきているのか」と言うことにな
る訳でございますけども、農業としての利用の仕方は非常
に少なくなってまいりまして、どちらかと言うと観光主体の
利用の仕方。観光ももうまでの秋吉洞中心の観光から秋吉
台の上を歩く。いわゆる素晴らしい草原に触れて心を癒し
ていただく。そういう観光が広まってくる。まあ「エコツー
リズム」というような形のものが増えてくる。という形
のものになってきております。

私は長い間自然公園の指導員をさせていただいており
まして、暇があれば秋吉台を歩くようにしておる訳ですけ
れども、毎年報告をする義務がございます。報告にここ20
年くらいずっと同じ様なことを書いてまいりました。どんな
ことを書いてきたのかというと、秋吉台の上には歩く人が段々
増えてきた。いたるところで歩く人たちのために道が割けて、
土や石が流れて非常に土壌浸食が盛んに起こって、もうど
うにもならない。これをなんとかして直してくれないだろ
うか。ということを毎年毎年書きました。つまり秋吉台の上
をたくさんの人が利用する訳ですが、利用すれば必ずどこ

か壊れる。規模の大きい小さいは別として、やはりどこか
壊れるんです。だから壊れるところを最初から少しづつ計
画的に修復していかないと、流れるままに任せているんじ
ゃいけない。よく考えてみたら、縄文時代以来、秋吉台を
丁寧に補修するということはなかったんじゃないだろうか
かと感じる。

まあそれはちょっと大変な話ですが、実際に「ワイズ
コース」ということが今盛んに叫ばれている。昭和30年
ですかね、秋吉台が国定公園になりました。「かしこい利用の
仕方」、壊さないで利用しようじゃないかというのが進ん
でいるのですが、これは誠に理想的なお話ですけどね。ど
うかが実際に山の上を歩いてみると壊れている。

例えば「長者ヶ森」。秋吉台の中心にある「長者ヶ森」に行
きますと、300年も経ったような大きな樹が森を造っている。
簡単にできるものじゃない。その森の中に入ってみると
ですね、大きな木が一本倒れ、一本倒れ、一本倒れ。で、木
蔭の光が入ると癒が生えるかと思うと全然駄目なんです。何
故かと言うと、長い期間の土を踏み固めてしまってカッ
チンカッチンにしている。近頃は国定公園で落ち葉を拾
いに来る人がいて、ちょっとこれは困ったことだねという
ことで、そこを利用していくと壊れていく。例えば「若竹山」
だとか「北山」という山ですが、大変展望がいいんです。尤
も変態めが強い訳です。皆さんそこへ上がる訳ですが、やは
りたくさんの方が行きますと「オーバーコース」になりまして、
使い過ぎになりましてですね、草がやがて干切れて、剥が
れて、土になって、土壌浸食を起してしまう。これは大変困
ったことです。

山口県では今から6年位前ですかね、県が思い切って何
億というお金を使っ込んで補修してくれたんですよ。
「若竹山」と「北山」と。これは素晴らしいということで、国定
公園にとっては画期的なことだといっている私は大変喜んで
ございます。

これからは秋吉台を太い利用していかなければなら
ない。しかし利用して壊してしまったのではどうにもならない。
「壊れない利用」というのはちょっと考えられない。だから
そこで研究をしないといけないんです。『壊れないよう
に利用するためにはどうしたらいいか』という研究から始
まって、常に秋吉台の「健康診断」をしながら、私たちも健
康診断を受けてますね。健康診断しながら、少し悪いところ
があったら早く手を打ってですね、直していくと。そういう
ことがこれからはとても大切になるんじゃないかなあとい
うことを感じています。

とは申しまして行政にそれをお願いするというのはな
かなか参りませんので今の時代は「ボランティアの時代」で
すから、ボランティアでやろうじゃないかということでも
すね。「秋吉台パークボランティア」。秋吉台の修復をするこ
とを専門にしたボランティア活動をたくさんの方が集まっ
てやっております。本日の実行委員会の中にも「秋吉台パ
ークボランティア」のメンバーも関わっております。

資料会の中でもまたそうした話が出るかと思いきりけれども。

まあこれからは、ただ使いつぶなしというんじやなくて、壊さないようにするにはどうしたらいいかということを一生涯余みんな考えながら利用していく、そういう利用の仕方がとても大事じゃあないかなあという気がいたします。

秋吉台をこうして観ておりますと、演習場の時代から放牧場もできましたし、草をみんなが持って帰って来る、虫が少なくなった、といろんな時代でいろんなことが行われて来た訳ですけども、これからは、それこそみなさんと大いに議論をしながら、英知を集めながら、固定公園として、自然公園として正しい利用の仕方を積極的に推し進めていって、すばらしい秋吉台を守るといいなあと思います。

秋吉台の草原もですね、今から30年くらい前ですかね、ネザサが一斉開花してみんな枯れてしまいました。自然の「大実験場」です。これは、やがてそこから芽が出てきて、それもチガヤ(茅)とかススキがパァッと繁茂したんですが、やがてとんとんとん目に見えながら変わって行って、ススキが少なくなってネザサが多くなってきております。また温暖化の影響でしょう、草丈も随分高くなってまいりました。「わあこれはずいなあ、中は歩かれんなあ」と心配しておりましたが、その高い草の下にはヒメノシラクショウだとかホンゴウソウだとか、その下に生きる植物たちがまた芽生えてきて、「おっ」といって観ております。いろんな虫、バッタやあるいはカタツムリの仲間、キュウシュウシロマイマイなんていうカタツムリもいるんですが、これは低い草の根を非常にうまく利用して大繁栄を続けております。秋吉台の上を歩いておりますと、草丈の非常に高いところもあれば非常に低いところもありまして、本当に多彩な植生が見られる。それを見て歩くとワクワクするような面白い現象がたくさんあります。このカラカラに乾いた草原の中に湿地植物、そんなものがパァッと生えている、そんな場所が延々と出てくるんです。何故そんなことが起こっているのか、石灰岩の間にある不透層が深くから水を運んでくるということも考えられますが、自然というのは本当に恐ろしくも尽さない、大変素晴らしいものでございます。

地質学の研究、化石の研究、カルスト地形の研究、動物や植物の研究、今、草原がですね、日本中から姿を消して参りまして、絶滅の危機に立ち至った状態となりました。秋吉台には絶滅に瀕した景観があり、また絶滅の危機に瀕した動物や植物がいっぱい中にある訳です。これを大事に守らなければならない。秋吉台にとって「新しい草原文化を守ろう」という動きがございます。

まあ、こうしてみなさんも今日、明日と秋吉台に実層に接して、「どうしたら秋吉台を守るか」という議論をなさる訳ですが、是非活発な意見を頂いて、素晴らしい秋吉台を後世に、素晴らしい草原を後世に伝えていきたいと思っております。どうかよろしくお願いたします。

大変まずい基礎講演になりましたが、ご聴取ありがとうございました。

司会

ありがとうございました。

映像を受けての大変素晴らしい講演でした。大変ありがとうございました。

今一度大きな拍手をお送り下さい。

■第1分科会

『観光と保全』

— 事例発表 —

事例発表 秋芳町わくわく村村長
松原 肇夫

平尾台の自然を考える会
浦田 健作

防長交通株式会社観光部長
春野 義一

進行 熊本大学法学部教授
佐藤 誠



佐藤

「観光と保全」の分科会を始めさせていただきます。
最初に報告をしていただきますみなさんをご紹介します。
最初は防長交通株式会社、観光部長の春野義一さん。

春野

先ご紹介をいただきました、防長交通の観光部で部長をやっております。春野と申します。よろしくお願いたします。

佐藤

2番目に秋芳町の「わくわく村」村長の松原肇夫さんです。

松原

「わくわく村」の村長をやっております。松原です。地元の名です。

佐藤

3番目に「平尾台の自然を考える会」の浦田健作さんです。

浦田

浦田です。よろしくお願いたします。

佐藤

進行でございますけれども、それぞれの立場からご報告をいただいて、その後、ごうい種になって座っておりますのは、みなさんと一緒に、是非、共同討議という形で、実りのある時間が過ごせればと願っております。お三方の経歴や、やっておられる内容につきましては、レジュメに載せて

おります。

それでは自己紹介も兼ねて、発表の時に、ご自分で必要な自己紹介をお願いいたします。早速ですが、まず最初に、春野さんの方からお願いたします。

春野

はい、では私は、まあ旅行業というような観光業界代表、または、旅行業を通しての意見というものを今から少し、話しをさせていただきますと思います。

みなさん方も存知のように、最近の旅行といいますが、まあいわゆる、昔からの「旧所・名跡めぐり」というようなもので、お客さまの動きの大半はそちらの方に行っておられた、というふうに動いておりました。最近はお客さまのニーズも変化してきて、特に「自然志向ブーム」、特に「健康ブーム」だとか、「登山ブーム」等で、それに「ガーデニングブーム」、まあそういうものが相まって、最近では、大半のお客さまが花や自然を求めめるツアーに人気を集めてきているというのが現状です。専門的なツアーとしては、最近では「ウォーキングツアー」だとか、または「登山ツアー」というものが、年々、そういうものの集積傾向が強くなってきております。秋吉台においても大分や九州の方から「秋吉台上のウォーキング」というようなもので来られるお客さまが年々増えてきている、ということも秋芳町さんの方からお聞きしておりますし、私も実際に経験させてもらっています。

で、今までのツアーのように旧所・名跡、またはきれいなものを単に遠くから見るといようなツアーでありましたら、規定された場所である程度一定の箇所しかお客さまは行かなかったんですけども、最近ではやはり「ウォーキング登山」ということになりまして、かなり奥の方まで入って行きます。そういうお客さまの中には、やはり自然の景観等

の認識の薄いお客さまもいらっしゃると思います。自然破壊につながるような行動をとっていかれるというケースがかなり増えてきているのではないかと思います。まあそういうように、これも登山だとかが増えてくれば、一番恐いののは、珍しい花の盗掘。特に秋吉台には貴重なささの植物があります。まあそういうものの盗掘。登山なんかにはたって道路の確保。先程、館本館長も言っておられましたけど、「秋吉台上に多くの人が足を踏み入れることによっていろんな崩壊が始まっている」というようなことも、先程、館長が言われておられましたけども、やはりそういうものにつながっている。またトイレの問題ですね。これがやはり、特に自然環境の中では非常に難しい問題として最近取り上げられている。ということも聞いております。

で、一番恐いのが、秋吉台もそうなんですけど、もう既に出来た道路なんですけれども、観光目的、まあ美郷口が「住民のためだ」とか「地域住民の交流のためだ」とか、という目的で道路建設がなされておりますが、最近ほとんどほとんど奥地への道路建設が進み、まあ、自然破壊がかなり悪化していると、我々業界にとっては大変有り難いことなんです。遠くまで道路が伸びて新しい観光地が増えれば、我々も売上がやり易くなっていくんですが、逆の面で恐い部分があるなと最近とみに感じ始めました。まあ最近では、地元の反対運動等が盛んになっていろんな道路建設も中止になるというケースもあるようです。

で、じゃあ「この秋吉台においてはどうか」と申しますと、やはり、それだけ多くの方が入ってくるということになると、いろんな、まああの登山でもそうですけど、靴についた種子がそこに落ちて新たな芽を出す、いわゆる「帰化植物の侵入」だとか、また、さっき言いましたように「貴重な植物の盗掘」といった問題が出てきております。特に秋吉台におきましては、帰化植物の侵入は、台の観光地的な価値が落ちるにつれて、展望台を中心とした建物附近、歩道、駐車場、または台上を走る秋吉台道路沿いなどの施設の増加にもなって、その付近からの帰化植物が問題化されているということも報告されております。

では今後どうしたらいいのか。まあいわゆる「自然環境」というのは我々に取っては大事な観光資源の一つでもある。ただそれを我々観光業界として「ただ利用するだけではないのか」という問題が存在すると思います。でまあ、そういう問題に今後、我々ほどのように取り組んでいければいいのか、ということも少し考えていきたいなというふうに思っております。

私もですね、実際は7年前くらいから登山ツアーを社内で始めました。で、私も正直言っていて登山については素人なもので、どうしていいかわからないということで、地元の登山用品専門店の方といろいろ相談をさせてもらった訳なんですけど、まあその方から「登山ってのはそんな簡単なものじゃないよ」ということで、いろいろアドバイスを受けながらやり始めた訳なんですけども、

私共のツアーでは、今、登山に行く場合は、リーダーを2名必ずつけます。そして2名のリーダーが必ずお客さまをご案内するというシステムをとっておる訳なんですけど、私共のリーダーっていうのはやはり登山経験の豊かな方が多くて、まあ、それだけ山に愛着をもっているというんですかね、当然ながら登山の心得だとか、安全に対する諸注意は当然されますが、「山の自然を大事にしてほしい」ということを必ず言われます。で、今、目の前にいくらきれいな花があっても決して取ってはいけません。これはあなたのものではありません。これはみなさんのものなんです。あなただけのものにしてはいけませんよ、ということを必ず言われます。そして、山に行った場合は当然のことなんですけど、ゴミの持ち帰り。岩壁で言う訳じゃないですけど、私共のツアーのお客さまはほんとに紙切れ一枚落としません。全部持って帰られます。まあたまたま弁当などを返っていた袋等が風で飛んでしまったというようなときでも、走って取りに行きます。なぜそういうことを言うのかということ、やはり「ツアー」というものはですね、お客さまをご案内するだけじゃなくて、やはりお客さまに対するそういう「啓蒙運動」ということも当然大事になってくるんじゃないのかと思います。いわゆる「観光客のマナーが悪い」ということ、よく言われます。また山小屋に行ってもですね、「登山ツアーのお客さんはマナーが悪いからヤダ」と、というような話も我々聞きますけど、まあそういうツアーであってはいけないということ、我々としては、私達の目を楽しませてくれる自然を、とにかく大事にしていきたい。

で、そういう考えのもとで昨年の9月に秋吉台さんと話しをさせていただきまして、「カルストウォーク2000」というものを去年の8月に開催させていただきました。その「カルストウォーク2000」の目的というのは、やはり秋吉台の自然を守りたい、これを守っていきなさい。私達の仲間にもやはり秋吉台の花が大好きで、ずっともう、月に最低1回以上は秋吉台に来て花の観察をしたり、または自然の保護運動、たぶん仲間の方がここにいらっしやるんじゃないかと思いますが、そういう活動をされている方もいらっしゃると思います。で、まあ、そういう「カルストウォーク」を始めた要因というのは、やはり「日本の草原」というのはですね、自然には成り立たないんだと。日本の気候風土というものは、林や森をつくる気候風土であって、草原というのは「人の手」を加えていかないと守れないということ、我々は分かっていますが、一般の方にはなかなか分かっていただけない。まあ、そういうことを知っていただきたいという目的と、レジュメの方にも書いてございますように、たまたま私、買った本なんですけど、石川龍也さんという方の書かれた本で、「山を殺すな」というふうな本がありまして、その中の一文で、ちょっと気になった一文がありまして、レジュメの中でも書かしていただいたんですけども、北海道大学の小野教授という方がですね、北海道の道庁が全国で一番ひどいんじゃないかと、その本の中で書かれておられます。なぜかっていうと、

本州の山はお花畑が小さいうえに登山者も多く、それが結果的に相互監視となり、選擇がしづらくなっている。ところが北海道の山は有人の山小屋も少なく、また標高が低くて登りやすい山が多い反面、高山植物の種類が豊富で遠慮しやすくはない。まあそういうことで、道内ばかりが本州からも遠回りかやってくるようなことだということでおられる、という文章を読んだときですね、秋吉台もまあそれに似たような環境にあるんでなかろうかなあと。というのは、高山植物にはみんな興味をもっていらっしゃるんだけど、秋吉台にそんな貴重な花があるとは、一般のお客さまはなかなか知っておられない。ですから逆に言えば、そういう花をそのへんの花と同じように痛んでしまわれるんじゃないかという意識性を含んでいる。それから秋吉台酒造が秋吉台の真ん中を走っていますので、駐車場も「長者ヶ森」の南側にもあります、展望台にもあります。展望に行けます。まあそういうことで北海道の山と似たような状況を持ち合わせているんでなかろうかな、というふうに私も思います。で、やはりそうならば、お客さまにですね、一般の方に、秋吉台に如何に貴重な花がたくさんあるのか、また大気にも、それを守っていかないとダメなのか、ということをお客さまに訴えていかないと、なかなか理解してもらえないんじゃないかと。また、これは組織の力を借って、またそういうような啓蒙活動って言うんですか、そういうものを進めていかないとダメじゃないんでなかろうかと、いうふうに感じ、この「ウォークフェスタ」を開催した動機にもなった訳です。

またこの「ウォークフェスタ」は、宣伝っぽくなりますが、今年もまた実施させていただきたいと、そういうふうに思います。そして、前は予定して出来なかったんですが、秋吉台を守るための「基金活動」、そういうものもぜひこのウォークのなかでやっていきたい。そして、秋吉台の自然を理解し、またこの秋吉台の自然を維持するためにどれだけの苦労があるのか知ってもらい、そしてその上で基金をお願いしたいな、というふうに計画しております。

まあ、要は、我々観光業界にいる人間が「自然をタダで利用してはいけない」、やはり利用させていただく限りにおいては、この資源を守っていくために我々が何かを、行動を起こしていかなければいけない時代に入ってきてるんでなかろうかと思えます。観光業界というのはいつも言われますが、自然環境の一翼を担っているんじゃないかという見方をされております。現実にそうだろうと思えます。私もいろんな山に行ったり、いろんな観光地にお客さまをご案内しながら、今までそういう世界を実際に自分で見てきておりますので、まあ、せめて地元ですね、秋吉台を手始めに、これから自然を守るための活動をですね、是非進めていってみたいなというふうに考えております。

佐藤

どうもありがとうございました。たいへん素晴らしいお話

して、従来、おっしゃるように、観光と環境は矛盾しがちで、欧米でも「ツーリズム=テロリズム」と、観光が環境のゼロ活動に手を貸すという鋭い批判もありますし、また日本でも「エコツーリズムと言うけれども、これはエコツーリズムではないか」という批判も出て、大変難しい問題があります。そして最近本を読んでいて、日本の観光について深くお考えになった宮本常一先生という方がおられますけど、彼が「観光を考える」という本の中で、自然を愛するということは、美しい自然を見て、観し、活用するという意味じゃない。そうではなくて、自然を守り育てることだ、と。昔の日本人はそれを信仰の力によってやってきたんだ、と。ところが現代では自然が好きだと言うと、木や草、動植物を大事にするというよりは、むしろ自分の好みで自然を促す、というような動きを取りがちである、ということも非常に懸念されておられまして、「新しい仕掛け」が必要だということも言っておられたことを、先、思い出しました。ほんとうに地元の人と、どういふふうに、大事な自然を育てながら一緒に楽しんでいくか、ということを考える時期に来たと思えます。

次、松原さんに、農業をしながら、この魅力の草原を守ってこられた立場からですね、新しい、地域で実践されていることやお考えを調べていただきたいと思えます。どうぞよろしく。

松原

先程「わくわく村の村長です」と言いましたが、村長といましても、あの、首広言て、イスに座っている村長じゃなくて、うちの集落でイベントをやる際に「わくわく村」という愛称をつけておりまして、その中で「おまえ村長ということにしなさい」という程度の村長です。

うちのところは幹線道路からも外れていて、ホントの「田舎」という中にある訳です。うちの集落は、この秋吉台の東西、要するに北側と西のちょうど真ん中あたりの、ホントに言語の奥みたいところで、まあ(外部との)交流の少ない場所にある訳ですが、それだけにいろんな「観光資源」がある訳でございます。「観光資源」と言えば非常にカッコイイ訳ですが、自分たちの住んでいる周りには、珍しい、恐らくよその人が珍しいと見てもらえるものがたくさんあります。まあそれと、うちの一番大きな楽しみになりますが、奥とは言ってもこの秋吉台の近くに位置しているために「山焼き」とかいような大きな行事があるということです。

まあそういうことですが、なかなかこの「山焼き」自体も、うちの集落もよそと変わりませんで、高齢化した中での「山焼き」、「火道切り」となっております。みんな歳を取って山焼きなども非常にしづらくなっております。山に登るだけでも大変だということで、一昨年、ああ、昨年ですが、「作業道路」というのが、やっと理解されて、山の(作業現場)近くまでは車で行けるような道が出来ました。しかしながら、まあ「道」がついたから山焼きができる訳じゃなくて、や

やはり「人」がいないとこの山焼きもできないということです。

まあそういうことで、私のところは昔から秋吉台とのつながりが非常に深いところでありまして、秋吉台を利用した昔ながらの農業が伝わっている訳です。今では段々変わってまいりましたが、以前は、例えば秋吉台のススキ、こりゃまあ「産糧食」と言ひまして、屋根を葺く材料に使用していたと。それからまあ、当然この家にも家畜がありまして、これがいなかったら田が耕せないんで、家畜の糞にするために草を刈っていた。それから今みたいに化学肥料というものが無い時代には、草の有機物を肥料として利用するために採草していたと。それから、まあ昔ですと、ガス、電気がまあ非常に少なかった時代、炭焼きが非常に盛んであったと。そしてまたその炭焼きの灰を入れる。ここでは「ダツ」と言うんですが、そういう入れ物を作るのにもススキを使っていた訳です。

ところが時代もどんどんどんどん変わってまいりまして、今ではほんとうに秋吉台の草原、せつかくの「資源」ですが、牛もトラクターに代わり、肥料も化学肥料に代わり、屋根もほとんどの屋根が瓦に代わったということで、秋吉台の大きい「産糧」が、あまりにも使われなくなったということで、(昭和)30年代以降、非常にこの秋吉台の利用率が落ちてまいりました。秋吉台には「ドリーネ」といって窪地がたくさんありますが、これを利用した畑(の跡)がたくさんあります。この畑は秋吉台にあっても個人所有になっておりますけれども、これも戦後、食料のない時期には、イモを作ったりゴボウを作ったり、勿論、イノシシが回りますので、イノシシが食べないようなもの、そばなども非常によく作っておりました。しかしながら、ほとんどこれも時代の流れで廃れて、今では大畷の畑の跡が残ってあるだけだということです。

まあ昔はいい道がなかった訳で、みんな刈った草を筒にしまわして(筒負わして)、馬で運んでいった訳です。まあ今はいい道が出来ましたので、草原の近くまでは車ででも行けるという、非常に便利にはなりましたが、しかしながら先程も言いましたが、時代の流れで、労力の非常に掛かる作業だということで、刈り取りが非常に少なくなったと。ただ、今でも部分的には、かつて放牧場であったという場所がありまして、部分的にはそこで採草して、家畜の糞に、家畜組合の方を通しておられるようです。

まあそういうことで、時代がどんどん変わってまいりますので、私達も秋吉台との「つながり」が、いろんな「思い」が変わってまいります。私達の若い者のグループですが、「とってもゆかいな秋吉台ミーティング」というのがありまして、これはなんで始めたかと言いますと、やはり先程申しましたように、秋吉台の自然を守るために山焼きは欠かせないんだけど、高齢化、老齢化で山焼きや火道切りの作業が大変であると、どうしたらいいかというのが一番根本にあって、それではみなさんに秋吉台をたくさん見てもらおうと、また知ってもらおうと、ほったらかしとてきた草原でないことをみんなに知ってもらおうじゃないかというこ



とで活動を始めました。この「ミーティング」では色々な活動をしております。そばを茹でてみたり、秋吉台を視察してみたりということで、いろんなイベントをして、よその人に来ていただいて、秋吉台を理解してもらおうという形で活動をしています。

そうした中で私もメンバーの一員としていろいろ勉強をさせていただいているうちに、自分の地域の中でも何か出来んかなあということをおもひまして、まああの「氷の上」という生活ですが、たった18戸しかないような所ですが、生活に欠けているいろいろ話しをして、ウチにもせつかくこんな資源がたくさんあるんだから何か出来んかなあ、と話ししてみた訳です。

ちなみにウチにある「資源」ですが、ウチには「中尾洞」という天然記念物があります。まあ小さい、それも加工してない、「加工してない」というのは電気(設備)が引っ張ってない、あの、観光用の洞窟はお客様が歩きやすいように通路が整備されていたり電気(照明設備)が引っ張ってあったり(照っていたり)しますが、そういう設備のない、昔のまんまの洞窟がそのままあります。今はまあ一般には閉鎖されていて、許可をもらって(お客様を)案内しておりますが、中尾洞はまだ昔のまんまで、洞窟探検のスリルがいっぱいの穴です。まあそういう穴もあるし、あるいは秋吉台を水源とする川、まあ湧水が出る場所がある訳ですが、農業の汚染が非常に少ないということでホテルがたくさんある。それから、秋吉台にフサのところから上がったところですが、「香石」といって、秋吉台上で一番大きいドリーネがあります。秋吉台の高いところにあるんですが、ドリーネの底は(秋吉台上で)一番くぼい(低い)と言われているんです。そう、珍しいところがたくさんあります。

ということで、いろんなモノがあるんじゃないかと言うことで、匙の利を逆手にとって、「逆手」と言うのが「利用」して、よその人との交流をひとつ考えてみようじゃないか、ということで始めたのが「わくわく村」です。まあ先程も言いましたように(集落の人の)年齢は、私が今59歳になるんですが、それでも若い方で、あと80歳くらいまでの人達、会え

は「どうか、元気かよ」というような話しかないという田舎です。そういう中で、よその人達と話をしたり、いろんなことをして交流をしよう。まあそうすれば話題ない(話題くらい)お変わるんじゃないかと、平気な話しばかりしちゃうって(していても)楽しくないじゃないか、ということで、まあやってみようかと。

それともう一つは、そういう田舎で農産物、あるいはそんな「モノ」を売るにしても、なかなか難しい。今は、勿論運があって、品質が良いという商品しか流通しません。その中で、来たお客さんに「良かったらもって行って下さいよ」と、勿論有料で、お金はいただきますよ。勿論、まあ、ほんとうに(初めからそれで収入を得るために)栽培して、ものすごく手を入れたものじゃありませんから、まあ、物の見た目はすばらしいんじゃないかも知れんけど、まあ、「もいで」、「引いて」、「届って」、「届て」という体験を兼ねた中で、農産物も持ち帰ってもらう、というような形でやって行けたらいいんじゃないか、ということがありまして、この「わくわく村」というのを始めました。

始めましたが、実は平成の8年度、最初の一年間は「どういう方法でやるか」ということについて、いろいろな意見を出し合って、いろんな話し合いを一年間持ちました。その中で一番問題になったのが、まあこうしたイベントをやるうとすると、どこの地区でも一編でしようか、やはり人手が要ります。やっぱり心配する人(面倒を見る人、受け入れ側)が大変なことが多い訳です。で、そういう中で、じゃあ、出来る善でその「大変なこと」を振り分けてやろうじゃないか、例えば、勤めに出ている者まで引っぱりまわして、「今日は休んでやるよ」と、こういうやり方をすると、こういうコトは継続きしないと思うんですね。みんながなるべく「出て来られる日」に合わせて設定しようと、都合が悪くて出て来れない人は無理に出て来なくてよろしい、勿論次の機会のときにまたお手伝いしてくださいよ、というような形で、なるべく多くの(集落の)人が参加できる日で、あまり忙しくないとき、忙しい時期にはしない、要するに「ウチのところの都合」に合わせてようと、お客さまの都合じゃなくて、すべてウチの都合でイベントをしていきましよう、というような形で、「後続きの出来るような取り組み方」にしてイベントを始めたいという訳です。

それで、第1回目に「山焼き体験」ということで行ないました。この発言はみなさんご存知のように、山焼きは「見る」ことはできますが、山に「火をつける」ことは決してさせないという、今までの慣例があった訳ですが、それをウチの地区で、平成10年度に、「火入れ体験」、お客さんに火をつけてもらいましょうと、そして燃えるところをしっかりと眺めてもらいましょう、というようなことを始めました。勿論これは、当然、誰かが火をつかばあならんし、地元の人も山焼きにはみんな上がって「火入れ」の作業をせにゃならん訳ですね。そういうことを地元だけじゃなくて、みんなで行うんじゃないかということで、参加者のみなさんに

はよくお話しをして、やはり、経験豊富な人が秋刈期にはたくさんおられますので、そういう方に説明をしていただいて、これに取り組んでもらおうということで、平成10年度2月15日、山焼きを行っております。

参加された人は本当に感激された様で、こん身体験が出来たということを非常に喜んでくれて、ただ見るだけではなく火入れを体験出来たということで非常に好評でした。お陰でウチの集落も「そんなに喜んでくれるのなら」と、我々は普通のことをやったんだという感覚しかなかったんですが、あまりにもお客さんが喜んでくれたので、それはまあということで第2弾、第3弾をいろいろやった訳です。

中には失敗もありまして、例えば「竹取物語」という竹の子を煮るイベントを4月にやった訳ですが、これが、竹には凶作と豊作の年がありまして、しかし生える(竹の子が出てくる)までは豊作が凶作が分からない訳です。で「やりますよ」という宣伝をした訳ですが、いよいよやろうかという直前になって、非常に凶作でしてね、生えてなかった訳です。それで竹の子を他の山からも集めて来て、一応イベントはどうか済ませたのですが、なかなか自然は我々の思う通りにならない訳です。

その他にも10年度には「里の秋の収穫祭」、これは芋掘りとそばの収穫という、主に収穫を体験するイベントです。それから、そば打ち体験と練乳搾機、先程言いました中尾湖の中に入らせていただくということでやっています。10年度は都合4回のイベントをやっております。その頃はまあ、あまりそういう「仕掛け」というか、やってみなければ分からないという部分が多かったものですから、ホッとする(試してみよう)方が先で、そばなどについても、当時ウチのところでは、そばなどあまり無かったものですから、よそからそばを入れたりなんかしてやっておりましたが、今ではそばも全部集落で栽培、加工してイベントをするような形にしています。

それから11年度は、まあお客さんがたくさん来ると、イベントの会場として集落の集会所を使っている訳ですが、わずか13戸の集会所なので非常に小さい、こじんまりした集会所です。それではなかなか思うようにできないということで、屋根の掛け出しをしたり、そばを打つ台(テーブル)を作ったり、「わくわく村」という大きな看板を作ったりということで、主に事前の準備の方ですが、手作りであることをやりました。勿論、業者頼れば済むことですが、ウチは「無資本」、お金がひとつもない中でイベントを行う訳で、始めからちゃんとした予算があって、何があって、というものは無いものですから、そういうモノも手作り、みんなが木を集めて、身体を出し合って作っております。イベントとしては「山焼き体験」と「里の秋の収穫祭」、これを行っております。

それから12年度は、やはり「山焼き体験」をやるつもりでしたが、山焼きが延期になりまして、結局この年はウチの集落だけで山焼きは行ないました。「意見会」と「そば打ち会」

を12年度にやっております。まあ13年度の山焼き体験は明日に控えておりますが、明日はまたたくさんの参加者で計画しております。

ここの分科会の話は「観光と安全」ということですから、観光のことについてですが、この「山焼き体験」のことを聞いたとあって、実は山口(市)のある旅館から「旅館に泊めて山焼きに連れてきたいが、お宅で受けてもらえますか。」ということでお話に来られまして、ウチでも「じゃあやりましょう。ただし人数は制限しますよ。」ということになりました。明日、25人程度の方が山口に泊まられて、ウチの体験に来られることになっています。

そういうことで、やはり、(意図的に作ったものでなく、身近な自然の中にあつたいろんなものを使った体験、あるいは作業ですが、そういうことを通じて、我々は、これからのいろんな交流をしていきたいと思っております。特にこの交流を通して地域のコミュニケーションが非常によくなったということがあります。昔はやはり年寄りの人が盛掛けていて、何かにつけて「上座に座って」、あるいは「座らせて」という形が多かった訳ですが、まあ、こういうイベントをすることで年間何回も集まって、準備や何かでいろんなことで話をする内に、お互いの意思の疎通と言うんですが、イベント以外の話なども、非常に難しい転作などの問題につきましても、今まで以上にみやすい(スムーズな)話し合いでそういうことがどんどん出来ております。

それと、「わくわく村」に来てくれた「村田さん」ですが、お客さんはみんな「村民さん」ですが、今ではイベント以外にも「交流」が生まれまして、話題も色んな話へと広がっています。私達も、ただイベントをするだけじゃなくて、それに参加した人々の「ふるさと」になるような感覚で、私達も今から続けていきたいと思っております。

「わくわく村」は小さくて、本当に形が有るか無いかわからない様なモノですが、無償資で、集落のみんなの協力のもとに、これが行われていることを、私は大変誇りにしております。簡単ですが、以上で私の話を終わります。

佐藤

どうも有り難うございました。

本当に素晴らしい体験談でございました。私も阿蘇の「野焼き」が出来なくなって、どうするかということで、3年前ぐらいから都会の人によるボランティアを組織しまして、今、数百人ぐらいのボランティアが参加して阿蘇の野焼きを行っております。

当初は地元の人たちも、野焼きというのは死者が出るくらい危険な作業だから(ボランティアに野焼きをやらせることは絶対ダメだ、遊び気分、観光で来ちゃあいけない)、というふうに言われておりました。ですから、きちんと組織立てて、ちゃんと研修もして、危険性など、野焼きについての認識をしっかりとさせた上で野焼きボランティアとして参加するようにしたんです。そしたらですね、評判がよくて、今

年は多分1,000人ぐらいにのぼるんじゃないかと、多分昨々には5,000人の参加者が見込めるだろうというふうに考えております。マスコミなんかが好きに集まれば電話での問合せなんかエラクすくて、参加したいという意欲っていうのは、強烈にこの12年で伸びてきているんですね。

それで、参加した人たちと地元の人たちが話し合いをしたときに、今「わくわく村」っていう名前が出てきましたのでたまたまのようですけど、福岡から来た人が、印象強い言葉を言われました。「ワクワク、ドキドキ、ハラハラ、そして爽快。私にとって野焼きはレクリエーションです。」と、結局、始めてのことなのでワクワクしたし、相当危険が伴うってことでドキドキもしたし、実働火が飛んできたら「火消し隊」で防火しなけりゃいけないから責任が非常にかかってくる。しかしそれが終わって、もうススだらけになって、達成感というか「いやあ、やったぜ」という感じがあるんですね。

そしておっしゃったように「ふるさと」になるという感覚、それは私共も同じで、それは長く分かります。その後の交流会も年中あって、一緒に竹で炭を焼こうとか、もう「観望付合いをやりたい」という地元の意向と(参加者は九州全県から来ているんですけども、「観望になりたい」という、そういう観望というの、何かこう共通して在るような気がいたします。

お客をかけたないで集落のコミュニケーションが活発になっている、って言うところも何か共通するものがありまして、私共では「修学旅行の野焼き体験」も今年から始めております。高校が200人ぐらいですけども、やってみるとそれが「商品」になるんですね。で、一人あたり2,000円ぐらいをいただくんですけども、

実は「エコツーリズム」という言葉がありまして、「観光」って言うのはちょっと昔の言葉で、最近は、体験型、グループ型でのツーリズムって言うか、それになっておまして、例えば水鏡市なんかは「環境教育」ということで一昨年ぐらいから始めて、今年は2,000人ぐらいの観光客、いや修学旅行客を誘致しておりますし、JTBとかのエージェントがすごく熱心なんですね。そういう意味では私は「野焼き」とかは、旅行のプロの巻野さんもおられますけれども、「有望な商品」になるだろうという気がしております。後でまた話論をしていただきたいんですけども、

次に、司会ばかりが喋っていてはいけませんので、浦田健作さん。浦田さんは、ちょっとご紹介しておきますけれども、東京都立大学で、ご専門は非常に難しい「洞窟学」などを研究されている理学博士でいらっしゃいます。そして北九州市役所なんかからも頼りにされている方です。ご出身が北九州ということもあって、東京から定繁く通って、「平尾台」に関わっていらっしゃる方です。じゃあ、よろしくお願ひします。

羽田

最初に、自分のことを紹介させていただきたいんですが、私、今お話ししていただいたように、北九州市の戸畑というところで生まれ育ちまして、北九州市には33外に「平尾台」というカルスト台地があります。「秋吉台の集分」のようなところとして、非常によく似たところですね。子供の頃から遠足などで平尾台に行きまして、秋吉台と同じように不思議な形をした岩がたくさんあったり、地下の鍾乳洞などあって、すごく興味を持ちまして、まあ趣味としてですね、洞窟探検、ケービングをやっております、それでまあ、北九州、地元の人といっしょにケービングを中心としたアウトドア・スポーツのグループ、「カマネコ探検隊」という名前なんですかね、それをつくって、初心者の方を対象としたケービング教室などを開いたりしています。それから自分の専門の研究として、大学で地質学、それから地理学の分野で「カルスト地形」を研究しています。

それでまあ、そういうふうに研究していきまస్తుですね、最初は地質学でその岩石だけを調べたり、地形を調べていたのですが、結局はこのカルスト地域というこの不思議な場所がどうして出来たのか、いったいそこで何が起きているのか、なんかその地下で洞窟ができたり、地下水が流れたりしてますよね、なかなか分からないんですね、それを研究してみまస్తుですね、結局いろいろなことが関係してくるんだということが分かってきまして、地質も地形も地下水も、それから生物や植物、それから土壌なんかもですね、全部が相互に関係してカルストを構成している、鍾乳石ひとつ出来るのにもですね、地上にどうい生物がいるのか、どうい植物が生えているのか、雨の降り方とかですね、雪の降り方、そういうのが密接に関係しているんだということが分かってきまして、博士論文をまとめる段階で「カルスト システム」という言葉をでっち上げてしまいました。これはまあ、そういういろんな自然界の現象が相互に関係しているという意味で「カルスト システム」というふうに呼んで、後の話でときどき、とこどこ出てきます。



まあ、簡単に言えば、「カルストの出来る仕組み」ですね、仕組みがある程度分かってくると、そこに住んでいる人間がですね、どんなふうに使っているのか、そういう人の営みなんかがいっぱい影響しているというのが見えてくる訳です。それがいいのか悪いのかは別にして、どれくらいの影響が自然に及ぼされているのかということが少しづつ見えてくるんですね。で、そういうことから、平尾台の保全、環境保全にはどんなことがいいのかということ closest 考え始めているところですね。これはちょっと、自分の本当の研究、専門から外れるんで、まだ勉強中ですね。例えば、生態系なんかについてもですね、勉強しているところで、そのへんのことについてですね、みなさんの意見を聞いて、教えていただきたいと思いますってやってまいりました。

それで、今日は、平尾台の事例を話しますが、今回は「観光と保全」という分科会なんです、実は平尾台のカルストは、秋吉台のようにいわゆる「昔ながらの観光」というものはあんまりないんですね、みやげもの屋やレストランやホテルが林立してお客さんを広く呼んでくるということが、平尾台ではほとんど興っていないんです。観光用の鍾乳洞が3つばかりありますが、小さなものであまり人も来ていませんし、管理人さんは、あんまり人が来ると面倒だからうるさい、とかいうぐらいの感じなんです、それから、あんまりご飯を食べるところもない、観光地として整備しようとしたこともあったんですが、なかなか問題があって成立しなかったんですね。なので、今回は「観光」だけに限らず、「開発」、「土地利用と環境保全」ということをですね、「野焼き」、「草原維持」ということを中心に考えてみたいと思います。

じゃあ先ずですね、「平尾台の紹介」ということで、スライドを見ていただきたいと思います。お願いします。

(以降、時折スライド、OHPを指し示しながら報告)

はい、これはですね、平尾台の北にある台地の端っこですね、この写真の左側が小倉の街です。後で地図をお見せしますが、小倉の街から30分くらいで台地の上まであがってこれます。台の周囲はですね、こんなふうな急な斜面に取り囲まれております。これは秋吉台と同じなんです、麓からの標高が秋吉台の倍くらいあります。台上がですね、海拔400mから600mくらいですから、まあ秋吉台の倍の高さがある台地と思っていただければ結構です。で、台上はですね、こういうふうに急になだらかになります。そして、このような石灰岩の露頭、すなわち「カレンフェルト」ですね。で、ドリーネ、こういった非常になだらかな台地の風景です。次お願いします。

これが台上の典型的な石灰岩の露岩、「カレンフェルト」と呼ばれているものですね、あの、これ番の、平尾台でも野焼きを行いますが、ちょうど明日、秋吉台と同じ日に行

なる予定ですが、野焼き後でちょうど草がなくなっているところですね。露岩がよく見えます。だいたい高さが1mか2mくらい。で、平尾台の特徴として石灰岩が結晶化して「大理石」という、結晶の大きな石灰岩になっています。秋吉台の石灰岩に比べると、より侵食が進んでいて、丸い形になっているんですね。なので、手の許りの厚さ、**「羊群居」**というふうに関係しております。次、お願いします。

これはあの秋吉台なんですけどね。秋吉台の岩、「ピナクル状峰」というのは、このように先端が尖っているんですね。だから「地獄台」とか「針の山」とか、ちょっと恐い名前がついているんですが、その点平尾台は、これが丸くなっていて、この上に座ってお弁当を食べてもおしりが痛くない、という感じで、「女性的なカルスト」と言われています。次、お願いします。

これは平尾台の真ん中ですね。平尾台は台地なんですけど、真ん中が盆地になっている、で周りが高くなっているというですね。「台地の上に盆地がある」というおもしろい場所でありまして、ですから台上に上がると、周りが全部山に囲まれてしまっていてですね、街が見えないんですね。だから、北九州からすごく近いんですが、すごく遠くへ来ているような感じがします。

それからその中心の盆地には森があります。この森はかなり人の手が入った森です。植林もされてますし、昔から薪を採ったりして、いわゆる「里山型の森」と言っています。で、集落が今は60戸、130人ぐらい住んでいます。かつて最盛期は250戸ぐらいありましたが、どんどん減っております。そして森の周りがですね、なだらかな斜面ですが、草原になっていまして、斜面のこういう茶色のところ、こういうところは畑として利用されていますね。それからパリーネの中も畑として利用されていて、そのへんは秋吉台とよく似ております。かつては放牧も盛んにされていたんですが、今はほとんど放牧はされておられません。次、お願いします。

これが野焼きのシーンですね。火をつけてかなり燃え広がっているところです。で、野焼きにつきましても、秋吉台と同様に、かつては農業用にですね、草を刈って、そのための草原維持だったんですが、昭和30年代後半から農業形態の変化もありまして、農業には使わなくなってます。特に「観光用」、「見る野焼き」ということではありません。今は「野焼きしている目的」と言いますと、「防火」のためというのが一番大きいです。放置しておきますと失火が起こってですね、山火事になって、毎年燃えるんですね。で、以前、もう20年くらい前になりますか、野焼きのときに、強風で、炎に消防士が取り囲まれて亡くなるというような事故がありましたので、もう、全体の野焼きというのはやっておられません。今は集落の周りだけ、集落の方に延焼がおこ

らない程度にというので、北九州市の方から補助が出て、野焼きをやっております。次、お願いします。

地下にはですね、このような美しい鐘乳洞がたくさんあります。160くらいですね。まあ、秋吉台の鐘乳洞が400以上ですから、半分以下なんですけどね。まあきれいな鐘乳石、石筍なんかがたくさんあります。次、お願いします。

鐘乳洞の中は地下水が流れていますが、それが麓から湧き出しまして、このような泉をつくっております。これは大清水神社、大きな湧水と書いて「おしょうす」と読めますが、そこここで水が湧き出しまして、水の湧き口がご桶体になっています。で、昔から毎日の農業用水、水田農業用水としてですね、使われてきて、雨乞いなんかも行われている場所です。

はい、スライドありがとうございます。

じゃあ続いてOHPで説明を続けます。

先ずちょっと、日本のカルストはどんなものであるかということをお簡単に紹介します。日本全国、ほとんどの都道府県に石灰岩、カルスト地形というのがあります。しかし、あの、この黒塗りのところがカルスト地帯、石灰岩地帯なんですけどね、どれも小さいです。大きなところは、そのなかで一番面積が広いのが秋吉台ですね。平尾台は、九州の北にありますが、だいたい秋吉台の10分の1の面積、9平方kmぐらいです。

そして平尾台の位置です。

ここが小倉ですね。北九州市の中心地の小倉です。大体この辺が八幡で、製鉄所や重化学工業地帯になっているところですね。小倉から真南に、だいたい車で30分くらい、10kmちょっとありますね、そこにある台地、これが平尾台です。

黒塗りのところは石灰岩ですね。こういう具合に徐々に石灰岩が露出しています。これを延長してやると、こちらに秋吉台がある。まあポイントに「秋吉台の鏡き」と思っていたらいい結構です。

ひとつの台地です。先程スライドでも見ていただいたように、泉がたくさん湧りにありまして、その水が北九州地域の主要河川の水源になっています。これが紫川、小倉の真中を流れています。こちらが小倉川という行橋市を流れる川です。それからこれには植えてないのですが、逆紫川に、ぐるっと回ってこのように出て行きます。ですから水源地域としても非常に重要な場所です。

それから先程お話しした「カルスト システム」というのをご理解いただくためにこんな図を持ってまいりました。これはカルスト台地の断面図です。平尾台のものですが、秋吉台もほぼ同じだと思っていたらいい結構です。それで

この断を削けている部分が非石灰岩で、白いところが石灰岩です。まあこんなふうに石灰岩が台地になっていて、その周りに非石灰岩がある。

そして石灰岩の中にたくさん断層とかの割れ目が入ってきていて、そういうところが地下水の流れ道になります。雨が降りますと、断面は地表の川を流れて谷に出ていくんですが、石灰岩地域では地下に吸い込まれていきます。これは酸性の水が石灰岩を溶かす役割があるからなんですが、それも「どこからでも」ということではなく、こういうような割れ目が交差しているようなところですね。そこに集めてきた水ですね、そこが特にたくさん溜めて。そこに「ドリーネ」という窪地が出来ます。

まあそこ(割れ目)に入った水は地下を流れます。その地下水の水の流れ、「地下の川」が洞窟、鍾乳洞になります。当然それは石灰岩が途切れるところで地上に出て流れるということです。

まあこういうふうに「カルスト地域の一番の特徴は何か」と言われたらですね、「川が地下を流れる」と思ってください。で、その断層にドリーネができ、洞窟ができ、泉ができる。それから苔上ではビナクル、カレン(石灰岩柱)ができる。多分全部氷の流れに出ている。ですから「水の流れをどう保全するか」というのがカルスト地域の保全に一番の重要な概念だと思っていただきたいと思えます。

そして、具体的に平尾台の「土地利用」、「開発」の話をしたいと思えます。これは平尾台の石灰岩の部分をお白抜きにしたものです。これが1kmですので、大体長径が6~7kmくらいですかね、短径3kmくらいの台地であります。

左の点を示してあるのが洞窟の入口です。このように150くらい見つかっています。これを見てお分かりのように「幅り」があるんですね。この辺にたくさんありまして、この辺は見つかっていない。それから番号が打ってあって二〇〇口三〇〇口と筋があるのが、これが大きな洞窟です。この辺に載せられるくらい大きな洞窟です。一番奥ののが2番の洞窟。「白濁」と言う洞窟で3kmくらい、観光洞としては2番(干徳鍾乳洞)と言うのが古くから有名で、今でも年間2万人くらいの観光客が訪れています。それから洞窟の入口のところにあります黒マル、これずっと平尾台の縁にありますけど、これが泉です。さっきスライドでも見ていただいたような、顔にある湧泉ですね。ここから平尾台に降った雨が明川に流れていきます。

で、平尾台の土地利用の歴史といいますのは、今日午前中に徳本先生が基調講演で話された秋吉台の歴史と大体似ております。戦時中までは陸軍の演習地として利用されておりまして、その他としても、周辺の農村から農業用の牧草地、それから肥料の、堆肥としての採集地として草蓐を利用しておりました。戦後になってですね、草蓐から払い下げが行なわれまして、大きく2つの利用がありました。

ひとつは石灰石の採石ですね。ここにケバで掘いてある

ところが鉱山です。三菱マテリアルズ、住友大阪セメントという2つの大きな鉱山がありますが、北九州工業地帯に近いこともあって石灰石のニーズが非常に多い。でもね、最初は平尾台全体を鉱区にして採石しようとしたんですが、それに対して北九州市、当時はまだ小倉市だったんですがそれが反対しまして、「全境を保護しよう」、「貴重な自然を守ろう」、とですね、まあ当時としてはなかなか先駆的な考え方だったんですが、これが真向から対立しまして、10年以上、最後は最高裁まで争いまして、結局府理府の土地調整委員会まで裁定が下りて、「真中から割って分けよう」ということになりました。で、西半分が鉱区、陸奥開発区域、これはもう全部掘ってしまってもいいだろうと、で、東半分、これはカルスト地形が良く発達している、洞窟もあるんで、これは天然記念物にしよう。で、この緑色の帯のところは国指定の天然記念物ですね。で、その後、ほぼ同じラインで囲まれた区域が「北九州国定公園」に指定されました。ですからこの小さな、秋吉台の10分の1しかない台地ですね、真中からですね、「天然記念物」、「国定公園」という、日本の国土の中でも一番国にとって大事であるという場所とですね、それから近代産業に欠かすことのできない石灰石の採石場が盛っているという、まあすごい状態になっています。

それから真中の部分、茶色の部分ですね、これは鉱区の中なんですが、採石場から出た土砂、これを捨てる「土砂捨て場」として造成されています。これはただ土砂を捨てるんじゃないくて、ドリーネを埋めて、そこを放牧地として使ったり、それから、天然記念物側から鉱区が直視できないように、ここに木を植えて「運へいする」という役割、そういうことも考えて土砂捨て場として利用しています。ということで、かなり「人の手」が入っています。

そして「観光」ということでは、最初にお話しましたように、あまり開発、利用がされておられません。隣の天然記念物側の、指定から外れた地域に、一時期、観光ホテルや海温泉地が建てられたのですが、最初は訪れる人が多かったんですが、ちょっと交通の便が悪いとかですね、登山道路の幅があまり広くないので大型バスが入れないということもあってですね、廃れてきてまして、廃業するようになりました。

それから「農業」も、段々人口が増えてきて、農地としても利用されなくなってきた。それで1980年代以降、公園の方がかなり「違法利用」と言いますか、オフロードバイクが入ってきたり、野草の違法採取ですね、そういう違法行為が多くなりまして、自然保護団体の多くが自主的に「外コール」を行ったり、それから県や市などからも働き掛けが重なりまして、「保護法」、「保護計画」が立てられました。

それから90年代に入ってからなんですが、福岡県と北九州市の方で「平尾台整備計画」と言うのが立てられて、画期的な動きが出ました。それを次にお見せしようと思うんですが、この真中に赤いゾーンを塗りましたが、この「平尾台整備計画」と言うのは「平尾台を3つに分けてしまおう」とい

うものです。今まで「開発」と「保護」という形で分けてきましたが、これが直接撞するのはマズイということで、真中の部分に「干渉ゾーン」を挿える。そしてここで「観光活動」を行なって、そこで出た収益をこちらの「保護ゾーン」の整備に回そうという。「ハートランド平尾台」と言う第3セクターの会社を、北九州市が中心となって、地元企業、セメント会社なども入ってきて設立しました。それで最初の計画では、「カルスト テーマパーク」ということで、洞窟の内部を模したジェットコースターみたいなものが観覧車、それから麓からロープウェイを通す。また麓には地ビール工場を作ると、かなり大規模な観光計画を立てました。しかしそれに対してですね、やはり地元や自然保護団体から、自然破壊や地下水汚染などの環境破壊につながるのではないかと、かなり疑問が出ました。まあ結局はですね、企業として成り立たないのではないかとということで、お金が凍まらなくて、去年この計画が一層凍西されました。それでテーマパークの代わりに自然公園にしようということになりまして、出来るだけ自然をそのままに残した公園にする。しかしそこで駐車場や施設の利用者からお金を取って、それを保護の方へ回すというような、自然公園を元にした「ランドワークトラスト」という運動に変わりました。これは「平尾台自然の里」という名前になっていきますけど、それまでの、テーマパークでお金を取ってお客さんを集めるという計画から、そういう趣旨に賛同してボランティアで動いてくれる人達を集めて、人を「資源」として活用しようという、そういう動きになってきました。

それと運動するうちに昨年、中心地に福岡県が「平尾台自然観察センター」という施設を作りまして、まあ秋吉台にも「秋吉行エコ・ミュージアム」というのが出来ました。それと同じように環境庁の予備ですね、ここが自然保護団体の拠点となりました。今までそういう施設がありませんでしたので、台上の道徳なんかを遊りましたら「自然観察ツアー」をやっていたり、ボランティアを集めて何かやっていたりと、いろいろと、かなり活発に動いております。

そしてそういう動きの中で「ランドワークトラスト」として企業、企業と申しますのはこちらの結晶ですが、それから地元住民、それから一般市民ですね、それと行政が一体になった「ランドワークトラスト」という形で、「先き野焼きについて考えよう」という動きを起しております。実はそのシンポジウムが明日、平尾台で行なわれるんですが、

実は「土地利用」については、このように狭い範囲に固まっていますので、お互いの利害関係による対立が、戦後50年くらいの間にかかりました。これは行政と地元住民の間では農地の払い下げ等の問題で、それから企業側は「保護」に私区を半分取られたという、そういう思いがありまして、なかなか上手くそれぞれの「思い」が一致しなかったんですけどね。それを行政側が一息御破棄にして、思いをひとつにしようということで、始めたばかりです。これがどういふふうに進んで行くかというのは、まだまだ分からない

段階でありますが、非常に注目される動きであります。

最後に私の専門の立場から「土地利用」について、ちょっとお話ししたいのですが、もうひとつ図を撮りました。青い線がたくさん描いてありますが、これは地下水系の流れです。例えばこのところはこちらへ線が描いてありますが、これは地下水がこっちの方へ流れていることを示しています。

かつて「保護地域」と「開発地域」に分けたときに、その根拠というのはですね、地下水系などはつながっていないだろうということで、2つに分けても影響はないと思われていたんですが、研究が進んでいきますと、実はこの辺の、ちょうど開発と保護の中間地域が地下水の上流地域になっておりまして、この上流地域で汚染が起こりますと、平尾台のどちら側へも汚染が行ってしまう。平尾台全体の地下水が汚れて、それがまた地表の河川を通じて下流へも汚染が蔓延るんじゃないかというふうなことが分かってきて、これも後になってテーマパークの建設、大規模な造成というのが中止になって良かった、ということになるのですが、行政もこうした結果を受け止めて、出来るだけ環境にダメージがないような工事で自然公園を造ろうとしております。

それから「野焼き」についてもですね、「本当に草原というのがカルスト地域にふさわしい自然環境なのか」というようなことも、案外もっと議論される余地があると思うんです。と言いますのは、本来、日本のような温暖、湿潤な場所では「森林」が自然な環境でありまして、今日、熊本先生のお話にもありましたように、昔、ソウやいろいろな動物の化石が洞窟から出てくるというのは、森が厚く覆っていたからなんですね。それを人間が草原にしていっていった訳なんです。そのときも、草原を維持するために草刈りを行ったり放牧をしたりしてですね、かなり手を加えていたのですが、今は「野焼きだけで維持しよう」としているんですね。そうすると、やはり今まで造られてきた「草原とは別のモノ」が出来ているんじゃないかという可能性があります。例えば、火で燃やすだけでしたら、根っこで繁殖していくような植物、これは逆に増えてしまうんですね。ですから今、平尾台ではススキに代ってササガがすごく増えています。一旦ササガが生えてしまうと、なかなか他の植物が生えてこないということが報告されています。それからこの鍾乳洞のような水源にあたる地域では、やはり森林を再生した方がいいんじゃないか、というようなことも考えられますし、やはり活動地域にふさわしい環境を、特に自然環境を保全するためには、これからもっと考えていかなければいけないんじゃないかと感じます。まあその辺のことについてはみなさんのお考えを聞かせていただきたいと思っております。以上で終わります。ありがとうございました。

佐藤

どうもありがとうございました。たいへん考えさせられ

るいくつかの問題がありまして、ひとつは草原と水源涵養の水の問題。また、森林と草原のソーニングの問題、それがこれから21世紀に向けて、都会の人が求める自然、取分け草原、草原というのは「やすらぎの自然空間」として世界的に注目されておりまして、そういう観光ニーズの問題と、それから生態の話と、いくつか重要な論点があったと思います。

これは冗談かも知れませんが、「なぜ人が快適と思うか」、「一番その場においてやすらぎを感じるか」という調査があまりして、心理学者の調査だったと思いますが、「後ろに山を控えて、目の前に草原がある景観がいちばん、アメニティー(快適さ)が高い」と。それは多分、500万年前に人間が草原の中から生まれて、やはり数をいち早く発見して、小さな人間が足で立つことによって脳や神経を進化させ、自然をコントロールしていく。そういう意味で、深い存在の人間が一番やすらぐのは「クサハラだった」という説もあるんですけども、観光で草原が注目されている背景には、やっぱり「癒し」とか「やすらぎ」とか、そういう人間の深い心理に根ざした快適空間であるという意味もあると思います。

それで今から、お三方のお話し、もう繰り返しませんけども、観光業の立場から何だかの手段で観光する人、ツーリストが、守る側にどう貢献するかという課題。2番目に、道政化、高齢化で、都市との文流の中から新しい「飯のタネ」をつくっていく、またそれを持続していくための観光、「観光」と言うよりは「ツーリズム」という言いかたの方が私は好きだと思うのですが、それを持続させるためのツーリズムの発展をどうするかという課題。そして3番目に開発と保全の関係という課題がございましたけど、今から、時間が1時間少しありますので、終わりは15時50分ですか、ちょうど1時間弱控っております。それで、今から第2部ということで、ご質問でもいろいろ、自分のお三方に対する意見の開催でも結構ですし、どうぞ自由にいろいろ、どうしたら具体的に草原を活かしながら新しいツーリズムのニーズにも応えることができるのか、という共生の関係を求めるという方向性でディスカッションをしていければと思います。そしてそれを、このあと行われるパネルディスカッションで、最初に私がパネリストとして皆様方の意見を報告するという形になっておりますので、どうぞ活発なご議論をよろしくお願ひいたします。どなたでも、はい、どうぞ。

熊谷

奇森から参りました。熊谷と申します。防長交通さんの方で「ウォーク」をやられたということですが、秋芳町さんからの、何か協力を得たということだったんですけども、行政側からの、何か「補助」みたいのはあったんでしょうか。その「ウォーク」のですね、規模とかですね、あと、その料金とかですね、そういうのをお聞かせ願えればと思います。

香野

お答えします。これは企画の方を、私共から秋芳町さんを持っていきまして、実質的には秋芳町さんの方が実行委員会を作られて、いわゆる「ウォーキング大会」、まあ、「フェスタ」という形で立ち上げられました。で、私共の方はそれに対する募集活動を行って、お客さんを送り込むというような役割を取らせていただきました。まあ、第1回目ではちょっと準備が足りなかったんで、宣伝等が行き届かなくて、当初は300人程度ぐらいの規模でしたが、去年はやっていません。で、今年は一応500人。来年は、これは公開しているのかどう分かりませんが、県の方も一緒に力を入れてやりたい、というような動きも出ていますので、もっと大きな「フェスタ」に発展できるんじゃないかならうかと思っております。

熊谷

ちなみに参加料の方はおいくらぐらいですか。

香野

はい、これはですね、やはり経費かかりますので、一応、秋芳町さんの方に2,000円の会費でやらせていただきました。そして、あと、遠くから来られます方は、当然交通費等も別に、という形でやらせていただきました。

熊谷

どうもありがとうございます。あとは「わくわく村」の村長さんにお尋ねしたいんですけど、野焼きの参加についてですね、どういう規模と料金と、をお知らせしたいんですけども。

松原

一応、野焼きは、やはり火を使う作業ですので、参加者にはある程度の監視下で作業をやっていただいております。やはり一般の観光客と言いますか、まあ、火を扱ったことのない人がやはりおられますので、火の状態、あるいは風の状況によっては、いわゆる危険が伴うこともありますので、そういうことから「参加者を監視下に置いて作業がやれる人数」ということで、限定で、最高で50人そこそこぐらいの参加者を募集してやっております。先程言いましたように、受け入れる側は13人程度ですから、まあ、「その後の準備」などに取られる人を除くと、実質的な実施部隊が7〜8人程度しかいませんからね。

で、コストということですが、そういうことで、まあ、「野焼きだけ」という訳にはいきませんので、そういう意味で、会費(参加者)の方には食事をしてもらう。要するに、山焼きを見ていただいて、その後みんなで食事をして、交歓会の場を持つということを「ねらい」としてしていますので、そういうことで、1,500円いただいています。だから「営業」というか、ウチの方も、「もうかるのか」といわれたら、とても、もうかるような状態じゃない。ですが、まあ、みんなで、山焼きの

その日1日を楽しもうじゃないかという趣旨でやっていないとね。だから、そりゃまあ、ほんとうに、みなさんから「もうけた方がええじゃないか」という意見があれば、それなりのやり方をやっていかなないと。

席谷

どうもありがとうございます。あとほ、佐藤先生にお聞きしたいんですが、なんが、あの修学旅行で、その300人程度、実績があったということですけども、その情報を詳しく教えていただきたいんですが、

佐藤

あの、申し訳ありません、記憶の関係上、お名前と出身、所属を。

席谷

青森市役所の観光課、席谷と申します。

佐藤

どうもすみません。で、修学旅行の話ですが、例えば水戸(市)なんかでは、昨年くらいからそういう動きが本格化しました。それで阿蘇町では、そのプログラムとして、農業体験が1日と、通常のホテルを利用した従来型のやつと併せて2泊3日なんです。これも本格的なのは去年からです。

突然のようにですね、なんか、JTBさんとか、新しい「体験型のプラン」を推す必要が出てきて、エージェントがすごく積極的なんです。要するに従来型の、歴史でいうと、「京都・奈良のお寺をめぐる」だとか、「平和教育で長崎、広島をまわる」だとか、ああいう、数百人でドカンと行くっていうスタイルから変わって、それは恐らく、多分2002年からの「総合的学習の時間」だとか、あのいろいろ、学校の、食育教育であるとか、急になんか、教育資源が変わってきまして、それに合わせて修学旅行のスタイルも、グループごとに事前の勉強をして、グループごとに地域で自然や、環境や、歴史や、農業や、謎々の課題のテーマに即してグループで行なうというスタイルに変わって来ると、そういう場合、「受け皿」がないんですよ。

それで、みなさん、どこの地域でも、一便に大量の修学旅行生を受け入れることは出来なくても、例えば50人とか100人くらいの小さなロッジの受け入れが出来れば、地区地区で分担するとか、「襲まで」というか、今日は50人、次が50人とか、スケジュールの調整や工夫をすれば、100人や200人の宿泊を受け入れることが、2泊3日で出来る訳なんです。そういうニーズが、なんか突然のようにこう持ち上がって来ましたが、なんか情報ごいませんか。

青野

「体験学習」については、もう、そうですね。約10年くらい

前から、言われているのは言われておりました。山口県下においても、そのような体験学習ができないかという質問はありました。今やってるのが、あの、あれはなんだっけな、山口県の阿蘇町のもっと奥になるんですけどね、そこで農業体験なんがは細やかならやっております。大規模的には、山口県はまだやっていないですね。

佐藤

ちょっと情報をもう一つ申し上げます。結局「受け入れ」をやるためには個別の農家や地帯では難しいから、そのためのインストラクターであるとか、現地の案内ガイドであるとかを育てなければならぬ、地域特性にあわせてニーズがあるものですから、地域でそういう「人」を養成育てなければいけない、と言うんで、例えば4年前から「九州ツーリズム大学」というものを、我々は、行政と大学と一緒に、「ラーニングバケーション」ということで、そういう「専門の人を育てる」ということで学校を作りました。それはとても評判が良くて、去年、和歌山県でも「和歌山ツーリズム大学」というのが出来て、今年は北海道と沖縄と、場合によっては信州に、そういう「ツーリズム大学」という名前の、国レベルの人材育成講座が出来ることになっております。

それで、受入れを仲介する専門の業者さんもおられて、いま人気があるのは「農業体験」や「自然体験」で、それは大体2時間くらいで2千円くらいが相場になるんでしょう。高いのはですね、乗馬が確か1時間6千円くらい、それからラフティングっていうか、川下りが5千円で、単価が高いのはその2つですけども、だんだん活動メニューに「定植」がつくようになったので、野焼きは3千円くらい、5千円取ってもいいんじゃないかと思うくらい「お金が取れるプログラム」であろうと思います。

で、宿泊に結び付けて、どういうふうにするかは地元農家にお金が落ちるようになるのか、農業にインストラクターになってもらうとか、なんかこう、「観光」というのじゃ説明できない、「ツーリズム産業」の動きがあります。

私はっかりがしゃべっても非常に問題がありますので、どうぞ、他に、はい。

高橋(女)

鳥取県の大田市からやってきました、高橋と申します。先程、ホールの「サミット」でもお話しがあったように、大田市には「三瓶山」という草原があります。それがたかだか100ヘクタールくらいにしかありませんが、24年ぶりに放牧が復活したということで、第2回の「草原サミット」も開催させていただきました。それで、あの、いろいろな所をまわらせてもらっていて、秋吉台も何回か来させていただいて、平鹿台も夫の出身地が小倉ですので、そこで遊覧したということも聞いていまして、子供の劇にですね、そういうつながりで、非常に関心が深い訳なんです。

で、どちらに伺ってもです、私はその、何て言うか、景

第1分科会

業の目さというの「人の香りがする」(良だ)というふうに思っております。ところが、人の香りというが生業の香りというのがないんですね。その、何て言うんですかね、生業と云っても、観光産業にだけお金が落ちるようなシステムになっているんじゃないかと。で、「洞窟探検」とか、そちらの方では、私共の方では魅力が、あの、いたるところで「欲求」と言うものが満たされてしまっていて。

で、「開けた」、先程佐藤先生が言われたように、やはり、何か遺伝子に組み込まれているような、「開けたところ」を求めているというのがあると思うんですよ。それを求めていきたい。それが「防犯さだけ」では足りないと思うんですよ。「草原の維持」というのは、「野焼き」、「採草」、「放牧」と3点がセットになって初めて、その「生業」と云えるものであるような気がするんです。ですから、そこに農家の人がいないといけません。農家の人が、観光だけでなく、メリットがないと維持していく場が生まれないのではないかと、それがどうも定まらないのではないかと想います。で、「植生も単純化していく」というふうにおっしゃいましたけれども、やはりその3点がセットになっていないからではないかというふうに思っております。

で、そこで、色々考えましてね、お話を伺っている間に、他の、秋吉台にもありますよね、何でしたっけ、「とつてもゆかない秋吉台ミーティング」、そこで「リーネ耕作」なんかもとれてますよね。それでその(耕作地の)「入会権」があるんですかね、その、入会権があって、その「リーネ」というのは個人所有じゃないかと思うんですよ。そうですね。で、その所有者が見つからないとか、分からなくなっているという可能性がありますよね。

佐藤

入会権はあります。で、(所有権の)分からなくなっていたものもありました。ですが大体は分かります。そういう記録、地籍が残っていますから。

高橋(女)

ああ、そうですか。そういうところを都会の方に開放して、耕作していただく、しよっちゃんリーダーになっていただく、という方法もありますでしょう。そういう方々の中に入れることによって、「希少種」ですか、そういうものの盗掘を防げるという可能性もある訳ですよ。どちらの方が来られているのかというのは、こちらが把握してる訳ですよ。

つぎの三瓶の場合でもオキナグサとか色々な希少種がある訳なんです。牛が放牧されたことによって、牛がその「守り」をしてくれてるんですね。盗掘が防げている、ということが起こっています。「草原の」中にどう入って下さい」といっても、やはりそこは何か人間には「観」のようなモノがありまして、何か見られているような感じかして、盗掘しているものはあまり無いような気がいたします。

ですから、そういう「人」を入れて、「農家の人が持つシステム」というものをキチンと作って、私達が行っても、「ああ、農家の人も潤ってるんだ」と、「色んな人が潤ってるんだ」という姿を見せていただくと、より「近付きやすい」ような、そんな気がします。

佐藤

それではご帰郷を。

松原

はい、あの、今大変いい意見だと思います。農家が、まあ今頃は「時代が変わった」ということで、秋吉台をあまり利用しなくなったと。まあ昔は、一頭には放牧場もあったんですがね。又は、先程平尾台の話がありました。非常にこの名はですね、これ、とんざつている(とがっている)という、新しいんですよ。それで、結構牛なんかも怪我をしたりね、そういういろんな事情がありましてね。まあ放牧場その名の、まあ「近代化」というか、近頃の風潮で、輸入牛肉がほとんどになりましたので、生産者として牛を飼うということが成り立たないというような、まあいろんな種の畜産の関係から、そういうものがありまして、飼う人自体が少なくなったというのがあります。

ただ逆に、今の新しい発想からいいますとね、逆にあまり手の掛からないヤギとか羊とかね、利用するという方法もあるんじゃないかなと。今ちょっと、チラッと思ったんですけど、まあ牛だけに限定することもないだろうと。だからまあ他の方法でも、北海道でやっているように羊の肉を焼肉の材料にするとか、まあいう原料をどんどん作ってやってるじゃないかと。そういうやり方でもいいかなあと、そんなことも、今チラッと思ったんですが、ありがとうございました。

佐藤

他に何か。

あの、打合せをしているときに少し出たんですけど、幸福の危機というのは、今、高橋さんが言われた「持続できない理由」というのは、そのためのコストを、もう農家では払えない訳ですよ。要するにメリットがある人が、その持続のために必要な労力やお金を出すというのが、普通は「原則」なんです。そのメリットを一番享受している人、いわゆる観光客が、維持のためのコストを負担するシステムがない、ということだろうと思います。この根本的な問題があって、農家は基本的にその観光客が農家に入ってくるような顔をする。カンを捨てられていだけだとか、うるちよるされて危ないとか、そして自分は一生懸命汗流して働いているのに楽しそうに、他人の土地にゴミなんか捨てて、もうわかつ腹が立つ、という関係だったんですよ。どうしたら、そのメリットを享受している人が維持管理のコストを負担するシステムができるのか、その問題を少し、

はい。

香野

まあ、私も仕事を通じて、これは大変良く感じることもありますが、まあ、先程から、登山ツアーなどを組んで、いろんなところに行ってるという話を申しあげましたけれども、信州の方なんかは「山の文化」が進んでいて、ちゃんとお金を払う。いろんな「システム」があるんですね。

ところが中国地区、それから九州の方に行きますと、まあそういうものが「観光財産」だとか「商品」であるんだ、とかいう意識がほとんどないように思われるんです。ですからなんの設備もないで、我々はそこに行って、なんかどうよその道にです、黙って入り込んでババッと荒らして帰るような、なんか「後ろめたさ」っていうものを感ぜさせられるんです。信州の方に行けば、なんか堂々と登らせていただけると、まあ、それだけのシステムもありますから、だげどこちらの方にはまったくないし、また地元の方もそういう意識がない。で、我々行く側からすれば、何かこう、勝手に入って黙って帰ってくるというような、後ろめたさのようなものが逆にある訳なんです。

で、かえて我々の方から言わせていただければ、まあ適当な「入山料」だとか、取捨台だつてウォークをするのに、(維持管理のための)「まあこれも経費がかかるんだよ」ということで、何かを支払う方が、どちらかという、気持ちの中ではさっぱりするっていうような部分も正直言ってございます。

佐藤

外国の例なんかは、なんかご存知なことがありましたら、

浦田

そうですね、やはり草原を、こういう秋吉台のような人工的な草原を維持するためのシステムっていうのは、もう何百年間も出て、まあ恐らく中世くらいからですね、作られてきたものですから、先程おっしゃられたように野焼きだけじゃなくて、放牧それから除草っていうような「手間」を掛けないと維持できなくて、それはもう本当に「農業のために」やっていた訳です、よね。で、今やはりそういうような農業としての必要性が無くなった段階で、誰がそれを両代わりするのかというのが、やっぱり一番大きな問題だと思うんですね。それでまた、自然公園というものを考えてみますと、それなりに規制があってですね、何か変わった事をしようとするときに引く掛かる。

で、先程、放牧で岩がとがっていて邪魔になると言っておりましたが、放牧のことだけを考えていいのであれば、岩は削ってしまうし、ドリーネは埋めてしまうし、洞窟は埋めてしまった方がいい訳です、よね。で、実際に平尾台でそういうことちやられるんですね。採石場の土砂でドリーネを埋めて平地にしてそこに放牧するっていうのが1970

年頃に行われていたんですね。しかしまあ、後になってそれが地下水汚染になんかにつながっているっていうので、それはいけないってことになって。しかし、公園内の一番草原がきれいなところは害を被ってはいけない。ですから、こういった秋吉台、平尾台のようなところは、放牧には、まああんまり向いていないんですね。

ですからその辺でどういうふうにするか、「農業」と「保全」と「観光」とを共生させるかというのは非常に難しいですね。で、「打合せの時に出た話」というのは、海外に目を向けてみると、海外の国立公園、アメリカなり、オーストラリア、ニュージーランドなんかは、非常に管理が行き届いてますし、また「そのための入場料」というものをはっきりと取るんですね。公園に入る道路にゲートがありまして、有料道路かと思うと道側じゃなくて公園に入る入場料なんです。それを払わない人は入らせないと。で、そのお金でレンジャーをまかなったり、いろんな維持管理はされていると、で、まあ日本ではまだそこまでいっていません。だから観光ツアーで利用しようとしても施設がないというのは、そういうふうなシステムになっていないからなんです。もうはっきりと、これだけのお金を払えばこれだけのことがされて、維持管理にも役立つと見えるようなことが、そういうシステムが出来ておればですね、利用する方も利用しやすいですね。

日本は自然がすごく豊富ですから、「自然に対してお金を払う」という意識がほとんど無かったんですね。で、一番いい例が「水」でありまして、誰も、あの水にお金を払おうと誓っていませんでした。でも、数米では水の方がお湯よりも高いということがずっとありまして、最近日本でもミネラルウォーターをわざわざ買って飲むようになってですね、そのような自然や環境に対する意識の変化、これは環境が悪くなっているからであって決していいことではないんですけど、そういう意識の変化が起こり始めている。そういう時代には、環境を維持するためのお金というのが、やっぱり農業や観光とまた別にですね、財源として作れる可能性がもう既にあるんじゃないかと、そういうふうに見えると思います。

佐藤

今のご意見に対して何か発言したいという方はありませんか。

「草原基金」みたいなものを、例えばニュージーランドなんかでは放牧に入るときに、これは九州農政局長がよく言うんですけど、何か、コインを投げたらゲートが自分上がるという、人手を要さない簡単なお金の集め方もあって、草原維持のために「是非日本でも」と言われながらまだ何も出来ていないんですけどね。いい知恵、もしくはどこか、もうやってる所があったら教えていただきたいんですが。

例えば宮林島、今の森林管理局では、阿蘇の越の茶地帯

第1分科会

源で、吾から「水源の清掃のために」ということで100円ずつ徴収しています。で、それは誰にも言わずに払って頂すけども、草原についてもなんか、どうですか。

なんかご意見があれば、はい、どうぞ。

高橋(女)

実際にやってる訳ではないんですけど、三鷹のところ、研究者の方が1年間、調査されたんです。この草原を守るために、どのくらいのお金をあなたなら、1年間に払って頂けますか?というような調査をした結果、平均で6,000円くらいですかね。その高低の差はあるけれど6,000円くらいを草原維持のために出してほしいよ、というお答えを頂いたことがありまして、やはり、そういう草原については「守っていかなくちゃいけない」というような気持ちは日本人の中にはあると思っています。

それがあの、そういうものをキチッと出していないというか、「日本人にはそういう気持ちはないだろう」と勝手に思っている面があるのではないか。そういうものはキチッと提示してみれば、大事なものだというようなことは分かっていただけではないか。それぞれ「環境教育」ではないか、というふうに思っています。子供の頃から草原に触れていくということを、そういうことをしていかなくちゃいけないと思ってるんです。

実際にうちの方にも草原があるんですが、それほど貴重な、第2回目の「草原サミット」をやられるほど貴重な草原である、という認識は市民の中にはないんです。かえって外側の方のほうが、都会の方々のほうがそういった「意識が強い」という結果が出てますので、やはりそういったものを中(地元)の方々にも広げていくべきである。「言っても分からない」じゃなくて、やっぱり「言っても分からない」という意識を持っていかなくてはいけないのではないかというふうに思っています。

佐藤

はい、どうぞ。

香野

それとですね、今の「支払い」の件なんですけども、これはお客側の側が「支払わない」と言ってるのではなくて、多分に受け入れ側の方がですね、「取ったら来ないんじゃないか」という恐れ意識の方が強いんじゃないかと、私はそう思うんです。我々も行政の方と話したり、まあ我々業者の側でいろいろ話をすると、まあ「タダにしない」と来てくれないし、「来ていただけない」という意識がかなり強い。あります。ですから逆に我々ユーザー側(利用者側)の方が、「支払うからちゃんとやってほしい」ということを言った方が手っ取り早いんじゃないかなという気がします。

佐藤

同意ですね。はい、どうぞ。

栗谷

地元の長谷と申します。こういう席に初めて出させて頂いて、まともなことが言えるかどうか分かりませんが、

実はごく最近、ここ3、4年前から、「山歩き」をさせて頂いております。あの、その関係で防長(交通)さんには1、2度ご厄介になりました。ありがとうございました。それで、業々思っているんですが、特に昨年ですね、防長さんから近くの山で「荒山」、それから私共で四国(愛媛県)に参りましたんですけど、特に右越の方で、いわゆる登山道を含めた整備を、非常にきっちりやってらっしゃる。で考えてみますと、「この金どこから出てるんだらうかな」という疑問が湧いてくるんですよね。

まあこれを草原の秋吉台に即当てはめていいかどうかはちょっと分かりませんが、やはり我々、やっぱり山を利用させてもらうとなると、やっぱり道も良くしなさいけないし、年に何回かは道の、登山道の修繕もありましょう。そういうものを整備するためにはどうしても「地元の方」ということであれば、それを草原に当てはめてみると、やはりこれは利用する者がそれに対する何だかのお金を少しでも、やっぱり払うべきじゃなかろうかと、私達利用する側も、私自身は考えています。先程言われたように6千円とか、平均が6千円とか言われましたけれど、それほど高価なものでなくても、やっぱり「いくらかでも」という気持ちは、みんな利用する者は持っているんじゃないかというふうに、私は利用者側の一員として思っております。

佐藤

どうもありがとうございました。他に手を上げられておられた方、はい、どうぞ。

徳永

すいません。今日は「ビデオ録」なんですけど、実は話を聞いてたら、やっぱり言いたくなってしまったものですから、

あの、やっぱり私も「グリーンツーリズム」とかいうものに興味があって、いろいろですね。あ、すいません、私、山口県の柳毛町の徳永と申します。

「わくわく村」、それから秋吉台にもここ7、8年間わかってですね、やはり「わくわく村」の村長さん、すごく人が良くて、すごくあのサービス精神旺盛で、すごくいいんですけど、出来れば楽ね、「もう少し、儲けていいのかな」と思っています。それから「儲けないといけない」と言うか、要するに儲けて、「わくわく村」の松原さん、すごく儲けて最近家を建てたらしいとかね。(笑) そうなると、要するにそういう刺激を他のみなさんに与えられるというかですね。

まあヨーロッパなんかでも、私も2回ほど行かせてもらって、そこでグリーンツーの話、それからその滞在型のグリー

ツーツで、ある農村に泊まって、普通のサファリーマンの家庭の方が、自宅に泊められるんですね。で、何もしない、何もサービスできないけど2階の息子の部屋が空いてるから泊めてあげる、というような形でやっています。

まあこれは、日本では「旅館業法」とかですね、いろいろあって、「民宿」ということになる結構法的なものがあって、山口県でも、すごく熱心にそういう「旅館業法をクリアしよう」という動きとか、公衆衛生関係のですね、「食事を扱う場合はこうしなきゃいけない」とか、いろいろ指針を出してるんですけど、まあそういう環境は結構あるんですけども。

ですから、そういうことをやるためには、はっきり秋吉台の場合は「わくわく村」があって、そういうことを始めたんだから、例えば「入村料」を取るとかですね、村のあるところにゲートを、そんなにまあゲートとまで言わなくてもですね、なんかのイベントの時にはゲートを設けてそこで入村料を取るとかですね、秋吉台での「遊び料」とかですね、なんでもいいと思うんですけども。

だからそれを、例えば身近な方がやられて、例えば「あそこはちょっと小遣いが買えて、ちょっと奥さんにいいものを買ってあげたよ」とかですね、あの何かやると「ちょっと良いことがあったよ」みたいな、そのくらいのことがないと（誰も）手を出さないですよ。それよりはどっかのパートに行ってますね、「小遣いをちょっと買った方がいや」ってなっちゃうんで、だから「サービス精神」大いに結構なんで、それをお金に代えることをもうそろそろやられていいのかなど。

それとやっぱり、「受け入れ制」というかあの業者さんですね、僕も前に聞いたことがあるんですけど、修学旅行のことについてですね、日本旅行の方にちょっとお話を聞いたことがあって、「田舎だけど、もしグリーンツーツで仕舞けるとしたら何人くらい受け入れればいいの」って聞いたら、やっぱり300人、200とか300って言われるんですよ。都道府県から修学旅行で来ると200、300の単位で来るんで、それを受け入れられないとだめだと。で、そんな施設、グリーンツーツやってる中でもそうそうないですよ。で、「どこかに泊めりゃいいじゃないか」ってことで、10軒くらいでやろうとしたんですが、「旅館業法違反」でですね、まあ惣を食べさせたりすると、ちょっと問題になったりする訳ですね。だからそういうことをクリアしないといけないけれども、ちょっとその辺のギャップがあまりすぎると。

だからもう少しうまくですね、民間ベースでなく、旅館業法もクリアしながら、まあ「法の規制」を解くのが一番いいんですけども、要するに、あの、「B&B」と言われてる、もう朝食だけでいいと。寝て(Bed)、朝食(Breakfast)だけでいいと。あとは台所を用意してあげてですね、そこで自分で食卓を取るとかですね。他元の、その辺の畑の物を取っていいよと、その代わりに農家は払いなさいっていうんで、ちゃんとお金を払っていいですね、自由に取っていい

っていうのをやっているとかがやっぱりありますよね。秋田にも確かグリーンツーツでやってるところ、知ってますし、長野でもやっておられますね。そういうことをちょっとやらないと。

あの山口県はよく「もてなしが下手だ」というふうにも、そういう県だとよく言われるんですけども、ちゃんといつ「高直があるんだから、だったらうまく利用してですね、それをお金に代えるっていう、ちょっとこうなんと言っかな、もう少し食欲になっていいのかな」っていう気がしますんで、甘んじてやられてるんで、是非そろそろ値上げをされてですね、儲けようという意識があってもいいのかなって気がします。

佐藤

村長、どうですか。

松原

はい、まあお話を聞いたように、ある人から「村営じゃから税金を取ってもええじゃないか」っていうような話もありましたから、まあぼちぼちみんな考えてですね、「わくわく村」にたくさんの方が親しく来ていただけるような方法をね、考えていきたいと思えます。

まあお世話する人もですね、今おっしゃったように「お金ばかりじゃない」と言っても、やっぱりお金は付いて回ることで、いろいろ、その、ちょうど「工工塩梅」のところを検討してみたいと思えます。

高橋(男)

あの、「仲間内」ばかりで喋っちゃいけないんでしょうね。

佐藤

いえいえ、司会者もしゃべってるんで。

高橋(男)

あの僕ちょっと反論みたいなことを言っちゃうかもしれないんですけど、「わくわく村」で、僕も「わくわく村」に関わらせてもらってるんですけど、例えば「一万円払って下さい」って、まあお金払って「遊びたい」って気持ちはあるんですけども。

あのちょっとディズニーランドに書き換えて考えてみたんですけども、みなさんミッキーマウスやドナルドとかが好きでディズニーランドに入るんですけども、そこでミッキーが「一万円頂戴」って言って、ミッキーにお金を払ってると、何かミッキーは「金の亡者」の様なキャラクターみたいに見えるんですけど、結局入場券っていうのを入口のところで買って入っちゃって、でミッキーはただ進んでくれるだけでお金も要求しないし、黙ってこんなふうに写真を撮ってくれる。で、やっぱり「わくわく村」の人は、なんか「ミッキーでい

てほしいな」という気があるんですね。

それで、出れば「お金」っていうのは、先程「定価」の額がちょっと出てましたけれど、高に乗ったら5,000円とか、それから農機体2,000円とか、そういう「定価」があると、みなさん当り前にお金払うのがなって気がするんですね。で、秋吉台も、入るときに誰かお金を取る「借まれ役」がゲートのところに来てくれてですね、で、先ずガッツとお金を取っちゃったら、中にいる村民や住民は「ミッキーマウス」でいてくれないかあるっていう、なんかちょっとそんな思いがあります。

それからあの、旅行で、例えば観光登山なんかをするときに、防長さんで、レンタルっていうんですね、専門の登山家の力を2人付けるのであれば、そこからガッツを取った予算の中から、そういう専門の登山家を支えるようなツアーには、その専門の登山家に対するお金を払う、レンタルの給料をそこからまかなう、そういうようなシステムにしてもらうと、非常に楽しいお金の払い方になるような、ちょっと気がします。すいません。

百野

先程の方へ、あの2つ回答したいと思うんですけど、石鎚山に行って、まあ「道路が良かった」と。これは前は有料道路だったんですね、でこれがもう有料が終わって、で今、自治体の管理になっています。河筋山が去年ですかね、無料になりましたやはり自治体の管理になったと。それでこれを見ててもですね、どういうふうにして管理するのか、それは全部自治体の負担になってるんですね。っていうことは地元住民の税金です。ですからその税金の中から道路の補修をしていたらいいっていうのが現状だろうと思います。

それから登山の場合はインストラクター、我々は「ガイド」と呼びますが、これは支払ってます。ちゃんと支払ってます。支払わないと来て頂けませんので、で、それはもう私共のツアーの場合には地元から、こっちから全部連れて行って、例外的に北海道だけ現地のガイドを雇うっていうことにしていますが、それでもまあ(料金の)ほとんどはこちらに落ちていますので、現地に落ちないで、お金をですね、そういう現状もあります。

まあ、そういうことでやはり何らかの形で、特に山口県の方はですね、お金を頂くのは何か罪悪のような意識が多少あるんじゃないかなと。これはまあ山口県だけでなく、日本人にはちょっとそういう何か「武士道」ではないですけど、「そういったことにお金をもらってはいけない」というような、何かそういうようなものを、みなさんどこかにお持ちだろうと思うんですね。

だけとやはりこれからは利用する側がですね、やはり支払うというシステムは作っていかなきゃいけないんじゃないか。これは結局、じゃあ何も利用していないその地区の住民の税金で全部まかなわなきゃならないのかという、

地元の方は多分腹を立てられると思います。「私は何も使っていないのよ」と、「私の税金で何でよそから来た人にちゃんとしてあげなきゃいけないのか」と、そういう問題になると思うんです。ですからやはりほう方が「今度また来る時にきれいにしておいてください」という意味合いで支払いをする、汚した分ちゃんとしておいてくださいと、まあ、汚しはしないんですけどね、まあ歩くことによって山の崩壊、秋吉台にも崩壊があるという訳ですから、それにやはり補修をしていかなければいけない。その補修代はやはり利用した人が支払ってくべきではなからうかと、いうふうに思います。

佐藤

はい、どうぞ。

櫻井

春野様にはですけども、ちょっとですね、あの「観光業界の方」ですよね、かなり今日気持ちいいんですが、私自身はかなり偏見を持っていたんではないかと思えます。もう少し悪いヤツだと思っていたんですけども、非常にですね、特に「自然をただで利用してはいけない」というのがですね、ご発想、あるいはいろんな話を伺っておりまして、ちょっと自分のイメージが「違うな」というふうな気がいたします。

で、恐らくですね、あの春野様は語っておられないのですが、お仕事の中、あるいは個人的な体験の中で、そういうふうな「自然観」をですね、今話しておられるような「自然観」を持つに至った、もっとご経験があるんじゃないかと思えますので、出来たらそのことを少しお話ししたいと思えます。それからもう一つは現在の秋吉台の観光のあり方について春野様のお目から見てですね、それをどのようにご覧になってるのかと、この2点のことを少しお話しただけなら幸いです。

春野

まあご指摘の通り、私もさっきから何度も言い出したように「登山ツアー」を7年前に始めて、そのときに初めてですね、登山という体験をさせてもらいました。以来、私はずっとこのツアーに付いて行っております。

で、今言うリーダー、我々の仲間がおりますが、彼等からずっと山の素晴らしさを教えてもらいました。そして自分がその自然にすく感動を持ちました。さっき言われました三瓶にも随分行って、「自然観」の方も、かなり私、知っております。いろんなお話をさせていただいて、そしてそういう方々とお会いして、お話しして、また自分が感じて、このままではいけないと。

確かに言われたとおり、先程佐藤先生も言われたように、「ツアーリストではなくテロリストだ」とかね、まあそういうような「破壊の一役」を担っているのが旅行業者だということは間違いないと思えます。私自身が他の業者ではそういうことをやっていると。で、このままではこの旅行

業、観光業は原れるなど。だから我々が真剣に考えてですね、これからは利用するだけじゃなくて、一緒に、「共生」って言うんですが、自然の中に共生していけるような業界を作っていないと、この業界は終わるんじゃないかというような危機感も持っています。

まあそういうことで私は、みなさん多分そういうようなイメージを持たれたんではないかと思います。旅行業界のヤツが来て、多分旅行業界だから、「あれを良くしろ」、「これを良くしろ」、「道を作り」と。そういうふうに使われてたのが、私が逆の発言をしたので戸惑っておられると思うんですけども、私はどちらかという、今日は「旅行業」というよりも「山を愛する人間」の一人として、まあ今日は話をさせてもらったっていうのがひとつです。

で、秋吉台の問題に付いてもですね、今、秋吉台の方で「ウォーキングツアー」をやっています。で、これには今、九州から大阪からも来られているんですが、まあ私が読んだ本の中にも、「視聴をして人を入れなくしてしまうとかえってダメになる、かと言って、多くの過ぎてもいけない、その緩和が大事なんだ」と、調整をしていかなきゃいけないと。

だから私、先程の話の中でもあったんですが、お金を取れば「来たくない人」は来ないと思います。みんなが行くから「じゃあ、僕も行こうか」という方、結構いらっしゃると思うんです。「ついでに」って、で、お金を取るようになってからそういう人は来ないと思うんです。で、来られる方は、ホントに「秋吉台を見たい」、「歩きたい」、そういう方たちのみが来る、そうするとそこに調和が取れるんじゃないかなと思うかと。

だから逆に言えば、「タダだから故に荒れる」、そして(その修復のために)金を掛りなきゃいけない、という「悲鳴」になってきているのではなからうか、それよりも有料化にして、本当に行きたい人、愛している人にだけ来ていただければ、この秋吉台の自然っていうのは守れるんじゃないか、これはどこの観光地、自然を提供している観光地においても同じことが言えるんじゃないかな、というふうに思います。

あの、「オーバーユース」っていうのが、結局道路を作って、誰でも簡単にいけるようになって、どんどん車で来る。ま、私も経験があるんですけど、四国の剣山(彦島山)なんかに行きますと道路が狭いんですよ。で、駐車場もない。もう道路の脇にずっと車を置いていて、車がもう動けない。これは大台ヶ原(彦島山)でも同じ経験をしました。で、九州でも同じ経験をしました。で、もう「何でもタダだったら行かなきゃ損々」という感じでボンボン来られる訳ですね、それらただの「徳島登山」で来るだけで、本当に山が好きだから来るっていう人は少ないんじゃないかなあと、で、オーバーユースになっているんなら車を引き返さず、そういう原因を作っているんじゃないかなというふうに感じました。

櫻井

最初にお尋ねしたもう一点のところ、もう少し詳しくお聞きしたいのは、いわゆる秋吉台が「通過型の観光地」という状態になっているところを、旅行業界の方からのお気持ちも、もう少しお聞きしたいと思います。

ま、よく出会うのは「萩、津和野、秋吉台、3日間の旅」みたいな感じですね。そういうのが「今の秋吉台の観光の主流」になってるんです。秋吉台とかのね、そのへんの観光と、現在おっしゃっておられるような「観光のあり方」の矛盾とかですね、そういうのを「観光業」というお立場から、もう少しご意見なりをお聞かせ頂きたいと思います。

青野

私が「こういうことを言うのは間違っている」と自分で思いついて言います。

今、旅行業界も末期的な症状を示している。と言うのは、まあ「低料化」でないとお客さんが来ないと、もう「ダンピング合戦」で低価格の旅行商品ばかりが氾濫している。

そうするとですね、どういふ事が起きるかと言うと、中には入らない、金が必要から、前を過ぎて台上を走ったらもう秋吉台に行った事になる。と言うような論法なんですね。で、結局「通過型」で、展望台に寄って、スカイライン通って我々に行く。また、彼から反対方向で来るというのが現状ですね。だから、ほとんど地元で金が落ちない、金が落ちないで、補償ばかりやっている。補償ばかりに税金を使っているという結果に甘やかさないですね。だから有料にしてしまえば、逆にそういう「どうでも」ね、本当は見たくもないけど、「ただコースに入っているから来てるんだ」というお客さんは来ないと思います。

だからこれからは、私、いつも話をするんですけど、この旅行業というんですか、まあ世の中もそうですけど、「曲がり角」にきています。ちょうど、で、こういう「低価格競争」が始まるっていうのは、もうどうにも手の打ちようがない状況、それが結局、低価格競争になってるんだらうと、で、また旅行業自体が、今のところ「新しい方法」がまだ見い出せてないっていうんですかね、それが見い出せば、この低価格競争ってのは終わるんじゃないけれども、まあ今まで右上がりできた旅行業です。で、旅行業界の人側で言うのは、その中にとっぶり遅かっちゃんって、新しいものに対する開発能力というものがどうも最近弱くなってきている。

だから、気が付いたところは、もうどんどん「新しい事」をやっています。だけど、昔のように、まあ何て言うんですかね、例で言えば「網を掛けてトサッと捕っていく」という手法でないと旅行業でないと、というような感覚がまだあるんですね。「一本釣り」は、そんな馬鹿らしくてやってられないよ、というような感覚がまだあるんですが、世の中は、完全に「一本釣り」の方向に行っています。だから、早く気付いて直すべきじゃないのかなと、同じ業界人としては思っています。

第1分科会

佐藤

はい、どうぞ

清水

私、あの、地元の観光業者の一人ですけど、先程から観光業者の方のお話を聞いていると、まあ、「来なきゃ采なくてもいい」と、ある意味においては非常にショッキングな発言であると。秋吉台にどういうふう「トイレ」を作って、どういうふう有料化して、まあお金を取るかと。

ただですね、お金を取るだけが経済効果じゃないんですよ。例えば、たくさん人が来てくれれば、地元の商圏は何らかの形で利用していただける。だからですね、人が来なくなったらどうにもならない、既にそういうふうなんです。ここはなってるんですよ。

しかもですね、秋吉台は有料ですよ、これに入られた方が、千いくらですけど、「おお、高いのう」と、家族4、5人で来れば何千円かの入場料になる訳ですよ。だから「案外高いなあ」というようなことを言われるんですよ。だからこれですね、秋吉台を有料化したらですね、これはほとんどない車になる。いざさか「現実離れした議論」だと、私はそういうふうに思うんです。

それで、今以上に観光のですね、秋吉台を我々が手入れをしていくのか、そういう具体的なものも見えない訳で、今の議論の中で、あの秋吉台をどういうふう我々が手を入れてですね、「やれ」という事なのか、その辺りも、もし具体的なご指摘があればですね、具体的にこ指摘いただいたら、こういうふう思うのですが。

青野

まあ、今の話は正直言って、まだまだ先の話のことになると思うんです。私が先ずやりたいなと思うのはそういう、特にウォーキングのお客等は、やはり「基金」とか、そういうものを自主的に入れてもらいたい。そして、利用させていただくという気持ちを持っていきたいということが先ず「第一歩」だと思います。

で、確かに今のご意見、切実な問題だと思うんですけど、私も業界の人だから分かるんですけど、確かに有料化したら来ないです。今は、今は絶対に来ません。

今は「コース作り」を私達がやっても、「あそこここは有料だから外そう」というようなコース作りがメインです。そして回費(団体経費)をいかに落とすが、そうしないと競争に勝てないというのが現実ですよ、それは分かります。私達が言っているのは「将来的な話」であって、今すぐどうこうしようという判断ではないんですよ。ですけど。

まあ先程から論議しているように、我々は(先の話)を、している訳でして、将来的に、これを一切無料にしてしまうと、先程言ったように、その観光地は荒れていく。我々が大事にしなければいけないのは「資源」ですね。その資源をなくしてしまったら旅行業も観光業も何も無い。

だから一番大切なことは、この自然を、我々の観光資源を「どうやって守っていくか」ということが先ず第一だと思えますね。それがなくなったら、もう何も出来ない。だからそのために「将来どうしていくべきか」というのが今日のお話ではなからうかと、私は思っておりますけど。

佐藤

確かにそうですね。今、たくさんお客さんが来ている北海道に調査に行きますとですね、地元の旅館が1泊2日でもらっているお金ってのは3,500円くらいしか落ちてないんだそうで、数は多いけれどもお金は落ちてないという話でした。

そういう現実の中で、いろんな世界的な流れを少し、「T社の調査部なんかと勉強しているんですが、ヨーロッパのグリベンドロフという、ヨーロッパのツーリズムの理論的な学者がおっしゃってるんですが、成熟したツーリズムのマーケット(市場)には3割ほど、高い支払い能力を持った高学歴高所得で、エコツーリズムなどにたくさん支払う意思があるという人達の層がある。そしてそういう人達がマーケットに3割くらいいると、そういうことを言っていました。

で、日本でもこれから「おいしい客層」はですね、やっぱりいるんですよ。やっぱり支払い能力があり、そうした「意思」を持っているっていう人達はいる。ですからそれに「踏み込む事が出来るどころ」が生き残る。21世紀には生き残り、極端に言うところエージェントに依存してダンピングで生き残るところは、僕は何か消滅するんじゃないかと、「仕分け」はとても簡単で、まあ学者だから、そういう言い方をしたんだと思いますけれども、ここは「考え系」だと思います。

青野

あの、具体的な例であるんですよ。ある地区で安いツアーを何千人と打つからという事で、供給金まで支払って、で、実際に誰かに来た時、落とすとしていったのは、お金でなく「ゴミ」だけだったと、現実にあるんですよ。で、本当に聞いておられました。「あんなものに入らんじゃなかった」と。

だから、「安いツアー」ですから考えて下さい。金があれば、そんなツアーに行かない訳ですよ。あれば、ちゃんとしたツアーに行くはずですよ。なしから行く訳ですよ。そしたら、そこでお金も落ちないんですよ。だから、その辺のところは良く考えなくちゃいけないですよ。これから先は。

蒲田

それで将来のことを考えてですね、草原に限定してみますと、草原の環境資源的な価値を高めて、お金を払ってほしいというふうに思ってもらう。例えば、ミネラルウォーターでも、どこかこの水だから「これは飲む」ということがある訳で、そう考えますと、日本の草原というのは完全に「価値が高い」と思います。

と言うのは、ひとつは、先ず広い草原って日本には少ないですよ。どうしてかという理由は、日本のように険しい地形の場所には、なだらかな場所があまり残っていない。さらには、雨が多くて湿かいところには、ほっといたら森ができますから、草原が出来ているってことは何らかの条件が、特別な条件があって、「森を作らない」ように邪魔してるんですよ。それで残っているなだらかな地形といいますと、三瓶や阿蘇のような火山地帯であるとかですね、また秋吉台や平尾台のようなカルスト地域、それから海岸近くの海底が隆起したところなどですね。そういう環境的には特殊な理由があるところですよ。そしてまた、森が出来ないというのも、人間の手が入っているとか、自然環境で言えば条件が悪い、湿地帯であるとか、風が強いとか、砂丘になっているとか、そういうところなんですよ。そういうことから逆に考えましても、草原ってのは、日本の環境の中で非常に「特徴のある場所」なんですよ。

だから草原といっても、全部ひとまとめにせずに、それぞれにどういう特徴があるのかということを出すとですよ。それが価値として人を集めることが出来ると思うんですよ。そうすると、ある草原に行って、それからまた別のところに行って、そしてそこが「なぜ草原であるか」ということを考えさせるようにする、そうすると思います。

佐藤

そうですね。

まあ大変いいところで時間が来まして、「まとめ」をお願いします。やはり、お客様を、いいお客様をたくさんお迎えする、またしなげなければならないという切実な要求がありますし、それを支える観光がとにかく生き残ってやらなくては困る。そういうことを考えますと、今、浦田さんからおっしゃっていただいたように、ひとつは、重要資源としての草原をネットワークすることによって、日本人は「百名山」とか言ってネーミングがあると必ず行ってみたいと気が済まない性質ですから、「名所旧跡めぐり」というのもそれでおこっている訳ですから、例えば「草原四十八景」とかですね、我々もあちこちで、第4回目で集まりましたけど、そろそろ草原の「ブランド化」を確立してですね、そして、それが「何かいいの」か「何かいいの」か、そこは学術的な研究をきっちりやって、「世界的にアピールできる規模の確かなもの」にして、そしてそれが「文芸能力のある人に届く」ような形で情報発信する。そういう事を次の課題として臨み込みませんか。

そして、ひとつ提案があるんですが、来年が国連の「エコツーリズムイヤー」です。また日本で動いているところがほとんどないんです。時間が無いんですけども、草原をエコツーリズムイヤーの「日本のプロジェクト」という形で情報発信する、という決断をここで上げていただいただけませんか。それを「シンポジウム」で議論をするという流れを作りたいんですが、

3つ提案をちょっと、相当強引な割合者ですけども、ひとつは価値のある草原、この草原に「なぜ価値があるのか」という根拠を多くの研究者の相当研究で確定をする。そしてそうした「価値のある草原のネットワークを作る」。そこにエコツーリズムの大きな人の流れを引っ張って「国際化していく」。そして、そのための「草原基金」とか「草原トラスト」とか、もしくはブランドになった草原を通る限りに対しては「料金を取る」。そういう意味では、「料金を払うほど価値のある」草原を、我々は、みんなの力で選んで守っていく、そういう事を始めていく。そのことが「新しい観光」を、観光というはある意味で終わったと思はずけれども、「ツーリズム」、世界に通用する?1世紀の基幹産業にツーリズムはなると言っておりますけれども、そういう「地域の基幹産業を作る」というような決断をですね、「観光を守る」ことが産業を作ることになる」という時代にあるということも、賛成出来ない方は手を上げてください。(笑)

こういうやり方はとても日本的なんですけれども、時間がないので仕方ないんですが、「拍手をする」という形で了解していただけますか。(拍手) まあ「曖昧模糊」といったところでしょうね。

まあ、こういう課題を今後議論していこうと、まあやっぱり、もう「草原サミット・シンポジウム」も来年で5回目になりますので、もう「議論の段階」ではなくて、「草原は」どんどん湧いていきつつありますので、「アクションを起こす段階」に来たと思います。

そういうことで、シンポジウムの場では、「観光と保全」の分科会ではこういう話がありましたと、判断と偏見で問題提起を先ず切り出して、進んでいきたいと思っています。

じゃあ、長丁場どうも有難うございました。どうもみなさん、有り難うございました。

■第2分科会

『生態系と保全』

— 事例発表 —

事例発表 秋吉台パークボランティアの会

塩谷 信夫

ナチュラリスト

武次 房江

坊がつる野焼き実行委員会会長

弘蔵 岳久

山口県畜産試験場

藤井 宏志

進行 中国農業試験場主任研究官

高橋 佳季



高橋

時間が来たようですので始めさせていただきます。

この分科会は生態系の保全に関する分科会ということで、今日4人のパネラーの方にお話をさせていただきます。時間も時間ですので、一言簡単にこちらの方からパネラーの方をご紹介させていただきます。

一番左、最初にご講演をさせていただきます、塩谷信夫さんです。「秋吉台パークボランティアの会」の会員で、奥庁の職員でもいらっしゃいます。そのお隣が、ナチュラリストということで場のお話しをさせていただきます、武次房江さんです。よろしくお願いたします。それからそのお隣は、「坊がつる」という、丸住山(大分県久住町)の麓に「坊がつる」という草原というか草原があるんですけども、そこで実際に野焼きをやっておられる弘蔵岳久さんです。どうぞよろしくお願いたします。最後がお隣の実行市から、岩永台にある山口県畜産試験場の方で牛の放牧による輪刈りを、「輪刈りって言うのは火道切り」ですね。このことを研究されている藤井宏志さんです。よろしくお願いたします。今日はこの4人の方からお話しをしていただくことになっております。

で「生態系と保全」という、非常に大上段に振りがぶった分科会に引っ張り出されて「どうなるのかなあ」と心配なんですけれども、ここは「学会」ではございませんので、「生態学会」でもなければ「植物学会」でもない「動物学会」でもないということですので、学術的に進化するようなお話しというよりは、むしろ草原を生態系として捉えたときに、それを守っていったり、その内容をいろいろ調べていったときに、「何が分かったか」、それから、それを守るために「どういう苦労をされているか」、或いは「どういうふうにしたらいいか」という事をですね、それぞれに提言をしていただければよろしいんじゃないかと思っております。

それでは時間も時間ですので、早速パネラーの方にお話しをしていただきたいと思っております。一人10分から15分程度お話しをいただいて、その内容についての御質問だけでも、まず会場の方からお聞かせいたします。それで最後にいるいると討論をしたいと思っております。

それじゃあトップバッター、塩谷さんの方から話題提供をお願いいたします。

塩谷

報告と申します。私は一応レジュメの方に書いておきますように、過去に秋吉台の草原について調査をしておりますので、その調査の内容と現状を、またこの2月に写真を撮っておりますので、それらをご紹介しながら進めてまいりたいと思っております。早速ですけれどもスライドの方でご説明をさせていただきます。ちょっと短くしていただけますか。

(以降、スライドを使つての報告)

まずこの調査につきましては、「秋吉台草原実態調査」ということで、平成8年度に山口県の方が園地庁、今の環境省の外郭団体の「財団法人国立公園協会」に委託いたしました実施したものです。

で、まず秋吉台につきましては、「我が国最大のカルスト台地」ということで、約130平方キロメートルあります。で、先程の「基調講演」の中で園地理事長さんの方からありましたが、「園地公園」、それと「特別天然記念物」に指定されております。まあ学術的にも重要な地域となっております。

で、これはちょうど去年の「山焼き」の風潮になりましたけれども、まず秋吉台の草原、これは先程ご紹介がありましたように、別日行なわれます毎年2月の山焼きで維持され

ております。

で、「秋吉台の山焼き」、これは先程榎本館長さんの方からご紹介がありましたけども、文献によれば古墳時代、今から1500年前頃にはもう「火が入っていた」という記述があります。ですから丁度、榎本館長さんのお話のように「中世の始め」と言うことですから、この秋吉台の草原自体が千数百年、1200年から1300年ですか、これくらいの歴史を持っております。

で、「火入れ」、火を入れる草原では阿蘇地方が一番広くて、秋吉台の約10倍くらいの、トータルとしての面積はございますけれども、「ひとつの区域」ということでは、「我が国では最大規模の草原」を持っております。

それともうひとつ、朝方の話でもありましたが、草原性の動植物が生息する、まあ貴重なエリアでもある、ということですよ。

その中で、今回論じている問題につきまして、ちょうど朝方の話でもありましたが、例えば景色の美しいところなどに集中して、一地点で、観光客の方とかが結構集中して歩かれますので、「禊地」と言うか、そういった「けもの道」のような道、人が集中して歩くことで出来た道の道が開所に作られております。

それで結局、ただの「はだか地」という以上に、傾斜がありますとどうしても履金をしてしまうということで、表層の土が削り取られてしまって溝のようにな状態になって、雨が降るとそこを溝のように水が流れて、更に表層を削り取る、ごろごろとした石が露出している「溝のような状態」になってしまうといった個所が結構見受けられるという問題がひとつあります。

それともうひとつ、樹木が結構、またご覧いただければと思うんですが、草原の中に樹木がどんどん、どんどん入ってきておまして、特にこれが「古い樹木」と言うよりも、むしろこの10年間くらいに入ってきたなと思われる樹木がたくさん生えております。

で、この主な原因は、草草が、どうしてもずっと続いているという事がありまして、広い一面の草原に、ぼつぼつぼつという具合にブッシュ化した樹木、林がどんどん、どんどん出来ております。

で、この実態調査では「山焼きの範囲とその変遷」と書いてありますけれども、どのように動いてきたかという事と、「禊地の分布状況」、それから「植生荒廃と禊地化の現状」、それと「樹木の分布」、それと量等に「草原修復」、これをですね、ひとつは禊地を草原に戻すという事と、歩道が出来ただけ一本化して、そのかわりがテックとした歩道にしていくという事と、それと樹木の方は樹木の伐採をやって行きたいと考えておまして、まあその「工法を検討する」といった調査になっております。

で、まず最初の草原の現状ということで「山焼き範囲」、空中写真で測定した結果1,180ヘクタール、他に「1,500ヘクタールの草原」と言われておりますけれども、1,180ヘクタールになっておまして、この10年前後で縮小した山焼き区域が100ヘクタール以上と、原因が判っているのが40ヘクタールくらいありますけど、まあ100ヘクタール、10分の1くらい縮小しております。

で、これが一番の草原の特徴と言える、「コナダケススキ群落」と呼ばれる群落になりますけども、典型的な秋吉台の植生になります。

で、丁度ここが、右の方に切っておりまして、これが「火道」、防火帯でございます。これは2月の始めに写真を撮りましたので既に火道切りは終わっておりますが、ここが防火帯になっておまして、多分これが1年目くらいの草が生えているんじゃないかなど、そしてここを10m幅くらいで判っております、その外にはもう既に樹木が、これは松がおりますけども、樹木がどんどん、どんどん入ってきておるといった現状があります。

で、向こう側に丁度草原が見えておりますけども、段々こういう具合にブッシュ化してくるといって、どんどん中層に降りてくれば、こうブッシュ化して人が中に入れないような状態になって、これが丁度樹林とブッシュ化した間になりますけれども、結構この間を通るといって、なかなか難しくなっております。で、地元の方が山焼きで上がって来られますけども、非常にこういったところは通り難くなっているということと、昔々山焼きの草原の区域と地元の集落との間が遠くなっておますので、移動に相当な時間と労力を要すると言ったような現状、問題点もあります。

で、これが「禊地化」と言うか、「けもの道」、私達が「けもの道」と呼んでいる、人が歩くことで出来た禊地化した道になります。ここが明日山焼きを見ていただく展望台になります。これからずっと歩道がありますけども、ここが「若竹山」という見晴らしの良いところですよ。で、その間にたくさん「わき道」が走っておりまして、正確のルートはこれからこう、この若竹山の後ろを回ってこういう具合に上がって行きますけども、ここに1本とかここにも1本とか、パイパスみたいな形で「わき道」が形成されておまして、この辺りが結構踏み付けられていて、そういうところが板かっているというのが、まあ上から見ると判ります。

で、若竹山の頂上から見た、踏み付けられた近道の「けもの道」になりますけども、これはまだ傾斜がないからこれくらいで済みますけども、中ほど回りまで降りて行けば溝のようになっているというか、表土が流れてごろごろした石が露出している、ご覧のものよりももっとひどい、そういった状態になっておりました。

で、これがもうひとつの禊地化の激しいところで、「長者ヶ森」の野原がこの辺りにありますけれども、「北山」という長者ヶ森の北側にある山です。若竹山同様、大変急めの

良いところで、たくさんの観光客の方が長者ヶ森の駐車場に車を止めて、歩いて上がってこられるところですが、本来の歩道がこれからこう戻って、こうありますけれども、ここをバイパスで通られておまして、後また写真をお見せしますけれども、結構「ほげてる」と言いますかですね、崩れて溝のように溝がなっております。

で、これが北山の山腹の、修復する以前の写真になります。このように道がツルツルになっておまして、ここをずっと人が踏み付けて道跡のようになっておりました。

で、これが「施工後」と言うか、きれいに修復した後で、人が入れないように柵がしてあります。

で、従来がこれで、こういった山腹に「裸地」と言うか、道がずっと上まで続いていて、雨の日ほまさに「滝のように」水が流れておるといふ状態で、これが工事が終わった後、ここに芝を蒔いております。まあ段々こう、こちらの方の草がこちらの中に入って来るという状況なんですけども、ひとつ問題は、多くの観光客の方はなかなか入ってこれないんですけども、人が入らないようにこうして柵を柵で囲っていても、例えばここに、もう脇に別の道が出来ているとか、柵の中を上から登りてこられる方がいらっしゃって、なかなか思い通りに本来に戻らないという現状があります。で、「私たちここ」になっておまして、結構お金を掛けてやっておりますけども、なかなか思い通りにならない。人の動きはどうしても楽な方へ、楽な方へと行くということで、多分ここを潰したら(修復したら)またこちらの方ということで、どんどん同じ事が続いております。

「山焼きの範囲と樹林面積」ということで、一番注目されますのが、この「落葉広葉樹」が2.8%とありますが、主にクヌギの木になります。クヌギの木は非常に耐火性があると言うかコルク質が固いということと、落葉樹ですので針葉樹に比べれば葉っぱが無いということと、現在の山焼きの方式では火をつけたら「パッと燃やす」という方式になりますので、非常に燃え難いというのがありまして、これが結構幅を利かせて残っております。

これは先程の地点と反対側の写真になりますけど、草原の方にカメラを向けてパッと写しただけで、こういったところに、遠くでいえばこれで、近くではこれくらい木が徐々に生えて来ていると。これは2月ですので常緑樹です。で、ここにあるのが落葉樹。こういう具合にあります。

で、これは「ドリーネ」と呼ばれる窪みですが、ドリーネの中に常緑樹が結構残っているのがよくご覧いただけるのではないかと思います。

で、逆に山の尾根と言うか、高いところにはこういったクヌギの、耐火性のある木がどンドン、どンドン種を落として広がっております。

これが秋吉台の一番中心の「地獄台」と呼ばれている一番石灰岩柱が多いところですが、ここにも樹木が密集してい

るところが見受けられますが、岩に囲まれた形で、これが火を止める動きが岩にありますので、こういったところでは結構耐火性の無い、火に弱いタイプの木というかそういった常緑樹、広葉樹が結構残っております。で、これが点在しておるといふ状況です。

で、ここは北山。先程荒れていると紹介しましたが、一番展望台としては都合がいいところなんですけど、ここに長者ヶ森がありまして、向こうはもう秋吉台の端になりますけども、こう一望しても、季節的に2月ですから落葉してまっすけども、結構ここ、ここ、ここ、ずっと樹林がどンドン、どンドンこの帯で広がっているというのがご覧いただけるのではないかと思います。

以上で「実地調査」の方は終えさせていただきますけども、時間の関係で、対稱につきましては、平成9年度からずっと、いろいろ木を切りたり雑地の修復を行ったりしていますので、後は資料の方をちょっとご覧いただければと思います。

続きまして、私の属しております「秋吉台パークボランティアの会」について、ちょっとご説明をさせていただきたいと思います。

まず「活動内容」につきましては、元々「草原の修復」と言うかそれが主になっております。それと、まあ「遊びながら」と言うか、永續させるためにはある程度「楽しくやる」ということで、いろんな「自然観察会」がありますけども、まあそういったことで活動をしております。今、会員数が38人、年会費1,000円ということで、「秋吉台管理事務所」の方でお世話をさせていただいております。

で、「活動風景」ということで、丁度大雨の後、遊歩道の修復をしている様子ですが、秋吉台の遊歩道は余り舗装とかがされておられません上に、こういった侵食で石などがゴロゴロしておりまして、それをもう一回「上流」と言いますか上の方へ戻すということでやっております。

で、もうひとつ、これは先程出ました北山のところですが、船方の藤本先生のお話の中でもありましたけども、戦時中というか、戦争のために掘られた褐鉄鉱(鉄鉱石の一種)の採掘跡がありましたけども、実はもう50年くらい寝込んでますが、ひとつには秋吉台には水が無いということと、結構強土が熱くなりまして高温であるということと、土が流れやすいということで、どうしても草が根付かないということで、広い面が赤膚のままになっておまして、ここに手作業で芝を張り付けたという、丁度その直後の写真です。これを去年の春行ないまして、この冬見ましたら、まあこういったシダ類というのがボツボツと生えてきておまして、この道は少し、やはり芝が高温で枯れておりますけども、次第に取戻しておるといふ状況です。

で、これが全体の様子ですけど、程々上の方に上がって来るという状態になります。

まあ「パークボランティアの会」、手作業でみんなやって

おりますので、まちまちとこういった活動を掲げております。ご興味がある方は是非入会をしていただきたいと思っております。以上でございます。

高橋

はい、どうもありがとうございました。

熊木は調査を実施されて、マクロの面から段々小さなところまで、そしてその具体的な提案に基づいてですね、道の整備だとか、樹木の伐採だとか、そういう活動内容をご紹介していただきました。

秋吉台全体のイメージを見るのに、先程の「基調講演」もとてもわかりやすかったんですけど、また違った面を見ることが出来たんじゃあないかと思えますけれども、今のご報告に対する質問、何かありましたらお受けしたいと思えますが、いかがでしょうか。

ここですね、光(照明)がものすごくまぶしくてですね、会場の方の顔が全然見えないんですよ、それで声を出して手を上げていただけますでしょうか。どうぞ、よろしかったら、いかがですか、ごいませんか。

はい、それじゃあまた後の「討議」の中でいろいろと話題を提供していただきたいと思えます。じゃあ折角ですから私の方から幾つか質問したいんですけど、「けもの道」とか「牛の道」とか「人の道」とかいろいろあるんですけど、「けもの道」の場合も、ああやって頂上へ向かって真っ直ぐに行くようなものがあるんでしょうか。

高橋の方ではですね、「牛の道」ってのは必ず(斜面に対して)横にしか作らないんですよ、ですから少々、あんな垂たい牛道が多いんですけど、土壌が崩壊することはあんまり無いんですよ、それで実際に斜面を渡すのは「じゃあ誰か」って言うと、大抵人間なんです。面白いことに、人間はすぐ、縦に真っ直ぐ登ろうとする。そうすると、もっぱら道を補修する一方で、何かそういう「読道道路」みたいなものを作っけいらっやるのかどうかってのを、ちょっとお聞きしたいんですけど。

池谷

元々、「景色のいいところ」に道を作るというのは非常に難しいですから、景色の邪魔にならないように、出来るだけ奥割を通して「道が見えないように」ということで工夫して作っていることが逆に「仇」になりまして、先程高橋さんがおっしゃいましたように、どうしても一直線に人間が上がる。

で、もうひとつは、調べてみますと大体傾斜が15度以上に降りますと侵食が始まるというのがどうもあるみたいで、侵食が始まったら人間はどうするのかと言うと、今まで一面所を歩いていたのがですね、段々こう道ができてくる。で、先程の「棚の写真」でご覧いただいたように、棚の外側に道ができてくる。同時に段々広がって益々大変な事になる。

ということで、「こちらから行けますよ」という(正科のル

ートを)案内しました。鹿かにその通りによがられる方は多いんですけど、今度降りるときは「一直線」に降りられるということで、これもなかなか「距離が及ばない」と言うか、もう監視するくらいしかないとかなど、もうちょっとモラルに訴えたいなというのがありますけども、どうしても「事をしたい」というのがみなざんあるようです。以上です。

高橋

はい、ありがとうございました。ほんとに難しい問題ですね。先程の「基調講演」にもありましたが、「人が入るとするとどこかが壊れていく」という、「堂堂洞」の崩れるものかも知れませんが、またいろいろとお気付きの点があったら後でお話しをいただきたいと思えます。

それじゃあ2番目の「ご提案」でございます。武次さんの方から、よろしくお願いたします。

武次

武次です。お手元の資料にですね、秋吉台の周辺部を含んだ地域に生息する蝶の種類を列挙しておきました。私は秋吉台の蝶に大変興味を持ちまして、14～5年、秋吉台の中をずっと歩き回っております。今日は、秋吉台の自然とその保護を「蝶の観点から考える」ということで、お話しさせていただきたいと思えますが、あがって途中で話が中断しても如何かと思ひまして、こちらの方に書いたものを準備しておりますので、失礼ですが読ませていただきたいと思ひます。

これは少し古い資料ですが、以前、1991年11月26日の毎日新聞に、「日本の森林と草原の割合」ということが載っております。森林が68%、草原が3%と、「世界に比べて草原の面積が少ない」という事が書いてありました。多分海外では牛や、羊とか、数を多く飼っていて、また放牧などを行っているから、そういう点では「人工的な草原」が多いのではないかと思います。またこれは10年前のもので、現在では草原の割合はもっと少なくなっていると思われま。

戦後、1950年から1980年には、特にクスギ、コナラなどの雑木林がスギ、ヒノキの林に変えられてきました。雑木林の樹木を薪や炭にして燃料にした生活も、石油やガス、電気になりました。

草原は「草刈り」、先程からおっしゃっていらっやるように「草刈り」、「山越え」、「放牧」によって維持されてきたことは周知の通りでございます。以前どこの農家でも田畑の新作、灌漑のために牛馬が飼われておりました。牛馬の飼料として、また田畑の肥料として、草刈りは不可欠でした。

戦後、「高度成長期」に入り、農業機械、化学肥料の急速な発達、普及により草刈りの必要性も薄らぎ、草原の構成が「シバ草原」から「ススキ草原」に遷移してきました。都市と農村の所得格差が生まれ、農村の過疎化が進み始めました。現在多くの草原は宅地化、ゴルフ場、スキー場に変質し、

ています。そうした中で園地「秋吉台」は多くの方々の英知と理解の元に、草原として守られてきたことを嬉しく思います。

近年「里山」という言葉が一般的になり、「里山を守ろう」とよく言われております。人々の手が加えられて維持されてきた森林、「二次林」を中心に、人の暮らしと深く関わって来た里山村の自然と生活を守る運動も行なわれるようになりました。里山はたくさんの種類の動植物を育んできました。ここ10数年前より各地で理解されるようになり、それに対する対策、取り組みも始まりました。日本生態学会も早くから「里山」に着目し、各地で調査研究がなされております。

草原性の蝶の衰退は著しく、幸いにして日本産の蝶は、また一種類も「種の絶滅」はしてはおりませんが、国内でも種によっては多くの地域で絶滅したところもあります。その原因として草原の開発は勿論のこと、草原の草刈り、山焼き、放牧の衰退といったことも無関係ではありません。蝶は人為を含め環境変化に対応し盛衰を繰り返してきました。人間は多様な環境でも生きられますが、蝶にとってはちよつとした環境の変化が致命的な結果になります。秋吉台と言えども蝶にとって決して満足のいく環境ではありません。次に挙げたものは秋吉台の草原を代表する蝶で、「山口県産蝶類レッドデータリスト」に指定される蝶たちの名称とその生態の一瞥であります。

ということで、ここに「ツマグロキチョウ」、「クロシジミ」、「シルビヤシジミ」、「オオウラギンヒョウモン」、「ウラギンシシチョウモン」、「オオムラサキ」、「ウラナミジャノメ」、「ギンイ子モンジサセ」などと列挙いたしましたが、この秋吉台周辺には現在71種類の蝶が確認されております。

蝶は種により「成虫発生時期」、「発生回数」、「越冬状態」、「食草」も異なります。そのため環境の多様性、食物となる草「食草」も豊富なことが望まれます。これらの蝶がいることは、やはり山焼きと草刈りによって、秋吉台には蝶の餌となる「食草」が維持されてきたことに起因しているものだと考えております。

「山焼きが蝶に与えるもの」ということですが、山焼きによって一部の蝶が焼死することは事実ですが、蝶の食草の生育に好影響を与えるメリットの方が大きいと思われまます。それは山焼きをしない場所より、山焼きをしている場所の方が蝶の種類が豊富なことから推定できます。

また「草刈りが蝶に与えるもの」として、草刈られる時期により「被害」が無い訳ではありませんが、山焼き同様、蝶の食草の生育に好影響を与えるメリットの方が大きく、山焼きのとき、草刈りがされているところは「焼けるもの」が少ないため、越冬して越冬している蝶の幼虫が高濃にさらされる率が少ないと思えます。

草原の維持には「山焼き」、「草刈り」は不可欠であります。秋吉台ではどちらも部分的に継続されてきましたが、10数年前頃から多様性に富んだ草原が、急速にススキ草原に遷

移してきたように思われます。

ススキは多種の蝶の食草ではありますが、刈取りがされずに山焼きが行なわれると、根元で越冬している蝶の成虫は高濃にさらされ、死亡率が高いように推測されます。全国的に草原がススキ草原へと向かう傾向にあり、かつては繁殖率の高かったジャノメチョウ科の「ジャノメチョウ」が、ここ近年、秋吉台でも激減したように思われますのは、ここでは「何故でしょうか」と書いておりましたが、ススキが全部刈られないで焼かれた場合には、このジャノメチョウと言うのは地表面ではなくススキの根元近くで越冬してあるそうです。だから上から火の粉が落ちて当たる率が高いから全国的に、よく「煤塵」の中では「秋煤」と言われてきた多くの蝶たちが、今全国的に激減していると言われております。

秋吉台でも確かにこの蝶がいなくなったんです。「いない」訳ではありませんけど、このチョウチョは元々7月の下旬から7月いっぱいまでたくさんいる蝶で、それから8月の間は少し減りますが、草原に入れば、他の蝶を観察するのにも邪魔になるほどいた蝶ですけれど、現在では急減しております。

だから蝶というのは、「植生のバランスが崩れてきたから蝶のバランスも崩れてきた」ということが言えると思えます。「蝶は環境を写す鏡」と言われております。蝶を観察してきたものとして「選言ではない」と思えます。

秋吉台上の放牧、草の利用、ドリーネの活用なども総合的に考えてみる時ではないでしょうか。広範囲な草刈りに対して、同時に全面的な草刈りを行なうのではなく、季節も視野に入れて、いくつかのブロックに分けて、ローテーションで草刈りが出来れば、草原自体も多様性を持った草原になるのではないのでしょうか。私達は素晴らしい自然と、その回復のために英知と力を合わせて守って行くべきではありませんか。という事が私の心に燃わって来て思った事でありまます。

その他にも、こちらの秋吉台上には日本各地で姿を見なくなった蝶で、「オオウラギンヒョウモン」と言う、山口本地域と言うか、本州ではここ秋吉台だけにまだ生き残っている蝶がおります。食草はスミレです。この蝶は九州辺りでは割と数多く繁殖しているんですが、その「生き残っている場所」と言うのが皮肉にも自動車道の演習場、山焼きをするところ、放牧をするところ、草刈りをするところ。そういうようなところに、九州では割と本州に比べて繁殖状況が良く、こちら秋吉台の方でも以前、15年くらい前は大変多かったんですけど、ススキ草原に遷移することによって食草のスミレが減ってしまったとか、草刈りの時期が例年よりズレてしまった時に、一番大きな「ポイント」と言いますか、場所、「繁殖エリア」の草を、卵の付いたまま秋吉台から持ち出されたことが過去にある訳です。その頃から急激にその蝶が減ったことも事実のようです。でも今まだ生息しておりますから、みなで力を合わせて守って行ってやりた

いと、私は悲っております。また、みなさんのご協力もお願
いいたしたいと思えます。

まあ、大変大きなタイトルで、小さな蝶にならえてお話
しをしましたが、その点、私も知識が無いものですから
お許し下さいませ。終わります。ありがとうございました。

藤森

はい、ありがとうございました。ご講演されておられます
けども、私共、そんなに「大きな目」を持っての訳ではござ
いませんで、「地べたに這いつくばったような目」から意外
と広い世界が見えてくるものだと思います。

「蝶の目」から見ると、「蝶にとっての草畑のあり方」とか、草
いほそれを管理する知識とか、文化とかいうものまで
ご提言をさせていただきました。多でご発言の内容について
ご質問があればありますが、いかがでしょうか。よろしいで
すか。何か他の考え方もよろしいですけど、それはじゃ
あまた後で、討論の中でお話しをさせていただきたいと思
います。

それじゃあ3番目に入ります。3番目は秋吉台ではござい
ませんけれども、あそこは久住町になるんでしょうかね、久
住町の「坊がつる」の方から、火入れを実際に再開された活
動をやられている事例をご紹介していただきたいと思っ
ております。弘蔵さんです。それじゃあよろしくお願いい
たします。

弘蔵

「坊がつる」の、その名前の由来とかそういうことは、資
料に書いておりますので、それを参考にさせていただき、

だいたい坊がつる自体の標高が1,200mです。私共が山
荘を経営しておりますが、そこは1,300mあります。だいた
い九州では「一番高いところ」に常時住んでいる人間の一
人であります。

非常に雨の多いところでありまして、大分市では2,300ミ
リ平均、飯田高原で3,200ミリくらいなんですけれども、それ
から300m上がったうちのところで、大体4,200ミリ平均、年
間に降水量があります。

「野焼き」をやめてからですね、だんだん、だんだん灌木
とかが生き残り、またそれに「温暖化」というものも加わり
まして、木の伸びが、ここ10年くらいで非常に良くなりました。
特に斜面で、元々が火山地帯ですので、下の地面が隆
起した上に、表層土が1mから2mしかありません。すぐ下
は岩盤になります。そういう状態での斜面ですから、台風と
かが来てちょっと木が揺さ振られるとですね、非常に表面
の崩壊が激しくなって、斜面は崩れやすくなります。

坊がつるにいたっては、明治の中頃くらいまではまだ森
林に覆われていたという文献もあるくらいで、ある日突然、
硫黄山(九重連山の山の垂硫黄ガスにより木が枯れまして、
今の「湿地化」が進んだと、そういう話にもなっているよう

であります。

じゃあちょっと、坊がつるをご存知ない方には、スライド
をちょっと観ていただきましょう。

(以降、スライドを使ったの報告)

「32年ぶりの野焼き復活」ということで、以前は牛の放牧
とかで、この「坊がつる」と言いますが、登山者も参り
て2時間ほど掛かる場所まで、牛はちゃんと草を食べに来
ておりました。それがやっぱり「畜産の合理化」とかそうい
う形で、だんだん牛の放牧をやめるような形になってきた
んですが、これが真ん中の色がややぼけているところ、こ
の辺り全体を称して「坊がつる」と御称します。これは昭和
59年の写真です。これでももう野焼きをやめて約15年ほ
ど経った状態です。この辺りの「形」と言うか様子を次の写
真と見比べて下さい、よく観えておいて下さい。

ちょっと斜面が変わってきてはいますが、もうさっきの
ラインがですね、このラインからずっとこちら側に来てお
ったのが、これが去年の写真なんです、約20年程でもう20
数年、こちらまで出てきております。どんどん、どんどん森
林化が進んでおります。

で、この坊がつるも全部が「国立公園」の区域内ではある
んですが、この川を境にこの部分は「特別保護区」です。今
野焼きを実施している部分は「一種」から「二種」の混合地
域で、こういう部分を数多くようになっております。次どうぞ。

これも去年、数ヶ月前の状態で、だんだん、だんだんこう
いうカヤが増えてきました。ほんのちょっと前までは、今の
時期は雪が降って、それが上に降り積もることによって、毎年
カヤは押し倒されていきながら、草を刈らなくてもあまり
「伸び」がないという状態だったのですが、「温暖化」で、特
にここ〜6年にかけては毎年どんどん、どんどん伸びてお
ります。

で、去年「雑草焼き」、「雑草切り」をしての大きな変化は、
この輪(葉)の太さが、一回切ったことにより、かなり細くな
ったということですね。作業も効率化が出来るようになりましたし、また、見聞らしがかなり良くなりました。次、お願
いします。

昭和58年頃というのは、(山の)中腹まで、こういうふう
に割ってたんですよ。で、この辺りのラインですが、次どうぞ。

先程の繪で示したところはこの辺りですね、このライン
から下が全部、一面の草草でした。たった32年間という間
に、これだけのノリツギとかアセビとか、そういう灌木類
が、どんどん、どんどん、生い茂ってきました。

「じゃあこの辺りまではなぜ変わらないのか」と言うと、

第2分科会

大体3年から4年に1回ぐらいの割合で、登山者の方がキャンプ中に火を飛ばすことによって、時々焼くことになってたんです。それでこの辺で(失火の火が)止まるということで、こちらほど激しくは「森林化」と言うか、そういう状態にならずに済んだかと思えます。次どうぞ。

で、これは坊がつるに咲いているノハナショウブなんです。これが去年から今年の夏に掛けては非常に多くのところで見られるようになりました。次どうぞ。

同じくハンカイソウという花ですね。これも多くなりました。しかし、今、この辺りの特別保護区の部分で、ノハナショウブとハンカイソウの色とりどりの花が咲くというのが、私の子供の頃には見えていた風景なんです。だんだん、だんだん思いやられてきていますんで、ここを、(省庁両端で)環境省に変わつまして、許可を取ったりするのにも、非常にまた時間が掛かったりするかも知れませんが、是非、特別保護地区に指定された地はですね、この辺りも一帯の草原の原でありました。で、こういうハンカイソウやノハナショウブといったものやミスズゴケ類、モウセンゴケとかそういうものもたくさん繁殖していましたんで、そういう時代に指定されたものであれば、「その時代に是非戻してみたいな」と、そういう気持ちで、まあ「32年ぶりの野焼き復活」になった次第です。以上です。

高橋

はいありがとうございます。随分短く終わっちゃったんで、あれなんですけど、すみません、それじゃあ質問を投げたいと思えますが、いかがでしょうか。はい。

塩谷

すみません。あの、「許可を受ける」というのがありましたけど、わざわざ「火をつける」ために許可を受けてやってらっしゃるんでしょうか。

弘毅

はい、国立公園内はいかなる火、例えばキャンプの火にしても、ちゃんと指定した場所では火は焚けないですし、そういった点では全体に火をつけるという事に至っては、国境内だけではありませんけども、許可を得ないと、坊がつるでは出来ないようになっています。

それから先程言い忘れましたけど、私達は「ボランティアを募集する」という形ではやっていません。それは、まあそれまでには3~4年掛かったんですが、九州電力さんが実はこの近くの山を持っておりまして、その「水源涵養保安」とかそういう形でですね、九州電力さんが、例えば作業のときのバックアップ、それは材料から食料から、そういうものに至って「全面的支援」をしていたいただいております。ですから「ボランティア」という形ではなく、「ひとつの仕事」とし

てですね、「仕事の一環」として、「野焼きをやるというのがあるか」と、そういう形で話しがまとまって、今日に至っております。

高橋

はい、ありがとうございます。今お聞きしようとしたことを先に答えられてしまったんですが、「民間の支援」によってですね、実際に「守られる」と言っているのかどうか判りませんが、でも、「昔の草原に少しずつ復元しつつある」と言うことなんです。何かで質問はございますか、他に。

そこはまた、入会地では、牛牯の放牧とかそういうことに、牧野組合などが関わること、或いは野焼きについて関わったりすることはあるんでしょうか。

弘毅

はい、大船山(九重連山の山)を挟んで反対側の飯切牧野組合の方も参加していただきますし、そういった点で、会議を持つときには参加していただいております。

高橋

はい、ありがとうございます。それじゃあ最後のご提案でございます。4番目は山口県畜産試験場、藤井さん。よろしくお願いたします。

藤井

只今紹介にあずかりました。山口県畜産試験場、向原技術部放牧管理グループの藤井です。よろしくお願いたします。

今回「草原シンポジウム」及び「全国山焼きセミナー」がこの秋告台で開催されるに当たりまして、山口県畜産試験場として何かお役に立てる事が無いかと考えまして、現在人力で実施されている「火道切り」を、牛を使って作ることを実証を試み、「防火帯設置のひとつの方法」として提案することとしました。

「牛で防火帯を作る技術」は、座敷であります農林水産省・中国農業試験場の高橋(佳孝)さんが提唱されており、京都府三船山、熊本県阿蘇で既に実践されている技術です。また、今回の試験を始めるに当たり、高橋さんのご助言を頂ながら実施しました。

本県では平成元年度より、牛舎周辺の水田や里山での放牧を推進しており、試験場としても放牧技術を蓄えてきました。

前書きが長くなりましたけども、これから「牛による防火帯作りの試み」について紹介させていただきたいと思っております。

山崎、スライドを使っての報告)

先ず発表課題名なんですけど「カルスト台地における牛の舌刈りによる防火帯作りの試み」といっていて、「牛の舌



刈り」とは、牛が草を食べる習性を利用して、放牧により草刈りを実施することを意味しております。スライドをお願いします。

現在秋吉台で実施されている「火道切り」です。防火帯幅は5mから6mで、このように草刈り機で刈取った後に、人力で草を「火入れ側」にかわす(除去する)というふうな作業をされております。植生につきましては、このようにササ、ススキが主体となっております。スライドをお願いします。

この「人力による防火帯作り」の労働時間を聞き取り調査しました。調査地区名はN地区で、防火帯の長さは620m、幅6mです。それに要します「労働時間」なんですけれども、刈取りは6人で3時間で「延べ18時間」、草の除去は9人で3時間で「延べ27時間」となりまして、合計で「37.5時間」、1kmあたりに換算しまして「60.8時間」の労働力が必要でした。スライドをお願いします。

次に防火帯作りの本題に入ります。

先ず各母試験場の概要なんですけれども、ここが美穂町です。ここが秋吉町で、ここ美穂市にありまして、国定公園から車で美穂市へ20分程度のところに位置します。地形も国定公園の中とよく似ておりまして、このようなところで今回の試験を実施しました。スライドをお願いします。

これが今回「火道切りの試験」を実施した試験地です。ここにカーレン(カレン/石灰岩柱)が見えます。スライドをお願いします。

先程の防火帯を図式にしたものです。ちょっと上の部分が途切れていますが、この赤い線が今回防火帯を作るために電牧(電牧機)を通ったところで、この緑が「野草地」というのが山裾きの際に火入れをするための残した部分です。スライドをお願いします。

先ず「材料及び方法」なんですけれども、試験期間は平成12年の8月から11月、供試牛は黒毛和種の妊娠したものを5から12頭放牧しました。その下に記したものにつきましてはこれから順次ご説明していきますので、ここでは省略させていただきます。スライドをお願いします。

これが今回用いました「放牧施設」です。これが「電牧機」、非常に軽くて400mで1kg程度です。「ポールセット(電牧の杭)」はこういうポールで、こういうソーラータイプの電牧機を使用しますので「電源」を引っ張ってくる必要はありません。

「給水施設」はこういう農業用の500リットルタンクを用いまして、このように設置して、これは「浴槽」なんですけれども、捨てられてあった物を使いまして、そしてこれにポールタップを取り付けておりますので水が溢れ出ることはありません。こういう施設によりまして「水の無いところ」でも放牧は可能だと考えられます。スライドをお願いします。

これが先程の電牧機を設置しているところですよ。スライドをお願いします。

このように石灰岩が林立しているところでも、このような岩と岩との狭い隙間でも、電牧は簡単に設置することが出来ました。スライドをお願いします。

「電牧機設置・撤去の労働時間と経費」なんですけれども、防火帯の長さ1km、幅20mで「長方形のもの」として、斐波那契を基に試算しました。

防火帯の長さは全体で2,040mで、電牧の設置に要した時間は、延べ19時間、撤去は「火入れ側」の電牧のみ撤去しましたので、撤去側1,000mで「延べ」2.1時間で、合計で「延べ」21.1時間になります。先程の「人力による作業」が60時間でしたので、約3分の1程度の時間で設置出来ます。なお2年目からは、こちらの撤去した側、「火入れ側」の設置のみとなりまして、多分「撤去時間」の倍になりますので4.2時間程度、再設置のための労力が掛かると思います。

「直接経費」なんですけれども、電牧機は2機使用しましたが1機75,600円、電牧線が1mあたり180.4円、ポストは5m間隔で使用しましたが1本に付き410円で、全体で初年目の経費は356,000円となりました。なお2年目からはですね、電牧機、ポストの耐用年数が5年程度あると思われるので、2年目からは、もし電牧機が壊れた場合にのみ87,000円程度が必要経費として考えられます。スライドをお願いします。

これが先程の試験地の「放牧前」の状況です。スライドをお願いします。

これが放牧の様子です。この石灰岩があるところでは、

第2分科会

岩の端まできれいに食べておられます。スライドをお願いします。

これが「放牧後」、放牧から3ヶ月経ったときの状態なんですけど、こちらとこちらに堆積物を残ったんですけど、このように防火帯の「帯」がはっきりと見えるようになりました。スライドをお願いします。

放牧をした場所の植生について調査したものなんですけども、先ず「草丈の推移」なんですけど、最初期でであったものが23cm程度と低くなっておりまして、スライドをお願いします。

次に「牛の舌草刈りによる冠部被度の推移」なんですけど、「冠部被度」と言いますのは、地表の草を上から見てどれくらい残っているか」というものなんですけど、野草地は100%であるのに対して、放牧地ではこのように一番下がったところでは40%で、少し増えて48%くらいになっております。スライドをお願いします。

で、その防火帯の中での主な種、「ススキ、ササの冠部被度の推移」なんですけども、ススキはこの(グラフの)ように8月から「直線的」に冠部被度は減少しています。ササについてもですが、10月まではススキ同様、直線的に減少していますが、そこから小さい「草丈の低いササ」が発生しまして、このように上がっております。なおこの「草丈の低いササ」は「火入れ」時でも常緑でしたので、防火効果の高い草ではないかと考えられました。スライドをお願いします。

これが「生草収量」の推移を表していますけれども、こちらが野草地で、こちらが防火帯内です。「牛の舌草刈り」により防火帯内の生草量は減少していきまして、11月には(防火帯内の収量は)野草地との比較で、野草地の5%程度の収量になりました。スライドをお願いします。

これは「1頭の牛が生活できる延べ日数」ということで、今の草の量で牛が何日生活できるかという延べ日数を表しています。

この「カウディー(CD)」と言いますのは、「牧養力」とも言いますが、体重500kgの牛1頭を1ヘクタールの放牧地で(何日飼えるか)というのを表す指標です。

それで838日という結果になりまして、これを365日で割りますと1.7頭、ですから1年でだいたい1.7頭の牛を飼うことが可能ではないかと考えられます。スライドをお願いします。

次に「飲水量」なんですけど、夏場は45リットル、冬場は18リットル程度でした。今回の試験に用いました500リットルのタンク1基で、1日1頭が最大の45リットルの水を飲ん

だとして、11日間飼える計算になります。スライドをお願いします。

2月に火入れをしたんですけど、これがその直前の「可燃物量」の調査です。可燃物の主な内容は、立ち枯れた草、枯草の堆積物です。

こちらが野草地内の「立ち枯れ」部分、こちらが「堆積」部分で、このように多くなっております。

で、防火帯内部では「立ち枯れ」部分はほとんど無くなるんですけど、堆積物は若干残っておりますのでこのようになります。放牧1年目では、ある程度の「立ち枯れ」も残って「立っている草」は食べるんですけど、堆積物は牛は食べないので、このくらいは残るかと思っております。スライドをお願いします。

それでこれが試験地内に火入れをしているところです。スライドをお願いします。

で、これが良く燃えているところです。スライドをお願いします。

これは燃けた跡、火が通り過ぎた後なんですけど、この辺は既に火が消えておりますので、一人で十分に消火活動が出来るような状態でした。スライドをお願いします。

先程の「短いササ」というのはこの辺りの緑の部分なんですけど、これは2月の現像なんですけど、このように奇々としておりまして、「防火効果」が期待出来ると思っております。スライドをお願いします。

で、これが試験地の全景で、ここが山焼きをしたところでカーレンがあるところです。スライドをお願いします。

それで、牛を放牧することによりまして「牛の糞による環境汚染」が懸念されます。そこで野草地内の糞とその腐敗の「アンモニア態窒素(糞肥料であると同時に遊動な場合は環境汚染物質となる)」について調査しました。

これが採査後の糞で、こちらが採査2ヵ月後の糞です。このように手に持っても不潔感は無く、臭いは腐葉土のような臭いになります。スライドをお願いします。

これが「土壌・糞中のアンモニア態窒素の含量」なんですけど、こちらの部分が土壌で、こちらから「防火帯内の糞の無いところ」、「野草地内の糞の無いところ」、「防火帯内の糞の真下」、「防火帯内の糞から30cmのところ」、そしてこちらが「防火帯内の糞の現物」を表しています。

「糞の現物」では100グラム中9.8ミリグラムのアンモニア態窒素があったんですけども、調査した4地点中で最高を示した「糞の真下」でも6ミリグラム程度と、他の3地点と

比較しても、ほぼ1ミリグラム程度しか上昇していないというふうなことで、薬による影響はほとんど無いのではないかと考えられます。スライドお願いします。

で、これまでの結果と畜産試験場の放牧技術の経験から「管理体系」を考えてみました。先ず「電気柵の設置」。これは通常の時なんですけど、「山焼き直前に撤去」、「山焼き終了後に設置」というふうを考えておきます。これはどういうことかと言いますと、「火入れ前」の備はすぐに撤去出来るので、火入れの際にはそれを防火帯の中の火入れ地点から2m～3m離れた「触れないところ」に一時撤去しておいて、山焼き終了後にはそれをまた元の位置に戻すという簡単な作業です。

それで「防火帯幅」は、今回の経験から20m程度。「放牧頭数」は、目安として1ヘクタールあたり1～2頭なんですけども、まあ防火帯内の状況を見て調整すると、「放牧期間」は「連続放牧」と言いますが、ずっと出す方式を考えてみますけども、やはり山焼き直前に退牧(牛を放牧区域から出す)し、山焼き直後に入牧する(牛を入れる)というふうなことを。

「衛生対策」として、殺ダニ剤を毎月1回滴下します。以前は放牧の際の衛生対策というのは結構厄介だったんですが、良い殺ダニ剤が出来まして、現在は非常に簡単に出来るようになりました。

「飲水量」は、1頭あたり毎日45リットル必要です、という事です。スライドお願いします。

それでこれが畜産試験場で見掛けることが出来る草原性の花々なんですけども、今度は、放牧によって草丈が低くなることで藤の植物の生態の変化や、環境の問題として藤に発生する害虫の調査、及び今回の発表内容と同じようなことを、今後数年間に亘って調査をしまして、その生態、植生、病害調査等について調査する予定にしています。

スライドありがとうございます。以上で発表を終わります。

高橋

はい、ありがとうございます。「猫の手も借りたいところを牛の舌を借りた」というやり方なんですかね。人がやるよりは労働時間は少なかったと、日本ほど人件費の多い国はありませんので、そういうところで牛を使ったという事なんですけど、今のご発言に対するご質問、ありますでしょうか。はい、どうぞ。

上原

おおざっぱな話で結構ですけども、秋吉台には今「17kmの火道がある」と言っていますけども、「牛で火道を作る」といったとき、「全体」というのは無理でしょうけども、どのくらいが可能なんですか。

藤井

先ず「放牧頭数」なんですけど、先程も言いましたように「17kmの距離に20m幅の防火帯を設置する」という事になると、単純計算で34ヘクタールの放牧面積という事になります。それで先程の結果から、「目安」として1ヘクタールにつき1頭～2頭の放牧が可能という事ですから、「34頭から68頭」の個々りの頭数が、「全体に出す」場合は必要となります。

後ですね、まだウチの方でも確認をしていないんですけど、「水飲み場から牛が何キロ歩くか」というのがありまして、それによってはまた変わってくるかも知れませんが、これは今後の研究内容として取組む予定にしていますので、ちょっとまだその辺は判らないんですけど、まあ全体をやった場合、頭数的にはそのくらい、34頭から68頭くらいが必要かな、と考えられます。

上原

人が力を使った場合に比べて、牛の場合は「後に残る量」があると想うんですけども、まあそれは別にしても、(牛は火道を)真っ直ぐに進みますか、どう表現すれば良いか、火道に近づこう。(防火帯を設置したい場所まで)るように草を食べてくれるか、その場所から外れることは無いかという懸念)

藤井

「火道の隣に出ることは無い」という事ですが、分かってきました。ちょっと説明がまずくて判り難かったかも知れませんが、今回は電気柵というのをですね、防火帯として想定している場所の左右に設置することによって、その中を牛が歩くというような「通廊」を作る、というふうな形になりますので、牛はその中に留まると言うか、外に出ることは無いと思います。

高橋

はい、一応4名の方から話提供をいただきました。今からいろいろと討議をしていきたいと思うのですが、全体を通してですね、或いは個別でも結構ですので、何かご質問ございますでしょうか。何か悪い忘れの事があったとか、或いは助言程度、或いは補足でもよろしいんですけども、はい、どうぞ。

川越

あの、久住町なんですけど、今の電気柵の件について、ウチら大分では「輪地切り」とか「輪地焼き」とか言うんですけど、防火帯ですね、その防火帯作りが、野焼きの中でも一番大変な作業なんです。だから牧野の組合員の方がだんだんお歳を取って行くうちに、その作業が出来なくなるので「野焼きが出来ない」と、そういう形になりそうなんです。ウチの方でも「牛によって防火帯を作ってはどうか」と

いろいろな検討は令してるんですけど、今お聞きした中でも「大丈夫かな」という点が何点かあるんでお聞きしたいんですけど。

例えば前の方も言われていましたように、牛を放牧したときに、有刺鉄線の柵でも4段張っても、5段張っても逃げるときがあるんですよ。牛が冷静な場合だったら大丈夫なんでしょうけども、例えば牛であれば「発情期」とかもありますし、お互い喧嘩をしたりするんで、そういうときに電気柵では簡単に抜け出してしまうんですね。だからそこから辺の「脱圍」すると言うのが、そういう可能性を心配するのと、もうひとつは今の方も言われてましたように、きれいに全部食べる訳ではないんで、そこにある程度、枯草なんかが残りますよね。そうしたときに、今度は脊、野焼きをするときに、それから延焼をしないかどうかですね。通常の場合(九州地方での野焼きの場合)であれば、防火帯っていうのは、そこに刈った草を敷いて、枯らして、そこを燃やすことによって防火帯を作ってるんですけど、牛の場合は全然燃やさないから、延焼しないか、そこから辺をちょっとお聞きしたいのですが。

磯井

先き「牧場から説明するのではないかな」という点なんですけど、先き最初、牛の導入時に「馴致」と言いました。「電牧を教える」という作業が必要で、それを十分にやっってもらうということがありますし、もし仮にですね、出たとしても、牛は群で行動する動物ですから、まあ「ワック」と言いますか、どこかに集合場所を作ってそこから出て行く形にしておくと、朝夕とかで頭数確認とかする場合には必ず戻ってきますので、そういう点はあまり、まあすぐ隣が民家とか田んぼとかといったところであれば、それは弊害もあるかも知れませんが、秋吉台のように広くて離れているところであれば、また戻ってくると思います。

岩谷

ちょっとよろしいですか。「防火帯の効果」ですが、実は私、畜産試験場の「火道」を見させて頂いたんですが、思いの外、非常に良く出来ておりました。

現在、秋吉台におきましては、年に1回、11月から12月に掛けまして、草の伸びきった時期に(防火帯の)草刈りを実施しておりますので、実際に今から見ていただいても良く分かりますけど、防火帯に切り株等が残っております。で、まあ明日、実際に行けば火入れになりますけども、火入れの際に、防火帯にそれぞれ人がついて、火を点けて行くはしから叩いて消すという要領で、その焼け跡がずっとつながった時点で初めて「火道が切れた」と称している訳です。

実際、畜産試験場の「牛が食べたところ」を見させて頂きましたら、非常に良く食べておりますので、まあこれを継続して行けば、「大きな切り株」と言うか、株自体が消滅するというのがありますので、秋吉台で言えば、現状よりも随分と

延焼は防げるんじゃないかなと、まあ効果的には「あるんじゃないかな」と思いました。

高橋

よろしいですか、牛の防火帯のごとばかりになっちゃったんですけども、秋吉台のように「牛のいないところ」でも、そんな試験をしてるんですね。

それと、多分高い草をたんだろうと思えますけど、さっきもお話しをしたように「牛で全部踏うんではない」と考えればどうでしょうか。短い草丈だったら非常に安全な輪地切りが出来るんですね。そこにカレンが隠れているって草も無いし、ちゃんと露出しているし、「短い草だから」ということで、そういうメリットってのは大きいんじゃないかなって思っています。

他に何かご質問はございませんでしょうか。

えっと、チョフチョのお話があつたんですが、植物の方から誰かお話しが出来る方いらっしゃいますか。

ホントに会場が見えなくて、ホントに申し訳ないのですが、それでも、内藤さんいます。いらっしゃいますか。あ、どうぞ。

内藤

あの、「植物のことから」という欲でも無いんですが、秋吉台の草景がだんだんススキが優先する「単調な草原に変わりつつある」ということをおっしゃったので、それについて。

そういうところでは、昔はいろんな使い方をしていた。場所によって草丈が高かったり低かったりと、いろんな場所があつたんだと思うんです。で、そういう利用をされなくなっていくことで、だんだん同じような草原ばかりになっちゃった、ということだと思うんですけど。

そういう自然と言うか、生き物を調べている方達は、その感じられたことを、どんどん、今まで草原を使ってきた人達に向かって発信していくことも大事じゃないかな、と私は考えます。

今日3つほど分科会があるんですけども、「それぞれ結論が違ふ」ということになるのかも知れない。で、そのときに、「生態系」ということを考えたときに、どんなことが必要なのか、どういふ草原がふさわしいのかということをお聞きしていきながら、「お互いに協力出来ることはどういうことか」ということを見つけて行くための「きっかけ作り」に今日のシンポジウムがなるといいな、と私は期待しているんですけども、後のシンポジウムでそういう話しがなればいいなと思います。ちょっと植物の話とは違ふんですけど。

高橋

はい、ありがとうございました。随分哲学的なお話しをされましたが、今お話しされたように「どういう草原が必要なのか」というのは「永遠のテーマ」でして、内藤さんは今のようにおっしゃったんですけど、一方で「単純な草原でもいい」という人もいる訳ですよね。その辺なかなか結論が出ないところだと思うんです。

た、今お話しがあったようにですね、「チョウチョの目から見たらこういう事が言えるんですよ」、「動物の方から見たらこういう事が言えるんですよ」という発想を今まで果たしてきてきたかなと思うんですね。「これは守りたい、守りたい」と言う一方で(言うばかりで)、そういう提言を他の人達に出来なかったんじゃないか、それを、これを機会にやってみればいいんじゃないかってことですね。

じゃあ、少し具体的に「話し」を深めて行きたいと思うんですけど、今いわゆる「人のいとなみ」によってファジー(あいまい)でモザイク状の草原があったはずだと、その(いい)加減さがまた良かったのかも知れませんが、ある植物を守ったりとかチョウチョを守ったりするとかって時にはですね、それでもやっぱり「火入れは必要なのか」とうかが、先ずそこから。

大半の方はやはり「野焼きは必要だ」と思われると思うんですけど、野焼きは「必要だ」と、野焼きは必要だけれども、(じゃあ次は)刈取りは必要か、どうか。その辺のお考えをハネラーの方から、じゃあ最初はお二人の方からお聞きしたいと思うのですが。

武次

私は森を通しての「植物の見方」をしております。あの、(秋吉)台上での植物は、刈取りをすることによって、シーズン、シーズンの植物が再生されてるように思います。

またチョウチョの話で申し訳ないんですけど、「危険種」の中にシルビアシジミと言う蝶がおるんですが、この蝶がミヤコグサと言う、地面をおる程度で、日の当たる所で水はけのいいところに生えている植物なんですけど、これをシルビアという蝶が食べております。シルビアの生態は、先程のカッコの中にも書いておりましたが、年3〜4回、5回くらい、年間に変態になる訳です。この最近台上での刈取りがうまく行かないで、ミヤコグサが少なかったりしたときに、ススキが大きくなることによって日照時間が無くなると思うか、日が当たらなくなってミヤコグサが、以前はこうつかんでウォって出来たものが、カヤの間をヒョロヒョロってこう出ているくらいで、その内には無くなって行く訳です。そうするとまたおかしな話ですが、この最近シルビアシジミと言うシジミ蝶が台上から豊産しているような状態の中で、じゃあどういふ所にいるかと言うと、農家の方達が車で走られるところなんかは割とまだシルビアがしっかりと生えている。刈取りをされることで今まで再生を繰り返していたシルビアが食べるミヤコグサはかなり少なくなって、

チョウチョの発生が激減している感じがします。ホント去年あたりは私はシルビアシジミを1頭も見てないって言うか、勿論観察する期間が少なかったり、時期によっては飛んでいないときもありますけども、去年あたりは1頭も見ておりません。その前は「あ、お前さんシルビアじゃあないからって程、ヤマトシジミと違っていてたくさん飛んでいるのを見た記憶があるんですが。

そのように「刈取りの必要性」と言うのを、私は、シルビアだけを通してではなく、他の草原性の蝶の食べるスミレなんかについても感じるんです。スミレなんかは、牧草地が刈られた後をよく見ると、草を刈るときに、草刈の機によって地面の所々がえくれると思うか、ひっくり返される。そういうふうなところにスミレの群落なんかを発生させることが出来る訳なんです。だから植物をいんならで再生したり、また人が入ることによっていろんな植物の種がこちらに運ばれていたり、こちらに運ばれていたり、以前は牛馬がしてきてくれたことなんですけど、そういう事で植物が広がって行くこともあるんじゃないかと思えます。

またこの秋吉台の、地元のみなさんとそばを作ったりなんかする会(とってもゆかいな秋吉台ミーティング主催のドリー=耕作体験)に参加した時の話なんですけど、(耕作地周辺で)全草スミレの生えていないようなところでも、私が「草刈ったら絶対ここはスミレが生えるよ」って以前2年くらい前に言ったら、この頃は「武次さん、やっぱりスミレが生えたよ」、「じゃあもうっというんなものが生えてくるから知らないから、もうちょっと刈ってよ」、そういうふうなこともありましたので、やはり刈取りがあって植物が再生されると思えます。

そのまま置けば、植物も種によっては生育する時期が異なると思うんですけども、ただやはり、「草原」という事で考えてみますと、ススキの背が高くなることによって、随分他の植物が潰れていることは事実です。

ですからまあこういうのもおかしな話なんですけど、山焼きによって植物の種が随分焼かれるのも事実だろうと思うんです。あるとき私がムラサキセンブリの群落を見つけたとき、「ここは良く育っている」と思ったところがあります。それはどういうところだったかと言いますと、秋吉台の土壌というのは稲刈によって土手などが崩れる場合があるんですけど、まあそういうのも自動車が何かが入ったかで、そこが「裸地」になったというか表土が崩壊したんですよ。そこを先程のお話しであった、みなさんが補修をされた。石成岩だとか石ころだとかを敷き詰めて補修をされたんですよ。そうするとその辺りにあったムラサキセンブリの種が、その年から石のすき間に入ったんですよ。そうすると山焼きのときにもその種は焼かれないから、一時的ではありますが、そこは競争なセンブリの花が2年、3年続きましたね。それは路上の土の上に種が落ちてなかったから燃えなかったということと、他の草が生えるには適さなかったからムラサキセンブリがそこでは群落をなしたと思うん

ですね。

だからやはり、いろんな変化があって、多くの植物が育まれていることも事実だと思います。もうポイントに私はチョウチョだけを見てからこうして考えるもので、何かと説明不足のところがあるかと思はすけれど、やはりいろんな形の、時には年が芝を蹴ってそこに新しい命が芽吹くとか、そういうようなことが今まで行われてきたと推測しております。

高橋

はい、ありがとうございます。塩谷さんの方から何かご意見をどうでしょうか。

塩谷

私、最初にご説明いたしましたけども、「樹林化が進む」といった状態。これがどんどん、どんどん、ここ10年から15年の間で進んでいるという状況をご説明いたしましたけども、本来、「固定公園」とか先程の「妨がつかない」のお話でもありましたように、こういったところの自然というのは「規制で守られる」のがほとんどですけども、この秋吉台自体、この「石灰岩の草原」というのは、「人の手」と言うか、「同じ人のいとなみの中で維持・保全されている」というのが、一番良く判る10年間、15年間ではなかったかな、と思っております。

で、ポイント一番いいのは、まあ「規制」もありますけども、それも合わせて、「人のなりわいが10年、20年、変わらなければいいんですけども、どうしても変わってしまう。そうした止むを得ない事情の中で、そこで採草が罷ってきたと。そういう面があると、これはどうしようもないと。という現状で、今、木がどんどん、どんどん増えておるんじやあないかなと思います。

で、もうひとつは、「以前は」、「戦後」はってことで地元の方から良くお伺いしますけども、「採草を争うようにして取って持って帰ったよ」と、要は「台上から有機物が少なくなる」と言うか、栄養が無い状態、草丈が低くなるという、「取る側」から言えば、非常にいい草が取れると、まあこういった「輪廻」と言うか、まあひとつの「流れ」が断ち切られたというんですか、まあそういった「採草」というひとつのなりわいが崩れたことしか、実際変わってないんですね。

まあ、こうして秋吉台の草原に木がだんだんと増えてくるという、まあ「大きな動きがある」というのがありますので、みなさん、いろいろ、「今がいい」、「10年前がいい」、みなさん「理想の秋吉台」ってのがありますので、バラバラなんではないかと思はすけども、この「採草」ってのは、どうしても欠かせないものではないかな、と思います。

で、まあ例えば「ドリーネで耕作した」ってのがありますけども、ひとつはやっぱり、「残念ながら」と言うか、いいか悪いかは別として、その生活、「なりわいの仕方」っていうのが変わってきたと、先程「自動車の乗り入れ」ってのがありま

したけど、昔は人が歩いて入ってきたものが、どうしても同じ道をしようとするれば奥で入ってくると。で、採草についても同じところを通るから、どうしても道が荒れるという面がありますので、今どっちかと言うとルールが無く、そのまま好きなところを歩いて採るといのが多いんですけど、確かに「取って帰られたところ」には、非常に草花がたくさん咲いております。まあその辺りで、「採草も大切」、「荒れたところの問題も大切」という面もありますので、まあ「ルール作り」と言いますが、これを機会に「ルール作り」はひとつ作るんじやあないかなと思はすけども、まあ最低限、この「採草」というのは続けていく必要が、この「秋吉台の草原を作る」上では必要ではないかなと考えております。以上です。

高橋

はい、ありがとうございます。どうですか、会場の方で反対意見ございますか。「火入れは必要だし、採草も必要だ」という考え方に固まりつつありますか、いかがでしょうか。異例と発言が無いんですね。

ただ、先程ご提案がありましたように「じゃあ誰がやるの？」という課題と、それから「規制」とか「制度」というものも、どう折り合いをつけていくか、というのが最後まで、多分残って行くだろうと。それはちょっと次の段に回すということと、

「じゃあ、いよいよ火入れも、刈取りもやっぱり必要だなあ」というのが「みなさんの考え方」ということで、じゃあ次は「放牧はどうか」、「畜舎を入れるのはどうか」ということを、そちらのお二人の方から、秋吉台に想定されなくても結構ですので、どういうメリットがあるのか、或いはどういう問題があるのかを整理していただければと思はすか。

藤井

先ず、野草地にですね、牛を放牧しますと、ススキは強放牧(放牧区域内の草の量に対して多めに牛を出すとか期間を長くするという放牧)を掛けることによって少なくなっていきます。しかしその中でも牛が食べない植物、まあそういった中に人間が見てきれいだと思う草花は多いんですが、そういった植物とか蕾のある植物とかは残る可能性はありますし、そしてそこで牛が糞をすると、菌が繁殖するまではその下の草を食べませんので、そこからまた草が出てきて、それをまた牛が食べるという「循環型」で牛はそこで営農というふうな形になります。

弘高

まあいろいろ農業の形態もどんどん変わって来ておりますし、今「牛を戻す必要性」っていうのは、私は感じてないんですけども、それよりも「野焼きをやることに対する意識」とかが「時代の流れ」について行くような形をですね、まあ

ひとつは庭園を見てその「やり方を見直す」というような、牛の放牧を育てまた「やり方を見直す」ような、「常に見直して行く庭園」の方が、今からは重要なんじゃないかなと思っております。

高橋

はい、どうもありがとうございます。まあ秋吉台では元々「放牧」という形態は無いので、新しく取り入れるということは、また相当なエネルギーが必要だと思いますけれども。

いずれにせよ「草原の管理」というのは「火入れ」と「刈取り」か「放牧」がマストになったものが基本なんだろうと思うんですね。その中で秋吉台に関して、「みなさんのご提言の中では、「火入れも必要なんだけれども、是非刈取りも、何とか復元して欲しい」ということだと思っただけです。

じゃあ、今ご提案があったように「刈取り」という作業は何のために必要か、或いは農業側から見てですね、「草」とか「野菜」とかっていうのをですね、「どう位置付けるか」ですよね。

「経済的な価値が低い」として捨てられてきた訳ですけども、でも経済以外に、こうやって「生物多様性」だとか「生体面から見たら必要だ」というご提案があった訳なんですけど、じゃあそれをですね、地元の人達や生活者がどの程度まかなっていきけるのかというのをですね、是非会場の方から発言を頂きたいんですね。まあ「放牧の話」がなかったんですけど、「放牧の話」もきめてでも結構ですけども、いかがでしょうか。上田さんどうでしょう。

上田

突然のご指名だったもので頭が混乱していますが、昨日泊まったホテルから外を見たときに、今は使われていない宿泊施設の跡というようなものもあるのではないかなという気がしたんですが、どうもコンクリートというのは未まで、未々までスカッとしないところがあるんですが、この秋吉台にもフラフラの、或いはフラを使った観光産業なり、フラじゃなしに、ごめんなさい、ススキを使った建物を作るとか、或いは高級な野菜を作るためにはススキを刈り取って、その作物の下に敷くことは絶対に必要だとかっていうようなことが、だんだん、また最近は見直されてきておるんですね。何らかの形で「地元の産業に結び付くような構造」をこの台地の中に配置すれば、「回転していくんではないかな」という気がいたします。

で、今日始めてチョフチョの話しをお聞きして、非常に興味深かったのですが、チョフチョというのは非常にこまやかな、その自然って言うか、人間の営みに影響されているなということを感じたんですが、チョフチョの種類ごとの「その住み方に応じた季節」を、ドラマとして、「人工的に」と言うか、まあ「半人工的に作り出していく」ってようなことは、どこかでやられている所があるんでしょうか、ちょっとお聞きたいんです。きっと成功するんじゃないかと思います。

以上でございます。

高橋

はい、ありがとうございます。それでは。

武次

あの日本ではいろいろと、「草原性の蝶」だけというのはありませんが、「蝶の館」というか、そののは全国各地にございまして、中にはお寺のお坊さんが市の、町でしたかの順路で「蝶の館」のようなところにベンションって言うんですか、そついろのを経営しているところもあります。

それからまた広島県にも大きなものがありますが、あそこら辺りではやはり「熱帯の蝶」が主体で、植物も熱帯の植物を温室で育てて、温度調節をしながら飛ばしておりましてオオカバマダラとか、「オオゴマなんとか」というですね、ちょっと忘れちゃいましたけど、一番大きな白黒の蝶ですけどそついろのがあります。ですがそういう場合でも、一つの館の中で生態系を守っていくことは出来ないようで、「幼虫」って言いますかね、サナギはサナギ、幼虫は幼虫で別の部屋で飼育して、成虫になったのが自然と中に出てみなさんを染しませるような形にして、卵をそこで産んだりしているところも見る事が出来るんです。その卵は従業員の方が取り込んで、また別の部屋で飼育してやっておられます。

秋吉台の施設を申ししますと、秋吉台の蝶だけでそれをやるということはちょっと不可能だと思っただけです。私も研究のためにちょっと飼育場をこしらえて、全く秋吉台の中と同じ形で、ちょっと10年ばかりやってみましたが、チョフチョの生態というかそついろものは良く判りましたけれど、それを「観光で使う」ということはちょっと不可能だと思います。

ただ私の考えとしましては、都会の子供たちが自然を知らなさ過ぎるとか、そしてまあ、自然科学というものに子供達が取り付くときが無くって、その「きっかけ」となるようなものが出来ればなあと思っただけなんですけど、まあ今の寒泉旅行村(秋吉台にある滞在型体験型施設)あたりもありますので、そういうところで2泊3日とかそういうような形で親子の昆虫採集会でもしていただけたらと、そして子供達も自然を観察する機会も増えて、自然科学というものにも目覚めてくれるんじゃないかと思っただけで、まあ都会の子供達をそういう形で受け入れるということもいいなあ、夢だなあと思っております。

高橋

多分、私も専門でないんでよく判らないんですけど、蝶のように「飛来性」のものって言うのは、幼虫の時期も成虫の時期もいる場所が違ったりもするでしょうから、特定の草原域だけを見てはダメなんだろうなと思うんです。周りの環境なり、周りの生態系も含めた「景観レベル」で考えなきゃいけないだろうと、或いは測りて、例えば産卵を

第2分科会

使っていたらそれがダメになるとかですね、そういう「副作用」も当然生じてくるんじゃないかなと思うんで、非常に楽しいことかも知れません。

先程、上田さんの方からですね、採草する草の利用を「何とか地元産業と結び付けられないかな」というお話があった。正しく「農産物のあり方」をもう少し見直してみても、地域の特産のようなものにするとか、或いは「工作りに役立つ」とか、そういう循環の方法があるかどうかということなんですけど、そこで何か農水関係の方、いらっしゃいませんかというかな、はい、どうぞ。

飯田

地元の産林事務所の方がですね、今、採草のお話が出ましたけれど、そういう中で今の現状をちょっとお話ししますと、秋吉台では、町の放牧場が以前ありまして、100ヘクタールくらいのところで放牧をされ、一部採草も行なわれていたんですけど、詳しい状況はちょっとはつきり覚えておりませんが、ここ10年ばかりは放牧は止められて、その内の40ヘクタールくらいを町の方で採草、機械によっての採草作業がされている、という状況になっているだろうと思います。

で、一般の農家の方はですね、その草が非常に安い値段で販売されておりまして、農家の方はそれを利用するという事でやられておられますが、もっとも量に限りがございますので、「それでは足りない」という方が個人的に秋吉台に行って採草をされているという状況になっています。

ただ畜産農家の方も、最近は高齢化で種分少なくなってこられてですね、そういう意味では「採草利用をする」という農家が限られているという状況になっています。これは秋吉台、それから美東町、高方とも採草という形で、牛に与えるということでやられております。

で、「野草の価値」という点ではですね、非常にこの野草の場合、乾草にした後ですね、「非常に嗜好性が良い」という事で、ウチの方、まあ「畜産部」というところになるんですけど、そういうところで子牛の指導者やっていますけど、そういう中で、野草を与えると「非常にいい牛作りが出来る」という事で、またそうした子牛は市場においても非常に高値で取引されており、「買う側」の購買意欲としても好んで買っているという事。そういう「野草の利用」というのは「農家としてはやりたい」と。やりたいけれど努力的には「なかなか大変だ」という事で、秋吉台の場合には、先程申しましたように、旧放牧地を使っての機械採草をしていますが、ほとんどが一般の農家の方が個人的に上がられて草を刈って持ち帰っているというのが現状です。

でもまあそういう点で、私も畜産関係におるんですけど、先程、畜産試験場の方で「牛の放牧」ということを取組まれておりますけれど、こういう形でのですね、「秋吉台に牛を入れていく」という事が今後、やはり今からの高齢化をしていく「火道切り」、「防火帯作り」とか、そういう部分を精

まえてですね、「生態系への影響も少ない」という力強いお言葉もいただけたんで、位置付けが出来るんじゃないかなとは思っている次第ですけど。

高橋

はい、ありがとうございます。何かボランティアの発言が少し批判に向けてるかも知れませんが。

いずれにしても、「草を介した畜産の振興」、「農業の振興」とってのが前提でなくっちゃいけないってことですから、地域の農林業が生きていないと、やっぱり守れないのかなと、これは一方で、とても大切な話なんです。

ただ現実の課題として、それだけの「抱え手」すら、もういない時代に、それに関わる「新たな抱え手」を作らなきゃいけないんですが、お金を稼がないでもそれに関わる人がいるんじゃないかなと思います。例えばボランティアであったり、ざっさお話しに出たのは「体験学習」ですよ。教育の場として使って、「草刈りを競争させている」とかですね。そういうおもしろいものかも知れないけど、そういう「取組み」もまたあるかなと思うんですが、そういう民間なり、地域外の人達が「そういう管理に関わる」ということに関して、尻がつるの方で実際にやられてみてですね、どういった意見をお持ちでしょうか、或いはそういうビジョンをお持ちでしょうか。

私蔵

まあ「一番怖い」のは、草刈りをするときのケガですね。それから火を入れたときの火傷とか、そういうのを考えたときに、これはおぼつかつるではない、農の方なんですが、上からどんどん火を引いて行くと火入れをして行くと、下の方で「もっさり」の「かな」ってライターで火をつけた事例が2年前あったんですよ。で、火が打ち上がってしまって非常に危険な状態になって。

で、そういうことを聞いたり見たりするうちに、これはもう組織的にキツキツ、もし何かあったときの「処分が下される」ような状態じゃないと、例えばボランティアでやると、どうしてもみんなが責任を転嫁してしまう。で、今回10月の輪地焼きのときも、班長の指導不足で少し失火をしたんです。そういうことを考えたときに「組織と規約」そういうものがしっかりした状態じゃないと、ウチの会としては「ボランティア募集」というのがしづらいなという状況です。

飯田

はい、ありがとうございます。阿蘇の方では200人くらいボランティアを集めたり、或いはかなり組織的にやっている事例もあるというふうに聞いております。

それで、もうひとつの問題は、制度や規制との関わりの中で、火入れとか刈り取りをどう実施していくかということがあるかなと思うんですけども、その辺も含めて、出来たら「阿蘇のボランティアの実情」も含めてですね、阿蘇の国立

公園の所長である¹⁰⁰⁰田安さんの方から発言を頂きたいと思うんですが。

田安

環境省の九州地区の所長をしております¹⁰⁰⁰田安と申します。先ず「列島のボランティア」の関係につきましては、今、「グリーンストック財団」と言うところが中心になりまして、阿蘇の輪地切り、野焼きの「ボランティアを養成する」ということを、組織的には平成11年度あたりから始めています。

昨年度400人くらい応募があったと、それも集まって来たのは熊本県の人間が半分以上で、半分以上は福岡とか、福岡以外の本州のほうからもいらっしゃるという方も出てくるというような状況です。

ただし、例えば輪地焼きについてはですね、「火厳ししかやらせない」ということで、火を点けることは一切やらせない。「完全に牧野組合の人の主導の下にやる」というような形です。で、毎年ボランティアで参加してくれる方については、その「ボランティアの方のリーダー」になって行くという形で、順次体制を作るということで、今年はボランティアの「リーダー養成講座」というのも始めています。いう形になってきたというふうに聞いております。

それから「自然公園の中の規制との関係」でございますけれども、先程、坊がつるでのお話しでは「特別保護地区だからやっていない」というふうにご説明がありました。

で、私、これはもう環境省と言うよりは、私個人の判断がお知らせできませんけれども、場合によるとですね、「特別保護地区」でもきちんと、野焼きが必要であれば、または除草が必要であれば、これは「やるべきだ」というふうに考えます。

「自然保護」に対する考え方、これはやはりいろんな「考え方」があると思うんですが、特に阿蘇、九条、トカラ列島(鹿児島県)、それからここもそうだと思うんですが、「人手がなくなって草原景観が維持されていること」が、それが「公園としての価値がある」ということであれば、きちんと人手を揃える必要があると思うんです。

ただし、現在の「自然公園法」という法律自身はですね、「規制の厳しいところは手をつけない」という方式の法律体系になっておりますので、残念ながら「特別保護地区」については「きちんと手触さをしなくてはいけない」というのがあるんですけども、やるべきときはきちんと手触さを取りながらやって行くということが重要なのかなあ、と思っています。

私自身の経験では、草原ではなくて温泉の関係ですけども、「利尻礼文サロベツ国立公園」の「サロベツ原野」というところがありますが、ここは環境省の土地なんですけども、そこはやはり「温泉だから国立公園」だということで、人為的に環境省で小さなダムを作って水位を上げる、維持をするということで「温泉景観を守る」ということも環境省自らやったこともあります。

ということで草原景観が必要であればですね、坊がつる

でもきちんと、「特別保護地区」についてもですね、「人手を揃けて維持をする」ということも、私としては認めていって良いのではないかとこのように考えております。よろしいでしょうか。

高橋

はい、ありがとうございます。大変心強い発言を頂いたと思うんですが、要するに「地元の意思」だと思うんですよ、おそらく。

何かにつけて日本人は「あれは農林省が嫌い」、「環境省が嫌い」、「どこそこが嫌い」とかですね、なんかかかんとか言いがらなんてですけども、地元の意思として「やりたい」ということをですね、必要だということを、是非そういう声を上げていただきたい。

そのためにも、じゃあこの分科会からは「刈取りと火入れはやりたいんだ」ということをアピールしていければいいんじゃないかと思うんですがいかがでしょうか。

はい、どうぞ。

前田

先程からいろいろお意見を聞いております。地元の者として、そしてここに60数年生きてきた者として、少しお話しを申し上げてみたいと思うんですが。

先程から「草は肥料として」、或いは「飼料として大変いいんだ」と、これは確かにその通りでございますね。「それを上手く利用したらいいんじゃないか」、おっしゃる通りでございますね。「それが出来ない今時代になっているんだ」ということですね。

それは何故か、皆様方ご承知の通りでございますね。牛を飼ってもですね、「牛肉の自由化」になって、安い牛肉がどんどん入ってくるでしょう。採算が合いませんよ。生活それじゃあ出来ないんですよ。私の家もかつて、まあ恐らくここにおられる方はほとんどがそうだと思うんですが、日本がそうでしたように、農家でした。農楽でした。百姓でした。その百姓では生活できない時代になった。そこで牛を飼って、田んぼを作って、草を刈って畑に入れて、畜はそれで生活できていた。で、1町4〜5反作れば子供を2〜3人養えた。今は3町、5町作ったってですね、大変なんです。だから「もう農業をやめよう」、生活出来ないんです。サラリーマンになっていくんです。そういう現状がずっと続いている。そうでございますよ。まあ私もその一人です。「農業じゃあ」っていうんで勤めに出るようになりましたね。

でも今まである用語を守らなきゃいけないだろうと。この秋吾台もですね、長い歴史があって、まあ一説には800年くらい前から山焼きが行なわれていたと、それを私達が、ここに住んでいる者が、何とかして維持しようとしてきたんですよ。

でも先程からお話しがありますように「高齢化」になってきました。私も実際にですね、分担があります。そこへ出て

やりますね。毎年やってるんですから申し上げますが、それがだんだん出来なくなった。だから「どうしたらいいんか」と。

「ボランティアを募集してやってみようじゃないか」、そういうことも町も考えられました。自分もそういうことを言ったこともあります。でも、先程おっしゃいましたようにですね、坊がつるのお方がおっしゃったように、事故があったらどうするんだと、今はですね、何かあったときには「補償をどうするんだ」と、こういう時代になってまいりましたですね。

だから「山焼きは続けたい」、「草刈りもしたい」、じゃあそれをお金を掛けてやるんでしたら一番みやすいたやすいんですよ。これは、お金を出来るだけ掛けないでやろうとするためにはどうするかと。それに「いい知恵はないかなあ」ということで、みなさんの知恵を借りたいということでございますね。

だから「放牧」という方法もございますでしょう。これは私聴いております、ちょっとコストが高くなるなと思いましたが、ボランティア、いいですね。でもボランティア、じゃあその次の「万が一という場合はどうするか」ということですね。

だから先程、何軒の所長さんがおっしゃいましたですか、「お金を掛けなきゃいけない」と、ある程度はやっぱりお金を掛けなきゃいけないと思えます。それでも、秋芳町、栗栗町で、この山焼き前後に1,000万(円)くらい掛かってるって言ってますか。何がそういう資料をどっかで見ましたけど、お金掛かってるんですね。

だからいろいろですね、「こうやったらいい」、「ああやったらいい」と第三者的にはそうでしょうが、じゃあ実際にここでそういうことをやるのになってことですよ。そのあ「趣味的」には出来ますよ。採草を除外視しましたら出来ます。でも実際はそれじゃあ生活できない。どんどん困難になっていきますね、この町。そういうことです。

で、まあそういうことばっかり言ってもしょうがありませんから、ひとつはですね、「牛の放牧」もいいたろうと思えますが、「ボランティアの方法もあるなあ」と思えますね。それから今、秋吉台で放牧されている、県の放牧場、育成牧場がありますが、そのように牧草をずっと植えていく、防火帯に牧草をずっと植えていく、そういう方法もあるかも知れないかと。或いはですね、夢いたら、先程のご発表にありましたように、「人間が歩いたら、そこが雑地になって、踏み固められて、そしてついに草が生えなくなる」んですから、周辺部をですね、ここに来た子供連や遊覧される方を「歩かせば」、そこを歩かせればいいんじゃないかと思うんですね。

ですから突拍子もない事ですが、そういう何らかの、「出来るだけお金が掛からない方法」で火道を切る方法をですね、「火道を切らなくても済む方法」を考えなきゃいかんだと思うんですね。

あのですね、「山焼き」、明日ある「火入れ」というのは行けば火道が切っておりますから、火を入れたらもう、ここに入らないようにサッサと消せばいいんですから私なんですよ。それで楽しいですね、ワーツと燃え上がりますから、あの「草刈り」が大変なんですよ。これは面白くも何にもありません。だから「ボランティア」って言ったって、そんなに多くは集まらないと思うんですよ。そういうものですよ。

まあそういうことの「地元の現状」というのは、ここに訪られる方は皆がご存知だと思いますけれども、あえて申し上げます。

それからです。もうひとつ申し上げます、「草を刈る面積が減ったのではないか」ということでしたが、私は「それはどうかな」と思ってるんです。データはございませんが、

昔は確かに、岡谷から農家が(秋吉台に)上がって刈っていました。私も中学校の頃から、朝3時頃からたたき起こされてですね、刈りましたね。で、竊で刈る量は減ったことないんですよ。今は草刈り機、刈り払い機でバーツと刈りますから、上がられたらごま初のようにですね、「ウオー、あれだけ草が刈ってあらかあ」って、それだけ草は刈ってあるんですよ。だから今から30年も40年も前と、草を刈る面積が減っているのか、増えているのかってのは疑問だと思います。以上でございます。

高橋

ありがとうございました。草刈りの面積は減ってないんじゃないか、というご意見でしたが、私もよく判りませんけれども、「目視上」見たら減ってるんだらうなっ、というくらいでは判らないんで、実情が判らないんですけども、その辺はもう一度、確認をさせていただきたいと思えますけれども。

それで、まさしく「なりわいが盛らないから出来ないんであって」ですね。「どうか」というお話し、まさしくそうです。

ただ「ホントに儲からないか」どうかってのは農業者の方でも、実は考え直しているところがあるんです。例えば野草の「資源としての価値」をですね、今までは牧草や飼料作物に対して「すくく券」という価値付けをしていただけども、「どうもそうじゃないようだ」と。特に肉用繁殖牛を飼うに至っては、「儲かってる農家はみんな野草を利用して」というのが全国レベルで見られる傾向。ただその利用の仕方は放牧で利用されたり、採草で利用されたり、いろいろあるんですけども、その辺も含めて、農林業を含めた「産業」とも一歩リンク(結び付けること)が出来ないかというのを、もう一度見直してみてもいいんじゃないかなど。

それから都市の人の生活の嗜好の変化とか、或いは食べ物に対する考え方の変化というのが出てきている訳ですね。そういうもので付加価値をつけたり、地域の中に加工や流通のようなシステムが出来れば、また地域の中に「新しい血」を呼び戻すことも出来る訳ですね。現実には日本

全国いろんなところを見ると、畜産を「核」にして、第3次産業、第2次産業をどんどん興してですね、ホントに遊び山の中に、大卒出の若い女の子がですね、就職に入ったり、そういう事例がたくさんある訳です。ですからそういうものをですね、「台上の集とリンクさせること」が本当に出来ないのかがどうかですね、もう一度考えてほしいんじゃないか。

そういう意味からでもですね、「関係のある人」がここにいらっやらないというのは、非常に私は不満なんですけれども、単程互換にですね、どうかそういう省庁をば抱き込んだ形でですね、もう一度「核の価値」というのを見直しをみられたら、評定なり競争というものの「生きる道」も無い事はないんじゃないかなという気がします。

で、ここはですね、今のような形は、恐らく次のシンポジウムの中で地元の方がご発言になる内容だったと思うんです。で、もう既に非常に貴重なご意見を頂いたと思うんですけれども、ここでは一応「生態系と保全」ということなんで、生態系から見た要望なり、問題点を抽出したいののかなと。

いずれにしても、これからの時代は「百点満点の管理方法」ってのは無いんじゃないでしょうか。例えば「ポラントニアは80点だからダメだ」と、或いは「牛がやっても100点は出来ないからダメだ」と考えるのではなくて、それぞれを何とか工夫して組み合わせてみよう、それぞれを「何とかやってみよう」というのが「地元の知恵」じゃないんでしょうかね。だから「部外者は地元のごとは判らない」とおっしゃるかも知れないけれども、「意思決定をするのは地元だ」ということなので、その辺を是非いろいろ考えていただきたい。私達は、それに対する案を、この場から提供していけたらいいんじゃないかなと思います。

えっと、全体を通してですね、そろそろ「まとめ」に入らないといけないんですけども、何かご意見がございまして、ようか、はい、どうぞ。

村中

岩手県から参りました村中と申します。私は「野焼き」という知識はあまり無いんですけど、ちょっと思い違ひなのかも知れませんが、野焼きをすることに当たっては、いわゆるダイオキシンの問題が「ホントに無いのかな」ということをちょっと考えております。

というのは、まあ塩化樹脂ですね、塩化樹脂がどうしても野原に落ちておると、これが一緒に燃えてしまって、「ダイオキシンの問題が出る」ということは無いのかどうか、その辺りは、例えば勿論「持ち込んだライカン」、「捨てたライカン」と言われているけど、実際は「実際はどうなんだろうか」ということだけを、ちょっと余分な心配かも知れませんが、どんなふうに考えていらっやるとか、教えて頂きたいという事でございまして、以上です。

高橋

はい、というご質問ですが、誰が判りますでしょうか、どなたかご存知ですか。

塩谷

あの、私が「ゴミ拾い」と言うかですね、くるくるっと回って見た中では、先程の「上から見た写真」をご紹介しましたが、大体人が集まる半径からそんなに離れていないところというか、そういう場所に「ゴミがある」と、今の「山焼きの範囲」まで入ってゴミを捨てられる、ゴミが残っているというのは、まあ特に燃えない缶ジュースって言うかですね、そういったのは残っておりますが、私の「道当な経験」で言えばですね、大体歩道から、そう2〜3分、4〜5分歩いたら、ぐっと「ゴミが減る」と言うかですね、そういうのが多いようです。ですから秋吉台の余り奥まで入ってゴミを捨てられるって事は、私の経験からでは余り当てになりませんが、

で、結構、例えば管理事務所(秋吉台管理事務所)とかですね、一般の方とか、自然保護協会もこちらの方にありますけども、いろんな機会を通じて、秋吉台の中でゴミ拾いとか、人のよく集まるところはやってらっしゃいますので、よく言われる「観光地」である程のゴミは落ちていないんじゃないかなと思いますけども、確かに燃やす中にはあるとは思いますが、実際ゴミが多いのは、人の歩くところが、燃えない歩くところが多いんじゃないかなと思います。余り言えなくなっておりませんが、

高橋

はい、他にございまして、はい、どうぞ。

岡部

私は県の職員で自然保護課に勤めている者なんですけども、ある日、山口大学の学生さんから電話が掛かってきて、「山焼きをするとCO₂(二酸化炭素)が増える」と、これがですね「地球環境に影響を及ぼすのではないかと」というような質問がありまして、まあちょっと、ふと考えたんですけども、まあそういう面はあるかなと。

ただそのときに答えたのは、まあ「秋吉台は草原景観が美しいから国立公園に指定されたんですよ」と、それからもう数百年に渡って、この山焼きというのが繰り返されているから、「山焼きによって特別にCO₂が増えることは無いんですよ」ということは言ったんですけども。

確かに草を放置しておけば「樹林化」します。樹林化すると、まあCO₂は吸収します。まあそういう面では、二酸化炭素を減らす意味からはですね、まあ相戻るところ、相戻ると言うか、「難しい面があるなあ」というのを感しました。

まあただこれは「こういうことがありました」という紹介だけで、特に「生態系」とばつながらないかも知れませんが

第2分科会

ども、ご紹介させていただきました。以上です。

高橋

はい、ありがとうございました。いろんな立場から見るとですね、「深くこ」と自身にも、いろいろと問題があるようですが、何か他にございますか。はい、どうぞ。

前田

先程は「生態系」ではないことを言いましたが、ひとつです、今問題になっていることがあります。セイタカアワダテソウが大変繁茂していると、これはですね、私共ボランティアで、引いたり刈ったりするんですが、到底追いつけませんが、人海戦術をやらないと。

と言っても、それを国定公園、特別天然記念物になっているところを、まあ許可を取れば根っこを掘ってですね、掘って除けるのが一番いいんでしょうけれどもですね。やはり「大変な問題」ですね。

ですから、「我々の生態系も変わりつつあるんだ」ということ、これはまあ出ませんでしたが、あえて言っておきます。

高橋

大変大きな問題を提示して頂いたんですが、はいどうぞ。

藤井

あのこれ、牛を放牧することによってセイタカアワダテソウは、この前の試験でも、すごく良く食べまして、我々の今までの放牧の経験の蓄積からも、もう次の年からは、もうほとんど見えない状態まではもって行く事はできると思います。

高橋

他にございますか。どうぞ。

原谷

先程ボランティアの話がありました。私も実践的に言うか、ちょっと実験的に、ずっと山奥に、実はちょっと勝手に行っておりまして、私の経験からしてですね、まあ多少明白くらいは出来るのかなあと思いますが、

まあ普通、ボランティアで組織的にやればですね、確かに「日にちと時間」を決められれば、それ相応の人数が出せるという面が力まずけれども、どうもこの「山奥さ」自体、ずっと平成になって、まだ1回しか予定通りにやってないという状態なんですね。

で、特に必要な、地元にとって必要なウイークデーと言うか、顺延したときに人を集めるのが大変で、この時期にまたボランティアが「すぐに対応できるか」という問題があるのかなと思います。まあ、自分一人でもなかなか大変で、朝起きてですね、私、山口市(在住)ですけども、朝8時半に科学

博物館(秋吉台科学博物館)にいつも電話して、「今日やうてですか」って電話するんですけども、それから実際、組織としてですね、連絡網を使って、どれだけの半径で(範囲で)人が動かせるかと考えたら、非常にですね、まあお天とうさんを気にしなからのですね、やる作業になりますので、なかなか。

確かに「ボランティアが参加すれば助かる」という面はありますけれども、実際どれだけ「当てになる」と言ったら怒られるかも知りませんが、その面がちょっと、今の、集落が主体的になってやってらっしゃる上で、何て言うか「助ける」と言うんですかね、そういった援助のボランティアは非常に難しいんじゃないかなと、また別のルールをちょっと考えないと、なかなかボランティアを、まあ人数を増やせばいいという状態ではないと、今思います。

高橋

はい、ありがとうございました。ボランティアは集落単位でのシステムに入り難い、ということですよ、ボランティアという体制が。

何回切りでも「牧野組合」単位でやってらっしゃいますよね、その辺はどう解決されてらっしゃるのか。

田安

正直なところを言って、今のところまだ、そのボランティアが、例えば野焼きって言いますが、火入れやなんかで、ほんとにプラスになっているかって言うと、どちらかと言うと「足手まとい」な部分が多分、多いんだと思います。

ただ、まあ3年くらい絶えているところを見させていたたい位限りでは、だんだん良くなるんではないでしょうか、それでも都会の人と地元の人との「交流が深まる」と、それで「理解をしていただく」ということのプラスの面が相当大きいからですね、順次、ボランティアを受け入れる牧野組合が増えてきている。大体毎年1.5倍ぐらいずつの伸びで、「受け入れる牧野組合が増えていく」というふうに聞いております。

というところで、どちらかと言うと、その人的な部分で、労力としてプラスと言うよりは、都会の人達と地元の人達の「理解が深まる」というところに、どうも一番大きなメリットがあるみたいですよ、ということではよろしいでしょうか。

あ、それから、そういった意味で、出来たらですね、もうボランティアについては「この牧野組合の担当のボランティア」というような形ですね、牧野組合をぐるぐる回るんじゃないかと、出来れば「同じ牧野組合と付き合う」という形のボランティアの組織にしていった方がいいんじゃないかと、という話なんかも、この前の我々の方の内部の、こういうパネルディスカッションでは出ておりました。

高橋

ありがとうございます。実際にやってみると、人間関係

して行くものでして、いろいろ工夫をしてみたり、組み合わせを試みたり、そういうものが分かる訳です。このシンポジウムも恐らくそうだと思うんです。今まで秋吉台の中で論じてたものが、例えばいろんな地域の人間と関わることで、また「新しい道」も生まれてくるかもしれない。そういう意味で是非ですね、前向きに捕らえてみてはいかがでしょうか。日本人って「マイナス思考」ですから、「これがダメだからダメなんだよ」、「ダメだからダメなんだよ」ではなくて、「こう言いたい点があるんだから何が出来ないか」、そこから技術革新も生まれてくるでしょうし、面白味が出てくるんじゃないかなと思うんですが。

さっきのセイタカアワダテソウの事、誰か判ります。放置したり、おれしたりすると、どうしても消えて、あ、はい。

松井

松井と申します。先程セイタカアワダテソウの話題が出ていましたが、秋吉台の場合はですね、やはり耕作放棄地ですか、それと道作り、或いは耕作地の増りと、後はですね、比較的安定しているところには入って行っていません。

ただ、今、秋吉台の場合はドリーネがたくさんあります。ドリーネの場合は昔は全域耕作地であった、ですから今「耕作放棄地」としてかなり入ってきています。それがどこまで入るかは判りませんが、まあそういう状況です。

それともう一点、先程チョウチョの問題で、ミヤコグサとススキの問題がありました。ススキは「今増えている」と言われてましたが、実際はですね、減ってます。ササ草原になりつつあります。

それは何故かって言うと今から30年前にですね、ササの花が咲きまして、一斉に枯れてしまって、それから徐々にススキが増えた。そして今はコキダケの方が徐々に増えて来ている。それからササの問題もありますが、このササの開花と同時に秋吉台の草原の雑草が徐々に、ですからササの開花が大体60年から80年と言われておりますが、それを同期にですね、秋吉台の草原は変わっています。

それともう一点、ミヤコグサの問題ですが、ミヤコグサは秋吉台にはセイヨウミヤコグサがあります。それは今のススキ草原の中にはほとんど入っていません。ただ刈取ることによって多少は「侵入種」として入っています、その程度だと思えます。

もう一点ですね、秋吉台の草原の刈取りの部分ですが、年に3回以上刈取ると、貧弱地の場合はシバ草原になっています。である程度土地が肥えている場合はですね、帰化植物のヒメジョオンあたりがかなり入ってくると。ただヒメジョオンの場合は、その刈取りを2年くらい放置するとですね、消えています。

それと、先程の畜産試験場の放牧の問題ですが2点ほどお聞きしたいことがあります。今「放牧で火道切りをする」と言われました。その中で火道の中ですね、やはり一応、牛ですから臭なり何なりをします。そして土地がある程度

肥えてきます。そうすると帰化植物の進入が考えられるということが一点。

それとですね、高橋さんも最初に言われましたが、「牛道」というのが出来ます。牛は大体1mから1.5m離隔です。等高線状に踏んでいきます。だけど火道の場合は「等高線状」には切ってはありません。当然傾斜地もあります。そここのクリアの問題、以上2点です。

高橋

それじゃあ私の方が、牛が糞や尿をしてくれてですね、富栄養化しないかどうか、放牧場はむしろ取除型なんです。例えば水田放牧なんかした後に、次に水田に戻したときには肥料成分ではかなり落ちるんです。それは多分「肥料」の影響だと思っただけで、肥料としては、採草も、当然、取除型です。ですから富栄養状態になるから生物多様性が高まって、いろんな草花やななかが混在するっていう状態になる。広い意味です。局所的には富栄養成分が残るんですけど、ですから富栄養の部分とポイントに留めた部分と、モザイク状に残っていく訳ですね。それじゃあ、牛道のこのことを。

高橋

牛道についてですが、今回は20mでやりましたが、傾斜がきつくなれば幅を広くして、牛が橋に歩けるような幅を取って行なえば、そういう問題は無くなって行くんじゃないかなあと思うんですけど。

松井

広い放牧地の場合はそうでしょうね。ただ牛っていうのは大体歩まってるんですよ。歩くところは、だからジグザグに歩くよなことは先ずしませんね、牛は。

高橋

それこそ今お使いになっている電線をフルに活用されたらよろしいと思います。ひとりで管理出来るようなものですから。

松井

一部分は大丈夫だと思うんですけど、何度も同じ手で同じところに集まると、牛道が出来ると言うんですけど。

高橋

阿蘇辺りではですね、40度近い急傾斜地の放牧場でも、牛道上にもシバが張るような形で、きちんとテラス状に管理されているところもあるんです。ですから放牧の回数と、植生がシバ型に変わるかどうか、変わるかどうかで決まるんだらうと思えますね。

いろいろ論議も尽きないんですけど、もう後10分になっちゃいましたんで、「まとめ」はしません。

第2分科会

が、それぞれまたパネラーの方にですね、最後、ここまでいろんな意見を聞いて、その上での感想を、またそれぞれ最後に一言づつお話を伺いたいと思うんですが、よろしいでしょうか。じゃあ塩谷さんから、よろしくお話しします。

塩谷

先程ボランティアのお話がありました。結局、阿蘇と秋吉台とは、もう根本から、時間から、自治体から違っておりました。結局秋吉台でなわわいが出来なくなったということは、切らかを変えないと、もうルールを変えないとどうしようもないと。少なくとも、こういう1000年の歴史で、「今までやって来たから」、「去年までやって来たから今年もやる」というスタイルで続けていたら確かに、非常に「エラクなる(楽しくなる)」と。またこのルールは非常にまた変えづらい、「歴史の重みのあるもの」じゃないかなと思います。

今日来られた方、それぞれ各地域でまた違った、秋吉台は秋吉台、阿蘇は阿蘇、三郷は三郷なりの、「草原の違い」があると思いますけども、先程高橋さんが言われたように、「正解」がなかなか見つけられないと思いますけども、まあこうやって、みんなて話し合っていくことが必要じゃないかなあと思います。

特に私、畜産試験場が亡の度発表されてまして、まあ実際17キロ(秋吉台の火道の総延長距離)を鞍馬で回るといのは不可能に近いんじゃないかなあと思っておるんですけども、人の出入りが非常に多いですから、まあそれひとつを取ってもなかなか難しいと思っておりますけども、まあひとつ、こういった研究で、草の研究でそういう事が「身取り」ってのは嬉しいなと思っております。

まあこれからも、いろいろな議論をしながら、いろんなことを考えながらやっていったらなあ、と思います。以上です。

武次

私はホントみなさんと違って、生活とは一切関係無いようなところからの「草原の豊方」をしていますが、今日、結果的には「野焼き」、「草刈り」の必要性は、みなさんが、みな持っていていらっしゃるということを感じて、急激に蝶の絶滅等は、まだ考えられませんが、このままでは心配ですけども、何かみなさんの方で、「山焼き」、「草刈り」、そういうものの「やり方」を変えられたりなんかすることに、期待することにして、私は私なりにチョウチョを保護して行きたいと思っております。

高橋

足跡、その期待に成えてですね、参加をしてください。作業にですね。

仏蘭

そうですね、「野焼きを復活させたものの」というところもありまして、自然の変化よりも、人間がどんどん、どんど

ん入ってくるのが非常に怖いのをここ何年間で感じています。

特に、例えば登山靴に付いた帰化植物であるとか、そういうのが状態がよければどんどん付いて行って、どんどん変わっていくと。

今私が思っているのは「登山の分散化」、特にひとつの季節に集中しないようにすること、それから登山道あたりを余りどんどん、どんどん広げていくようなことをしないこと、それから山の中に暮らす者としては「ちょっとおかしい」と言われたんですけども、山に入らずにですね、「休暇山」、「山にも休暇を考えようよ」と、「遠くから見ただけの日があつていいじゃないか」という構想を、今みなさんに、私は提案していらっしゃるんです。

藤井

畜産試験場では今年からこの研究を始めたばかりなんです、十分に説明出来るようなデータが、まだ取れてませんので、これからも継続的にデータを取ってまいりまして、補生なり、その影響なりについてですね、調査していきたいと考えております。

それとですね、もし假に、秋吉台で(放牧による火道切りを)やられる場合はですね、畜産試験場の方から、「牛の糞し出しも検討する」という事でもありますので、もし「その時」がありましたら、「ご利用願えればな」と思います。

高橋

はい、ありがとうございます。ホントにまとめようがないので、大変申し訳ないんですけど。

いろんな意見が出たと思います。是非これを持ち帰ってですね、また地元で討議されればよろしいんじゃないかなと思います。

大体大まかにまとめると、「火入れは必要だけど、刈取りもして欲しい」ということですね。要するに「利用をして欲しい」。

ただその「利用が出来なくなった歴史背景がちゃんとあるじゃないか」と、だからそれをどう産案と結びつけるか或いはその「担い手」として、新しいものをどう取り込んでいくかということですね、考えて行かなきゃいけないだろうなと思います。

それから郡庁行政そのものも次第に変わりつつありますし、人手が入った二次的自然に対する国民の理解も少しづつ高まって来ていると思います。でも私達はまだまだ「言い足りなかったんだ」と思うんですね、国民に対して、こうやって「手を加える」ということがですね、ある意味での「自然環境」を保全したり、生態系を守ったり、景観を守ったりするんだという事を、やはり「声意」に言わなければならぬ「だらう」など。

それから、そばに畜産試験場があるんだから、「何でも利用しましょう」、或いはみんなもっと魅力を上げて、全員で、

「みんなを守る」というようなシステムを作つたらいいんじゃないかと。

最後に、「入山規制」もいいんじゃないかって。まだしくホフトはそうなんでしょうけれども、「観光資源」として考えたときは「ひとりでも(多く)入れたい」というもう一方の考えもある。ただ、どうなんでしょう。地域の資源を「観光」なり「産業」なりとして守っていく場合には、「資源を無くさない」という努力を一方でやらなくてはいけない訳ですよね。私達は、ですから「持続可能な利用」をどうしていくかということ、やはり大前提に置かなければいけないんだらうと、その辺をもう一度見直してみる価値はあるんじゃないかな、と感っています。

はい、どうぞ。

堀谷

「規制」がいながら私が言つてはアレですけど(堀谷氏は山口県庁自然保護課の元担当者)、一応、秋吉台国定公園の「公園計画」が、先程「特別保護地区」という話がありましたけども、「第一種特別地域」ということでこの草原はなっております。まあ「公園を守っていく」という意味で、「第一種」という、「一つ落としている」のはですね、人の営みと合うか、先程来話題になっておりますけど、「標準を前提とした自然公園の景観」という画がありますので、あくまでも生態系自体は「結果論」であってですね、みなさんが本来、「1000年前からやってこられた事を続けて来られれば「当然あるべき姿」であって、先程「山大(山口大学)から電話があった」という話と同じ話ですね、「全体でやった結果、生態系が守られる」という画がありますので、「それに合わせて国定公園にしておる」と、ちとちと「国定公園を守るため」というのもありますけども、それ全体の「なりわいを含めて国定公園にしている」ということを、最後にひと言付け加えさせていただきます。

高橋

はい、ありがとうございました。まとめていただきましてありがとうございました。私がやることがないんで。

まあ、おっしゃる通りで、「草原文化」そのものを守って行かれたらどうでしょうか。そういう方向で「補強」にしたいと思うんですけど、いかがでしょう。(拍手)

どうもありがとうございました。つたない進行で、大変あっちこっち飛び回ってですね、「まとまり」がつかなくなりましてけれども、みなさんのご熱心な討論のおかげですね、少し「光が見えてきたかな」と思います。もう一度パネラーのみなさんに盛大な拍手をお願いたします。(拍手)

それではこの「生態系と保全」の分科会を、これで終了したいと思います。みなさんどうもありがとうございました。

■第3分科会

『なりわいと保全』 — 事例発表 —

事例発表 (財)阿蘇グリーンストック専務理事

山内 康二

環境省自然公園指導員

大滝 典雄

西の原牧野組合組合長

川村 孝信

久住町稲葉牧野組合

佐藤 隆幸

進行 山口大学農学部助教授

宇佐見 晃一



宇佐見

それでは『なりわいと保全』の分科会を始めることにします。

まず最初にですね、どういうふうにごこの分科会を進めていくかについてご説明します。この分科会は4名の報告者の方がごぞいます。みなさんのお手元にはですね、もう順番が書いてありますけれども、先程「打合せ」がありまして、報告者の順番を変えさせていただきました。ひとつ目が大滝さん、ふたつ目が山内さん、そして佐藤さん、最後が川村さんというふうな順序にさせていただきました。それで一報告20分を計画しております。それで報告者の方には15分使って頂いてご報告していただきます。それで残り5分と短いですけれども、報告の内容に直接関わるご質問を受けたいと思います。それで4報告が終わりますと、おそらく残り40分程となりますけれども、それはこの分科会のテーマである『なりわいと保全』ということについて報告者の方と、それから出席者のみなさんと共にですね、考えていきたいと思っております。

私、この分科会の進行役をさせていただきます宇佐見と申します。よろしくお願いいたします。

それですね、あの、報告者の方は前へ、そしてスライドとかOHPを使ってみなさんにプレゼンテーションをされます。で、報告に関する5分の質問につきましては、私の、このワイヤレスマイクを使って、質問をみなさんにご披露していただきたいと思います。といいますのは、全て録音をしてですね、後で「テープ起こし」をして記録として残しておくように、事務局から言われておりますので、発言なさるときにはですね、最初に申し訳ないんですけども、お名前を言って頂けませんか。【どこどこのだれべえ】で結構でございます。それからご質問ですが、限られた時間は5分です。最後の総合的な検討も40分ではありますけれど

ども、これだけの方が、一人1問質問すればですね、到底十分な時間がありませんので、なるべくコンパクトなご質問をして頂くようにご協力をお願いいたします。

それでは最初の報告に移りたいと思います。最初は、熊本県の阿蘇郡からお見えいただいております、大滝典雄さんに、発表していただきます。題目はですね、『草原と人々の営み』ということです。じゃあ大滝さんよろしくお願いたします。

大滝

お手元の資料に書いてございますこの内容は大きく3つに分かれておりまして、第1番目が、草地と家畜と農地って言うのは有機的な結合関係にあったということですね。で、古典的な草原の利用を映像でお示しいたします。2番目は、採草地の必須的な維持管理技術としての野焼き、という映像を出します。3番目には、放牧頭数の減少による放牧圧の変化、植生の変化、そういったものの話をしていきたいと思っております。では早速スライドに移らさせていただきます。

(以降、スライドを使つての報告)

これはあの、ランドリット、自然探査衛星から見た阿蘇です。一番中央にあるのが噴火口ですね。周囲4キロメートルの噴火口。で、大きくいきますと、これがカルデラ、今から15万年程前にですね、それから8万年の間に3回大爆発を起こしたときの複式火山の火口丘ですね。【カルデラ】と言います。で、東西が18キロメートル、南北が23キロメートル、カルデラの周囲が100キロメートルでございます。

で、色分けて言いますと、この白っぽいのが水田地域、阿蘇台地これが4,000ヘクタールあります。こちらが南郷谷ですね。で、これが北外輪地域の草原、これが中央火口丘

の草原、これが海外希の草原分布でございます。

草原の特徴に5つありまして、1つは「集団性」ですね。まとまりがあるということで、こういった、北外輪地域はここだけでも15,000ヘクタールあります。全部で阿蘇郡の草原面積は23,000ヘクタール。で、この場合は、幅が6キロメートル、波野村から二重峠までの距離が30キロメートル、非常にまとまりのある草原ですね。これが、土地利用の面でも、観光の面でも、非常に「日本離れした草原景観」になっております。

2番目にはですね、波野って言う村がここにありますが、その名前のように「波状丘陵地」ですね、湖のようにこう、うなってるんですね。後で画像が出てきますが波状丘陵地。それから、中央火口丘では「山麓傾斜地」、阿蘇山を頂点としてその麓に展開している草原が、こう見えます。

3番目には、標高が900から800メートルですね。一番多いのが約700メートル、これが分布域としては一番多いんですけども、特にこの北外輪地帯は、阿蘇谷が標高が500メートル、外輪山上が800メートル。で、「ゴニールカルデラ」の壁、300メートルの「壁」がある訳です。この「壁」がですね、草原の利用にとって、農家にとっては非常に過酷な労働を与える「運命」を与えたことになる訳ですね。

それから、緯度と言いますと、ここに「北緯33度」が走っています。で、低い緯度にある草原分布ということで、これは国際的な草原の分布の位置から見ても非常に貴重な分布ですね。北緯33度、「温暖地にある草原」ということで、この草原の成り立ちについては、秋吉台と同じようにですね、「人為的な土地利用によって草原が出来た」ということです。

それからもうひとつ非常に大事なことは、これはあの、江戸時代に出ました、今から300年前に出ました「入会地」ですね。御川藩が豊家の「入会権」を認めてですね、農家的な土地利用をしながらということ、認め入会地でございます。所有は町村有ですね、ほとんどが町村有で入会権があります。そうして175の牧野組合がそれぞれ利用しています。

で、これは、あの、阿蘇っていう所は「もうひとつの鎮」がありまして、「中九州の水脈」って言われています。それは、阿蘇っていうところは、この緑川、白川、菊池川、筑後川、大野川、五ヶ瀬川っていうことで、熊本県、佐賀県、福岡県、大分県、高崎県、この5県にまたがる水脈と言われてます。実はこの事がですね、「阿蘇の草原を守る」という運動を啓蒙する上において、とても大事な要素になっております。特にこの6大川に受益する子流域の人は300万人。特に熊本市の65万都市は、阿蘇に降った雨が地下浸透してですね、数十年の経ちをして流水する訳ですけども、65万都市が100%地下水の水を利用して生きてると、そういった都市でございます。

で、これはあの、「行けど寂 行けどすゝきの 原懐し」とい

う俳句をですね、文豪、夏目漱石が詠ったようにですね、行けども行けども草原が懐いてるという、北外輪山上の波状丘陵の草原でございます。遠くに「阿蘇の五區」、板子岳、高岳、中岳、烏帽子岳、住生岳、杵高岳が見えます。

で、「阿蘇千年の草原」、「人と牛の織り成す自然」ということでありますが、「阿蘇千年の草原」という言葉が、盛んに近頃使われるようになりました。それは905年、「延喜式」という国の政を書いた書物の中にですね、「肥後国 二重馬牧、波良馬牧」(二重馬牧は阿蘇町の二重峠、波良馬牧は北外輪山の一角)という記述があって、同量の馬の生産牧場があったということから、現在まで1000年の間、歴史が続いてるということからですね、近年は「阿蘇千年の草原」ということが盛んに使われるようになってまいりました。

で、そこでですね、草原の利用の一番の原点になるのは「採草」です。その次が「放牧」ですね。で、農家の人々は昭和30年代まではこういった苦労をして草を刈ったんですね。

これは「草泊まり」風景って言いますが、農家から草原までの距離が数キロメートルもある、ということ、朝、露のあるときに草を刈ると産草が上がる訳ですが、「通勤型」では非常に遠過ぎるということで、草原の中に草の小屋を掛けて、そこに寝泊りしたと、それを「草泊まり」といいます。で、牛の背中に布団、それから炊事道具、全部積んでですね、家族で草原に小屋掛けに向かうとこです。昭和37年まで阿蘇で見られた風景です。

これが「草泊まり」ですが、スキの草原の、草の高いところを刈ってですね、で、竹の支柱を入れて、そしてこれに草掛けをして、泊まれるようにしてですね、夕方、おはなちゃんやせせらぎの水を汲んで来て夕飯の支度をします。非常に貴重な写真です。で、こういった農家が、大体150戸から200戸くらいは、こういった草泊まりをしていて、この草泊まり期間が、大体2週間、その期間は、小学校、中学校もお休みになったと、それくらい、この、「村をあけて」のですね、乾草を取ったという風景です。

どうしてこういったことをしたか、これは、現在では冬の積っていうのはサイレージとか乾草とか十分にありませうけれども、昔はサイレージもありませんでしたので、「乾草=冬の貯蓄飼料」と。そして、この乾草を取る量によって牛がたくさん飼える。そしてその牛がたくさん飼えると、仔牛が売れて現金収入になる。そして厩肥(糞肥)が取れて、農作物の米の生産高が高くなるということで、もうこれは農家の「無くしてはならない」必須的な農作業であった訳です。

これは草刈ですが、昔は大鎌をふるってですね、刈って取りまして、今では刈り払い機で草を刈っております。

これは「草小箱み」といいますけれど、ひとつの小箱みの

量がですね、「一駄」、「二駄」、「三駄」って言う表現が何駄ではありますけども、牛の背中に積む量を一つの単位として、あとで映像が出てきますけど、牛の背中に6疋積むんです、片一方に3疋、向こう側に3疋ですね。これは十駄小積みといいますが、60疋小積みですね。で、冬の間に牛の餌は、朝1把、夕方1把の1日2把与えますので、60把ありますと1ヶ月分になったんですね。ということで、農家にとっては、冬場の餌を採ることがとても大事な仕事でした。

ということで、農家の人は「隣の家に負けるな」と、よその家はもう5時に出て行って草を刈った、「ウチはそれよりも早く出て行こう」ちゅうことで、早起きの競争、それから、草原に向かうのも「競り先に」。そういった過酷な「労働の競り合い」があった。そういった時代の映像です。

で、これは夕暮れの「干草小積み」ですけども、日没寸前でお父さんが上で、お子さんが下で投げ上げてですね、干草小積みが完成しようとしております。

これは、三重連による牛の運搬風景ですが、おいしいちゃんがこのように、牛の頭が1頭、2頭、3頭と見えますが、三重連です。こっちは3把、向こう側に3把、これが1駄、2駄、3駄と言います。

現在では幹線道路があって、トラックによって大量に搬出が出来ますけども、昔の搬出方法っていうのは、こういった駄載(牛馬の背中に荷を乗せて運ぶ)しかないんですね。牛の背中に振るしかないということで、出来るだけ1回で多くの草を運ぶために、三重連という、連結の知恵が生まれた訳ですね。大体、最大4頭までは連れて行ったそうです。で、そういった中でも、先頭に立つ牛はですね、非常に豊饒に育んだ利口な牛を先頭に連れてくるというふうなことで、そういった連結の方法にも生活の知恵があって、それで、方が一、途中で切れても3頭一輪に転落しないように「途中で切れるような結束の仕方」、そういった知恵もあったと言われています。

で、これは非常に貴重な昭和30年頃に撮った映像ですけども、農家の主婦がですね、1頭、2頭、3頭と連結して外輪山の坂を下りてくる訳ですね。そして午前中に1回運び、午後1回運ぶということで、もう過酷な労働なんです。

で、昔の農家がですね、野焼き、干草刈り、それからこの運ぶっていうことを調べてみましたところが、1頭の農家がなんと、この外輪山を越えるのが200回にも及ぶんです。往復で5キロあるとしますと、200回だと、1,000キロメートル。熊本から東京に行くぐらいの距離をですね、歩いて草を運ぶ、野焼きをする、放牧に牛を連れて行く、そういった重労働に就いた訳ですね。それから外輪山の標高差、200メートルから約300メートル、これを越えて行く訳ですが、これを積み重ねると、実に富士山の18倍ぐらいの高さになるんですね。そういった過酷な労働の中で草を運んだ。

ということで、どうしてそれだけの労働を繰り返すにやめたかといいますが、草は牛の餌であり、それから破いたところ、食い残したところは燃料であり、そして牛の糞と尿と混じって厩肥になります。その厩肥はいわゆる緑肥農業(田畑を耕し、作物を植える農業)、米のですね、生産力になるということで、農家にとって草をたくさん刈り、運ぶということは「美德」であつたんですね。

その当時の石畳の道を歩いておりますけども、「何軒の農家はみんな石工であった」、「石工であった」と言われるぐらいですね。滝尻岩を命でこたかて割って運んで、そして外輪山にたくさん道を造るんです。一の宮町だけでも約30箇所、その中の21箇所を私は歩いてですね、確認しております。

で、阿蘇の昔からの牛小屋ちゅうのは、こういった「籠み込み式」の籠でして、だんだん、だんだん、干草を中に投げつけてやります。そして、(牛が草の)匂いとこだけは食べて、匂いところは敷き藁になる訳ですね。で、それに糞と尿が混じって厩肥になると、もうして、だんだん、だんだん、床が高くなってきて、牛の頭が天井につかえそうになると、農家では三本爪(三本)でこれを出してですね、そして、桶手でくくって牛の背中にまた積んで、田んぼに運ぶと、そういった循環が見られた訳です。で、言うなればですね、阿蘇の畜舎構造っていうのは「糞肥の生産工場」です。だから牛の手を取ることも、厩肥を取ることも第一の目的があったと言われています。

そしてさらにですね、草は窒素成分で0.1とか0.2ぐらいのパーセンテージしかありませんけども、糞尿と混じることによって窒素濃度が0.8とか1.0とかにですね、4倍にも5倍にも、肥料としての価値が転換すると、そういったことで、草原の草と牛と耕地って言うのは「有機的な連鎖関係」にあった訳です。

さらにですね、農家では傾斜地を利用して、「落とし飯」って言いますが、上が畜舎で、牛、馬が飼われとって、こう、段があって、ここに牛、馬の厩肥を落とす訳ですね。で、馬車に積んで田んぼに持って行く、こういった畜舎構造が、昔が一番近代的な畜舎構造であった訳です。はい。

で、これは、遠くに見えるのは北外輪山の、先程言いました15,000ヘクタールにも及ぶ広大な草原。ここに過酷な農家に労働を与えた「カルデラの壁」、300メートルの新壁があります。そしてこれが阿蘇谷の4,000ヘクタール。ここに農家が張り付いている訳ですね。4、5世紀にはもう古墳がたくさんあって、この辺に農家や農業の営みがあったと言われていますが、農家の人達は、この外輪山の上にある草を運ぶために、この外輪にかかる道をですね、1年間に200回も上り下りする訳ですね。

そして、この草原の草を畜舎に運び、そしてこの畜舎で出来た糞肥を、また田んぼに運ぶと、それから草原の草と家畜と耕地って言うのは、有機的な循環によって、牛が1頭おりますと、糞肥が3トン出来て、30アールの水田の肥料が出来ると、そういったこの連鎖関係、それから有機的な流れがありました。

で、そこで農家はですね安定的に干草を取るために、生活の知恵が生まれたんです。それは「古野」って言うことですね。ここは米塚(阿蘇町にある山)ですが、こっから向こう側は草が刈ってありますね。こちらは刈り残してあります。それは「草原に休息を与える」っていうことですね。光合成を十分行って、地下部に貯蔵養分を蓄えて、そして翌年も生産力が上がるようにするために、こういった休息を与える。これを「古野」って言います。昔から農家の人が受け継いで来た伝統的なですね、草原の維持管理技術です。

で、野焼きが始まりますけれども、この野焼きもですね、ただ単に都会の人から見るとイベントに見えますけども、農家にとっては、今話をしてきましたように、採草地の草を安定的に、そして牛の食べる、粘り草の混じってない、いい草をとるために、野焼きっていうのは必須的な管理技術でした。

野焼きをしないと、雑草木、低木が生えてですね、具体的にはケルトリイバラ、ノイバラ、それからアキグミ、そういったのが生えて来てですね、刈り取りがしにくい、牛が食べないということで、農家の人は縄文の時代からですね、営々と野焼きをすることによって、採草地の草が刈りやすく、いい草が立つということを感じてきた訳ですね。

その、慣習が今でも阿蘇では残っておりまして、あとで山内さんの方でも話がありますが、野焼き面積は16,000ヘクタール。ここに関わる農家の人数が8000人ですね。一人当たりの負担面積が2ヘクタール。一番ひどいところは一人当たりの野焼き面積が10ヘクタール。そういった重い荷を背負っているところもあります。

これは野焼きの原動力ですが、戦後今まで50年間に、野焼きによって亡くなった人が、阿蘇郡だけでも数名に及びます。おそらく1000年の歴史の間には、単純計算しますと、200名の命が野焼きによって失われたであろうって言うことが推定できる訳ですね。

で、これは火の合流ですけども、農家にとってはですね、野焼きっていうのは命を懸けた作業なんです。救急員の野焼きもそうですけども、指揮・命令系統を明確にすること、そして火をつける人を「火引きさん」って言いますが、一番大事なベテランの古老の人があたる訳ですね。風向きを見、そして、つけたところから消して行くっていう、そういったことをしながら、安全にこの包囲網が出来



たところで会議をしますと、向こうの谷から来た火と、こちらの火が合流して、ドッキングしてですね、10メートルも15メートルも炎が舞る、そういった伝統的な野焼きの管理技術っていうのを土地の人は身につけております。

で、「輪地切り」、ここでは「火道切り」と言いますが、熊本県ではクルマの輪、土地の地と書いて「輪地切り」と言います。で、「急斜面で命がけの作業 高齢農家に重い負担 あと5年もつが?」という新聞のショッキングなタイトルですね。今平均年齢55歳です、5年すると57歳、65歳の人は70歳に歳実になる訳ですね。

ということでこの輪地切りの総延長が40キロメートル、熊本から神宮くらい距離ですね。(防火帯の)幅が7メートルですから、450ヘクタール。これを5,000人の人が受け持っていて輪地切りをしております。

で、(輪地切りの実施は)夏、まだ9月で高温の時期、それから高齢である、足場が悪い、刈り払い機で一つ間違えると大怪我をさせる。そういった心理的な負担、それから野焼きのときに森林に火が入りますと、その保護者にゃならん。それと重い負担のために、だんだん、だんだん、野焼きが減って、平成7年以降、阿蘇では450ヘクタールが野焼きを中止して、景観上の問題にもなっております。

で、輪地切りをした後、1週間くらいすると「輪地焼き」という作業を行います。防火帯が確実に防火機能を発揮するために、(輪地切りで刈り払った草を)束めて焼くんですね。そういったことを阿蘇ではやっております。

これが冬の映像ですが、これが防火帯ですね。冬、雪が降っておりますから斜面に見ることができます。

で、その次は「放牧」ですが、阿蘇では昔からですね、放牧されておまして、昭和35年代が一番多くて、2万頭放牧している。2万頭が150日の放牧期間でしたので、約300万頭

の「延べ頭数」の牧畜力があつた訳です。

で、現在では1万頭に牛の数が減っておりましてですね、牧草の導入によって240日間に放牧期間が延びております。延べ頭数で言いますと240万頭の牧畜力があるという訳ですが、その量が60万頭ちょうことで、草原に放牧して余裕がある訳です。

ということで、放牧の「圧」(放牧圧)が牧によって草原に働きかける力がそれだけ弱くなりますと、草原が荒れてくるんですね。阿蘇でも痛んにチカラシバが生えてきたりですね、エゾノギシギシが生えてきたりということで、「放牧圧の不足」による草原の荒廃が見られます。

で、さらにですね、「牛は山にのぼる」という言葉があるように、この等高線を作って傾斜角度35まで上って行く訳ですね。阿蘇の草原の23,000ヘクタールのうちに、16度以上の急傾斜地は70%ですから、この牛がいないと阿蘇の草原の利用率というのは、ぐんと下がってしまう。牛がおることによって、こういった傾斜地まで綺麗な短草型の草原になる訳ですね。

ということで、この牛のことを中国雲南の高橋(姓)さんは「草原の造園師」と、私は卓原の、これは全部メスですから「草原の美容師」という言葉で、表現をしている訳です。また、ゴルフをされる方は「グリーンキーパー」とですね、草原を綺麗にするグリーンキーパーであると、いろんな表現を使って牛の「業績」を讃えております。

これも外輪山の急斜面ですね。35度あるようなところにですね、「牛道」(牛が通って出来た道)を、こう作って、牛がここに6回いるでしょ。ここにも2回おりますが、こういった斜面をですね、等高線状に進みます。よく見ると「スイッチバック」がある。所々に、こう下から上に、上から下に移動するスイッチバックを作っていますね。これは前十年という歴史の間に、牛が「生活の知恵」で作った移動の路線ですね。スイッチバックを作っています。で「牛道」と言う、非常に珍しい景観ですね。

この牛の「採食行動」、「登坂力」ですね、そして体重の10%から12%を食べる、80キロから72キロもの草を食べる。こういった行動によって「阿蘇の草原景観」ているのは保たれている訳です。

で、最後に2枚で終わりますが、これは「草千里」ですね。熊本県の観光地の中でNo.1と言われている草千里ですけども、この広々とした景観、そして宮みのある景観、動きのある景観、牛の営みは、仔牛が母牛の乳を飲み、水を飲み、寝転ぶ、そして緩やかな時の流れ、清らかな空気。そういったところに都会の人が身を置いたときに、心の安らぎ、心の癒しを感じる訳ですね。

で、もしもこここの牛がいなくなったときには、この景観は荒くなってしまふでしょう。

荒々たる低木、または荒地になってしまうでしょう。そうして阿蘇にきた観光客が「こんな景観が国立公園か」と言うでしょう。そういったことですね、牛が持つ「多面的な機能」ですね、第一義的には牛肉の生産であり、仔牛の生産ですけども、そういった「多面的な機能」を見直してですね、牛を壊やそうという運動が今起こっている訳です。

最後になりますが、これは草千里の景観ですね。短草型、芝型の草原です。8月から9月になりますと、下の方から、里から牛が上がってきますけども、ミヤマキリシマが咲き、そして芝型の草原があって、この景観が「熊本県でNo.1」といわれる景観です。

ということで、今日私はメインテーマとしての「なりわいと保全」という意味でですね、「阿蘇の農家の人々が千年の歴史の中でどう草原と関わってきたか」という話をいたしました。以上で終わります。

平佐見

大滝さん、ありがとうございます。

えっと、報告者をちょっとご紹介するのを忘れてしまいましたけども、大滝さんは、現在阿蘇地区のパークボランティアの代表であり、自然公園推進委員をなさっております。

それでは、大滝さんの報告に関してご質問がございましたら、お手を挙げていただければと思います。ありませんか、はい、それじゃあ、後でまた「全体」のところでありましたら、積極的にご質問をお願いいたします。

それでは続きまして「第2報告」の方に移りたいと思います。第2報告は、「財団法人阿蘇グリーンストック」の専務理事をなさっております山内康二さんからの報告であります。題目は「市民参加の草原保全の取り組み」です。よろしくお願いたします。

山内

先程ご紹介をいただいた「グリーンストック」の山内と申します。

私の話は、ここでのテーマは「なりわいと保全」ってことになっておりますので、若干、無理があるかと思うのですが、私共は「市民参加による草原保全の取り組み」ということで、実は私共の財団は、平成7年に、都市と農村、行政の3者の連携で、「阿蘇の生命資産」、まあ草原とか、森林、農地、或いは水、水源ですね、これを守り、後世に引き継いでいこう、ということを目指して設立された財団な訳です。で、先程大滝先生の方からご報告のあった、地元の「なりわい」によって維持されてきた阿蘇の草原、その保全に向けて、「都市部の市民による関わり」が何とか作り出せないかということで取り組んで参りまして、そういう意味で、どちらかと申せば、そういう都市側の参加、関わりによる草原保全の取り組み、「私共の財団でやってきた取り組み」を中心に、スライドを使って、ちょっとご紹介をさせていただきたいと

思います。

(以降、スライドを使っての報告)

もう前半は省いていきますか。野焼きの後に、阿蘇ではキスマリンが一面に咲き誇りますが、これはその様子です。はい、どうぞ。

これは阿蘇の景観、それと野の花を代表するゴタイの写真ですね。「阿蘇が大焼と地焼きだった」と言われる証拠の、こういった希少な野の花が随分あって、いわゆる野焼きで背の高いキスマリンなどを除去することによって、こういう野の花が生息する条件が作られているというふうに言われています。はい、どうぞ。

これは非常にスライドの写りが悪いですけど、先程大滝先生のお話しにもありましたが、実は私共の財団で平成10年から11年にかけて、2年間かけて、阿蘇の草原について調査を行いました。阿蘇には175の牧野組合があるんですが、その牧野組合の持つ全部の牧野について総合診断、及び野焼き、輪地切り、先程話しがありました「輪地切り」と言う防火帯を作る作業がありますが、そういった作業の現状について調査をした訳です。その結果に基づいて、データで、阿蘇の土地利用のスケールとか、人的スケールというのを紹介しようとしたスライドなんですけど、ちょっと写りが悪くて分かりません。

(スライドを指し示して)ええ、阿蘇の草原の面積は23,000ヘクタール、そのうち野焼きをしている面積が16,000ヘクタールっていうふうになっております。そしてこれは「阿蘇郡の入会権」。阿蘇郡の草地にはほとんど入会権がございまして、その入会権者が10,000戸、入会権を持つ方が10,000戸いらっしゃるということですね。はい、次どうぞ。

これが野焼き面積、16,000ヘクタールですね、そして先程出てきた輪地切りという防火帯を作る作業ですが、これが総延長640キロ、175の牧野組合の総延長で640キロ、直線距離で熊本から諫早までの距離になるというふうになっています。次どうぞ。

これが輪地切り及び野焼き作業に関わる地元の人々の人数ですが、(スライドを指し示して)こちらの方が、輪地切りに関わる人数ですね。出役者5400人、野焼きに関わる人々が約7,600人というデータになっています。次、お願いします。

で、そういう中で、阿蘇の草原の維持が困難になってきているって最たる理由、私共も調査をしてびっくりしたんですが、平成7年から平成10年に掛けて、8年間の間に、家畜を飼っている農家の減少率が、この割合で588戸、まあ26%

くらい減少している、この3年間にですね、そういう非常に深刻な状況、これが阿蘇の草原の維持に関して非常に深刻な問題になっている、と思っております。次、お願いします。

これは、その調査によって、175ある牧野組合をタイプ別に、4つに分けてみたものです。(スライドを指し示して)上から、草原の維持が極めて困難だという牧野、もう既に野焼きなんかを一部中止している牧野ですね、これが35牧野で、全体に占める割合が20%もあります。で、「タイプ2」が、現在は維持されているけど、恐らく条件的に厳しいといった牧野、(例えば輪地切りの出役者の平均年齢が50歳を超えている、そういった牧野がですね。この時点で、平成10年の時点で60歳を超えている訳ですから、現在ではもう62、3歳くらいになっている訳です。そういう牧野が「タイプ2」ということで、これが40牧野、全体の約22.9%。このタイプ1とタイプ2を合わせて、既に43%くらいが、野焼きの維持が非常に困難だというデータになっています。はい、次お願いします。

まあそういう中で、お手元の資料28ページに私の報告の項目だけで紹介していますが、「市民参加による草原保全の取り組み」の、私共が取り組んでいる「取り組み」の大きな1つの柱でもあります。先程の大滝先生の話の中でも「草原の維持に畜産が非常に大きく関わっている」という話がありましたが、そういう意味で、「阿蘇の草原維持に関わる畜産」、阿蘇の場合、牛は赤牛なんですけど、その赤牛の「畜産振興を都市側で応援していこう」ということで、赤牛の「産直(産地直送販売)」を生協(生活協同組合)なんかを通じて行なう「畜産振興支援活動」を展開しています。

これはそのときの交流会の写真です。九州に「グリーンコープ」という、山口にもありますかね、グリーンコープという生協がありますが、そこと赤牛の「産直」をやっている。これはそのグリーンコープとの交流会の風景ですね。次どうぞ。

これも同じ交流会の風景です。はい、次どうぞ。

これは、その生協の組合員さんの子供さん達を呼んでの交流会。産直の普及のひとつで、「赤牛にふれあう」ということで集まってもらっているところですね。これが赤牛ですね。

一応今のところ、平成12年で年間260頭から260頭位の赤牛の産直をしています。で、このところようやく地元の阿蘇のホテル、旅館関係も、だんだん「赤牛の肉を何とかせよ」といかにだろう」ということになりまして、先日ようやく契約が成立したので、おそらく平成13年度は年間350頭から400頭近い産直に広がるだろうと思われていますが、そういう「産直」、「畜産振興事業」を財団の方で取り組んでいます。次どうぞ。

これもちよっと分かり難いんですけど、これは去年から準備中なのですが、産直だけじゃなくて、河野の赤牛を増やすのに、都市の人々に「赤牛のオーナー」になっていただいて牛を増やそうという事業です。

これは実は後で紹介する、「野焼きボランティア」の取り組みの中から、そのボランティアの人から「野焼きの支援だけじゃなくて、何かもっと草履維持のために都市側が支援出来る方法はないか」ということから始まって、現在、最終的な子牛の飼料代金の調整をしているところで、おそらくこの春には、第1号の導入が始まるんじゃないかと思います。

都市の人々にお金を少し出していただいて、大体30万円くらいで母牛を買って、そしてそれを地元の農家に預けて、子牛を生産していただいて、その子牛の売却益で都市の人々に、まあ「元金を保証する」と言ったら出資法に引っかけられますので、出来るだけ「元金程度は返せるように」、まあ3年か6年間で返せるようにしよう、というふうな「仕組み」を今検討している最中です。

地元の「収入割」として現在3件くらいの申し出がありまして、そこそ打ち合わせをしているところです。もう既に福岡の方には「赤牛なんとかクラブ」というのが出来上がっていて、今10強分くらいの資金が集まっているところです。他にも、新聞で報道されたということもありまして、今17件くらいの問い合わせが来ているところです。次どうぞ。

いよいよ「市民参加による草履保全の取り組み」の、もう「一つの具体的な「取り組み」として、先程からの大滝先生の話なんかにも出てました、「野焼き」と「輪地切り」、まあ野焼きとその野焼きをするために欠かせない輪地切り、防火帯作りですね、この2つの作業が欠かせないんですけど、この2つの作業に「都市の市民のボランティア参加が出来ないか」ということを、ずっと財団の方で追求してきました。で、これは地元の方が輪地切りをしている風景写真ですね。次どうぞ。

で、実は財団の方では、平成6年頃からですね、20名くら

いで「体験的な野焼き参加」を続けてきたんですが、平成11年から本格的に都市市民に呼び掛けた「ボランティアでの野焼きと輪地切りの支援活動」を開始しています。

これは去年の10月に、ボランティア参加をされる方に集まっていたいて、輪地切りの作業に入る前に、輪地切り、或いは刈り払い機の扱い方について、地元の人から講習・説明を受けているところです。次、お願いします。

この方が地元の方で、ボランティアの人には、みんなこういうゼッケンを付けてもらってるんですが、ボランティアの人達が刈り払い機の扱い方なんかを地元の方から、今実地で講習を受けているところです。次、お願いします。

で、講習を受けた後、まだ危なっかしいんですが、(スライドを指し示して)実はここが山林なんですね。で、その山林道を、この時は幅が12mから16mくらいの幅で、「輪地」といいますが、防火帯作りをボランティアの手で行っているところです。次どうぞ。

これも同じですね。これは去年の10月、環境庁のモデル事業としてボランティア作業をやったところです。これも同じく防火帯作り、輪地切りです。次どうぞ。

大体これで輪地が、かなりもう出来上がってきたところですね。(スライドを指し示して)こっちが森林帯、これが防火帯、これで15mくらいの幅があるんじゃないか、はい、次をお願いします。

で、作業が一区終わって、記念撮影をしているところです。次どうぞ。

で、これが一番最初にやった野焼き、94年の3月だったと思いますけど、20名くらいの参加者で「体験的にやった野焼き」のときのものです。で、初めて、「阿蘇千年の草原」で、地元の人名権を持っていない人で、都市側の市民が初めて参加してやったという意味では、確かこれが初めてだと思います。次、お願いします。

で、これが93年位の春の野焼きです。(スライドを指し示して)このお2人がボランティアの方ですね、この方は確か九州農政向の人だったと思いますけど、このお二人と、こっち側におられるんですね、あ、こちらにおられるんですね、たと思います。次どうぞ。

で、本格的に、大々的に「野焼き支援事業」として始めたのが平成11年からでして、今日お手元にチラシをお配りしたと思いますが、野焼きに参加する上で、ボランティアには必ず「初心者研修」というのを受けていただくことになっております。先程の大滝先生のお話にもお進ましたが、是非何回か事故が起こっておりますので、初級ボランティアには



必ず保険を掛けますが、必ず「講習」を受けてもらわないと、本番の野焼きには参加させないという条件で、地元の方と信頼関係、協力関係を作っております。これはその講習会のとさの様子です。次、お願いします。

そして講習を受けた上で、これは野焼きの際に使う消火用の道具で「火消し棒」と言うものですが、それぞれのボランティアに自分用の火消し棒を作ってもらっているところですね。次どうぞ。

実は今日、阿蘇の方で、その「初心者研修会」の第2回目、今年の第2回目が140名くらいのボランティアを集めて行われているはずで。

これは、第1回目のときの大滝先生ですね。第1回目は平成11年の春ですかね。初心者研修会のときに、1日オリエンテーションと火消し棒作りがありまして、翌日が小規模の野焼き体験ということで、一応予定してらんですが、この年と去年の2年間は、大雪とか雨でですね、体験の方が出来ませんで、現場の草原で、野焼きの危険性とかそういうのをボランティアの方に、随が大滝先生だと思いますが、話してもらっているところですね。次どうぞ。

これがいよいよ、去年の春の野焼きの本番です。これは研修を終えて、いよいよ本番を迎えるボランティアが、地元の軽トラに分乗して、野焼きの火を入れる現場に向かってるところです。次、お願いします。

で、続いて、それぞれの火消し棒を荷台から降ろして、今準備に入っているところですね。次どうぞ。

そしてこれは、地元の区長さんから、野焼きの要領や注意事項について説明を受けているところですね。これ私ですけど。次をどうぞ。

で、一応、取り掛かる前に、ちょっと記念撮影をした様子です。1つの牧野、阿蘇郡の場合、1つの牧野組合で普通300ヘクタールとか、まあ大きい牧野では600ヘクタールとかの規模になります。ここは薩が島森町の牧野ですが、野焼きするところは100ヘクタールくらい、80から100ヘクタールくらいの規模のところ、地元の方が25名くらい、ボランティアが30名くらい、これ薩が30名くらい入っています。次、お願いします。

どのようにボランティアが入ることによって、以前は地元の人達だけで2日掛りで野焼きをやっていたところですが、一応ボランティアが入ることによって、1日で終わるようになっていきます。これが実態にボランティアが入って野焼きをしているところで、向こうから、こう、火が燃えてきている、そしてこっちから迎え火をちょっと打っている、火消しなん

かをしている、というところですよ。次、お願いします。

これも野焼きの写真です。次どうぞ。

これは、県立大の女子大生もボランティアに参加している、向こうの方に火が燃えているところですね。次どうぞ。

これが、これは去年の春の野焼きの風景です。次お願いします。

これも去年の^{阿蘇}阿蘇での野焼きの風景ですね。で、ボランティアは、遠くはですね、今年もそうだったんですが、東京、埼玉なんかからもいらっしゃいます。今年は、埼玉の所沢から主婦の方が4人くらい来られて、まず今年は初心者研修を受けて、来年「2年掛かりで」ということで、来年「本番」に参加するというふうなことを誓っていらっしゃいました。福井、東京、埼玉なんかからも何名かづついらっしゃいます。

で、参加者の大半、半分弱が熊本県内、そして残りの半分が、福岡とか、その次多いのが佐賀、大分ですね。九州各県から参加していただいております。今年の初心者研修、総勢210名くらい、去年も250名くらいで、一昨年も250名くらいです。そして初心者研修を受けた人は、一応そのまま本番に入りますので、今年は現時点で、本番への申し込みが、薩が300名くらいになっていると思います。

で、ようやく最近、去年あたりから、地元の理解も得られるようになりまして、最初のうちは地元の人も「都市の人が来て足手まといになるばかりだ」という雰囲気非常に強かったのですが、2年経って、去年、一昨年と2年続けることによって、非常にボランティアの評価が良くなってきています。で、最初4町村の8牧野とか10牧野くらいしか受け入れがなかったのですが、今年は7町村の14牧野が受け入れ、まあ受け入れというか「来てほしい」というふうになってきております。

で、今年は初めて、今まで人手が足りなくて野焼きを中止していたところを、地元の人とボランティアが一緒にやることで「野焼きを復活させよう」という動きが出ています。薩の本高原という割と有名なところがありますが、その近くの牧野で今度、復活作業をするということになっていきます。

野焼きボランティアの人はずね、大体一度来られますと、非常に感動して、もうほとんどハマってしまいます。で、実は私井のところで「野焼き支援ボランティアの会」というのを作ってしまして、これは初心者研修講習をちゃんと受けていただかないとこの手帳を発行出来ないんですが、講習を受けた「資格がある人」だけに発行しております。

で、この会に参加されるボランティアは、去年発足して140名くらい、今年も初心者研修で受け付けていますので、恐らく今年も250名くらいになるんだと思いますが、そういう方は、もうほとんど毎年のように何度も野焼きに来ら

れます。で、その数も拾々揃えてきたものですから、この中から更にリーダーを、手養成してしまして、「リーダー養成講座」も開いております。

で、もうそういう方は野焼きのために、ご承知かもしれませんが野焼きというのは天気によって左右されますので、天気が悪いと予定日が、どんどんどん、1週間ずつ相延したりするんですね。で、そういうこともあって、大半のボランティアのリーダーの入道なんかは、2月から3月にかけての日曜日、ずっと野焼きのために空けとってもらっていて、「いつ野焼きがあっても駆けつけられる」というふうな様子になってきています。

まあそんな感じで、最近になってようやく、今までほとんど無関係、まあ出会いも関係もなかった都市の人々と地域の牧野組合の方達とが、ようやく初めて出会う、一緒に連携して「阿蘇の草原の保全に取り組みよう」という雰囲気が出てきたところです。

実はこれ、最後のこの写真は、去年の雁山牧野組合での野焼きを撮ったものですが、実はこれ、私の後ろ姿なんですけど、これは何か「ナショナルジオグラフィック」という、何か有名な写真雑誌の国内特別部門賞を受賞したんだそうです。撮った方は別のボランティアの方なんですけどね。一応、以上で私の報告を終わらせていただきます。

宇佐原

はい、山内さんありがとうございました。今の山内さんの、「市民参加の草原保全の取り組み」というご報告について、補足説明が必要な方、或いは疑問がありましたらお願いいたします。

ええ、第1報告と第2報告で、阿蘇を素材にいただきまして、まあ歴史的な変化、そして今どういう形で草原の保全に人が関わり、或いは動物、牛が関わっているのかという、まあ概要ですね、これを皆さんに聞いていただいたと思っております。

で、第3報告は、久住からお越しの佐藤隆幸さんです。佐藤さんは、地元でお米と畜産の接合経営をなさっております。実際に稲葉牧野組合のメンバーであります。で、発表の題目はですね、「畜産と野焼き」ということで、久住の例を使いながら、実際にどんな形で保全がなされているのか、そこにどういう形の「なわわい」が見られるのかというのを報告していただきたいと思っております。それでは佐藤さんよろしくお願いたします。

佐藤

ただ今ご紹介にあずかりました佐藤でございます。実は私は昭和48年地元の高校を卒業しまして、以来、農家の婿といたしまして、父の業を継ぎまして百姓として今日まで来た訳でございます。しかしながら時の変遷と共に、「一足のわらじ」ではどうしても生活も出来ないということで、地元の酒造りに昭和57年より出ておりまして、冬の間は酒

り酒屋の最の中に出稼ぎと、うま酒を唄いながら酒造りに勤めまして、今日も2泊3日ではございますが、親方の目を、まあゴマをすって、「ちょっと山口の方へ遊びに行ってくださいのでよろしく」ということで、酒蔵から抜け出してきた様な次第でございますので、どうか話の方は決してうまくございません。でも本音を話させていたいただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。控らせていただきたいと思っております。

私の話ですけれども、昭和48年、1町5反の田んぼで6-7頭の牛、成牛と、そして雑草を2-300キロ作るというようなことを「なわわい」として始めまして、以来、今日までずっと来ている次第でございます。

そうした中で、春になれば、3月上旬には野焼き、そして4月の15日頃から牛の放牧が始まる訳でございます。そして秋になりますと輪刈りかたをしまして、そういったものは先程の大流先生、山内先生のスライドの中でご覧になったと思いますが、全くあの様な状態のものである訳なんです。輪刈りの日に、野草地の草を分ける「野分け」というものがございまして、ここからここまではAさん、またBさんはこの辺りの草を刈ってくれというようなことで、野分けをしまして、糞を実際に入れるのが9月の下旬くらいから、私も小さい頃を思い出しながら、大流先生のスライドを見させていただいた訳でございます。牛の背に乗り、或いは牛車に曳かれながら、朝の5時頃家を出まして、父から「あれが夜明けの明星だ」ちゅうようなことをですね、今で言えば金童でしょうか、そういったことを言われながら、牛の背、或いは牛車に揺られながら、てくてくと歩いて数時間がけて、久住高原の方に行って、高原で遊んだことを覚えていらっしゃる訳でございます。

そういった形で保全をされてきた牧場の形態が変わりかけたのが昭和54年だったと思っております。ちょうどその頃に「久住飯田広域牧場開発」なるものがございまして、大型外国製トラクターの導入と、それまでは大鎌で草を刈っておったものが、だんだんと背負い式の草刈り機と刈り払い機、さらには大型の外国製のトラクターというものによってまいりまして、それが現在まで、およそ22年目でしょうか、至っている訳でございます。ちょうど昭和54年当時、原の畜産試験場に「牧場オペレーター養成」というようなことで私も研修生として行ったのが記憶に新しいところでございます。そしてそういった中でずっとやって来た訳です。

その当時の牛の頭数がどうかと申しますと、私の手元の資料には昭和50年頃の牛の頭数の資料がある訳でございます。当時、久住前の農家の戸数が620戸あって、頭数が1,700頭ほどいるんですね。1戸当たりの平均頭数2.7頭とそれが6年後になりますと590戸になりまして、頭数は若干減っていると、さらに8年後つとですね、戸数は6年後に100戸ずつ、ずっと減って来ている訳でございます。平成元年が380戸、さらには現在220戸までに減っております。

しかしながら減ると反比例しまして、飼養頭数の方は2,800頭くらいに増えてきておりまして、1戸当たりの平均飼養頭数が約11頭になっておる次第でございます。

これは、農家の一戸当たりの頭数が増えたということは、農家もそれなりに努力をして、何とか不況の波を乗り越えるべく努力をしている姿の結果だと思えば良い訳なんですけども、しかしながら牧場全体として捉えました時に、例えば何故、野焼きボランティアを入れたか」とかという経緯にしても、そこにはやはり農家の減少という深刻な問題がある訳です。現在私共の稲葉牧場では、元来90戸あった農家が先日88戸になりました。「入会権」の放棄ですね。それは子供、或いは孫が東京、大阪の方に出ていると、彼は誰も守らないというようなことで、輪地切り、輪地焼き、或いは野焼きに出られないと、これが現状でございます。

そういった中で久住町の方では、第1回の「野焼きシンポジウム 草原サミット」なるものを、武紫哲也さんと呼んでやったのが平成7年だったと思うのですが、その時に、「久住町を特徴付けるものは何といっても高原である」、高原を置いて他にはない。しかしながらそういった現実から、久住町23牧場ありますが、実態火入れをしているところは13牧場しかない訳でございます。ですから、何とか野焼きの文化というものが、他にもあらゆるものがあるんですけども、そうしたものが絶えないようにするために、人手を都合に求めようということで「野焼きボランティア」等を入れてまして、外からの啓蒙運動のひとつとして、そういったシンポジウムのようなものを開くと、ボランティアによるご協力を頼むとかいうようなことを行なっている訳でございます。

「野焼きボランティア」は毎年申込者が増えて、近年では100名くらい集まるようになりました。しかしながら、如何せん3月の下旬というのは、阿蘇のあの周辺は天候が非常に不安定な時期でございます。どうしても決められた開催当日に野焼きが出来ない訳でございます。そこで順延ということで、2日、3日と延期するとなりますと、ボランティアの方も動機がございまして、そう月日も休みが取れないということもありまして、崩られてしまう訳です。例えば今年の場合は3月の11日が野焼きとなっている訳でございますが、その後には予備日が12日、また15日と続く訳でございます。例年ならば大抵50人から60人くらいはボランティアの方の応募がございまして、しかしながらどうしてもまともな一回あたりとも開催出来たことが無いということで、結局20名程度で終わる訳でございます。今年もまた60名くらいは、遠くは鹿児島の方からやって来る訳でございます。

そうして地元の方の「受け入れ体制」としましては、最初は「物好きでやって来るんだ」と、「邪魔だ」、「面倒くさい」というような意見もございました。しかし、毎年のようにやって来て下さるボランティアの方もいらっしゃる。作業にあたっては、消防署の方から消火の道具を借りる。「ジェットシューター」という水の入った袋を使って火を消す訳でござい

ますが、それを使って消すと、自分で消火道具を調達するとか、回を重ねる毎にボランティアの方の士気は高まっている訳でございます。中には単なる物見遊山の方、写真撮影の方、いろいろなタイプの方がおりまして、今後地元がそれに対してどういう対応を取れば良いのか、また事故等あった時にはどういふふうに対応すれば良いのか、というようなことが一つの大きな問題になっているところでございます。

個人のことを申し上げてなんですけど、そういったボランティアの方が見えられても、仕事だけして、ちょっと「なぞらいついて、それで「はい、さようなら」じゃあ面白くないので、「お茶でも飲みませんか」というところから話し始めるところ、そういったボランティアの方々、いろいろな職種から、大学の教授からお医者さんからいろいろな方がおられますが、そういうボランティアの中のお一人が、「私達も缶を持っている、あなたの酒造りの話と、山を飛んで回った話が面白そうだから、一度来てそういう話をしてくれないか」と言うことで、大分にある、文化的多目的ホールがあるんですけど、そこに月1回寄りまして、私もお酒を造っているし、造ったお酒をどんな形で世の中の人々が飲んでいるのたるかということも「考察に行く」と、素手な言い方ではございますけれども、酒の飲み方も少しは勉強しなければ、造るばかりが駄目じゃないと言うようなことで、月1回行ってみなさんとお付き合いいただくようになりまして、その内に非常に「人間の和」というか、そういったものがどんどん広がって行かまして、そちらの会の方も今30名くらい、学生からずっと年のいった方までおられる訳でございます。

まあそういうことですが、私が父の跡を受け、18歳くらいで農業を始めたときには、それは実に辛くて口じゃ悪い表現しないものでした。「何でこの田舎の山の中に俺が残って百姓せんにならんのか」と、先程大瀧先生、山内先生あたりが話された近所の牧場には国道、観光道路が走っている訳でございますが、地下定袋を巻いて牛を引っ張って歩いて行く、そのそばに同じような年代の若者が赤いスポーツカーにきれいな女の子を乗せて遠くを走り過ぎると、そこで牛がうんこをポトリと落とせば乗っている女の子の「あらいやだ」という声が聞こえて来る訳でございます。私も自分が悪いことでもしたように顔を赤らめて下を向いて牛を引いたような経験もある訳でございます。

しかしながら、それも今考えてみればホントまあ「いい時代」で、今は牛を引いて歩くところが、近年の社会情勢の変化によって、組合を取り替える環境が大きく変わって、新たな問題も出てきておる訳でございます。

久住町の場合は「観光も併せて推進する」と言うようなことで、現在ウチの牧場の中に、20町歩ほど農地を売りましてビール工場、それからコテージ、オートキャンプ場なるものが出て、大変な車の通りでございます。そのような中で、去年の10月だったですか、牛が夜間に牧場より外に出まして、国道を渡ったと、そこにちょうど2日連休の最終

第3分科会

日だったと言うことで大変な交通量があって、牛と車との正面衝突があって、牛1頭が死亡して数頭が怪我をしたのですけれども、自動車7台の損傷が甚だしく、その対応について最近まで追われたと言うのが現実でございます。

農業を続ける中にも、全ての人間が副業ではございません。88戸ある組合員の中でも、牛を飼っている農家は若干23戸でございます。先日までは半数以上が牛を飼っている有畜農家だった訳です。そうなりますと同じ牧場の入会権を持つ組合員でも、有畜農家とそうでない者の間で意識のズレが出てくる訳でございます。牧野組合が一年に一度総会をする訳でございますが、総会の席上で、「何で牛を飼っている者のために野焼きをしなければならないのか」、「我々は野焼きをする必要もないと思うし、出るのも面倒くさい」といったような話も出て参りまして、遠いでは「町有の土地」なんですけれども、「牛を飼っている者は、飼っていない者に対して使用料を払え」などというような話も考えられるような話まで出てくる始末でございます。今後、実際ほんとに、この先どうなるだろうかと危惧しております。農家の戸数は減ってしまうし、どういった様な形でボランティアと協力して野焼きを続けていかなければいけないのか、そうしなければいけないんですけれども、これが一番のうちの牧場の課題点でございます。

こうして本日参りましたのも、皆様方のお知恵をこの場で伺いたいというのが本音でございます。私としましては、ボランティアを取り入れて、彼らとお付き合いしながら、自然の中での農業を続けていきたい、これは今まで自分が想っていた様な、腰を赤らめて牛を引いていた様なあの「悔けなさ」、しかし逆にボランティアの方から困りました。自然と共に融合して行く農業の姿は、先祖が今日までやって来た、野焼きをして牛を飼ってやってきたこの姿は、「決して間違いないんだ」と、「もっと自分自身に自信と誇りを持って良いんじゃないか」ということを私はボランティアの方から逆に教わりました。これはボランティアを入れて、みなさんはどういうふうにお考えになるかわかりませんが、私自身は得た、体験した実感でございます。

以上簡単ではございますけれども、とりとめのないような話なんですけれども、今日は本当に皆様方のお知恵を、ご意見等を伺いまして、お知恵を拝借したいというのが本音でございます。以上でございますが、何かご質問がございましたら、

宇佐見

佐藤さん、ありがとうございます。何かご質問がございませうか。

自らの体験、自らの地域の抱えている問題、というのを報告していただいた訳です。ボランティアと換えることによって、ご自身がどういうふうに変ったのか、考え方や々のその一部をご披露していただいたのですけれども、ご質問はございませんでしょうか。

では、ないということで、次の報告に行きたくないと思いません。どうも佐藤さんありがとうございます。

続きまして第4報告、今ご報告いただきました佐藤さんと同様に「実践家」でございます。報告者のお名前は川村孝信さんで、鳥取県の大田市から来ていただきました。川村さんも繁殖肥育一環経営をなさっている方でございます。

発表の題目は、「国立公園三瓶山における和牛放牧と草原の保全」という題目で報告をいただきます。よろしくお願いたします。

川村

私は「第2回草原シンポジウム」が隔がれました大田市の三瓶山からお邪魔に来ております川村と言います。この分科会にお招きいただきましてありがとうございます。

私は三瓶山の牧野を利用して和牛の放牧と、そこから生まれて来る子牛の肥育をやっております。繁殖肥育の一環経営なるものを今やっている訳ですが、繁殖牛がおおよそ100頭、それから肥育が80頭、子牛と合わせまして220頭前後の飼育頭数でございます。私は昭和22年生まれでございます。54歳になりますが子供の頃から見ても来た時間がおおよそ40年間ばかりあるかと思う訳ですけれども、この40年間の間の三瓶山の変化について、一部ではございますが皆様方にスライドを使ってご報告をしようと思っております。それではスライドをお願いします。

これは、鳥取県のある機関が、三瓶山に采られた来訪者218名の方に対して実施したアンケート調査の集計結果として発表されたものですけれども、実は「一度三瓶山に訪れた方は再び草原を訪れる」という結果が出ております。こちらの秋吉台には24.8%の方がお越しになっているということでして、「草原を訪れた方は、草原に引かれて、また次の草原を訪れる」ということから、私共が大田市の三瓶山とこの秋吉台とがリンクして、お互いのパンフレット等で草原を紹介し合う、というふうなことが出来たら良いんじゃないかなというふうな思っているところでは、それでは次、お願いします。

「三瓶山における放牧の歴史的な変遷」ということで絵に描いてありますが、実は三瓶山の放牧の始まりは、記録によりますと1730年代に朝鮮で牛疫が発生しまして、牛が次々と死んだそうですが、朝鮮ではこれを海に投げ捨てるというような習慣があったようで、これが佐賀県から本州の山口県の長門の方、それから鳥取県の海岸に流れ着いて、その影響から相当数の牛が全滅に近い絶好になり、大田市に於いても相当数の牛が死んだというふう聞いております。このときに、前沢周平さんはご存知かと思いますが、数年前に亡くなりましたが、あの方も会津若松(福島)の

出身ですが、会津吾松に当時おりました加藤という殿様が
 由来との話の中から、矢張りありました大田市の川合町
 に御封になりまして、40万石から1万石になった訳ですけど、
 この方が上方から樺牛を入れて三瓶に放牧をしたのが「放
 牧の初め」と言われております。それ以前のことについ
 てはどうだったかと言うことについては分からない訳です
 けれども、おそらくそれ以前から放牧がされていたのでは
 ないかと考えております。

昭和の初め、大正の終わりに頃は、この三瓶山の周辺
 の外側に集落がある訳でございます。一筆台帳でも4,000
 ヘクタール以上の採草放牧地があって、だいたい3,000頭
 以上の牛が放牧されておったというふうに、三瓶牧野委員
 会の記録の中に残っています。

またこれは昭和25年頃の話ですが、だいたい三瓶山周
 辺の採草放牧地が1,300ヘクタール、ここに春と秋の2回に
 分けて合計、或いは「延」と言いますが1,300頭の牛が放牧
 されておったようですが、この放牧を伴う草原の景観が美
 観らしいということで、三瓶山の景観が国立公園に編入さ
 れる大きな理由になったようです。1963年に、昭和38年
 ですが、三瓶山が「大山隠岐国立公園」に編入されました。編
 入の理由は「火山内地形及び視野に展開する牧野景観を
 維持するに定むる区域」ということで編入になったようです。

ところが1960年代以降、「風景の近代化」と言いますが、
 樺牛から新幹線とかテラーとかいうふうな形の「機械化」
 が進んで来まして、牛の放牧が、農家の飼育頭数も減りま
 すし、放牧が少なくなって参りました。当然のように三瓶山
 の周辺が、二次草原(放牧、採草、野焼きなど人為的行爲に
 よって維持されてきた草原)だった訳ですけど、これが林に
 なって行って、草原性の植物が減少していった訳です。次
 お願いたします。

これが、1950年代の三瓶山の「西の原」の風景ですが、阿
 蘇と同じように、やはり水たまりがありまして、ここで牛が
 水を飲んだり、涼を得ると、いうふうなかなたです。

現在の三瓶山には鹿松がござりますが、当時はまだ、も
 う既に植林はしてあったと想いますが、まだ大きくなって
 ないので松の姿を見ることは出来ませんが、この草原の美し
 さが評価されて、先程の国立公園に編入されたというふう
 に残っています。次お願いします。

これは1995年頃の写真ですが、まだ西の原に放牧が再
 開されておりません。野流さによって草原が維持されて
 いる訳ですが、この野流さだけだと、ススキのような長草
 型の草の勢いが増すばかりで、日の当たるところを好むよ
 うな、放牧によって維持されるような草原性の植物が、ス
 スキの下に隠れてしまっている訳です。生きるか死ぬかとい
 う状態の中で生息しているというふうなかなたです。

昭和30年前後に植林された鹿松が既にこのように大き
 くなって三瓶山の蘆山のは頼が大きく変化しております。

こういうふうな姿になろうとは誰も、国立公園に編入され
 た当時には思っていなかったろうと察します。次お願いします。

これは平成元年頃の蘆山の原、「三瓶温泉スキー場」の様
 子ですが、実は昭和50年代の半ば頃から、放牧する側面と
 しては、私共が唯一、1軒だけになってしまった訳です。50
 ヘクタールある草原の中に牛が7頭ないし10頭という状況
 ですから、ススキ型の草が生い茂っていたという状況です。
 次お願いします。

これは平成10年前後の「三瓶温泉スキー場」の写真です
 が、先程のススキに覆われたスキー場が、牛の頭数が増え
 るに従いまして、芝型の草地へと変わっていったという風
 景です。放牧頭数は、だいたい1ヘクタールあたり10頭程
 の割合ですから、50ヘクタールある草地に、多いときには
 40頭前後の牛が放牧されております。

(草原の)下の方にあった芝を牛が食べて、(山の)上にあ
 がって雑草をする。真には芝の種が溜まっており藪とともに
 落ちる。それが発芽しやすい状態になっておりますので、
 広がっていったということです。ススキの再生は非常に悪
 い訳ですが、芝の再生は、牛が食べれば食べるほど成長点
 が下にさがる、或いは踏まれれば踏まれるほど根が広がる、
 成長の遅いススキは退化して行って芝型の草原になった
 という訳です。

実はこのスキー場では、毎年秋に100人から150人くら
 いの刈り払いの方を雇って、一斉に草刈りをやってスキー
 シーズンに備えておった訳ですが、今では有刺棘(有刺植物、
 トゲのある植物)の除去のため刈り払い機で少しさらえ
 るという程度で、すぐにスキー場として利用できる。芝型
 の草地ですから(牛の)つめまで見えるというふうな短い草
 です。ですから今のような積冬の時期でも30センチ程度
 の積雪でスキーが出来るようになりました。かつては7~
 80センチの積雪がある場所でしたが、南向きの斜面という
 ことと、もう一つは積雪とすることで、1月も半ばにならな
 いと積雪がないというようなスキー場です。次お願いします。

これは、24年ぶりに西の原で、平成8年から放牧が再開さ
 れた訳ですが、その目的として農家サイドとしては、「里山
 に恵まれた草地資源を活用した肉用牛生産振興による地
 域農業の活性化」ということと、二番目は「国立公園に指定
 された当時の美しい三瓶山の姿をもう一度蘇らせる」とい
 うことで、景観の保全、景観を元に戻すというふうな目的の
 もとに、国の補助金をいただきながら農視果と、補助金は
 大田市が出しまして、平成7年度事業でしたけれど、放牧地
 設置事業によって西の原の放牧が再開されました。次お
 願いたします。

これが平成8年から放牧が再開された西の原の様子ですが、ここは毎年春に野焼きするもので、元々ススキが生い茂っておった訳ですが、それが3年ないし4年経つ間に、元々あった芝が、ススキの影に隠れて姿を見せなかった訳ですが、ススキがなくなるに連れて放牧場一帯を覆うようになりまして、かつての三瓶山の草原の状況に今復元されつつある訳です。

今、大田市ではここにプロスカンホーリーコースをつくっております、このそばをクロカンの競技者たち、或いは趣味で走る方々、或いは散歩される方が歩いておられます。次お願いします。

これは先程から見ていただきましたように、全国的に二次的な草原の重要性が見直されるようになりまして、文在の後、平成9年に第2回の「全国草原シンポジウム・サミット」が大田市で開催された時の写真です。次お願いします。

これは今村宗良先生^{（おきなぐさの会）}の著書の中にもありますように、牛は「創制動物である」と言われておられる訳ですが、今まで放牧が廃れて24年間、草原だけだったところですが、ここに牛が放牧されることによって、勿論牛はそれ自身が経済的な効果も発揮する訳ですが、ここに牛が放牧されることによって、「動く動物」、「創制動物」としての新しい価値が生まれてきたと居っておりますし、草原そのものも、動物がいることによって活気づいている訳です。この牛を見て、子供も大人も、こういうふうに牛がいるところに寄ってきて牛を見ておられるというふうなところですよ。次お願いします。

これは大田市の「市の花」に指定されているレンゲツツジですが、これが野焼きによって毎年1年生になる訳ですね、株だけがようやく生き残っているところに、成長の早いススキがどんどん大きくなってしまって、このレンゲツツジは花を咲かせるチャンスが今までなかった訳です。ですが牛を放牧することによってススキがなくなると、ここは今火入れをしていないところですが、毎年新しい花芽がついて花を咲かせる。牛はこのレンゲツツジは食べないものですよから、この株が緑々広がっております。大田市の「市の花」にふさわしい姿を今たくさん見せ始めております。次お願いします。

これは同じく日の当たる場所を好むオキナグサです。私達の小さい頃は、このオキナグサはたくさんありまして、この毛でお手玉を作って遊んだという方もいらっしゃると思います。私達は三瓶に遊びに行っても、「オキナグサを取ると雨が降る」ということを言われておりましたので、この花は見るだけで手折らないようにしておりましたし、この花は赤黒い紫色の大きな花を付けるところから、子供心に何となく貴族の麗い花のように思っていました。放牧では「顔の

花」、「キツネバケ」というふうな呼び方をしております。「オキナグサ」ということを最近私知ったという状況です。

こういうふうな放牧を再開することによって、ウメバチウウ、センブリも出てきておりますし、いろいろな日の当たる場所を好む草原性の草花が復活しております。次お願いします。

これは「オキナグサのサイズ構造」を内藤(内藤和明)さんと鳥橋(高橋佳孝)さんが調べられたものですがけれども、(スライドを指し示して)こちらは「茎の太さ」です。5ミリ、10ミリ、で、こちらの方は株数ですけど「個体数」、こちらは「放牧している場所」、こちらは「火入れだけの場所」で、後ススキに覆われて日が当たらなくなるところです。

よく見てみますと放牧をしているところは個体数も20を越えてたくさんありますし、黄色く色付けしているところは「花が咲いた」という「繁殖個体」ですけど、この繁殖する個体がたくさんあると、茎の太さも倍ぐらいの太さになっているということ、火入れだけではこういう草原性の植物は守って行けない、だけど「死なずに生きている」というふうな状況が今の三瓶の草原では伺える訳です。次お願いします。

草原を維持するために、現在、西の原だけですけど、大田市が中心となって火入れをしています。この写真では牧場と火入れをするところの間が防火帯になっている訳ですが、よく見てみますと、刈り払い機で刈り払いをしています。

この防火帯を作るための経費が掛かるということから、大田市は実は平成10年度の火入れを止めたいというふうなことを言った訳です。「緑と水の連続会議」は、これは地域のボランティア団体な訳ですが、平成9年に「全国シンポジウム・サミット」を聞いた翌年に火入れを止めるとするのは非常に遺憾だということから、牛による防火帯作りをした訳ですが、これ以前からこういうふう到大田市に於いても、二次草原を市民においても守っていきなさいと、そういう草原の維持作業に市民も積極的に関わっていきなさいということから、ボランティアが火入れに参加することを大田市にお願いして、草原の維持活動をやっているというふうな経緯です。次お願いします。

これは今、こちら側が放牧地で、こちら側が防火帯で、ここに今ススキが生い茂っているのが見えますけれども、この間が防火帯で、防火帯には今一度に9頭から12~3頭の牛を一週間から10日間、ずっと食い尽くす程度まで放牧して、草がなくなりますと牧区の方へ移動します。水飲み場はこの牧場のそばにドラム缶の半切りが置いてある訳です。

草原の維持というものは実は火入れだけでは、先程から言っておりますように草原性の植物がなくなっていく、或いは私達の目に映れない。また、放牧だけでは有刺籬や灌木

が茂って来まして、草原を維持することが出来ない訳です。で、実は「聖山放牧研究会」という10人前後の和牛農家、或いは乳牛を飼いながら放牧している、或いは和牛を飼っているという農家の人と一緒に、ひと月に一回、学習を兼ねて各農家を訪れて、団体で共同作業をするというようなことをやっておりますし、また「緑と水の連絡会議」の応援も得て都市市民の方ですが、メンバーの方々の力を添えを得ながら刈り払い作業をしているところです。次お願いします。

これは防火帯の様子ですが、ここに「電気牧柵」があります。これは1本のナイロンのワイヤー、ポリエチレンのワイヤーに4本の細いステンレス線が編み込んでありまして、12リットル前後のバッテリーで電圧を上げて、触れると電気ショックがあると、そういうことで牛が外に逃げないようにしている訳です。こちら側が春になったら火入れをするところですが、ここに牧柵が見えると思いますけれども牧柵と電気(調気牧柵)の間を防火帯として使っております。

で、よく見てもらうと分かるように、牛のヒツメぐらいまでしか草で隠れていない訳ですから、防火帯としての役割を十分に半の放牧で作り上げることが出来る。で、大田市は程度を必要としない。この防火帯を「緑と水の連絡会議」では「モーモー帯地」という表現をしておまして、今、「牛で防火帯を作る方法」を発信していると思います。次お願いします。

これ最後ですけど、第2回の「シンポジウム(サミット)」が終わった後、草原を守るために農家だけでは、或いは大田市だけではうまくいかない訳ですから、市民のみならず方の協力を得るということで、これは私達の「緑と水の連絡会議」の仲間のワイルズ・カズミさんという画師の方に描いていただきました「三岳の再来の絵」です。人と牛と山と草花が融合して、いろいろな方に心の癒しを与えるというふうにしたいなというような夢を描いた絵ですが、このテレホンカードを販売して活動費に充てたというふうな経緯もあります。

私共は申し上げましたように、農家の「なりわい」だけでは草原は維持出来ませんし、今から先はどうしても都市市民の皆様のお力添えも得ないと、国立公園に編入された当時の三岳山の景観を維持することが出来ないと思っております。そういうことを目標に掲げながら、今後とも皆様方の協力を得て三岳を守っていく活動を続けていきたいと思っておりますので、今後とも一つよろしくお願いいたします。

宇佐見

それでは今の川村さんのご報告にご質問がありましたらお願いしますのでなければ、ございませぬでしょうか。

それではどうも川村さんありがとうございました。

休憩を5分ほど取りましょうか。その方がリフレッシュが出来て、活発な議論が出来ると思えますから。それでは5分ほど休憩を取りますので、5分たったらもう一度お席にお戻りいただいて、残りの時間、いろんなディスカッションをしたいと思えます。よろしくお願ひします。報告者の方、こちらの方に準備、お願ひできますでしょうか。

(休憩)

宇佐見

それでは引き続きディスカッションに移らせていただきます。

先程4名の方からご報告いただいたように、阿蘇、久住、それから三岳と、それぞれ地縁性がある、独自の文化がある地域ですけれども、そこにおいて農家がどういふふうな問題を抱えているのか、そしてその草原を保全していくためには、この分科会のテーマである「どんな「なりわい」を作っていくのか」ということでですね。

昔は、草原も牛を「神立ち」と言うんでしょうか、棚に立てて、人と上手く結び付いていたと。それが世の中の農業、或いは産業の構造の変化で、今よく言われる「循環のサイクル」が途切れてしまった。そうした中で「草原との結び付き」をどうやって繋げていけば良いのか、昔は地域で何とか「出来た事」が出来なくなってきた。それを「何とかしよう」と言うことで、「外からの応援団」と言うんでしょうか、ボランティアという方を取り込んで保全していけるようなシステムが出来つつあると、ただどもなかなか問題は多い、と言うことだろうと思えます。

で、4名の方からご報告いただいた各地域の単原、どれも共通するのは「公園である」ということですね。そういう一種の「制度」も考えなければいけない。「出来ること」と「出来ないこと」がある。「やりたいけれどもやれないことがある」ということなんです。

最初のお二人、最初のご報告が、地元と消費者、或いはボランティアの方を上手くマッチングさせる。まあ他に言う「NPO」だとか「NGO」で活動されている方ですね。で、残りのお二人っていうのは、草原を上手く使って、何とか「なりわい」を確立させようと努力なさっている方、まあこういう2つに分かれるんじゃないかと思えます。

で、私、この分科会のテーマ「なりわいと保全」というのをいただきまして、私自身も目録よく「なりわい」という言葉を使いますが、「生業」、「生きるための業」ですね、まあ「業」は「ゴウ」とも言いますね、で、調べてみました。そしてやはり「生活するための職業」みたいな意味なんですね。で、昔は全部「生活」、すなわち生きていかなければいけない、それには所有がある、自給自足が出来ればどうにか所得を得ることが出来る。で、何とか自分で自己完結が出来たんですけれども、それが出来なくなってきた。

私自身はこの「生業」というものを「生産者の生業」とそ

うでない方、都市側、非農家の方の「生業」というものを、何とか上手く融合させていけないんじゃないか、どうも「生業」というのは農業者だとか漁業者だとか林業者の方だけの言葉になりがちですが、そうじゃなくて、生活者全体が「生業」という言葉を、自分達のものとして新しく作り上げていかなければいけないんじゃないかと思う訳です。そのためにも、双方、やはりいろいろ価値観も違いますから、学ばなきゃいけないし、お互い「歩み寄り」という言葉がいまいちどうか分かりませんが、何か新しいものを作っていくべきじゃない。そうしないと、どうも今回のテーマである「保全」、特に「豊かな草原」というものを維持して行けなくなるとんじゃないかと思う訳です。

まあそんなような方向で、みなさんとの議論を進めていこうと思っている訳です。で、先ず最初ですね、4報告について議論を深めていきたいということ、そして報告者とここにおられる参加者がですね、どんな「なりわり」というものを提案していくか、ということがこのテーマである「草原」というもの、「地域資源」と言えば非常にいいんですけど、そこには文化があり、そこで生活している方がいる訳ですけども、どうやって「なりわり」としていけるのかというものを「提案する」という形で、みなさんのいろんなお知恵を盛り込んでいただく。そうすると佐藤さんのように、折角2日3日で来たんだから、地元の方に「こういうふうな考えがあるから、自分達でやってみないか」とかですね、またボランティアの仲立ちをされている方にも「こうすれば新しい関わりを持つ人を呼び戻していけるんじゃないか」ということが、或いは報告者の方のご体験をみなさん自身がお受け止めになれば、「新しいエネルギー」と言うんでしょうかね、「源」と言うんでしょうか「運動」と言うものを呼び起こしていけるんじゃないかと思えます。で、基いてはこのシンポジウムの地である「秋吉台」についてですね、今抱えている問題を解くことが出来るんじゃないか、というふうに思っている訳です。

まあどうか、実現可能かどうかは分かりませんが、やはり最初はどうなアイデアも出来るか出来ないかは分からない、「無責任なことを言うな」と言われていたようなものでも、いろんなプロセスを経ていくことで「実のもの」になっていくんだろうと思えますし、地元で定着していくんじゃないかと思えます。

先ずは4報告について、何かお考えとか、苦労話とか、そういう「きっかけ」とかというものについて何かご質問はございませんでしょうか。どんな些細な質問でも構いません。ございませんか。

じゃあ、4名の方ですね、時間が足らなかったから「言い切れなかった」というようなものがございましたら、追加報告なり、追加説明をしていただければと思います。どうぞ。

大庭

今一番阿蘇で困っていることはですね、採草地の「利

用圧」の減少です。先程川村さんからもお話しがありましたようにですね、昔は九州横断道路または外輪山の方を車で走りますと、もう何万個というくらいの「干草小積み」ですね、1000、1000が積みという干草小積みが連続してあったのが、今走りますと、まあ良くて数十個、ぼつんぼつんという程度ですね。

それはどうしてそんなに採草量が減ったかと言いますと「水田転作」で他人経営の所有地に農耕地が余ると、そこでより栄養生産性の高い、より分蘗生産性の高い「ホールグロップサイレージ」のトウモロコシを作るんですね。といったことで、草原に行って苦勞をして栄養価の低い乾草を取るよりも、自分の経営内部で、転作でより栄養価の高い飼料作物を作った方が良く、そういう判断で、それから高齢化現象ですね、それから機械化対応が草原では出来ないと、傾斜地が少なくて草原では機械が使えないとか、そういうことがあって水田転作での飼料作物作りというのがぐんと伸びてきてですね、採草地の利用が減って来たということですね。

ということで採草利用の「圧」が弱くなってくるとススキの単純な草原になる。野焼き面積はどんどん拡大する。そして採草しないところが増えてくると火入れをしたときの火の勢いというのはまだまだ強くなる。そういった悪循環の中に今ある訳です。

そこで「どう採草地の活性化を計るか」という議論が与える訳ですが、「天極」は昭和30年代から40年代前半頃の阿蘇の農業、その頃の阿蘇の農業は「有機農業」であった。先程映像でご紹介したように、草原と家畜と農耕地には有機的な結合関係によって「連鎖関係」があった。牛1頭で30アールの耕地をまがなうことが出来た。牛1頭には「ヘクタールの採草地があると、そういった「有機的な関係」を復活させていこうと。そして「有機農業」を、より「草の付加価値が高くなる作物」に転換していこうと。それは「プリンスメロン」であり、その地域のトマトであったりイチゴであったりすると、そういった付加価値の高い作物に、草原の草、ススキを価値転換することによって、その産地が産額として支えられ、そして品質として支えられると。そういった連鎖が年ごとりつつあるところがございます。

それから一方放牧地の衰退というのは、昔は2万頭も牛があったのが今は1万頭と、これは草原に対する「放牧圧」の減少ということで、チカラシカが増えて放牧地の荒廃が起きております。ということでこれら対策としては、かなりの理論体系が出来てきて、放牧期間の延長、または周年放牧することによって、省か、低コストの牛が生産出来るということで、放牧期間を延長することによって放牧圧を上げていくと、そういった動きがあります。

それから平坦部(地域外)から「入会権の枠」を飛び越えて、畜産団体が間に入ってくる「預託放牧」ですね、具体的に、1日200円を払う訳ですけども、平坦部の、全然入会権のない、阿蘇郡以外の町村から、トラックに牛が積まれて阿

豚の放牧地にやってきます。大体それが今200頭ぐらいですけども。

まあそういったことで、県の行政でも「放牧圧を何とか抑けていこう」と、「採草圧」は、今言いましたように「有機農業の必要」ということで掛けていこうと。そういったことが今展開されているところでございます。

宇佐見

今、「新しい動き」、或いは「新しい取組み」というのをご披露していただいた訳ですが、その場合ですね、今「有機農業」というのは非常に多くの方が関心を持っておられる訳ですね。昔は採草をして、それが牛舎に行くと、「糞肥」ですか、有機堆肥になって、その農家の方が自分の農業経営の中で循環させていた、というものを先程のスライドで見せていただいた訳ですけども、今ご提案なされた「有機農業とつながる」と言ったときには、片方では牛舎で減っちゃう訳ですね。そうしますと「誰が有機肥料を作るのか」というところが、ちょっと私自身、「どうしたらいいのかなあ」、「どんなお考えがあるのかなあ」というところが、ちょっと分からなかったんですけど、何かご説明をいただけませんか。

大澤

おっしゃる通り、ご指摘の通りですね。今までは自分の経営内部の「自己完結型の農業」ではそれが出来たんですけども、入会者という中で出来たんです。ということでこれからは、「有機農業を実現するためには、農協が経営している堆肥センター一つのがありますね、そういったところに供給していこう」として「広域的な流通」ということで、阿蘇では今「付加価値の高い農産物」と言いますと高冷地のトマトなんですね、それとイチゴですが、より平畑部にある「日本全国No.1」と言われている「箱木のスイカ」（熊本県植木町）ですね、そういったところに流そうと、そういった試みが今とれているところです。

で、その「きざし」もありますけど、何しろまたその「流れ」が細くてですね、まあこの「流れ」がどわだけ大きくなり、阿蘇の草原のスキが付加価値の高い巨肥に依り、堆肥になるかってことは、まだちょっと時間が掛かりそうです。

宇佐見

佐藤さんは実際に畜産で複合経営をされている訳ですけども、今のようご提案についてですね、いかがお考えでしょうか。佐藤さんご自身の経営で、或いは地域の中でですね、「有機農業」を上手く取り込んでいけば、経営としても、或いは地域としても、付加価値を高めることができる、で地域も活性化していく、というような形になるんではなからうかと、まあシロワトは外から見ると感じるんですけども、ご自身のご経験なり、現状なりからどんなふうにお考えでしょうか。

佐藤

確かに牛も20頭を超えますと、経営していく上で堆肥の処理をどうしようにするのかという問題があります。堆肥の野積み等は「畜糞堆肥処理法」によりまして、一昨年くらいからですか、規制されるようになってきました。しかしながら、田んぼ、或いは畑等にマニュアルスプレッド（堆肥を撒く機械）等を使って撒く、或いは多面飼育をされている方、一番多い方で50頭ですが、そういった方は、農業センターはまだ出来ておりませんが、近所にBMW方式あたりで農業用の処理をやっておられる方がいらっしゃるようです。そういったところを持って行く、或いは近所の農家においでウラと交換するといったような、そういった形で処理をしておるみたいです。

それと今、大滝先生が言われた「放牧圧」、阿蘇の放牧の資源というお話しに関連しまして、私共の先程の「牛の脱牧事故」についてなんですが、これもある意味では「過密放牧」になっているという現状から起こったのではなからうかというふうにも思っておるところでございます。放牧の利用率が高過ぎて牛の方が多い、草が無い、草が無いもんだから、ある意味では牛の方が新しい草を求めて脱牧して、それが事故にあった、というのが現実な訳なんです。まあ大方県では昔から「兼牛」、熊本県では「遊牛」と、それぞれの地域を代表した文化がある訳なんですけれども、私も昔は赤牛を飼っておりましたし、赤牛の世話をするとしておったこともございます。ですからそういったことも「県の特産」を飛び越えて話が出来れば、お互いに話ができればいいなあと、まあ先生のお話しを伺いながら、今考えさせていただいていたところでございます。

宇佐見

そうですね、片方は「遊牧」で片方は「過密」だということであれば、まあ「どれたがコストがかかるのか」というのは本当の「なりわい」、生活に関わることでありますから、やはりもう一度調整しなければいけないと思うんですけども、そういったことも今後は考えていかなければならないことも加わりますね。

えっと、何か今、どうぞ、すみません、お名前を言ってお見言をお願いできませんでしょうか。一番後ろの方です。

廣津

広場から来ました廣津と申しますけども、2つほど質問して、それからもうひとつ、私の専門から「言葉使いがおかしいな」というのがありましたので。

ひとつは「牛と住民のトラブル」の問題ですね。私は広島県の国立公園の吾妻山の草原の問題と言うか、まあ「農業を生かした景観形成」と言うんですが、景観作りを田園地域、林業地域をすべて認めているんですが、その内での草原、今棚田もやってるし、その他生業からしても「住民生活」に付いてもちょっと聞きたいんですが、その「トラブル」

の問題です。結局、私の固定公開のところで、最後まで一人、60頭を飼育されていた人、放牧されている人が、婦人の方が怪我されて、それが大問題になって、県と当局として、いろいろ長年掛かって、それで国民宿舎の周りに柵をして「人」が入らないようにして、つまり周りに牛がいて柵をしてその中に入を入れる、そういう形を取られたと。その後2、3年して私が聞き取りに行ったときには、ついには後継者がいなくてやめちゃったんですね。それで問題になったんですけども、今解決したかどうかは分かりませんが、これも大変だと。

で、その観点で僕ですと、まあ動物との関係もあって、国府町(広島県)の邑の借地、ちょっとこれは観光産業の問題とはちょっと違いますが、やはりこれもトラブルがあるんですね。そういった動物とのトラブルの問題をずっと考えてみて、「牛との付き合い方」ってのは、昔の人はちゃんと出来ていたんですね。ですから先程の「野焼きボランティア」の話にもありましたが、やはりそうした動物との関係についても「研修」をやらなきゃいかん。つまり山に行けば山の動物の、牧場に行けば牛の、棲し方、付き合い方をちゃんとやらないと、いい加減な気持ちで行くと、やはりトラブルになっちゃう。

そういうところで今回の久住の場合は大変だったろうと思いますが、その辺を具体的にお願いします。どういふふうなプロセスで、何百万円掛かったのか、どっちがどうなったのか、その辺のところをお願いします。

僕は本当は「金は払うべきじゃない」と思ってるんですけど、「牛が悪いんじゃない」と思ってるんですね。つまり「付き合い方」が間違っているから、人間が間違っているから、と黒川から言うけど、でも現実には行政の方がどうしても、そうっちゃう。

もうひとつは住民参加のボランティアの件ですけどね。これはいろんなパターンがあるとは思って、私も今論文を書いているんですけど、例えば参加の対象や形態、それから保全とかの活動についても、いわゆる「体験型」なのか、「遊び型」なのか。例えば私が今、林業の関係でまとめているのが「ホルンを作ろう」というんですね。ホルンを作ろうってことで山に行ってもらって、遊んで、木を探してもらって、ホルンになりそうな曲がった木を探さず訳です。その結果として森林のこと、林業のことを理解してもらって、そういうテクニックなどが経験としてあるんですね。そういう「遊び心」と「草席」との、何て言うか例えば「カヤを利用してよしずを作る」とかね、何かそういうことをされているのか、その辺りをお願いします。

で、最後に「景観動物」ってことを誰か言われたんですけども、これ、私の、景観をやってる者の立場から言いますと問題がある。「景観動物ってどういう動物か」と言いたいんですね。それから「景観作物」ってことも言われる。むしろそうじゃなくて「景観」って言うものは、「食の景観」、「音の景観」、「さわる景観」、全部あるんです。それらの総称と

して「景観」というものがある訳ですから、むしろあれは、正しく言うならば「景観要素としての動物」という理解の仕方なんですね。ですからそこら辺がいつも聞いてて引っかかる。

で、「生業を生かした景観づくり」ってことを言わないと、甲なる都市のための景観じゃないと思っただけです。例えば「早稲では牛が良う」という生業ですね。林業なんかでは「生産緑地」という言い方で儲ける。棚田なんかでは法面に何か大豆なんかを作って儲けるとかね。で、そういうものを「景観作物」とは言わない訳で、私の専門からは、ちょっとああいう言葉はおかしいなど、逆に私から言うとおかしいんで、ただ作物の方とか畜産の方達はそういう言葉を使われているんですけど、僕は正しくないなど、以上です。

宇佐良

ありがとうございます。高津さん、じゃあ先ず最初、「補償」のことで何が、どういうふうなおてってことを、はい。

佐藤

「事故の対応」という事なんですけども、まあ私のところの牧場(放牧場)は、下は(標高)700m、上はおおよそ1000mくらいまでの分布がある訳でございます。で、その中に国道が1本通っております。で、(放牧場に牛を連れて行くために)900mからの100mくらいを上がるころでは国道を利用して、昔は牛を引いて移動をしていたと。先程お話ししましたとおりですね。

ところが1頭引い、2頭引い、5頭引い(じゃあ生活できない)。「牛と共に生計を立てる」ということになりまして牛の数を増やさなければならぬ。10頭、或いは20頭、人によっては50頭と。で、50頭の牛を飼ってその「放牧場」というのは大抵半分くらいですから、30頭から、多い人で40頭くらいの牛を個人的に牧場に出している。1頭、2頭の方も勿論ございますが、1頭、2頭の方は(重機用の)トラックを持たないから、歩いて牛を引いて移動させる。それはそれでいいんですけども、30頭も40頭も移動させる方はいちいち引いて行く訳には行かない。で、トラックで移動させる、しかしそれには相当な時間が掛かる。

そこでそういった方はどうしていたかと言いますと、昔は国道と言えども牛を引いて歩いて移動をさせていたと。しかし段々段々牛を引いて歩くこともままならなくなりまして、もう「いち、たの、せん」で牛を許して(放して)しまった訳ですよ。誰かが、でそうすると、後ろの方から牛が遠いかげっこをしてくるから、前の方でゆっくり牛を引いて歩いていく人も、「これも危険だ」ということで手綱を許すようになって、で、あるときから一気に、時間を決めて「牛を放そうじゃないか」というね。これ非常に危険なんです。ですからその間が約1.5キロメートルから2キロメートルある訳なんですけども、朝の、早朝の5時頃、車の通りの一番少な

い時間帯を見計らって、「(牛を)放すところ」と「放牧場」に入る」と人を指して、「牛を移動しておりますので通行の車の方はご協力をお願いします」ということでやっておりましたものですから、牛の方も「夜中に国道を走ってもいいんだ」という具合に体で憶えてしまった訳ですよ。実際の話ね。

ですから、牛も盲信として、ある程度のところまで上がってくれば、国道を渡って次の地点へ行くことが出来るということをしつこく憶えてしまった。で、たまたまその場所の右利線の状態が良くなかった。自然に切れたのか、人為的に切ったのか、それは分かりません。で、30頭くらいの牛が国道に出て事故に合った。道中恐らく一番先頭を走っていたであろうと思われる牛が、向こうから来た車と正面衝突をして、自動車は大破した。牛も恐らく3、4回くらいは道うちに踏ねられたらと思うられる傷もありました。牛は30分以内に死亡。自動車は大破、人も怪我をしたと、そういうことであります。

宇佐見

ということは、確認ですけども、一定の「ルール」みたいなものはあったと、すなわち車の通行量の少ない場所でしたか、そのときに「放す」というルールはあったんだけれども、たまたま何か不備があって起こってしまったということですか。

佐藤

ええ、事故が起こったのは夜の7時から8時頃と思われるんです。

藤井

ちなみどのくらいのスピードだったんですか。

佐藤

スピードはですね、そこは直線でも見通しのいいところでございます。道路標識では40キロです、標識がありませんけど40で走る方はおりません。大抵70、80は出ています、たがども、そういったことを(事故の瞬間を)見もしないで、状況だけから「河キ口出てただろう」というようなことは言われませんから、なかなか難しいところで、運転者の側の話を聞けば、牛の方が突進して止まっている車にぶつかって来た。牛の方が飛び込んで来たんだと。大変な事になったんだと言うことで、7台の車と事故を起してしまっただ。中には外車もございまして、擦り傷一本入っただけだったんですけど、ボンネットを壊れたとか、バンパーを取り壊えたということですね。(補償の金額が)外車あたりは1台50万(円)という、まあボルボでしたけど。

宇佐見

ありがとうございます。3回質問をいただいておりますの

で、次に移らせていただきます。

ボランティアの方を受け入れているということなんですけれども、兼に「レジャー型のボランティア」なのか、もっと「教育性を目的としたボランティア」なのかというような趣旨の裏面だったと思うんですけども、どんな「方針」って言うんでしょうかね、将来的な目標を持って、ボランティアの仲立ちと言うんでしょうか、NGOをやっておられるかということなんですけれども。

山内

私共の方ではですね、元々「阿蘇の草原は生業によって維持されてきている」という捉え方を出発点からしております。まあそういう意味で、よく地元の方なんか言われるんですけど、「草原を守るために自分達は畜産をやってきた訳じゃあないと、(畜産をやってきて、その結果草原が出来ているんだ)というふうによく言われるんですね。まあその言葉どおりだと思います。そういう意味で私共が「草原を守る」と言うとき、財団の立場は「生業資源としての草原を後世に引き継ぐ」というのが財団の目的なんですけど、ただボランティアの面質はあくまでも、そういう生業によって草原を維持してきておられる地元の牧野組合の人々に対する「助っ人」である、という捉え方をしております。従って、行く行くは都市の人々に「入口」としての「体験見学的」な企画しようとは思っておりますが、基本的に「ボランティア」というのと「体験見学」とは別に区別するつもりであります。

今私共のやっている「ボランティア」というのは、実は今日もやっているんですが、「初心者研修会」なんかでは、州府払いの扱いの方の講習なんかもするんです。かなりの意味では、きっちり講習をして「事故が起きないように」ということで、また「地元の人で定年までいにならないように」と、その辺りはきっちり指導します。で、こういう「ボランティア手帳」にも「ボランティアの心構え5条」という形で明記しております。

先程佐藤さんからのお話して、「いつも天気に振り回されて、延期になって」と言われてましたが、阿蘇もご多分に漏れず、この2年間は本番の野焼きはほとんど3回延期になっています。毎年延期になっています。それでもやっぱり来てもらう訳ですね。阿蘇の場合は「日曜日に野焼き」ってことになってますから、「今週の日曜日がダメだったら来週の日曜日」って具合になりますから、それでももう2年3年経験を積んだ私共や慣れたボランティアの人には、もうとにかく「3月の日曜日」はずっと空けといてもらう。で、参加した人達は非常に感動して「また来年も来たい」と思う訳ですよ。で、是非参加したいと思われるものですから、必ず空けといてもらって、「運が良ければ本番に参加できる」と、そういうふうな形にしています。ですから「心構え5条」の一番最後には「天気に従う」というふうになっております。

第3分科会

宇佐見

まさに、生業がうまくいくように「それに従う」という形でしょうね。

佐藤

ちょっと先程の話を補足させていただきたいんですけど、最終的には7言の中で、人身事故等を含めまして、500万円払うことになりました。そういう事になりました。奥の顧問弁護士などのお話しを伺った結果、「やはりどうしても管理責任を問われる」ということで、それはそういうふうに対応して行かなければならんだろうと、それは私、まあ個人的な意見ですけども、500万でも600万でも、お金は努力をすれば何とかかなるんじゃないかと、大変ですけど、

しかしながらですね、そういった事故が起きて、組合員の入会権を待つ8戸の農家の間の、お互いの心と心の間に亀裂が入ってしまったと、「何だお前達は、一体どういう管理をやっているのか」と、今までやってきたような野焼きの何だのいろいろあるけども、「そんな問題を起すぐらいだったら、この際もう止めてしまえ」と、「よその牧場で牛を飼え」とか、庭では、先程も申しましたように、同じ組合員でありながら「お互いで(土地の)貸し借りをすればいいじゃないか」とかですね、「態度差」がひどくてですね、もう極端なことばかり言って、組合員の、折角今まで守ってこれたそういうひとつの「形態」に、もう存続さえも危ぶまれるんじゃないかと思われするような意見まで出る始末で、それがやっぱり今一番困っております。半句の果てには「観光会社に叩き売れ」と、そういうようなところまできております。

宇佐見

ありがとうございます。それでは最後の「静観動物」という言葉遣いなんですけれども、廣津さんの方は、いろいろご自身のお考えを披露していただいたんですけども、どうでしょうか、川村さん。

川村

まあそれは「分かりやすい言葉」としてそういうふうに使われているということで、まあ「市民感覚」なら合うかなあというふうに思います。まあ新しい言葉ですから、おっしゃるように「静観要素としての動物」というのが正しい表現なのかも知らない。

宇佐見

やはり「そこにいることが静観を構成する」という形で、認識されて使っておられるみたいですね。

廣津

ちょっとそれから「住民参加のボランティア」の件でね、僕はずっと考えているんですけど、まあ「どれがいいか」ってのは分かりませんが、ひとつ言いたいのがですね、や

っぱり、いろんな、例えば地元住民の方々、今僕は「生業の地域における住民参加のあり方はどうあるべきか」というのを考えているんです。そうすると、今ボランティアの方が絶対必要だと、この人達も住民参加の一員だと、それからもうひとつはですね、三瓶の方だったと思いますが、やっぱり専門家をね、だから地元住民の方、ボランティア、それから行政の方、それからやはり専門家が入ると入らないでは、これはかなり違うんじゃないか。私が専門家だからそんなことを言うんじゃないですが、例えば草花のことをするときには草花の専門家が要りますよね。まあそういう面では三瓶の方では中国農試の専門員の方もおられるし、そのパートナーの方はNGOだとかすごくいい傾向だと思うんですけど、その辺りを教えていただきたい。

宇佐見

どうですか。あの「新しい形」と言うか、「構成」ですね。「参加型」と言ったときに、地元、それからボランティアの丸、そのボランティアの方も先程は薪か、大学の先生だとかいろいろ「その道のプロ」だとかが出てきて、というご報告だったんですけども、そんな形でもみなさんが、多種多様な方がボランティアとして参加して、それぞれ専門的なご意見等々を発言しながら、まあ運営していくなり、或いは「どういう活動をするのか」という、まあ、ボランティアの組織全体の運営にも何らかの形で反映されるんでしょうか。

山内

ご質問の答えになっているかどうか判りませんが、まあボランティアの研修会等には、例えば大浦先生にお話しするとか、刈り払い機の場合は地元の方が「先生」なんですよ。実際の野焼きの現場にもそうなります。

で、ボランティアの数が今増えてきつつあるものですが、私共の財団は小さな財団なものですから「なかなか手が回らない」ってこともあって、ボランティアの会の中に「運営委員会」を作って、またその中で、もう2年くらい野焼きを経験されて「毎年でも来よう」という方なんかを対象にして、今「リーダー養成研修会」を今年から始めております。で、第1期生がこの前18人、「リーダー養成研修会」を終了して、キチッと「終了証書」をお渡しして、で、「カッコいい、アメリカの「森林ボランティア」みたいな帽子を作ろうか」という話になっておりますが、

まあそんなふうには、ある程度「専門的な人」ですね、何箇の野焼きの場合、広い範囲のずっと奥まで作業に入っていくものですから、きちっとした「リーダー体制」を取らないと事故が起こむかねないんで、そういう体制だけは取るようにしています。

宇佐見

ありがとうございます。大体スケジュール通りに終わりたいと思いますので、私の力量不足で、なかなか「なりた

い)という姿が見えてこなかったと思うんですけども、まあ今回だけではなく、今後もこのような会は続きますし、またみなさんの地元へ行けばですね、こういう機会はいろいろあるだろうと思いますので、その節には、今回の4名の方のご報告を上手く活用していきながら、或いは紹介していただくことですね、みなさんご自身のご意見を発表していただければいいんじゃないかと思います。

どうも、今回はご参加していただきましてありがとうございました。どうもありがとうございました。最後に4名の報告者の方に拍手をお願いしたいんですけど、よろしくお願ひします。どうも報告者の方、ありがとうございました。(拍手)

それでは、この後【パネルディスカッション】のプログラムが待っておりますので、先程のホールの方へ移動をお願いします。

■シンポジウム

秋吉台草原シンポジウム2001

— 今、草原に必要なこと —

- パネラー 熊本大学法学部教授
佐藤 誠
- パネラー 農林水産省中国農業試験場主任研究員
高橋 佳孝
- パネラー 山口大学農学部助教授
宇佐見 晃一
- パネラー 地元秋吉台関係者代表
田村 昭雄
- コーディネーター 九州大学大学院人間環境学研究院教授
小川 全夫
- コメンテーター (財)自然公園美化管理財団専務理事
瀬田 信哉



司会

さて皆様、本日のこの会が始まりましたから早7時間が過ぎて参りました。がなりのいろいろな討論、意見交換などが行われて参りましたが、そろそろお終りのこととは思いますが、さあ、もう一息がんばりましょう。第3部もしっかりと素晴らしい意見の交換が出来ればと思います。それでは第3部の「シンポジウム」を開催させていただきます。

ステージの上にすらすらと並んでいただいております皆様、シンポジウムの関係者の皆様をご紹介して参りたいと思います。まずコーディネーターとして九州大学大学院人間環境学研究院教授の小川全夫様にお観ししております。そしてコメンテーターは財団法人自然公園美化管理財団専務理事の瀬田信哉様でございます。パネリストのみなさんをご紹介いたします。熊本大学法学部教授の佐藤 誠様です。農林水産省中国農業試験場主任研究員の高橋佳孝様でございます。山口大学農学部助教授の宇佐見晃一様でございます。もうおひとかた、地元秋吉台で生業などを通じ長く関わってこられました、田村昭雄様でございます。

さあ、それでは進行は小川先生にお願いします、よろしくお願いたします。

小川

はい、かしこまりました。それでは本日の締め括りのですね、会になります。『今、草原に必要なこと』というテーマでシンポジウムを行ないたいと思います。

このシンポジウムの進行の仕方ですけれども、まず最初はこの直前に行なわれました3つの分科会、その3つの分科会にみなさん分かれて参加されましたので、他の分科会ではいったいどう言う論点が提起されたのか、というところが判りてないか判りませんので、それぞれの分科会の座長をつとめていただきましたパネリストの方々から、

まずお話しをしていただきます。だいたい18分くらいを目途にして、こういう論点の話が出ましたという紹介を得たいと思います。

で、その上で次には地元で秋吉台に関わりながら生業を続けてこられた田村さんの方からこれまでの生き方と今思うこと、と言ったような点からの、まあある意味での問題提起を受けたいと思います。

で、それに対して、また今度は先程の座長という役割を超えて、まあ個人としてですね、パネリストの方々には自分は今この問題についてどう考えるか、この草原というものに対して何が必要だと考えて、どういうことをするべきだろうかと、まあ、そういうことについてのそれぞれのパネリストなりの答えをですね、提起していただくということになります。

で、それぞれの方の提起されたことからもまして、もしご意見等がありましたら、相互のやり取りを少しやらせていただきまして、そしてその中では勿論コメンテーターの瀬田さんにも加わっていただきます。瀬田さんにはこれまでのこのサミット・シンポジウムについては随分ご存知ですから、そういうことも踏まえられていると話に絡んでいただいて、全体の総括も先ずはそのコメンテーターの瀬田さんの方をお願いしたいと思っています。もし時間に少しでも余裕がありましたら、パネリストの方々にも一言のまとめをいただきますが、時間に余裕がなければ、最後は私どもの方で引き取らせていただきまして、最後の締め括りをしたいというふうな思っております。

まあ、いずれにしても、この草原の過去のことについてはですね、いろいろと情報交換は出来たと思います。では、草原が今後どうなったらいいものかという未来の姿については、どうも少しずつ感覚のズレが、この参加している人達の中にもあるんじゃないかな、と思います。じゃあ、その過去と、

将来、未来というものを結び今、何をすべきなのかということになると、もっと、その道は多岐にわたって判らなくなっているというところがあると思います。しかし、そういう現実というものを踏まえた上で、このシンポジウムをあえて、進めたいというふうに思っております。

ではまず最初に第1分科会の方ではですね、いったいどのような事柄が話されたのかということにつきまして、まずご報告をお願いします。じゃあ、佐藤先生お願いします。

佐藤

「観光と保全」從來矛盾しがちなものを草原でどう結びつけるかということが話されました。事例発表は、地元で「わくわく村」という草の根のツーリズム開発をやっておられる松原さんという農家の方、地元の防長文通の観光部長の香野さん、そして研究者としてランドワークに関わっておられる浦田さん、3人が1時間程度しゃべりまして、フロアと1時間議論しました。

かいつまんで申しますと、議論の段階から実践の段階に移らないとも草原はもたない、と、ではどうしたらいいか、1つは草原のメリットを受けている人が、草原管理のコストを払うという原則を明確にしよう、そのためのトラストや草原への入場料をヨーロッパやニュージーランド、オーストラリアのようにきちんと取って、地元の方にお金が落ちるようになろうという事が9点です。

それではお客さんが減るじゃないかという観光業の方から叫びがありましたけれども、それへの対策として、本来森に戻って行くことが自然の成り行きであるはずの日本において、草原として維持されているということには特異な自然体系、条件があつてのことなので、それを学術的に多様な観点から、この草原がいかに価値が高いかということを中心に、国際的に通用する形で調査をしよう、そして、選んで、例えば「草原四十八景」とか、観光資源としても価値のある草原を鑑別し、その三十か四十か百か判りませんがそこにツーリストが「草原ツアー」という形で、シリーズで全国、もしくは世界から観光客がたくさん来てくれるようなそういうネットワークを作ろうと。

そして第3点目が、来年、田邊が「エコツーリズム・イヤー」ということで、日本ではまだそういうことに対応する動きがありませんが、草原のエコツーリズムというものを強烈に世界に向かって送り出して行こう、そういう4点が話されました。

以上です。

小川

はい、ありがとうございます。

かなり今取組むべき具体的な課題、草原への入場料を取ってみよう、そしてそれを地元へと還元しよう。ツーリストが来れるような三十ないし四十余りの草原のポイントを決めて、そこでツーリストが来れるようなネットワークをは

かっという。で、来年は「エコツーリズム・イヤー」という、これは田邊が定めた記念行事の年ですが、それに草原エコツーリズムというものを掲げて取組もうじゃないかと、まあ、かなり具体的にその目標を設定しての議論がなされたようですね。

それでは第2分科会の方は、高橋さんの方ですね、よろしくお願いします。

高橋

第2分科会は「生態系と保全」というテーマでした。ただ、その生態系のことばかりをお話するという内容だけではなくて、随分幅広い意見が出てきました。

最初は「秋吉台パークボランティアの会」の方から、それから蝶の保護を通して生態系の保全をしたいと考えるナチュラリストの方から、それから実際に草花を植えたり、生態系を保全するために民衆の力を借りて「枅がつる」というところで「野焼き」を再開した事例、それから、じゃあ、草原の健全な生態系を保全するために今問題となっている「火通切り」をどうするかということで、その留意的な、あるいは新しい試みを山口県畜産試験場の方からしていただきました。

で、それぞれの方、それぞれの立場からですね、例えば、採草という形態がなければ火入れをしたって樹木が生えてくるんだよ、という考え方、あるいは蝶の立場からいうと、草を刈るという行為によって蝶が食草とするような植物が増えるんだよ、というお話、それから、民間を活用してそこに火入れを再開することによってノハナショウブなど、野の花が増えてきているという実態をしているという話、それから、牛を使うことで、これは阿蘇や三岳でもやっていますが、草原保全にとっても低コストで役立つんだよ、という個別の事例が出てきました。

で、草原の生態を生物多様性のような観点から眺めてみたとき、やはり火入れと同時に刈り取りも欲しいという意見が大勢を占めました。それから勿論場合によっては放牧も考えてみたらどうかと、それから一番大事なことはですね、そういう生態系を研究している立場から、あるいはそれに携わっている人の立場から、草原を管理していくことはこんなに大切なんだということをもっとアピールしようじゃないかと、これまでその部分がとても不足していた。そのためにもっともっと私達からアピールしていこうという提言がありました。

それからそれに付随する内容として、じゃあ、守っていく、管理していく形態をどう取っていくか、やはり草そのものをですね、農業とリンクさせるか、あるいは地域振興と考えるか、勿論ツーリズムということもあるでしょうけれども、それが今ひとつであると。

それから実際に管理していく担い手ですね、どこに求めるかということをもっと整理しようじゃないか、先程お話を払うべきだという話もありましたけど、そこまで具体的に

ではないにしても、ボランティアなど多面的なですね、そういう世の像というのが提示してその地域にあった実情に変わっていったらどうか。

それから、どうしても自然公園にしか、今はもう草原というものは残っていない以上は、規制とか、あるいは制度というものと関わりのある訳ですけども、今はいろんな、環境庁なら環境庁としての立場からも、二次的自然に対する理解というものは進んでいるし、進んでいる。問題は地元が「どういう自然を守りたいか」という意思決定をするかどうかの問題じゃあないかな。と、そういう諸々の意見が出て、生態系の検討というよりは、何かそういう管理面でのですね、いろんな提言が多かったのが特徴です。

それと、生態系という観点から言えば、実際に火を燃やすとダイオキシンが出るんではないかとかですかね、あるいはCO₂(二酸化炭素)が増えるんではないかとか、あるいはセイタカアワダチソウのような外来植物が随分と増えてるんだけども、それをどう考えるかというそういう個別の課題も提示されました。

小川

ありがとうございます。

かなりまあ、『生態系と保全』ということになりますと論点が多く出ていたようですね。しかしそれらは、まあ共通して一言でいいますと、どうも地域資源の活用と保全に関する「マネージメント」が問題になったということのようですね。お互いに利害の相反するもの、あるいは技術面でも、火入れがいいのか判断がいいのか、それらの組合せはどうしたらいいのか、牛を入れるのがあるのかどうか、草花のことだけを考えていいのか、雑草のことだけを考えていいのか、人間のことはどうなるんだろうかという様々な思いがあって、それらを全部「マネージメント」という形でどうやってまとめ上げることが出来るのか、まあ、そのあたりのところの論点が随分たくさん出たような感じがいたしましたね。

はい、どうもありがとうございます。それでは第3分科会、宇佐見先生の方からよろしくお願ひします。

宇佐見

第3分科会のテーマは「自然と保全」です。4名の方からご報告をいただきまして、お二人がボランティア活動について、残りのお二人がまさに生業を実践されている方からご報告を受けました。

前の2つの報告は、やはり草原は人が関わって保全されている、と、しかしそれはどうも昔のように生業を営む方に任せるだけでは出来なくなりつつある。やはり、これまでは縁のなかった都市の方にボランティアとして何らかの形で関わっていただかないとどうも保全が出来なくなってきたということで、その取り組みを報告していただきました。

後半は、実際に放牧をやっておられる方から、放牧をするということは草原をうまく復元するためにもいい方法である、

と、ただし個人の方だけでは限界がある、すなわち、どこかの地域も権利としての入会地を持っている、けれども権利を持っている人の間には様々な考え方があり、やはり自分は農業を生業としてやっていこうとする人とそうでない人、子供が農村を離れて都会へ出てしまったために後継者がいない人、あるいは自身が農村を離れてしまった人、権限の面では高質なんだけれども、関わり方が違ふと考え方が違い、何か問題が起きたときには非常に危ないことになる。従来自然と出来ていた意思の疎通だとか、関係が非常に深まってくるといような問題が指摘されました。やはりボランティアの方たちと連携しながらやっていかないと自分達の生業も持続できないというようなご報告がありました。

会場の方からはボランティアもいろいろだけれども、やはりどういうボランティアなのか、将来どういうふうな形で参加している方を取り込んでいくのかということについても注意しなければいけないんじゃないかというご意見がありました。単なる観光型のボランティアで終わらせるのではなく、ボランティアとして参加する人自身が積極的に参加して、自分の専門性を発揮しながら、草原のあり方を提起していく、活動のあり方を提起していく、そういう関わりをうまく作っていかないと持続性がないんじゃないかというご意見でした。

もうひとつ、最後に景観ということでもいろいろ議論がありました。「そこにあることがその景観を成す」、それは営みであったり、そこにある植物であったり、牛もやはりそこにはいることで、従来言われていた経済動物ということだけではなくて、景観をうまく構成する動物として評価し直していかなければいけない。牛だけではなく、植物や草地もそうだとおっしゃる方たちで、景観に対する「考え方」そのものについてもプロアーの方からご提案がありました。

以上です。

小川

はい、ありがとうございます。

地元の方々にとって見れば最も大きな問題である生業と、そういう自然環境の保全とを、どう折の合いをつけていくかということに関しまして、もう地元の方々の権利を持っている人達の方だけでは維持管理、保全が出来ないような実態にある。じゃあそのときに町場からボランティアのような人達に関わってもらえる道は、どういう形でなら可能なのか、それにまつわるごとの期待と不安と問題点、こういったことについての議論がなされたようですね。そして、この会での話としては、やはりも草原というものは人が関わってこそ今の姿である、そういう意味では、人が関わり続けられる条件というのはいったいどういう形でののかというところが共通の課題として語られてきたというふうな感じがいたします。

どうもありがとうございます。これらの各分科会の話をもとめるという意味では、もう一度、秋吉台に生活を掛け

て関わってこられた田村さんのお話をお伺いしながら、もう一度現場の感覚に戻つて今の脚跡を振り返ってみようというふうに思いますので、読んで田村さんの方から、これまでどのようにして秋吉台に関わってこられたのか、少しお話をいただけますでしょうか。よろしくお願ひいたします。

どうぞ座ったままで結構ですよ。

田村

只今ご紹介にあずかりました。秋吉台の麓に住んでおります田村陽雄でございます。皆様方の前でこうして話をすることは大変不慣れでございます。大変お聞き苦しい点があるかと思ひます。何卒よろしくご声援、ご理解をお願ひ申し上げます。

「秋吉台シンポジウム」といわれておりますが、機文字としては私にはよくわかりません。秋吉台の生業と保全ということで私が観から聞かされたり、あるいは体験にあつたことをちょっと語らせていただきます。

秋吉台には山焼きという行事がございます。その山焼きを行なうためには、昔、火道切りという作業をしなければなりません。私が観から聞かされたことでは、火道切りということは「火道開り」と言われておつたようでございます。これは土地を、秋吉台の土地をクワで削って、山焼きの火が漏れないように守りをするようなことをしていたようで、地元の森林と草原の境を作るために削つたような形が現在も残されております。これを火道切りと呼んでいた訳です。現在は美東町と秋吉町との境としても形が残されておる訳です。

現在の山焼きとしては、美東町、秋吉町が一斉に火を放して秋吉台を焼いておる訳です。

昔、私が子供の頃、昭和16、7年だったと思ひます。よく憶えておりますが、また男に行つたこともあります。私どもの親達が火道を作るために天気の良い日、または風の吹かないという天候のときに、みなさんが集合されて、原野に火をつけ、約5メートル幅を焼いて、両方から消して行く姿を憶えております。

今では時代が変わりまして、作業の仕方が変わってきました。現在では刈り払い機を使って防火線を作るようになったようなことです。

山焼きを焼えるとやがて春が過ぎ、夏が来ます。秋吉台には青々とした草が育つて来ります。畜産農家では牛馬の飼料として、稲作農家では肥やしを作るために、草の刈取り仕事が始まるのです。昔は稲作畑を作るには今のような化学肥料は無いし、その肥やしとして草を刈取って、堆肥を作ってそれを作物を作るために使つていたのです。秋吉台の草は農家にとって大変貴重な品だったのです。今ではそういう姿は見られませんが、でも秋吉台に登ってみますと、草刈りの跡をたまに見ることがあります。戦時中や戦後、草刈り競技大会という催しがあったことがあります。私もそれに参加させていただきまして、



秋吉台には「へこ地」(くぼ地)がありまして、これを「ドリーネ」と呼んでおります。このドリーネの底を農民が耕作しておりました。秋吉台には「長者ヶ森」という森がありますが、そこには昔、こうしたドリーネの畑の地主が住んでおられたということです。その耕地を農民に作らせて小作料を収め、長者になられたということです。今ではそのドリーネも個人所有になっており、私もその耕地を持つておる訳です。戦時中から戦後に掛けては意地増産ということで、手、豆、ゴボウ、そばなんかを作つておりました。上り道、あるいは下り道、細い道を片道1時間以上掛けて、荷物は馬の背中にのせて運んでいたのです。このことを思い出しますと、今でも、極端近の出来事のように思われます。

昔にはワラビ採り、秋にはセンブリ(ゼンブリ)採り、行基、山登りなどたくさんの人々が利用されておりました。

この秋吉台を利用するにおいて、今日では自動車時代でございます。その車で地元から上げられるような道を私どもは作りたく思ふ訳です。しかしながら、天然記念物、または文化財とかいわれて、秋吉台を削ることが出来ないのが、私どもには残念でなりません。時代は私ども高齢者時代になりました。この山焼きはたいへんに困難な仕事になってきた訳です。ですが山焼きはやめることが出来ません。何とか良い方法で秋吉台を価値あることに、大事に利用していきたいものです。

以上、謹にお礼末でございますが、皆様方のご理解、誠にありがとうございました。

小川

はい、どうもありがとうございました。

田村さんは、それこそ農業を営みながら秋吉台に関わつてこられた時代がございました。その後、その農業の前では使えなくなったその土地を、今度は観光的に利用しようというので、馬を引いてですね、観光客に乗っていただくというような、そういうお仕事もされたそうです。そうして今日までこうして見てこられたのですが、いよいよ自分の年を考えてみたときに、この高齢化した私の力で果たして今

のような状態の秋吉台にどうやって聞かれるんだらうか、そういう思いを切々と感じておられるんでしょうね。それは恐らく田村さんだけではなく、この秋吉町や美楽町にいる、秋吉台に権利を持っておられる方々の共通している悩みではないかなあ、という感じがいたします。

まあ、このあたりのところからいろいろな論点が出てくると思うのですが、まずコメンテーターの瀬田さんにですね、先程の分科会から田村さんの今の現状のお話までを聞いての留戀な感想を、ひとつよろしくお話ししたいと思います。

瀬田

えー、まず田村さんのお話しの中で、草がとっても大事な資源であったとおっしゃってましたですね。それはきっとその資源である草が、草が入り取り取る訳ですけども、草が生えてくる秋吉台が、皆さん集落の人達の大きな資産だから、その資産から、毎年毎年の草が生えてくる。そしてそれを資源にお使いなつたというふうにおもうんですね。

で、最後のところでちょっと、私が聞き間違ったかもしませんが、特別天然記念物だから、まあいい事ができないというか、あるいは削る事ができないというふうにおっしゃったんですが、もし仮に秋吉台という台地が、まあ田村さんなり、あるいは他の方でもいいんですけども、削って広い、真っ平らの所というふうにお考えでしょうかね。そうするとそれは空間にはなるんですね。で、空間になればランドになる事も有るかもしれないし、ゴルフ場になる事だってできるかもしれない。そういう一つの土地が空間として有るというの、これは人間がどう使うかというための土地そのものが資源では有りますけれど、けれども、草が出てくるとかあるいはそれを、今、田村さんが馬の背中に観光客を乗っけてあげて、喜んでもらって、まあ、いくばかりかの観光収入を得られる、というような資源としては成り立って来ないんですね。また別の使い方としての資源は有るかもしれませんが、それは土地の空間にしかならないなあと思えます。

という事でちょっと今のところ、私の解釈が間違ったかもしれませんがけれども、やっぱり秋吉台が有るという事の、大きな遺産をどういう形で資源にして、その資源を使っていくかというのが、今草原をこれからどうするかというテーマではないのかなというふうに思いました。

それで後は皆さん3人とも、先生方でパネルディスカッションをしていらっしやった訳ですからそれなりに。例えば、産婦さんの「生態」という回題、佐藤さんの「エコツーリズム」、場合によってグリーンツーリズム、エコツーリズム、その両方が有るのかもしれませんが、それから宇佐見さんの「生息」という中で、えー、どういいますか、本来の日本の観光というものは、何か新しいものを、例えばディズニーワールドとかディズニーシーというのを今作っておりますけれども、そういうものを作ってそこに人を呼ぶというよりも、本来生息のある中で非常にオリジナルなもの、そうしたものを先

ず観賞する。そして当然そこに生業があるという事は食べる事の出来るもの、あるいは着る事の出来るもの、いじる事の出来るものといいますが全くいじってはいけないというんでなくて、そういうものがそこに必ずある訳ですから、そういうものを口にする事、手にする事が出来る。ということで目にするだけではないいろんな事があって、まあ私はグリーンツーリズムていいますかそういうものになると思うですね。

で、かつてはそうだったんだけど、一端そうではない大規模な、バスで風景を見せるというカプセル旅行といってもいいと思います。そういうもので全国を走り回られるといいんですが、そういう大量、大衆、高速の観光形態というものが工業化社会では一番効率の良いものというふうになっておりましたけれども、その工業化社会を越えて、今、まあ情報化社会といいますが、その中でももう一度自然と人間の関係、あるいはそういう自然を舞台にした人と人との関係、これはボランティアだとかインタープリテーションといいますが、お客さんとその自然をお客さんに説明する人、あるいはボランティアの方々とそこに訪ねて来た人達との関係、こうした人と人の関係だと思えますし、そういう舞台としての視点があたりする、というふうに思います。

徐々ににはまたお話を出来ればと思いますけど、今まじめならそんな事かなと思えます。

小川

はい、ありがとうございました。

今ちょっと、誤解があつてはいけないので、田村さんの方からですね、今いわれたところですね、あの、決してそうではないんですね。真っ平らな土地を作つてということではなくて、あの、私の方で少し補足しますので、後でまたよろしくお話ししますね。

要するにこの秋吉台の場合にですね、火道切り作業の負担をどうするかという話がありまして、これを実際に農業サイトの事業で、作業道を造ろうとしたことがあるんですけども、そのことを巡つてかなり緊張関係が生まれて、「石一つ動かすのもまかりならん」という話になりまして、そういうことで結局は農家の人達が火道切りに行くための作業道も設備出来ないような状態になってしまった、というそういう具体的なことがありましたので、ちょっとそこらあたりの話が話題として出たということですね。

まあ、そういう意味では生業と公園だとか文化財だとかといういろんな規制との関わりの中でありまして、特にこの秋吉台の場合には台そのものが貴重な世界遺産に匹敵するものになっているということもありまして、その上でどのような営みをやるのかというのは、農業だけの側面じゃなくて、もっと広くいろんな認識をたくさん抱えている所です。

しかしそういう規制があまり強くありすぎるというふうに感じた場合には、多くの人々はそこで、自分達の生業を展

開することは出来ませんから、結果として見れば、若い人達がそこに住まなくなると、残った人は高齢者ばかりになっていく、そういう話になってしまう訳ですね。

そこで今の問題が出てくるというところなんですが、まあこれから少しですね、今回は「山焼きシンポジウム」という話になっていますので、この山焼きをせざるをえない状態、またその山焼きというその最終手段かもしれないようなことさえも、現在では出来難くなるとそういう現状あたりからですね、色々とパネリストの方々のご意見をいただこうと思うんですが、最初はどうでしょうか。じゃあ高橋さんの方に回しましょうか。

高橋さんの方にですね、大体、こういう草原というのは大事だということでは言われているんですが、草原を守るは術体系とかですかね、草原というものを守るといふことに関するような制度とかかというようなことになると、結構その範囲して広く解らないという感じがしますね、このあたりについてはどういうふうにお考えでしょうか。

高橋

はい、えーっと、守るとか維持するとかの技術ということになると、火を入れるということと、それから草を刈るということ、それから牛馬を放牧すると、まあ三つに分けられると思います。その内、草を刈るということと牛馬を放牧するということは、まさに生業そのものと直結することなんです。それによって牛や馬を飼って、生活の糧としてやると、で、火を入れること自体はそれでお金が入る訳ではない、ということですね。ですからある意味では少し区別をした方がいいのかなという気がします。

それで火を入れることは放牧する場合にも、あるいは採草する場合にも有効な手段ではあります。ということで技術的にはですね、火入れというのが三角点の頂点にある様な格好で、放牧、採草というふうには、勿論それだけではごいせんけれども、そう考えるのも一つの考え方ではないかなと思いますね。

それで秋吉台の場合は、放牧という慣行は以前に少しありましたけれども、ほとんどがその採草利用ということですので、直接その生業というか生業と関わるところは採草という形だったんだと思います。

もう一つのご質問何でしたっけ。えーっと制度等の関係ということですか、それは、そういう行為をすることに対する規制という意味なんでしょうか、まあそれは瀬田さんの方が詳しいとは思いますが、秋吉台の場合の文化財としての指定の根拠がどの辺にあるのかというと、その台上そのものということなので、台そのものをいじるといふことに対する規制というのは、かなり厳しいんじゃないかなと。で、阿蘇や久住の場合には、その草原の景観が国立公園の指定要件、まあ三瓶山もそうですけども、そういう所が獲つかある場合には、その管理としての草原を守るということはある程度許される部分かなりあるんだと思うんですね。

で、生態系の分科会でも出たんです。例えば特別区域の内でも最も規制の厳しい様な特別保護地区みたいな場所に手を加えること自体がどうなのか、というお話にもなっていて、でも実際には特別保護地区でも火入れをしている所もあるし、刈り取りを行っている所もある。それから、環境庁の方が、まあ個人的な意見ということではあったんですけども、私もおそらくそうだろうと思んですけども、規制があるからしちゃいけないという立場では必ずしもないと。ただしその場合でも「やり方」はきちんとやって欲しいということですね。公園管理上どうしても、やはり手続きはきちんとと福んで欲しいし、その地元の意識としてきちんとしたものも上げて欲しいと。

ですから、で、その制度がまた別々にあるというのかまた困った問題として、文化庁側は文化庁側、で環境庁側は環境庁側それから、入会を含めた営農という点ではまあ農水省も入るんだと思うんですね。それぞれが相対しているという状況が非常に不幸な状態ではないかと思うんですけども。

まあ一つの提案としてはなんですけども、どこかがですね、環境省なり農水なり、あるいは文部科学省なり、どこかが省庁間の調整をするようなシステムって出来ないのかなというのが私のまあ漠然とした希望ではあるんですけど。

まあその草原管理に関わる制度とか、技術とかいうのは、そういう形ではないでしょうか。なんか補足があればまた補足してください。

小川

そうですね。今、重要な提案がありました。草原という概念については、それを技術的にもどういう形でやればいいのかということも、まあ幾つかのパターンはあるようですが、それが本当に現実の様々な制度的な規制の上に立って考えた場合に、どういうのがベストであるかということについての協議をするためには、省庁間、縦割り行政というものの「橋を架けて行く」ような工夫がいるだろうと、どこかが首領を取ってその調整役を果たせるようなことになったら、少しは草原に対する問題の解決も出てくるんじゃないかな、というご提言だったと思うんです。

これに関しまして、先程佐藤さんの分科会でもですね、言うならば「草原学」のようなものを立てて、学問的なことでまずみんな縦割りになってるんで、横にしたらどうかという話が出ていたと思うので、ちょっとそのあたりに関連してご意見をいただければと思います。

佐藤

はい、「畜産と草原」というのは草地試験場とかでやられていますし、「生態学と草原」というのもあります。また「地質学」、「地理学と草原」というテーマもありますし、「環境」、「観光と草原」と、まだまだたくさん草原についての学術的研

究というのはありますけれども、生態も含めて、地質も含めて、そして歴史も含めてひっくり返して、日本では本来存在しない稀有な資源として草原がある訳ですから、ひっくり返して全体像を研究することが今まで無かったと思います。

それでなんか地元の方は草原があるから、これはありふれたものだ、あまり価値が判らないんだけど、世界的に視ますと、例えば蒙古の草原というのは行ってみれば砂漠化した土だらけの、極から見ると極端ですけど、上から見ると石ころだらけの砂漠です。それから基本的にそのサバンナというのも水が無いところにある草原でありまして、日本の様にこう開いた草原、蒙古の学者あたりに何歳の草原見せたらもう目をむいて置いていましたけれども、本当に珍しい。ですからかつては何処にでもあったんでしょけども、明治以降も10分の1位に、国土面積のもう1パーセントを切ろうとしている。「ふるさと」の唱歌にあります「うさぎ追いし」という、ああいう草原というの、ものすごい資源的価値が出てきたんですね。これはもう、その根拠をこれから、やはり可及的速やかに調査したいと思えますね。

小川

ということで、少なくとも世界的に見ても希少価値のある草原。そういうものを個々ばらばらの学域で研究していてもやっぱり省庁間の縦割りと同じ様態ことではないか。もう少し自然科学的なこと、歴史科学あるいは人文科学的なこと、そういうものも含めて、あるいはまあ社会科学的事柄も含めて、「草原学」の様なことを一つ立てて検討してみることが省庁間の、「縦に繋げて行く調整」ということにも関係するでしょう。実際にこの秋吉台で人々がここに開わりながら生きて行くという道を探る上でも非常に有用になって行くのではないかなあ、まあこういう提言だと聞きます。

まあこれについてはですね、実際に地元近くにおられながらこの秋吉台の方にボランティアとして、というか「勝手道」として関わっている宇佐見さんの方からですね、今の、秋



吉町あるいは美楽町の人達がどうい生活の中で秋吉台と関わっておられるのか、そこに都会の、というか町場の人間としてどういふうに関わってですね、何が課題になっているというふうに感じておられるのか、少しそのあたりのことについてのご意見をいただきたいと願います。

宇佐見

今、小川先生からご紹介いただいたように、私は三年前に山口県に引っ越して参りまして、色んな経緯でまあ秋吉町に足をつっこんでいます。今はですね、皆さんご存じのようにドリーネを使ったソバの耕作に汗を流している訳です。まあ年に4回ほど来る訳ですけども、

私は山口大学におりますけれども、いろいろな機会を作ってですね、学生にまあ農業だとか農村に親しんで欲しいと思っている訳です。それはやはりそうしたきっかけを作るというのは非常に大切なことだと思います。

で、これまでいろんな方が、それぞれの専門の立場から良いことをおっしゃる。でもそこではまってしまっているということで、何か実現できない訳です。農村へ行きたくてもどうして行けぬのか判らない、やりたいことがあってもどこに行けばできるのかも判らない。そうしたことを私はこれまでの経験で痛感しておりましたので、まあアクセス出来る、即ち何らかのきっかけを与える、それに参加する、そこで何かを感じるってことですね。そうしますとその人の能力が発揮される訳ですね。そうすることで今まで障かったもの、あるいは潜在していたものが発現して来るという、まあ夢を持ってですね、取り組んでいる訳です。

で、どこにいけば良いのか判らない、誰がどんなことを作ってくれるのか判らない、ということですが、幸いにしてですね、それは私どもの分科会でも出たことですが、幸いにしてボランティアの方達、あるいはNGOの方達がその準備をしてくれてる訳ですね。

で、報告の中にもあったんですけども、私も字ばなければいけないと思っていますが、勝手に機会だけを作っちゃいけない、やはり、阿蘇の「グリーンストック」(財団法人阿蘇グリーンストック)ですか、研修に来ていただいて、良く理解していただいた上で、本当に理解してみたい、本当に体験してみたい、という機会を次に設けてあげる。で、おそろく将来的には何かのプロになるような、人材を育てるような、機会も準備して行くと、そういうようなものにして行けばですね、面白い展開が出来るんじゃないかと思えますよ。

ですから、参加参加といわれてる訳ですけども、やはりいろんな方を取り込んで、それぞれが持っている能力を何とか生かせないのかなあ、そして同じような、まあ目標とっていいんでしょかね、一緒になって考えるような機会を双方がですね、あるマナーを作り上げて接していかなければ、片方の力が大きいとそっちに引っ張られてある特定の方向へ行ってしまいますので、どうもそういうようなことですね、求められているような気がするし、私自身もそういう

南に気を付けてやって行かないといけなと思っています。

ですから私はあくまで大学に勤めてるといことは直い
として、山口県山口市に住んでいる一郡会人としてですね、
町に住んでいる者として、秋古とお付き合いをする。そして
いろいろなことを学ばせていただく。即ち、お隣の田村
さんのような方と接すればですね、昔はこうした村のお付
き合いの仕方があったとか、秋古台とこうゆうお付き合い
の仕方があったんだとか(しばしば「生きた情報」というんで
しょうかね。「生きた文化」みたいなものを学べるのが出来る
訳ですね。そうすると感動する訳です。私どもの学生を
連れて来てもらってですね、私が色々と大学で話すような口調で
言うよりもですね、こうした生きた教材がある訳ですから、
そういう方に教えるを請うとですね、「あーそうか」というこ
とで、まあ感動と申しませんが)けれども、半分ぐらいはですね、
何らかの形で関係を持ち続けることができる訳ですね。

そうして早くも人達が今度、山口の中で就職する、ある
いは獣医に戻って就職する、そうするとやはりまた、希の未
永いというんでしょうかね、良いお付き合いが出来るよう
な気がするし、うまく行けば今いわれるように「応援団」み
たいな形ですそ野を広げていけるんじゃないか。また、例
でいうんですかね、人を一番信頼させて、説得出来るもの
は「口コミ」ですから、口コミほど強いものはありませんから、
そういうような口コミで広げて行けるような人材を育てて
行くような機会をオープンにして行く。勿論その機会を作る
時、あるいはそれを運営する時には、いろいろな方の意見を
聞きながらやって行くということが大切じゃないでしょうか。

やはりビジョンからアクションへとゆう時代が、佐藤さん
の方から出たと思うんですが、やはりもうその時代にな
って来た。だけれどもそれを何かに実現して行ける。案外なり
お知恵はですね、いろいろな方が持っているし、どうもそうゆう
ような意見を披露できる機会を、よその人あるいは秋古町
に居る方達が同じように一緒になって作って行く。そんな
時代じゃないかなと思っています。またそれをやっていた
だきたいし、それに携わることが出来たら私、個人的には
非常に楽しいなと思っています。以上です。

小川

はい、ありがとうございます。

草原を扱う人は多くて、ビジョンも溢れるような人達はた
くさん抱えて来たんだけれど、これをアクション、行動に移
すためには、どうもそのための作法をわきまえるというこ
とが必要なのですね。「草原の作法」というんでしょうか、
基調講演では原本先生の中から「風景の作法」という言葉
がありました。それをもじって言うならば「草原の作法」と
いうようなことをみんなが学び取ってそれから行動に入る
ということが必要なかもしれないですね。

そういう意味では田村さんの方にちょっとお伺いしたい
んですが、田村さんの所では、火入れだとかそういった作
業の時には、自分達の農家だけでやっておられるのですが、

それともボランティアのような人、都会の人なんかも多少
集まってやっておられるんでしょうか。

田村

ボランティアとって別に私は、あのー、今まで意識した
ことはありませんが、

あのー昭和37年でしたか、置鞍馬が変らなくなったため
に観光用の馬に切り換えて、で秋古台の展望台の下で30
年間働いた訳ですが、そこで知り合いの方でボランティア
に来ておられる方に会って話したりしてね、私もいろいろ
お客さんの為に、お眷もいたたりしたことがあります
から、やっぱりそうゆう観光(ボランティア)のことについてね、
一緒に入って出来ればいいなあって、思いつつ今までそう
ゆうおこないが出来ないで、こんなに過ぎ去ってしまった
訳ですけどね、はい。

小川

はい、どうもありがとうございました。

まあいずれにしても、随分と、この「山鏡さ」、「野鏡さ」を
する所では、地元の人運の力だけではどうにもならず、
それだけに多くのボランティアをなんとかうまく集められ
ないだろうかという話は上がるんですけども、果たし
てそれがうまくいくかどうかということについては、いろん
な所で懸念もされているようですけれども、

先程のお話のように、少なくともそういうところに関わる
ためには、事前の訓練だとか、そういうことが必要だろうし、
一回限りというのではなくてももう少し長い付き合いが出来
るような関係を作った上での構想として位置つけた方が
良いんじゃないかというような、そういうご指摘は考えるべ
きことがたくさんあるんじゃないかなと思いますね。

高橋さんの部会でもやはり、そういうボランティアとこう
した草原の関わりというようなことについての何かご意見
が出ましたですか。

高橋

はい出ました。で、秋古台の場合はその阿蘇、久住とほ
ち」っと違うんだという話、まあ詳しくはお話ししないん
ですけど、その旧来型のとてものがちりした火入れのシス
テムというのがあってですね、そこにボランティアが入り込む
ことは非常に難しいということと、意識の中で当たり前の
仕事をしているんです。地元の人達は、それでそれが去年
もやったから今年もしていく、今年やったから来年もして
いくという意識感覚で継続していく。だから何でボランティ
アが来るんだということの理解はなかなかできにくい。そ
れとさっきお話ししたように、なんといっても事故の問題だ
とか、そういう問題があるので相当に体験を積んで訓練を
してくれないとなかなか難しいよ、というお話がありました
けれど。

小川

まあ、このあたりは佐藤さんのところでもですね、まあ佐藤さんのところというか、その阿蘇の「グリーンストック」との関係でも、やはりこういう都会の人達が、山焼きなんかに関わるという問題についてはですね、かなりいろんな議論があったと思うんですが、現状とまあその議論の乗り越え方というところでしょうか。どんな話になったかということをちょっと紹介していただければと思います。

佐藤

あの、その前に、秋芳町でも「わくわく村」では地元の8~8人の方だけでは野焼きが出来ないから、50名まで野焼きにボランティアを入れていると聞きました。

ですから、阿蘇の話でもですね、これまでそんなことは絶対不可能だと、地味だとか危険性だとかいうことで、集落のチームワーク以外では不可能で、「遊び半分の都会の人は邪魔になるだけだ」とずっといわれてきました。それが変わったのは、今日もおみえですけども、あの環境省の方で「草地懇話会」というのが平成8年からあって、そこで実際に赤が集落でやってみたん、ですね。そしたら結構役に立ったんですよ。

それで「グリーンストック財団」、今日おみえの阿蘇町の川崎町長が理事長ですが、公的な一つの信用がある財団が地元の新聞で半年間キャンペーンやって集落基金が3千万円集まりました。でその半分で集落ボランティアの備品と活動費を5年間出していただいております。

最初は幾つかの集落だけだったんですが、今年は僅か10町村、いや4町村十数牧野組合だが、阿蘇には175の牧野組合が在りますけど、1割位の牧野が、しかも町村の農政課を通して正規の要請と組織的な対応という形で実施しております。新聞のアピールで、今とんとん参加者が増えて、数百人集まっていると聞いていますけども、山内事務が非常に努力されて、そのための専門的なリーダー養成の講習会を徹底してやっております。その独自の運営委員会が三十数名、正式な資格を得たリーダーを養成して、場合によっては数千名を組織する。そういうふうな特殊な機構を備えたものになっていくだろうと考えています。

そして私共にも要請がある集落というのは、例えば26戸で800ヘクタールもの牧野を管理しなければいけないとかいうところ。阿蘇の経験では、野焼きの火が飛火すると杉山が焼ける。焼けたら10年間下草刈りをしなければならぬ。田んぼの忙しい時に労働でその補償をせんといかん、もうこんなもの、とってもしリスクを負えないということが一番大きいんですね。それで都会から来た人でも、勢も力のうちで飛火した火を、あちこちでとにかく製粉に叩けば火事にはならない訳ですから、そこで生命保険を掛けて野焼き参加者は必ず一百のトレーニングと「消防消火器」(火を叩いて消す道具)を製作してもらって、命に関わる危険ということを叩き込んだ上でやれば、これは戦力になる。

そして参加者がですね、ワクワク、ドキドキ、ハラハラ、そして爽快。「野焼きは私にとってレクリエーションです」という私記があるんですけども、病み付きになってですね同じ集落に毎年行ったり、野焼きだけじゃなくて、「輪地切り」も参加してくれてますしね。そして以外とですね参加者の中には大手の企業の専務だったり常務だったり偉いさんが来てるんですね、以外ですけども、そしてその人達はもうファンになって地元の農家、集落と親戚付き合いをして、定年後はここに移住したいという関係も出来つつあります。

そういう意味では、その単に専務とボランティアというよりは、人間に会いに行く旅とか、親戚付き合いとか、置村への移住とか、そういうテーマに非常に良い、リスクがあるだけに、運命共同体作りこそ「野焼き」は良いですよ。

小川

今のお話を伺いますと、ボランティアに対して腰が引けている状態から、少し積極的に、どういう訓練をしたり、どういう仕組みを作ったらそのすそ野が広がって、どういうところまでは手伝っていただけるかという、ひとつの展望が開けてきそうですね。

この辺りのところは、お互いにそのノウハウを学びあって、より良い方向を考えていくということが出来るんじゃないかと思えますね。まあ言うならば「集落の危機感作り、どうやってやれば可能か」、こういうところのテーマがひとつの課題としてあるんじゃないかと思えますね。

今までの話を聞いてですね、瀬田さんの方から少しコメントをいただければと思いますが、よろしくお願いします。

瀬田

まず、今の佐藤さんからお話がありましたけれども「ボランティア」というのと、それから高橋さんから「継続性」というお話がありましたね、ワクワク、ドキドキ、ハラハラと、結局ボランティアも苦しかったらやらない、楽しいと。ただし「楽しい」というのは「心が楽しい」って言った方がいいですね。手足なりなんなりは汗をかいたり大変で、息を切らせてハラハラってことはあっても、楽しくなければきっと「継続性」には至らないと思います。ですからそういう面では、さっと今佐藤先生がおっしゃったことは、みんな継続性があるってことは「楽しい」ことがそこにあるって、それが自分の身に返ってくるんだろうと思うんですね。

で、私は「日本型のボランティア」と言いますが、ボランティアを随分考えて、あ、その前に、実は来年は「エコリズム年」なんですけど、今年は「ボランティア国際年」なんです。国連でボランティアの、これは亡くなった小淵さんが外務大臣のときにニューヨークの国連総会に行って、「21世紀のスタート、誰はボランティアの活動で開きましょう。」という演説をされてそれが採択されて「ボランティア国際年」ということになりました。「国際ボランティア年」と言ってしまうと、何か日本から外に出ていって何かしなければなら

ないような誤解があるので、「ボランティア国際年」というのが、実は昨年の11月20日、ニューヨークの国連がオープニングをしたときから今年いっぱいをそういう年にしていきます。

ただ私、日本のボランティアと言いますが、じゃあ日本にボランティアはなかったのかと。ボランティアと言うのは志願兵だとか、あるいは中世の十字軍だとかというふうだったり、あるいは教会への募金なんかですね、そういうところのように思われがちですけど、日本では、きっとそういう「共同の活動」しているのは3つのパターンがあったと思うんです。

「尽くす」という、これは領主だとか庄屋さんにいろいろな仕事で呼ばれてやらざるを得ないという、まあ昔で言う「租・調・課」という、税金を納めるのもあれば「使役」に出かけていくというも徳川時代からありましたけども、その「調」といいますが「使役」、領主のために働くというようなことがありますね。

それから2番目には「務める」という考え方。これは村落の共同体の中では当然みんなで共同してひとつの仕事をしていないと成り立たないものがあります。例えば堤防を直すとか、あるいは溜め池をさらって水を溜めるとか、灌漑用水の水を引くとかいうようなことがありますね。これはすべて美濃の中での「お努め」でありますし、この中に火を使うという「野焼き」があったと思います。「火」と「水」はその面から言えば、個人が自由の意思でやれるものではなくて、やはりその美濃という共同体の中、日本でいえば「ムラ」というふうによくカタカナで書きますけれどもこの中で「みんなと一緒にやる」ことが「務める」という考え方だと思います。

3つ目は「つき合う」という中での労働力のやり取り。「オウ、ちょっと手を貸してくれよ」ということで個人と個人がやるハナシですから、場合によってはよく言われるのは「合掌道り」の田川郷(岐阜県大野郡白川村)の季節さだとか、田植えをするときなどですね。「今日はアンタのこころを手伝うから、明日はワチの田植えを手伝ってね」ってことで、今、意外とこのことについて「エコマネー」っていいんですが、日本でも、「私はこういう仕事が出来から、何がのときに手伝うから他のことでは助けてね」と、例えば「お年寄りのお世話をするから、ウチの庭木を刈ってよ」と。そういうときの何時間分とか何人分とか、ボランティアの代償の尺度として「エコマネー」という考え方が出来てきています。これは今、全国で、いろいろなところで地域のコミュニティとして出来てきています。

ただ「火を扱う」ということについて言えば、私は2の「務める」ということだと思います。そしてそれは小さな集落だけの「務め」ではなくて、日本列島の中で、やはり集落を守っていくということについて、都市の人も農村の人もが一緒に出来るルールを、「務める」という中に共に作っていくことができたいなというふうに思っています。

もうひとつボランティアでご紹介しておきますと、イギリスには「BTCV(British Trust for Conservation Volunteers 英国環境保護団体)」と言いまして、ボランティアの人達の手配をするトラストがあります。あるいは「ナショナルトラスト(The National Trust)」にも「エコーンキャンプ(ACORN Camp)」とあって、そういういろんな作業をする。ナショナルトラストの中で畑を直すとか、あるいは水道(みずみち)を整備するとか、そういうことをするプログラムが何百もありまして、それを年産1冊の本にする訳ですね。そして「こういうことに参加する人がいませうか」ということで投げ掛けていて、多くの人が早い着勝ちで申し込んで行く訳です。その際には「ここには(宿泊できる)小屋があり食事も提供される」、「ここでは(宿泊設備がないので)テントで生活をする」というようになってはいますが、これはボランティアの人達が夫はお金を払って行くんです。そんなに高いお金じゃありませんけれども、「ワーキングホリデー」って言いまして、自分達がお金を出して出向いて行ってそういう場所でボランティア活動をする。ですから日本からもイギリスのエコーンキャンプというナショナルトラストのキャンプへ行く人達もいます。行って見てやはり自分が発見される。楽しかったということがあるのでこれが継続となり、またその人ばかりではなくて次の人へと続いていくというリレーをしている。そういうことがこれからの「務める」という世界の中で続けたいなというふうに私は思っています。

小川

どうもありがとうございました。非常に有意義なコメントをいただいたと思うんですが、ボランティアという姿、これをもう少し日本語に砕いて言えば「尽くす」「務める」「つき合う」という、この辺りの言葉でいえば「籠」とか「てまがい(手廻し)」という分野なんでしょうね。そういう分野として取って、もう一度理解してみると、「火入れ」というのは「務める」という分野だから、これを集落のところで出来ないのなら、もっと日本国民全体として「お努めをする」という形の火入れの方式を考えることが大切なのではないかというはなしでした。

それから実際に今話されているようなところでは「つき合い」をしていくというところで、新しい都市住民と農村の人達との関係のあり方が認識になってきたというところで、イギリスなんかの有り様というものを学べば、もう少しそういう人達を刺激できるような機関を日本でも作ってみてはどうかという、今後非常に展開の可能性が深いという可能性のあるご提言をいただきました。これも考えてみなくてはいけないことかなというふうに思います。

さて先程、分科会からの報告の中でもお話がありましたし、今の調田さんのコメントの中にもありましたが、国連がいろいろと、その年その年のテーマを提起していますね。1999年は「国際高齢者年」だったんですね。これも余り大掛か

シンポジウム

のイベントにはなりません、好きな人が多かった人多いと思うのですが、今年は「ボランティア国際年」という名前になっておりまして、ボランティア、これは何も福祉だけの問題じゃありません。こういう環境保全の関係のボランティアも含めましてもっと考えていこうという、そういうことになっているということですから、ちょうどタイミングよくこのシンポジウムでもですね、そういうことが話題に出来たというのは嬉しいと思うのですが。

さて、来年はエコツーリズムということの国際年だという感じが佐藤さんの方からありましたが、どうもその辺りのところがひとつの「到達点」が有りませんし、準備ということになると思いますが、現状として、これだけ草地というのが日本の中でも減耗の状況になってきていると、しかしそこでは新しく英知を集めて「草原学」のようなこともやらなくてはならないだろうし、「草原に関わる作法」というものをもう少し再確認していかなければならないだろうし、更には「草原十字軍」のようなものを組織しなければならぬというような課題が出てきたということ、そういう世界の「エコツーリズム」というようなことに関してですね、どう考えていけば良いのか、佐藤さんの思いということで結構ですから少しお話しただければと思いますか。

佐藤

何か突然アジアの人達も、欧米先進国の人達と同じように国際なんかの活動に参加するようになりましたよね。我々日本人、特に私も英語が下手で、気後れするからアジアの人に連れをとってますぐても、エコツーリズムとかグリーンツーリズムというようなものはアジアでもあったりすると最近、政府が動かして、観光の新しい姿として事業化が盛なんです。

例えば一番強烈なのは、中国政府が99年を「エコツーリズムイヤー」と定めて雲南(省)で国際花博をやりましたけれども、中国政府ははっきりとした戦略を持っていて、内蒙古の草原を生かしたグリーンツーリズム、雲南とか内陸部のエコツーリズム、それを今までやってきた東部の海岸都市の発展に対して、所得では7分の1しかない内陸部の開発、「大西部開発」と言っていますけれども、その国家戦略としてグリーンツーリズム、エコツーリズムを位置付けて、観光収入としてGDPの8%を2010年には獲得するというので、今ものすごいことになっています。

今、7億人位の中国人が旅行をしていると言われていて、そして年間1,000万円を越える人が1,000万人いると言われています。10年後は1億人だと言われています。その受け皿を、早く我々は、九州から北海道まで連携して、受け皿作りを急ぐべきではないかと思います。

アジアの他の国でも韓国でも政府が最近「観光文化策」というのを作ってツーリズム産業を国策として推進していますし、タイでもそうです。タイの大学には「エコツーリズム学部」もできております。それに比べると、アジアの人達

に比べると日本人はボケーっとしてるんですね。

まあそういうことではけれども、アジアのエネルギーも受け入れるような形で、来年一掃にどうでしょう、草原をテーマにした、例えばアジアでは草原が砂漠化する危機があったり、熱帯雨林を草原にしたんだけどその後がうまくいかなかったりとかあって、要するに「外貨を稼ぐツーリズム」というのに対して猛烈に熱心なんです。そういう「産、官、民」一体の、アジア連携の「国際シンポジウム」なんかを来年夏以降でやりませんか。

その「手始め」といってはアレですが、実は昨年、熊本大学で「地域連携フォーラム」というのをやって「アジア連携のツーリズム」「草原を生かす」という国際シンポジウムをやったんですよ。そういうことで中国、韓国とはチャンネルが通りますし、タイとかもありますから、是非、環境省なんかで、農水省や国土交通省にも呼び掛けて、今度やりませんか。

山田

いや、規模がだんだんと拡大になって来いのかもしれません。

草原の問題、草地の問題というのは、おそらく日本国内ではかなりマイノリティーとしてみますが、少数派の「課題」ということになりまますけれども、特にアジアの世界を見てみた場合には、この資源というものとのかかわりなくしては、新しい意味での「観光」というんでしょうか、それはエコツーリズムとかグリーンツーリズムとかって言うのでしょけれども、もっと言うならば「サステナブル・ツーリズム」って言うんですかね、「持続可能なツーリズム」ということに到達するのも知れませんが、そういう共通の課題をこのシンポジウムから提起できれば非常に面白い動きになるのではないのでしょうか。

日本では、どうも国策に対する取組みというのは日本政府を通じてしか出来ないというような、何かそういうちょっと壁が厚いような感じになっていますけれども、今の国策は全然違います。政府と同じようにNGO、こういう民間の団体、あるいは一地方の自治体が一緒になって、国策に直接、いろんな形で関わるということが出来るというような体制になっていますから、そういうことの実験をやってみると新しい展望が開けるかも知れません。

そしてまたそういう動きの中では、先程ありました「ワーキングホリデー」というご紹介がありましたね、こういう動きというのは、今結構、九州辺りでも農田の保全のためにイギリス辺りからワーキングホリデーでやってきて、日本の「農田ボランティア」と一緒に行動しているなんてこともありますから、そういう「新しい動き」が出てくるかも知れませんが、そこでまた意見交換があれば、今までは違った「新しい動き」が出てくるかも知れないと、まあそういうことでしょうね。

今のような構想が出ましたが、田村さん、こういう話を聞かれてどういふような感想を持たれますか、今のような、例えば世界の草原を持っている人達との話し合いの機会が

日本で持たれるといふようなことが今話されたんですが、こういう考え方についてどういうふうに思われますか。

田村

ちょっとうぬと、何て言いますか、ピンと

小川

まあ今はどんなところでやっても、きちんと通訳が付きましますので、いろんなところで話をすることが簡単にできるとは思ってますけどね。

宇佐見さんの方は今のような話を聞かれてどういらるかに思われますか。

宇佐見

私、年に数回アジアに行かせていただいておりますが、地域の産業、特に後発地域、山間部だとか、日本でいえば中山間地ですね。そういうところ、森などが残っているところは「生物の多様性」ということで、何とかそれをうまく観光ビジネスに乗っけていけないかということに非常に興味を持っている訳です。それも先程あったように関係省庁が非常に進んでいる、日本版でいえばインタープリターを育てるだとか観光専門の学校を作るだとかをしている訳ですね。

勿論それを支えるにはNGOの活動が活発なんですわ。やはり従来のような環境が多様な地域、条件不利地域だといわれる地域で生かせる資源は「観光」だと、それもやはり「持続性」を持っていきなさいけない。それを維持管理するのは、NGOは一時的にお手伝いはできるかも知れないけれども、やはり長くお付き合い、維持管理するのは地元の方々ですからね。地元の方々の能力も高め、そしてどうやって自分達の生活と結び付けていくことが「観光につながる」のかということを一生涯考えている訳ですね。だからどうしても「そこに住んでいる人達の能力を高める」ということごとをなくして、やはり持続的なツーリズムは成り立たないと思っております。

私、以前京都で、都市と農村の関係に関する調査をいろんな人達と、私と、農学者とですね、歴史学者というんですけど、農業史をやってらっしゃる方と一緒にやったんですけど、そのときに私が感動したのは、日本の観光は、これは私自身の拙断と偏見なんですけど、どうも日本の観光は「商品の切り売り」をしてきたんじゃないですかね。だからストック(在庫)をどんどん、どんどん減らしてしまっただけで、流れでやってきたから、究極的にはストックがなくなれば産業が終わってしまう。どうもこれからは「生身」ですね。草原の中にある文化、そこに関わっている人達の生活みたいなものをもう一度見直していくことで新しい観光資源を作り上げていく。そこにNGOなどいろんな人を取り込んでいく、そういう作法ですね。文化を育つめ直していく、ある

いは作っていく、そういうことをもう一度「掘り起こす」ということですね。そして「開拓」ということをどういう形で具体化するのかということが大切ですね。私はいつも「開拓」というのが好きなんですわ。言葉として、どう開拓していくのか。そして掘り起こすということですね。やはり何十年、何世紀にわたって培われた文化には、やはり見習うべき「作法」的な「英知」がある訳ですね。それを掘り起こしていくことが、今話題になっているツーリズムをですね、持続性がある。地域の文化だとか他域の方達からいろんな形で開拓する。まさに21世紀のひとつの「社会のあり方」みたいなものを教えてくれるんじゃないかと思えます。以上です。

小川

そうですね。まあそういう草原に関わる人々の生活のあり方、草原と一言でいっても個々の状況は随分と違ふんだけどそういうものもわきまえていくということ。また草原というものの視目の価値というものをそこに見出していくということになりますと、それはただ単に「草原」という言葉でくくるよりも「草原文化」という言葉でくくった方がいいのかも知りませんね。そうした「草原文化」について国際的に話し合いができるような場になればオントにいいだろうな、という、なんか夢が湧いてきますね。

高橋さんの方から、今のような構想について何がご意見があれば。

高橋

そうですね。私の分科会は「生物多様性」が観点でしたが、「生物多様性が観光行政と結び付く」というのが実は諸外国の今の現実、というか新しい試みだと思っておりますね。これまでは「生物多様性」という何か学術者のマスターベーション(自己満足)で終わっていたようなところもあるんですけども、そうではなくて、もっとグローバルに見たときには、今草原がおかれているのは、実は大塚さん(大塚典雄、熊本大学非常勤講師)がよくおっしゃるんですけど、「渇死の状況」だとおっしゃるんですね。で、渇死の状況にリパテーフを貼ってもしょろがないんだと思っておりますよ。いわゆる傷口をふさぐような、例えばちょっとした火道への資金提供とかですね。まあ僕も兼死ですから農水省の「補助金制度」みたいなものですか。(農水省関係者が)誰もいしませんからいいんですけどね。今日は(笑)。そういうものはいわば傷口をリパテーフでふさぐようなもので、そうじゃなくても「輸血されるもの」でなくちゃいけない。そうすると人材を生み出すとか、文化を生み出す、文化を発見すること、あるいは技術を提供すること、その技術も高度化していくことも次の段階で必要だと思うんですね。

でも「輸血」でもやっぱり献血なんだと思うんですね。で、「造血」しないと、若死らないといけないんじゃないかと思うんですね。そうすると事業への展開だとか、ツーリズム

を食むそうした農業を興す、地域振興へと持って行く。と、そうした観点から草原をもう一度捉え直して見るのも、ひとつの手ではないかという気がするんですけども、すみません、いらんことを言ってしまいました。

QVII

いや、非常に大切な視点だと思いますね。

まさに「今、草原で何をすべきか」という、必要なことというのをですね、まさに絶死の状態になってるんだから、何か「パタープのようなもので傷口をふさぐような形をやったってそれだけでは消えないもう少し「体力」を戻してゆく、「造血作用」まであるようなプログラムを考えていかなければならない。そうやってくるとそこには「人材の育成」という問題もあるだろうし、これは農家で言えば「後継者問題」ということになるかも知りませんね。後継者がいなければ新しい農村の住民をどうやって作り出すかということでしょうし、草原に對する人間が少なくなってきたというのであれば新しい草原に関われるような、そういう知恵と技を持った人達をどう育成していくかということでもあろうかと思えますね。更にその人達に対して新しい生き方だとか技術だとか、そういうことを如何にして授けていくか、あるいは新しい知恵というものを作り出していくかということでもなければならぬでしょうし、それらが今の社会では経済の仕組みに乗っからなきゃいけない訳ですね。お金が掛かる訳ですから、お金がそれに伴って回るような仕組みをどうやって作っていくのか、この辺りのことを真剣に考えてみる必要が出てきた。いうならば「草原をビジネスチャンスとして考える」ということができるような条件をどうやって整えていくのかというところが非常に大切なことになってきているという問題提起は、これは恐らく「次のシンポジウム」、あるいは「永遠のシンポジウム」かも知りません。みんなでそのことについての知恵を交換していかなければならないんじゃないのかなというふうに思います。

それでは、もう時間が迫って参りましたので、こちら辺りで「まとめ」の方の話になっていくと思いますが、まずこれまでのところの話に付いて、またひとつコメントをいただきたいと思います。どうかよろしくお願いします。

新田

実は「まとめ」にふさわしくないかも知れませんが、最初に私がこの秋吉台とどんな関わりを持ってきたかということについて、ちょっとお話をさせていただきたいと思えます。

今朝の講演講演でも、ここ秋吉台には3億年の自然の歴史があり、そして人が関わって2千年たっておっしゃってましたね。実は私は58年、秋吉台、秋吉洞と関わりがあります。私は今82歳でありますけれども、7歳のときにここに来たことがあります。それはどういうことかと言いますと、私の母親は防府(山口県防府市)の三田房の出身で、唯一の叔母が萩(山口県萩市)にいます。戦争が終わった年は無理です

けども、昭和21年には母親に連れられて三田房に降りて、そして石田という防府の田舎の方に行って、それから森に行く。その際には秋吉台、秋吉洞に来た、というのが私の最初の旅だったと思うんですね。

それからいろんな仕事の関係で、特に環境庁の仕事を行いましたから、ここで自然公園大会があったとき、初めて皇太子さまと皇后さまがいらっしたというときには、もう役人は辞めておりましたが、その役取りをしたということでもやって参りました。

その後、実は私は朝日カルチャーセンターで「自然に豊く」というツアーを持ってた訳です。これは自分なりにエコツアーだと思っておりますから、佐藤さんのエコツーリズムのお話と非常にぴったりとするんですけども、それでここに来たことがあるんです。秋吉台の野焼き(山焼き)をテーマに、野焼きを狙って、東京から十数名連れて、前日から泊って、「さあ野焼きだ」と思ったら雨が降って中止になりました。これは仕方ないんで、「じゃあ、多分よ」というので、そこにいる山野君だとか地元の方々と一緒にこの山上を歩くことにしたんですね。そうしましたらドドッとイノシシが7、8頭飛び出してきたんです。彼ら(東京からのツアー客)はイノシシに出合ったのは皆初めてなんですね。で、きっとこれは野焼きをしたらこのイノシシはどうやって逃げたんだらうかと思いましたが、私も写真を撮りたいと思ったんですが、やっぱりもうイノシシの方がはるかに逃げ足が速い。

で、そのときに思ったんです。エコツアーとかエコツーリズムとか、私が企画をする時には、今北海道に行って雪の中を歩くとか流水の上を歩くとか、あるいは西表島に行くとかって企画を組む訳ですが、実は本州でそういうツアーを組むというときにはどうすればいいのかなというのを考えたんです。まあ野焼きというテーマがあったから良かったんですけど。

ただ、来てみたら野焼きはなくて、じゃあ山上を歩きましょうということ歩いたときに、来た人はよく「こんな所は時々来るけど、車で30分位で通り過ぎたところだ」とおっしゃる。「しかし歩いてみたら、今までの自分達の旅になかったものが随分発見できますね。だってイノシシ見たの初めてですよ。」というふうになっていきます。

そうやっていったときに、実は「自然」というものは、新しいものは、決して期待していたものに出合えなくても、それに代わる別のものがちゃんと待ち構えている。そういうものが「自然」だと私は思ってるんですね。ですからそういう自然に我々がどれだけ合わせるか、自然がメッセージしてくれているもの、本来の踏破の舞台ではなくても、それにチャンネルを合わせるのは我々なんです。人がチャンネルを合わせるしかないんです。自然の方は天気が行けば雨が降くこともあります。そういうことを常に考えるということが実はエコツーリズムなりエコツアーには大切なことだと思っています。

ですから私は旅をするときには、勿論「時刻表」というの

は遺棄の手段として必要なのですがその前に「理科年表」がやはり手放せないんです。それは日の出が何時なのか、海であれば大潮がいつなのか、潮の干満がどうなっているのか、というもののなかでツアーというものを組み立てていくということが必要になると思っているからです。

ですからこの秋台まで、勿論4月、5月の時期、あるいは雪の青々とした草原の景色も、それは素晴らしいと思いますが、枯れ野であるときもまた素晴らしいと思います。そして場合によれば明日火が放たれるかも知れないというとき、しかしその火が雪で駄目になったときでも、それは「また来年を狙おう」ということになると思うんですね。そのときに、どれだけ自然に対して自分の心が近寄っているかによって、行ってみて「つまらなかった」と思うか、「また来年挑戦しよう」と思うかというようなことが分かれるのかなあ、というふうに思います。

これは今、先生のお話とは離れたかも知れませんが、まあみなさんも「秋吉台が大切な」あるいは「何とかがしたい」というふうにお思いでしょうし、佐藤先生にとっての阿蘇は、秋吉台のみならず、あるいはそれ以上かも知れません。それぞれのところにあるものに、私達の方からいろんなチャンネルを持って近付いて行くということが、私は大切だというふうにお思っていて、あまり「まとも」にならないかも知れませんが、勘弁していただきたいと思います。

小川

どうもありがとうございました。

新田さんも随分と良い付き合いの中で、この秋吉台と触れ合ってきたということで、その中でのひとつの「知恵」ですね。「理科年表」を片手に接するということというのが、エコツーリズムのひとつの手法ではないのかということですが、この辺りからのいろいろな知恵ということになりますと、またそれぞれの方がお持ちだと思います。

さて「まとも」の時間になっておりますので、ひと言ずつ感想をいただいて、最後に私の方で締め括らせていただきますが、それでは佐藤さんの方からひと言、今日のシンポジウムに参加しての感想を、ひと言でまとめてください。

佐藤

田村さんが馬を引いて女性の方が乗っている写真、すごく心に響きました。私は「火道切り」、「権地焼き」を、「馬の道」という形で使うといふんじゃないかと思えます。もし、トラックの道として整備することができれば、馬車の道として整備してもいいんじゃないかと思えます。

イギリスのトラスト運動というのは、原点はエンクロージャーとして囲み込まれる牧草地を農民が自分達がレジャーをする権利のためにコモンズ(共有地)、もしくは入会地として守ったという戦いの歴史でありまして、その中で20世紀の余暇文化、ツーリズムというものが出てきた訳だし、ゴルフだってそうですし、フットパスの散歩のウォーキングも

そうです。私どもは日本においても都市の人が自分の生きるかけがいのない空間として草原にアクセスする権利みたいなものを受入れながら、共通の「道」として、歩いて、馬に乗ったり、馬車で走ったり、自転車でとか、そういう形でいつもそれがツーリズムのルートとして使える形で、「権地」が切れるといいなあと思えます。

小川

ありがとうございました。

馬がいた時代を思い返して現代版「馬の道」として「火道」を見直してみると、そこに新たな可能性があるのではないかと今回提案でした。

それでは高橋さんの方から、今日のシンポジウムに参加してのご感想をお願いします。

高橋

私は三瓶にいますので「生業と草原」というものが身近な存在としてある訳で、例えば秋吉台のように観光のために火を入れる、あるいは植物を守るために草刈りをするという視点が、新しい管理の方法として、頻りに目に入るというのは新鮮な思いがしています。

感じたことというか、先程お話ししたように「造血」ということを考えたときに、今までのような省庁から県に降りて地元へ降りてくるというような「トップダウン」のシステムではなくて、今度は地元の力量が開かれてくるだろうと思うんですね。ですから地域復興等を手段にとって「ボトムアップ」のシステムに挑戦して欲しいな、という気がします。ですから逆に言えばそれだけの能力や人材が必要だと思うので、人材が唯一じゃないかな、という気がします。

それから生業という観点から言うと、草原がこれ程まで少なくなったということは、ある意味では希少価値を持っている訳で、逆の「ビジネスチャンス」と考えてもいいんじゃないでしょうか。だから言わば、先程おっしゃったように「草原文化」として、文化的な「遺産」のひとつでもある訳ですから、法隆寺のように保全していくということも、決して市民権を得ないことではないんじゃないかなと思います。ただその「声」なり「データ」なり、「裏付け」をきちんとみんなを出さなきゃいけないんだなと、自分でも思っています。

で、その「文化」を守る上では、生業によって守られる部分もありますし、ツーリズムによって守られる部分もあるだろうし、ボランティアによって守られる部分もあると思うんですけど、キーワードとして「持続的な管理」とか「持続的な保全のあり方」ということが大事だろうと思うんです。ですから資源を資源として活用しようとしてもその資源を失うような生業や形態では駄目だということですね。

草原を持つ人達や、草原を持っている自治体、そこに住む地元の人達にとっては、草原が森林に移ることも「草原が壊れる」ことだと私は思います。勿論生態学的に言ったら「森林の方がいい」という人もいらっしゃるでしょうが、

シンポジウム

「思いを持っている人達」にとってみれば、放置して草原が森林になることは「草原が壊れる」とこと言ってもいいんじゃないかと思っています。

川口

そうですね。草原を放置するのも(自然破壊)のひとつとして危機的にとらえた方がいいのではないかと。非常に野の腐いお話だと思います。

やはり資源というものを持続的に活用し、守っていく。持続可能な活用の仕方、そういうものを続けていくことが必要ではないか。そのためには何よりも先ず、「トップダウン方式」で中央官庁が何を考えているからそれを自分達のところでどうするかというような「逆立ちした論理」ではなくて、自分達の暮らしている地元から自分達の次の生活をどうしていくかということを中心に考えて、「ボトムアップ型」でいろいろな計画などを提起していく、そういう「力」がこれからは必要なのではないかという、非常に根本的なところでの問題提起をいただきたいと思います。

それじゃあ宇佐見さんの方から同じように感想をお願いします。

宇佐見

私は単純に2つだけです。

ひとつ目は、私にとって稲作は非常に身近なものなんですが、草原は、稲作、水田では味わえない感動を与えてくれるところ。私にとって草原とはそういうところであると言うことです。

2つ目は、吾橋先生のおっしゃることと重複するかも知れませんが、やはり今一度、秋吉町の方達がどういうふうな形で秋吉台、上(秋吉台)と下(地元)が関わっているのかを学ぶことで、自分達の地域づくりの中で秋吉台をどう生かしていくのかというものを作り上げていけないといけないんじゃないか、その上で「できること」と「できないこと」、すなわち誰とどのような関わりを持っていくこと、作り上げていくことが草原、あるいは草原文化というものをもう一度「21世紀型」として作り直して、22世紀につないでいけるのかという、そういう壮大なビジョンを「遊び心」が発端でもいいかも知れませんがやってみる。そしてその中でどういうことができるのか、誰とどういうことができるのかということを実体化していくことそれがやはり大切ではないでしょうか。

今回、いろんな方とお会いできて、いろんな思いを持ってもらえることを聞くことができ、非常にこのシンポジウムは私にとって刺激的でした。また今後もこういうような感動を味わえるような場に来ることが出来るよう念じています。以上です。

川口

はい、ありがとうございました。

先程佐藤さんのご紹介になった山焼き体験をした人の言葉の中にも、「ワクワク」、「ドキドキ」、「ハラハラ」、「爽快」というような言葉が盛りでしたが、まさに稲作農業の現場では得られないような感動が草原では得られるんだ、というところがこれは「価値」としてもっと内容を深めてみる必要があるかも知れませんね。またそういうものをどうやって体験していくかというところをもう一度みんな一緒に考えてみようというご提案だと思います。

それじゃあ田村さんの方から、よろしくをお願いします。

田村

この場で失礼かとも思いますが、私が考えておることなり、お願いということをひとこと。

この場には美東町、秋吉町の両町長様方、あるいは鎌倉の方がおられると思うんですが、草刈りはどうしても、山焼きはどうしても止めることができません。それかといって私共もこうした高齢化時代ですから、果敢でいうと私のところは28戸ありますが、その8分の2は高齢者の世帯です。そして、美東町長さんと秋吉町長さんにお願ひなんですが(毎年2月の)第3日曜が山焼きです。明日がですね、これが雨が降ると第4日曜になる訳です。それが雨が降ると日曜(順延して平日実施)になるんですね。こういうことがよくあります。そこで私共の後継者、若い人は替と違ってみんな動機を持っておる訳です。私達の時代はみな農業を嫌いでおったので後継者がおりましたが私もせがれがおりますが(平日実施だと共同作業に)私しか出られん(出る者がいない)訳ですね。月曜(平日)は若い者が(山焼きに)のために仕事を休むことが困難なんですよ。そうすると草をついでても(秋吉台に)上がらなければならぬことになる訳です。そこでボランティアとか、執行部というかが防備隊とかの手伝いが欲しい訳です。ですからひとつの願いは、第3日曜、第4日曜という、山焼きの実施日は日曜日をかたどるような方法にさせていただくと、私はいいのではなからうかと思うのがひとつです。

それとさっき馬のことを言われたけど、私は小さいときからずっと、爺ちゃんのその前庭から農耕用の馬、今の世と違ってみな畜産で耕耘しておったんですから、これに替わらせる馬を刈りに、お父さんと(馬を)連れて(秋吉台に)上がっておりました。私がそういう騎兵で草刈りは、昔の言葉で言えば高等科(旧制の高等小学校)の頃からやっておりました。そして青年学校を卒業した頃に「草刈り競技会」がありまして、小さいときからやっておるから、自分の目標のようなけれど、技術がある、いくら付いておる訳で、だから青年団から(「草刈り競技があるが、あなた出てくれんか?」)と言われたときに、まあ自分の勉強のために出たことが昭和22、3年頃だったと思うんです。

それで昭和35、6年頃になって(農業が)機械化になりました。そして食料もたっぷりあるようになりましたので、秋吉台まで行かなくても、田んぼでさえも休耕が始まったよ

うな時代ですから、そういうような馬で遊ぶようなことが必要なくなったから、皇馬として何かこれを使おうと思って観光馬車をお願いした訳です。ですがまだ不慣れでございましてから阿蘇山とか馬取砂丘とか小豆島とか、研修と語ったらいいですが、見に行っただけで終わったのが昭和37年です。

そうしたところが、始め頃は、さっき言ったように天然記念物、文化財ですから、ここに馬をつないだらいいとはいかぬ、ここを通ったら(道が)ほげる(穴があく、壊れる)とかいうような問題があった訳です。でもそれをなんとかして、秋吉台の麓で暮らす者としてなんとか頑張ってやった。(秋吉台と)私達の一番の糸のつながりはやはり採草でした。でも遊ぶことも出来なくなった(餌や肥料として)利用することがなくなったし、(昭和)35、6年になると化学肥料が出来ましたから薬に(農業が)出来るようになった訳ですね。だから(農業への)馬の利用をあきらめて、そういうことで始めたのが観光馬車です。

(当初)そこに36人おりまして、その中で私がまあ若い若手(者)でした。そして一昨年来まで若手が続いておりますので続けておりましたが、改めて現在は馬も馬車もおりません。残念です。

その観光を活かしたいのが私ですけども、(観光馬車の方も後継者がいなくて)若い者にいろいろ募集して、町長さんからも「どうか続けてくれ」という言葉も与かりました。でもねえ、大きい力がある動物ですから、そういう力がある動物を扱いきる人でないと、お客さんは素人ですから「もしかし」というようなことがあるといけませんから、扱いされるような技術がないとできないから、なかなか「ハイ、観光馬をやりましょう」ということにならないですね。

そういうことですから、なんとか、今日は「山焼き(シンポジウム)」ということですから、先程に戻りますが、東栗町の町長さんとお秀町の町長さんと考えていただいて、出来ることでしたら日曜日に、遅くなくても日曜日に、(山焼きを)していただくと私も幸せがると思う訳です。この場でご無理ですけど、ハイ、以上です。

小川

はい、ありがとうございます。非常に具体的、切実な思いが聞かれましたけども、

いずれにしても、こういうところから出てきた「課題」というのはそれぞれ具体的に解決していかなければならないことがたくさんあります。それと同時に、やはり全体として、こういう草原をどうするか、あるいは草原を守るひとつの技術としての山焼きというものをどういう形で持続できるのか、もし持続できないとしたら、一体その代替案はどのような形で展開すればいいのか、草原の全体を守ることができるのか、その中ではゾーンニングをして観光用に見せる草原、あるいは技術的に代替案を考える草原、あるいは自然といいますか、それに任せてままで森林化することもやむなしとする草原、そういう、「ゾーンニング」と言います

けれども、地区を分けて管理することということも必要になってくるのかも知れません。

また、実際にはまだ、そこには様々な権利関係というものがある訳ですから、自分達の権利があるにも関わらず、様々な規制の中でそれを活用できずにいて、負担だけが来るということに対する不満というものがうっせきするということになれば、結果としてみれば、せっかく御定公園というふうに、「適用しながら多くの人々にその公園としての機能を提供する」という概念そのものが崩れてしまいます。様々な意味でこの「草原」というものが持っているテーマというのは、21世紀、どれもこれも逃してはならない重要な課題だろうと思います。

今日のこの話し合いの中では、「まずは草原」というふうに言うのではなくて、草原と人間の関わりという「草原文化」として、もう一度見直してみようじゃないか。今まで個別々に考えられていた個別科学の中での草原のとらえ方ではなくて、できれば「草原学」といったようなことを構築することも必要ではないか。ただ単に「ビジョンを描く」という時代を超えて、次の「行動を起さなければならない」ということになる、「草原に関わる作法」というものをもう少し明確に確立していく必要があるのではないかと、こういったテーマは、恐らくこの日本の中では非常に希少価値になった草原を守っている自治体の共通の課題ではあるかも知れませんが、この地方の自治体がむしろ積極的に、こういう草原の「環境計画」というものを立てて、その「環境計画」をもって国の省庁と連携する必要があるのではないかと、そういう意味では国の省庁に対して一緒にこの問題について考えてもらえるような「仕掛け」、あるいは「調整」と言うものを求めていくということが必要ではないかと、という話もありました。そして出来れば来年度、ボランティアの話が今年に出ましたが、「ボランティア国際年」としてはふさわしい会になりましたが、来年は「エコツーリズム」の国際年と書くことになっていきますから、それをきっかけとして出来れば「世界の草原エコツーリズムシンポジウム」、もし規模を小さくするとしても国際的な観点から同じような関心を持っているアジアの「草原文化国際フォーラム」と言ったようなものを提起することが良いのではないかと、かなりいろいろなアイデアが出て、どれもこれも検討に値する提案であったかと思えます。これは冒頭にあった栗本先生からの問題提起に十分に答え得るディスカッションもできたのではないかと感じております。

非常に熱心な議論をしていただきましたパネリストの方々、そして貴重なコメントをつけて下さいました瀬田さんに、拍手をもってこの会を締めたいと思います。どうもありがとうございます。

司会

ありがとうございました。

大変熱心な1時間50分に渡るご討議、お疲れのことと思

シンポジウム

います。秋吉台からアジアが、そして21世紀が見える。大変
賑やかなシンポジウムになったと思います。今一度また
な相手をお送り下さい。ありがとうございました。

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001
全国山焼きサミットin秋吉台



■サミット

全国山焼きサミットin秋吉台

北海道小清水町	企画振興課長 阿部 潤一	宮崎県甲陽市	市長 野辺 修光
奈良県曾根村	収入役 平田 徳和	山口県美祿市	助 役 小竹 伸夫
島根県大田市	商工観光課長 松村 淳真	山口県美東町	町 長 清水 武人
大分県久住町	商工観光課長 川越 賢一	山口県秋芳町	町 長 上利 礼昭

司会

それでは時間がまいりましたので「全国山焼きサミットin 秋吉台」を始めさせていただきます。

まず今回のサミットへの参加者のみなさまのご紹介をいたします。北海道小清水町からは町長代理で企画進行課長の阿部潤一様。奈良県曾根村からは助役の平田徳和様。島根県大田市からは市長代理で観光商工課長の松村淳真様。山口県美祿市からは助役の小竹伸夫様。大分県久住町からは町長代理で商工観光課長の川越賢一様。宮崎県甲陽市からは市長の野辺修光様。山口県美東町からは町長の清水武人様。山口県秋芳町からは町長の上利礼昭様。以上のみなさまによりまして熱心なご討議をいただくと思えます。本サミットの議長は地元秋芳町長の上利礼昭様にお願いたします。よろしくお願いたします。

上利

それでは只今、司会の方からご指名をいただきましたので、慣例に従いまして、お許しをいただきまして、本サミットの議長の大役を勤めさせていただきたいと思えます。いずれ不慣れでございますし、こうした経験もございません。ご参会の皆様方のご協力をいただきまして、帯られた時間ではあります。素晴らしいサミットになりますよう、よろしくお願申し上げます。

今日は先程来お話がございますように、北は北海道、南は九州から、8つの市町村の代表の方に来ていただきました。草原を取り巻く問題につきましては先程、我が町の博物館長が「基調講演」で申しましたように、極めて草原を取り巻く環境は厳しい環境にある訳であります。地域地域でそれぞれの実情も異なりますし、それなりに「課題」もお持ちだというふうに思っております。

今回のサミットは数えまして第4回ということになると思っております。第1回は、大分県の久住町で開催されました。で、



その後大田市さん、そして小清水町、とまあこういう形で今回この美東町、秋芳町でこういう会を持つことになった訳であります。今まではこのシンポジウムに、あるいはそのサミットに付きましても「野焼き」という、あるいは「草原」という言葉でありましたけれども、今回特にサミットに付きましては、秋吉台を取り巻くこういう行事等々は「山焼き」とまあこういう呼び方で永く伝わっておりますので、あえて今回は「山焼きサミット」とまあこういうことをお願いをしている訳であります。その辺に付きましては、どうぞよろしくお願いを申し上げたいと思えます。

先程来申し上げましたように草原を取り巻く環境は、農耕、あるいは社会環境等々の変化によって、大変変わってまいりました。これをまあどのように今後維持管理をするのが、あるいは現状はどうなっておるのが、本日に参会の皆様等々のご発表いただきまして、そして後ほどできますならば、共通課題の「宣言」というところまで、ご協力をいただければ大変ありがたいというふうに思っております。従ってまあ大変あの恐縮ではございますが、時間も限られておりますので、まあ5分程度で各市町村の実情に付きまして、

課題の現状なり、また将来の検討課題等々があれば、ご発表をいただくと大変ありがたいというふうにお願ひしております。はなはだ失礼ではございますが、私の方でご指名を申し上げさせていただきたいと思ひますので、よろしくお願ひを申し上げます。

それでは、昨年第3回の車原ゼミットを実施されました。北海道の小清水町さんからお願ひができたは大変ありがたいと思ひます。よろしくお願ひします。

阿部

小清水町の阿部でございます。まずもって昨年六月に、私共のところでも第3回目のシンポジウムを開催させていただきました。全国各地から大勢の方にいらしていただきましたこと、心よりお礼を申し上げます。また本日は町長がどうしても離れられない用務がございまして出席できなかったこと、お詫びを申し上げます。また私共の野焼きの関係でございまして、先般「原生花園」というところで、網走国立公園の中の一部でございまして、砂丘のところ、それと湯淵湖という湖がございまして、そのオホーツク海と湯淵湖に挟まれた砂丘地帯が原生花園となっております。これらの位置関係につきましては、ま、ロビーの方にパンフレット等ございまして、ご覧いただきたいと思います。

さて野焼きでございまして、実は昭和50年頃から私共の原生花園、百万人近くの観光客の方にお見えになっていただいていたけれども、放牧を中止した、それから、実はまあ、そこにところに創設本線というJRの路線がございまして、そこにところで蒸気機関車が廃止になりましてディーゼル機関車になったというようなことで、まあ、楽しんでおりました「野火」がなくなってしまったと、こういういろいろな状況が重なって、あの一、既存の花々、エゾスカシユリ、エゾキスグ、ハマナス、それからセンダイハナ等、大変衰退していったと、こういうような状況が顕著になってまいりました。そういうようなことから本町では、昭和58年からですね、あの本町第1回で3年まで野焼き、これは期間を設けた訳でございまして、学術的な、ま、調査の不足というようなこともございまして、「野焼きをしたからどうなった」というようなことについても実際は判らなかつたというのが現実でございまして、ただ、平成2年から北海道の方が中心となりまして、私共も入りまして、対策協議会を設置していただきまして、その中で、本年までずっと野焼きを部分的に、いっぱいにする訳じゃなくて、地域を分けながら野焼きを続けてきたところでございまして、

まあ、その成果等については、いろいろなものが回復してきたということもございまして、また新たに問題も生じてきたという部分もございまして、野焼きをすることによりましていろいろな形で復活してきた花々が多くあります。その反面、実はまあ、ネナシカズラというような寄生植物がございまして、これは野焼きをすることによって逆に発芽が促

進されて、害害になるという現象も出てまいりました。こういうような問題点も現在ございまして、相対的には野焼きをすることによりまして、花々がある程度復活してきた、「これは結構強くやっていかなきゃならない」というように考えてございまして、

ここで研究も行われてございまして、現在北星学園大学の教授でございまして、辻井謙一先生、それから本日お見えでございますけれども、岐阜大学の津田 智先生、それから北海道大学の富士田裕子先生が、一生懸命研究をいただいております。その成果等についても、若干触れさせていただきたいと思いますけれども、ま、その研究の中からやはり5年サイクルぐらいで野焼きをしていくことが一番良いんじゃないかというような方向性が若干見えてまいりました。その原因、あの状況というのは、毎年毎年、野焼きをしておりますと、花の数が減ったり、それから、ま、繁殖できなくなったつというふうな状況もございまして、5年サイクルぐらいが適当なのかなというふうな、今現在方向性が見えてきてございまして、

それから私共のところ、先程申し上げましたように、昭和33年に国立公園に指定されて以来、ま、大変多くの観光客の方にいらしていただいておりますが、現在策定中でございます、第4次総合計画の中でも、私共の町、「自然と共生する町を目指します」というようなことで、それを大きな目標に掲げて、町づくりを進めよう、こういうことでございまして、そういうような意味でも、大変原生花園の野焼きというのは、重要な課題になっておるところでございまして、

また、私共のところの今後の大きな課題といたしまして、先程来お話がございましたように、野焼きも行政、それから関係機関が中心になって行っておりますけれども、今後ボランティアの方々を、どのように巻き込んで町全体でやっていくかということも大きな課題だとこのように思っております。また野焼きばかりではなく、私共、今年は適時期に「抜き取り」って言うんでしょうか、先程申し上げましたネナシカズラを抜いてしまおうとか、それから、アメリカオコバズミという植物がございまして、これも適時期に抜き取りも併せて行いながら、植生の回復保全を図っていききたい、このように考えておるところでございまして、

大変あの短い時間で、舌足らずでございましたけれども、そのような取り組みを今後ともますます頑張ってやっていきたい、こういうことを申し上げます。簡単ではございますけれども、現状の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

上利

どうも、小清水さんありがとうございました。それでは奈良原の曾根村さん、座られたままで結構ですから、よろしくお願ひします。

平田

帰ったままで失礼いたします。奈良県からやってまいりました。この山焼きサミットにつきましては今回初めての参加でございます。そういうことでございますので、山焼きの現状、それからあの課題とかも踏まえます前に、少しだけ私たちの村の宣伝もさせていただきたいと思っております。

奈良県高市郡としまして、かなりまあ「そこ」と読んでいただくことが少ない訳なんです。位置的には奈良県のほぼ中央部から東の方へ上がりまして、三重県との境にある小さな村でございます。大部分が室生赤目青山国定公園の中にございまして、村の面積は47.84平方キロメートルという小さな村でございます。昔の室生火山群の噴火の跡で落ち込みました窪みにできた村でございますから、柱状節理の山々が周りを取り囲んでおられます。そういう山岳美と、それから、これらから半しげます「曾爾高原」、こういう中で自然の豊かな村ということでございます。人口は2,470人ほどでございます。世帯数800ほどの村でございます。気候的には内陸的気候でございますけれども、まあ夏は涼しく冬は暑いということでございます。

続きまして曾爾高原のことでございますけれども、曾爾高原という名前は、かなりまあ、近畿圏の方では知っていただいているとは思いますが、全国的には知名度は低い訳でございますけれども、一帯全てススキが自生しております。以前は牧場なり、また植林ブームの時には植林をされた、ということであった訳なんですけれども、今は、奈良県に、県有地となっております。そして奈良県の委託を受けながら、吉野村の村人で山焼きを行っているということでございます。焼く面積はこの秋吉台に比ぶ物がないほど少ない訳でございますけれども、面積としましては348.699平方メートル。ですから、約35町歩というほどの面積でございます。参考までに山焼きにかかります部分の金額的なものに付きましては120万ほどの金額を計上して、そして山焼きを行っております。

どういような山焼きをやっておるかということでございますけれども、この山焼きに付きましてはうちの村には9つの集落がございまして、曾爾高原のある集落の中の方々が共同体でやっていただいております。約60戸の方々が「出あい」という形をとりまして、そして昔から山焼きをやっていたいております。どんな作業をということに付きましては、まあ他の町村も同じだと思うんですけども、まず始めに9月の下旬から10月上旬くらいに「焼切刈り」というものを行います。これは防火線確保するためにございまして、周囲に植林した山林がございまして、そこに飛び火をしないということのために防火線を作る、まあ焼き切り刈りを行います。それを行った後、次には「焼切焼き」と申しまして、これは10月から11月に防火線に刈り込んだカヤを焼ききってしまう。そういうような作業を行います。そして最後に通常「山焼き」を行う訳でございます。ま、時間的には9月の下旬を予定してやっております



ですけども、なにぶんにも天候が左右しますので、なかなかその日にできないというようなことなんです。けれども、大体3月の下旬から4月の始めに焼いてしまうということです。これに付きましては乗客の方60軒で、100人輸出をいただきまして、そして安全を確保しながら、まず防火線の方を焼いてしまいます。そしてその後、内側から、まず尾根の方から、上の方から焼いていきます。そして傾斜を見計らいまして、下の方から一気に焼いてしまうという作業を行います。ですからタイミングが非常に難しいし、危ない作業ですし、生えているのが全てススキ、うちの村では「カヤ」とか言うんですが、それですので、かなりのまあ、火が炎となって風をまいて天空に昇っていくということでございます。時間は大体、3月の下旬の日曜日くらいに行いまして、10時半から大体2時間くらいで焼ききってしまうような状態です。

今現在曾爾高原も、ススキが自生している訳でありますけれども、最近ではハギがたくさん生えてきて「刈る」ということにいたしまして、また「山焼き」をいたしまして、やはり根が、茎が残ってしまいます。そんな関係で、その部分に付きまして、まあ焼ききってしまうということで、平成13年の予算といたしましては、いくらかの、ハギを焼いてしまって、ススキだけを残しているというふうなことで予算を計上しております。また、その部分に付きましては、うちの村としましてはその地域に「国立曾爾少年自然の家」というのがございまして、車の乗り入れ等に付きましては、禁止をさせていただいておりますので、そのままの形でやっていきたいと思っております。

なにもにも、昔からこの山焼きは、村の方々が伝えて、そして残していただいて、毎年美しいススキを残していただいております。村としましては、やはりこれを守って、そしてまた後世に伝えていくというようなことで考えております。またいろいろご意見をいただきたいと思っておりますけれども、簡単ですけども、報告なり、をさせていただきまして、失礼しました。

上利

前田村さんどうもありがとうございました。それでは第2回目の山焼きサミットを開催されました島根県の大田市さん、よろしくお話しします。

松村

島根県大田市からまいりました松村でございます。よろしくお話しします。あの、島根県の大田市には「三瓶山」という山がありまして、そこが草原景観が美しいということで、昭和38年に国立公園に指定されたという経過を持っているエリアでございます。

で、私が、商工観光課の人員がこうして代理でまいりましたのは、実は今年度、「新観光計画」の策定ということを行ってございまして、と言いますのも、ここ数年、私共の大田市では、この三瓶山エリアと石見銀山という昨年の11月に世界遺産登録の暫定リストに入りました場所がございまして、これは1500年代から江戸時代の1600年代の始めにかけて、銀を産出した場所でございます。その産出された場所が大田市の大森という町の「庭原」という土地だったものですから、それが海外に出ますと「ノマ銀」というふうに、結構その時代にはヨーロッパ辺りで「ノマ銀」と呼ばれた銀を大量に出したところでございます。その際によって、秀吉は太閤政を作り、そして徳川幕府の初期はその財源を石見銀山で支えたとも言われております。

ですが、そうした「観光」という産業が最近衰退しております、と申しますのは大型バスが減ってきたということが一つの要因、それから観光行動が変わってまいりまして、ということも当然消費行動も変わる訳でありまして、そのことに対応ができないということで、入込み客が減ってきております。それを向こう10年間、なんとか建て直したいということで、この1年、今日ここにも参加していただいております「緑と水の連絡会議」の高橋泰子さんにも関わっていただいておりますが、12名のメンバーによる委員会でお互いを協議していただいております。で、2月の末にはその各申書を作成する訳でありますけれども、これまで9回協議を重ねてまいりまして、通算しますと多分95時間くらいを、協議を重ねてまいりました。で、その委員構成というのは、多くの場合、関係団体の長を集めた構成になる訳でありますけれども、この12名の委員にはそうした団体の長は入れない、そして向こう10年間の消費行動をする中心世代になる人達の、いろんな各勤の人を入れましょうということで、12名の委員の平均年齢が45歳でありますから、まあ若い委員会、非常に面白い議論を重ねてまいりました。その中でやはり、私共の抱えておる三瓶高原の草原エリアというものは、温泉よりも、まず草原の美しさというのが先だると、日本人は温泉が好きですけども、温泉は島根県には「玉湯温泉」というネームバリューのいい、あちらに人が流れる温泉がございまして、やはり草原から来ていこうという議論を掲げてまいりました。

で、山焼きというのは1989年から実施しておりますけれども、その広さというのは三瓶高原の面積、草原が150ヘクタールに増えてきたのでありますが、「西の原」という場所で野焼きは今50ヘクタールくらいです。で、ここのボランティアの方々も参加されておりますが、この山焼きも観光素材にしようではないかということで、その観光素材として取り扱っていかうという議論を起してきております。ただ、従来から山焼きをする関係者、市役所でいえば農林課は、非常に危険だからそれはやめてくれ、というのが従来の立場だったんでありますが、その山焼き、野焼きも管理をきちんとすれば十分に観光素材として考えられるんじゃないかといったことで、そのことによって「草原の面白さ」というもののすそ野を広げたいという趣旨合いもございまして、

この草原というのが、皆さん方へ承知のように、放牧や野焼きをしないとどんどんその狭められていくというのは、実は私、ついここ1、2年の間に教えてもらった訳でありまして、ここにお集まりの皆さんからすればとんでもないド素人がここに出てきて話をしておる訳でありまして、ただ、その野焼きが行われた、あるいは放牧をされておる場所に、昨年は中学生が生活体験といいますが、いろいろな職場に出向いていって2日間ほど、実習をするカリキュラムが取り入れられて、中学生のグループが石見銀山でありますとか、この三瓶草原の西原にまいりました。そこで、今日この発表会でも出ておいでになります。河村さんという方の奥さんと高橋さんに講師になっていただいて、中学生に草原を案内してもらいました。そうしましたら、もちろん牛の糞があって、草原が、それこそカサで覆われていたものが、3年目、4年目になるとこんなにきれいになって、野草が新たに出てきている、その実情をつぶさに見てもらって、そのことを中学生は大変喜んでいたと思います。で、中学生以上に私も非常にそのことが面白くて、あ、これは本当に、あの、牛の糞さというものを利用、活用しながら、草原の維持するのは非常に面白いものなんだなあと思えてくることができました。

そういう経緯から、こうした「草原サミット」があるから出てこないかということも感じた経過もございましてけれども、山焼きをする、そして牛が放されて、そこに可愛い草花が咲いていく、そうした姿というのをより多くの人、あるいはより多くの子供たちに提供するのには非常に面白い素材になるのではないかなということを感じてございまして、そうしたことを含めてこのサミットにも参加させていただきまして、そういう立場で今後の観光振興にも活かしていきたいということで、ま、ご報告をさせていただきます。以上でございます。

上利

大田市さん、どうもありがとうございました。それでは山口県美祿市さん、どうぞ。

サミット

小竹

秋芳町さんとは隣、まあ地続きでございしますが、西隣の町の美祿市でございします。先ず私共の市の紹介を少しさせていただきますと、市の中心を川が流れておりまして、東半分は秋芳町さん側でもございしますが、これは石灰岩地帯でございします。西半分は石炭地帯でございまして、元々その石炭を産出するというで発達した街でございまして、この石炭が「無煙炭」という、煙やしても煙が出ない炭でございしますが、明治38年の日露戦争で船に使われて非常に活躍したということから、国が力をいれて鉄道もひかれ、炭を産出したということでもございします。ま、昭和40年代に燃料革命、石炭から石油に変わりましたものですから、復興をいたしまして、当時、従業員3,000人から4,000人家族をあわせて12,000の人口が一半におられなくなったと、適度になったということでもございします。現在は石灰岩を産出しておりますので、セメント原料として採掘して、セメント工場が稼働して産業の中心となっておりますのでございします。

先程の上利町長さんの山焼きのお話しでもございしますが、地続きではございせんけれども、下が大理石の地帯で、「於福台」というところで以前は山焼きをやっておりましたけれども、戦後開拓団の入植地として開拓されて、現在は梨の生産をしておられるというところでもございします。まあ山焼きについてはその程度のことでもございすけれども、いまれにいたしまして隣接しております山は、地下(資源)の方が高くてもの方は、まあ全然金にならないという現在でもございしますので、地下に埋まっております石灰岩の方が有効に利用されるという土地柄でもございします。最近「石炭に変わる産業」ということで(企業)誘致を盛んに致しておりますけれども、現在の情勢ではなかなかうまく回らない、苦慮しているところでもございします。以上でございします。

上利

はい、どうもありがとうございました。それでは第1回目の「野焼きサミット」を開催されました大分県の久住町さん、お願いいたします。

川越

大分県の、第1回目の大会を開催させていただきました。大分県の久住町から参りました川越と申します、本日は4名ほど参加させていただいております。本日は、この「野焼きサミット」といいますが、この大会の「火付け役」でありましたウチの山田理事が急遽来れなくなりまして、私、リリーフといいますが、全然ブルベンにもいませんでしたし、肩慣らしもしていないのに、いきなりリリーフということでもございしますが、何とかご報告を致したいと思っております。よろしくお願いいたします。

まず第1回目でお見えになった方はご存知かと思いますが、久住町がどういうところなのかというところを少しご紹介



して、それから「野焼きの現状」に行きたいと思っております。ウチの久住町というところは九州のほぼ真中に位置しております。「阿蘇くじゅう国立公園」が町の土地の約半分を占めております。人口は僅か5,000人、この間はちょっと切っておりますが、面積はものすごく広いんです。150平方キロくらいありますから相当な面積になります。久住高原は約5,000ヘクタールくらいありますが、ちょっと荒れたところとか牧草改良したところなどありますので、実際に野焼きをするというところは1,000ヘクタールちょっとくらい。そのくらいの産物を毎年野焼きをしております。人口は5,000人足らずですけれども、牛の方は全然減少しておりますんで、飼育農家は減っておりますが、牛の方は人口よりも多く8千数百頭ですがね、「7千頭を目指そう」ということで今畜産家の方が頑張っております。

野焼きについてなんですが、一昨日でしたか、ウチでは農政課というところが野焼きを担当しておりますが、今年はどういうふうにするんだとか、どこのグループがいつやるんだとかですね、あのウチでは(野焼きを)一度にはやりませんので、大体一番早いところで2月の25日ですか、次の日曜日からは始まりますが、3月の末日までに各団体ごとに分けてやります。今年産出が出ている分が23団体ありまして、先程申し上げましたように焼く面積は約1,000ヘクタールです。

「何で野焼きが必要なんだろうか」ということが先程からもちろちら出ておりますが、当初「火付け役」だったウチの山田理事の方はですね、東京生まれの東京育ちなんです。それで久住高原辺りに来たときにはびっくりなされたと思うんですけど、あの方辺りが考えておられることは恐らく、これから21世紀に向けて環境を、環境問題が主で「野焼き」ということに結び付いたのではないかと思うんですけど、私の場合は久住町に参ってもう53年経っておりますが、小さいときからですね、ウチも勿論農家なんです。昔農家だったんですが、8つか7つくらいのときから親父に連れられて久住高原に行って、昔ですから今のように機械で草を刈るのではなくて、「大鎌」って言ってですね、2mくらい

積のある大きな草があるんですけど、それで朝晩の内から刈って夕方帰ると、そして冬の寒い時期に草原に乾燥して小積んであった干草を牛にかるわせて(荷負わせて)帰ると、そういうのに連れて行っておりました。それで片道が半キロぐらいあるものですから、6つか7つのときには、もうきつくて、帰りは牛の背中に乗せてもらって帰ったとか、そういう経験もあります。そういうふうな形で、もう中学生の頃には、今度は野焼きに連れて行かれてですね、先ず広い草原を野焼きをするときに、自分とこの乾燥した草を積んでいるところ(干草の集積場所)がある訳なんですよ。その周りを「飾り焼き」というんですけど、その周りを先ず焼いておいて、後で全体を焼いたときに干草に火が移らないようにという「飾り焼き」というのをするんですけど、それは草を所有している人がやらなくちゃいけないんで、親父なんかと一緒にそういうことをやっておりましたので「例で野焼きをするんだ」とか「どうしてしなきゃいけない」というそういう感覚が全く無くなって、最近になって「ああそうか」というふうなことを覚えた訳で、牛を飼っているから当草を刈った後を「片付ける」というか、粗い草が立っているからそういうものを片付けるために焼いているんだな、程度の感覚しかなかった訳です。

まあ私なんかは「野焼き」とはそういう感覚なんですけど、今年、野焼きに「アマテアの方」というと誤解がありますが、昔からそういうふうに草原を利用されてない方が最近参加されるというような「野焼きの形態」というのが段々出来てきております。久住町にそうした団体が3つあるんですけど、先ず一つ目は第1回目の「野焼きザミット」が開かれた平成7年ですがね、そのときに地元の牛を飼っている牧野組合の方がボランティアの方を受け入れようということでそのときから始まっております。その組合はやはり120~130ヘクタールくらいを所有しておまして組合員の方も80名くらいいるんですけども、当初は「人手が欲しい」とかということじゃなくて、「都会の方たちとの交流」という形ですね、観光と言いますか交流と言いますか、そういう形で最初は「野焼きの受け入れ」をしております。それも毎年交流がなされておまして、毎年来る方はほとんど決まっておりますけど、多いときには40人、50人という方に来てもらっております。そして地元の方達と職人的な繋がりもできておましてですね、「ウチの家に遊びにおいでよ」とかですね、例えば「シイタケができたから送ってあげる」というと向こうの人が、海辺の人であれば「魚のおいしいのが手に入ったから送ってあげる」というようなことがですね、そういうふうな繋がりまで出来ているようです。

それからもうひとつのパターンは3年前から、あっ、お伺いもうちょっとよろしいですか、3年くらい前からですけど、以前野焼きをしていたところ(団体)が隣の山に延焼させてしまって損害賠償を要せられたと、そういうことでお年寄りの方も多かったのでも「こんなことならもう止めようや」ということで止めてたんです。ところが地元の4、5人の有志の

方が「これじゃあいかん」、「やっぱり野焼きをせんと草原はめっちゃくちゃになるじゃあないか」ということで立ち上がりまして、それに報道機関の方も協力していただいて新聞で「野焼きのボランティア募集」というのをやったんです。そしたらそれでやはり数十名の方が、大分市内の方が野焼きを全然やったことがない人達が集まって下さいまして、それで野焼きをやっているところもあります。これなんかは地元の方がリードしてやっているの、これからは結構と手く行くんじゃないかなというふうに思っております。

それからもうひとつのパターンは、久住山のちょうど中腹になるんですけど「坊がつる」というところがあるんです。キャンプ場なんですけど、芹洋子さんの頃で「坊がつる賛歌」というのをご存知かと思えますけど、その発祥の地なんですけど「坊がつる」というところがございまして。ここはやはり80ヘクタールくらいの広さがあると思うんですけど、もう37、8年間ですね、野焼きをなされてないんです。それまではやはり(放牧の)牛がそこまで行ってたんで地元の牧野組合の方が野焼きをしていたんですけど、もう利用しなくなったということでもっと30数年間野焼きがなされておりました。そしたら、そういう環境に関心のある方が、いろいろな方ですね、今日ここに環境省の九州地区の所長さん、国交所長さんもそこにお見えですが、環境省の方なんかも一緒になり、それから自然を守る会とか、勿論久住町、隣の九重町さんとかですね、それからある企業の方なども非常に興味が湧いて「坊がつるの環境をもっと良くしよう」と、そうじゃないと先程出て来ますような「自然の草花が無くなってしまふよ」とかですね、それからもうひとつそのときに言われたのが、元々私は消防署の出身なんですけど、キャンプに来た方が使った火の不始末で1年に何回となくキャンプ場の周囲の山火事が起こるんです。ですから山火事防止も兼ねまして「坊がつる」というところのキャンプ場の野焼きをしております。昨年からは始めましたが今年も3月24日の土曜日にやる予定にしております。これはもう完全なボランティアですね。そういう実行委員会組織を作りまして、その会長の方も勿論ボランティアです。そういう形でやっております。

そしてもう最後ですが、その入口のところにポスターを3枚掲示しておりますが、ウチは観光課の方でポスターを作ったときに、野焼き等は直接ございせんが、タイトルとして「山は天才である」、「牛は天才である」、「草原は天才である」という3枚のポスターを「天才シリーズ」として作りました。それでひとつ、そのキャッチコピーの面白いのがあるので最後にご紹介いたします。「牛は天才である」というところのキャッチコピーがですね、「牛は草を食って草原を造る。牛は高原の庭師である。牛の糞肥は有機農産物を作る。牛は久住の農夫である。」そういうキャッチコピーを入れてあります。それからもうひとつですが山の方の「山は天才である」というキャッチコピーがですね、「山は命の森を育む。山は命の水を育む。山はすべての命を育む。山

サミット

は命の母である。」と、そういうようなキャッチコピーを入れてあります。大変時間をオーバーしまして済みません。どうもありがとうございました。

上利

どうも久住前さんありがとうございました。それでは兵庫県の中岡市さんお疲れします。

野辺

私、串岡市の野辺でございますが、今回のサミットに初めて参加させていただいたところであります。実はご案内の通り、昨年は主要国のサミット(九州沖縄サミット)が宮崎で、シーガイアで開催されましたが、最近いろんなサミットの計画があちこちで出ておる訳であります。後程紹介させていただきますが私共の土地の中に「都井岬」というのがありますが、「1岬サミット」には参加している訳であります。実は先日そちらの全国サミットが佐賀県の方で行なわれたので、イベントとして、ちょっと利用させていただきたくないだろうかということで、みなさん方のお知恵を拝借したいということで、軽い気持ちで、私、参加いたしましたので、準備いたしておりますのでご理解いただきたいと思っております。

私共の串岡市は宮崎県の最南端に位置する訳でありまして、昭和28年に市制施行をした訳であります。当時4万3千近くいた人口であります。今はもう2万8千台ということになって、過疎の一途をたどっております。面積294平方キロ、その中で海岸線が77キロございまして、この海岸線のほとんどが「国定海岸公園」に指定されている訳であります。従いまして農林水産業が主産業となります。と同時に観光面での活用をしていきたいということで、その中でも特に「都井岬」という、皆様方ご承知の方もいらっしゃると思いますが、野生鳥の産地がある訳でございます。

その中でいろんなイベントを計画しております。『ジョギング都井岬』とかあるいは「火祭り」、あるいはまた「とび魚すくい」、まあそういう諸々の計画がなされている訳であります。併しの方にも第3セクターで運営しているホテル等もございまして、以前は70、80万台の入込み観光客がございましたけれども今は30万台になってしまっております。ということでまあこの「都井岬」に付きましても野焼きをやっておりますので、これらが何とか生かさないだろうかということで参加した訳であります。

まあこの「都井岬」に付きましては約500ヘクタールを牧場組合というのが運営しております。野生鳥が国の天然記念物に指定され、またソテツの自生地として「国定」ということで3,000本のソテツが特別天然記念物に指定されている訳であります。その中で今114頭の野生鳥が生息している訳でありますけれども、500ヘクタールの中の40が50ヘクタールが毎年野焼きをやっている訳でありまして、



新しい草の生成を計るといふ目的で行っております。今年は週日、2月の10日に野焼きの方は消えている訳ではあります。これもひとつ何かのイベントとして活用できないだろうかという考え方をしている訳であります。まあみなさん方のご紹介にありましたような広範囲の野焼きではございませんが、観光面で活かさせていただきたいと、まあこういう考え方を持っております。簡単ではございますが、私も特別、準備致しておりますので、以上で終わらせていただきたいと思います。

上利

串岡市さん、どうもありがとうございました。

それでは「秋吉台」のことに付きましては奥東町の清水町長さんの方からご報告をいただきたいと思っております。よろしくお願ひします。

清水

奥東町の清水でございます。秋吉台に付きましては、先程藤本町長さんの方からですね、秋吉台が出来た当時から現在に至るまでの、また現状に付きましてのいろいろなお話がございましたけれども、まあそれぞれ秋吉町と美東町が現在守っている訳でありまして、そういったことで現状の草原が保たれているというような状況であります。

現在1,500ヘクタールという数字になっておりますが、大正時代には1,700ヘクタールあったというようなことも聞いております。ですがそれも陸々、公有地と私有地にそれぞれ分けまして、造林をしてきて、相当の面積が減ってきているような状況であります。

また先程の基調講演にもありましたように、明治31年に陸軍の演習場になりまして、それからまた大正11年には第5師団の42連隊等のいろいろな問題で「寛書」等も文交しながら、多少地元にお金が入ったようなことも歴史の中で見ております。「1ヘクタールが3円とかですね、当時はそのお金がどのくらい(の価値)であったか私も判りませんが、そういったことも調べますと出てまいります。

いずれにいたしましてもこの秋吉台は特別天然記念物でもありませんし、また文化財の指定も受けておりません。この素晴らしい自然を後世に残すというのが私達の責務でもある訳で、それが農業や畜産業、先程からいろいろなお話がありましたけれども、そういった食糧によりまして保全が困難な状況へなりつつありますし、そういったことによりまして草生が変わったり、自然が変わったりしてきている訳であります。やはり台上の草を刈り、そしてそれを焼くことによって自然の網目らしさが保たれて来ているのではなからうかと想っている訳でございます。山頂にいたしましてもヒンメリにしましてもオミナエシにしましても、段々最近では茶室に敷が少なくなっているような感じがいたしております。カヤも相当伸びておりますが、これは一応畜産農家が畜舎の飼料として刈取ったり、昔のような農業の、草草を田んぼに入れるといったようなことが細々とはありますが削がれていることで、また山頂を行なうことで、素晴らしい草原景観が残されて来ている訳です。先程より申しておりますように、農業(形態も)最近変わってきたりですね、衰退してきてまして、(農業を)取り替く状況も悪くなっておりますし、畜産にしましても、段々畜産農家が減ってきてまして、台上の草もいろいろと制限を受けたりということで、「保護と活用」についていろんな問題もある訳でありますけれども、私はやはり、「刈り」そしてそれを「焼く」ことにおいて自然が保たれているのではなからうかと、というようなことも考えております。

また「保存」という観点から言えば、昔は鎌で刈っておりましたが、今は草刈り機で刈るということもありまして、作業のための林道網の整備もしていかなければいけないし、そしてまたここ秋吉台は他の草原とは異なりまして、石灰岩の多い地域でありますので、常人ではなかなかその「管理」、草刈りれないという特殊な草原であろうかとも思う訳です。

私、今思いますに、昭和40年頃、景気の良かった頃に、台上にいろいろな雑物が出来、放牧を止めたり、いろいろな状況が変わりつつあった時期に、山口県と秋吉町、美東町、そして教育委員会とで「秋吉台を守っていこう」ということでマスタープランの作成に掛かりまして、「家並みの状況はこうしよう」とか「草原はこうしようじゃないか」とか、そして「お互いを守って後世に伝えていこうじゃないか」というような「約束事」もしたことを思う訳であります。

まあいずれにいたしましても、秋吉台の「山頂」につきましては、各集落のみならず、消防団のみならずの協力によって、現在保たれているような状況でありまして、両町(秋吉、美東)としましても、経費も相当掛かりますけれども、これにつきましてはお互い力を合わせて、後世に伝えていかなければならないと、私考えておる状況であります。

まあ歴史的事項に付きましては先程お話しがありましたので、「私の意見」のようなことになりましたですけれども、発表に代えさせていただきたいと思っております。以上でございます。

ます。

上利

はい、どうもありがとうございました。

一応本日ご参加をいただきました皆様方からひと通りのご発言をいただきました。なにか補足といひますか、もつひとつ言い足りないところがあるという方に付きましては発言を求めたいと思いますが、「是非これだけは」というものがあればお願いできたらと思っております。

どうぞ。

小竹

農業のあり方も変わりましたが、老齢化が進んだということで、山焼きも一番重荷になっているのが「火道切り」ことではあるまいかというふうに観ております。

それで私共(美東市)にあります山口県畜産試験場では、試験場があります「刈原台(美東市伊佐町)」に於いて、「火道切り」を行なう範囲に牛を放牧して、牛に草を食べさせて「草刈り」の代わりにするという研究を最近始めておられます。まあ件そのものの数が現在少なくなっておりますのでどうかということもありますし、その効果についても伺っておりませんので、「如何か」というところもございましたけれども、注目しているのではあるまいかというふうに考えております。以上でございます。

上利

はい、どうもありがとうございました。

今は「火道切り」のことに付いてお話しをいただいた訳でございますが、このことにつきましてはですね、後程「分科会」の場において山口県畜産試験場の方からご報告なりご提案をいただくということになっておるように聞いておりますので、またそちらの方で皆様方とともにこの問題をご協議いただけるのではないかと考えておりますので、只今のところは「お聞きをする」ということだけで留めさせていただきますたいと思っております。

他に何かございますか。

今お話を聞きますと、やはり農業の形態が変わってきたとか、あるいは観光に活用できないかと、まあいろいろある、それぞれの地域の実状によって十分ご検討されておるやにお聞きをしておる訳であります。

まあ、今までこの「自然保護」と言いますとですね、誰の手を加えない、ただ放置をしておればというふうな、ややもすればそういう自然保護の認識があったんではないかというふうに思っておる訳でありまして、やはりこの草原といひますが、こうした草原のすばらしい景観というもの、ある程度の「人の手」を入れなければこれは維持、あるいは守っていくことができないということが、私は最近、社会に、みなさんに認知をされたいんではないかとそういうふうに



想っております。それはそれなりに今後我々もですね、この草原をどうしても先程来お話がありましたように、「後世に伝えていかなくてはならない」という我々の責務があるというふうに出ておりますし、それから、「絶滅の危機にある」というふうな種羊飼長のお話もありました。草原だけでなく、ここに生えている植物、あるいは動物なども草原が変わることによって、と、まあこういうふうなお話もお聞きをした訳であります。我々といしましては、今後皆様方と共にこの草原を守りそしてできるならば「地域の活性化」の為に活用ができれば、というふうに出ておる訳であります。

まだ、若干時間はございますが、何かご発言があれば、どうぞひとつお願いしたいと思います。

別にないようでございましたらですね、せっかくのこうしたサミットでありますので「宣言」を是非行いたいということで、一応、実行委員会の方で「案」を作っております。皆様方にお配りしたいと思いますのでご検討いただければと思っております。

〔サミット宣言案〕の配布

只今事務局サイトでですね、「宣言案」なるものをお配りを致しました。皆様方からご了解されましたならば、このシンポジウムが終わりました最後の「閉会式」にこれを発表させていただければというふうに出ております。で、それまでこの宣言案に付きまして、ご一読をしまして、ご意見等々があればお聞かせを頂ければというふうに出ております。

なお次回といいますが、次のですね、このサミットを栃本県の阿蘇町さんが「是非開催をしたい」というお話しでございます。実は「この会だ」ということでありましたが、また時間的なことでご出席されておりませんが、午後はご参加がいただけるといいうふうに出ております。従って次回のこのサミットを栃本県の阿蘇町さんが引き受けたいということがある訳でございますが、ご出席の皆様方のご了解が頂けれ

ば大変有り難いと思いますが、その辺よろしくございまして、ありがとうございます。それでは次回の開催地に付きましては、栃本県の阿蘇町さんということで一つ方向を決めさせていただきますと思います。

それでは、先程申し上げましたように宣言に付きましては、充分ご検討頂きまして「閉会式」までに、ひとつご検討いただいて、何かございましたら後々の方に、これで良かったら、ひとつそのまま「宣言案」にさせて頂ければというふうに出ております。

他に何か、せっかくの機会でございますので、よろしくご

それでは、大変「とりまとめ」も不十分で、なおこうした不慣れなものが、議長の大役をおおせつかりましたが、参加をいただきました皆様方大変細かいご協力を頂きまして一応「宣言案」までござつていけることができました。皆様方のご協力にたいして深くお礼を申し上げます。

午後は、「分科会」あるいは「シンポジウム」等々でこの草原に付きまして深く皆様方の研究成果なり、問題点が協議されるというふうに出ております。この「サミット」に付きましては、各自出席状況や準備状況も出ておりますので、一応の「おおまかな方向付け」に、とまあこういうことでありますので、今後いすれにたいしまして、「草原を守っていく」、こういうことを確信を頂いたということも議長の大役を終わりたいと思っております。皆様方のご協力深くお礼を申し上げます。以上で終わります。

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001

閉会セレモニー



閉会セレモニー

町会

それでは「草原シンポジウム2001 全国山焼きサミット in 秋吉台」の閉会式を締めさせていただきます。

閉会に先立ちまして、「全国山焼きサミット in 秋吉台」で採択されました「サミット宣言」を行ないます。

宣言者は栗原町長、清水武人様、お願いたします。

清水

サミットで宣言がまとまりましたので、皆様方にお配りしたと思いますけれども、「案」を消していただきたいと思えます。

それでは朗読をさせていただきます。

今、草原景観は存続の危機を迎えています。この危機はそのまま草原に生きる虫や草花の絶滅の危機を招くと同時に、先人達が築いてきた草原文化を根底から揺るがそうとしています。

農林業や畜産業の衰退によって、採草や放牧という利用目的が失われつつあるからです。草原景観の維持は各地域共通の問題点です。

一方で社会の進歩と高度化によって迫られ、疲労した心の癒しの場として、美しい草原には多くの人々が訪れるようになりました。人々の健康と安らぎにとって草原はかけがえのない場所となってきたのです。そこには観光、福祉、健康という新たな産業も育ちつつあります。

本日、秋吉台山焼きサミットに集う自治体は、草原景観を地域の宝、国民の財産として維持保全していくことを話し合いました。また、ともに人々の癒しの草原を管理、保全する責務も認識しながら、運営上貧窮している実状も認識しました。

今後は、機会あるごとに、こうした実状を国や国民に訴えかけ、国民の財産、地域の宝、そして援助と支援を要請しながら、草原景観の維持保全に一層の努力を傾注する事を宣言いたします。

平成13年2月17日、全国山焼きサミット、秋吉台

以上でございます。

町会

さて今回のサミットに付きまして、次回の、5回目になりますが、開催は阿蘇郡、阿蘇地域12町村でお引き受けいただくことが承認されました。

代表して阿蘇町長、川崎敦夫様よりご挨拶を頂戴いたします。

川崎

ご紹介いただきました。那本県は阿蘇郡12ヶ町村で構成いたしておりますが、町村会長をいたしておりませ、阿蘇町町長、川崎でございます。

例はともあれ、今回の「秋吉台草原シンポ」、そして「山焼きサミット」ですか。阿蘇ならば「野焼きサミット」でございますけれども、御地では「山焼きサミット」と言うことだそうでございます。まあ宣言に、そして真洲にご討議が行なわれまして、総盤を迎えることができまして、同じ草原を持つ我々といえども、限らない喜びでございます。

せっかくでございますので、お疲れのところでございますけれども、我が阿蘇のことについて若干ご報告、おつなぎ申し上げたいと思えます。

先程申し上げましたように、阿蘇郡は12ヶ町村、6町6村でございます。そしてその6町6村の、12ヶ町村の面積は119,800ヘクタール。ちょっと私も、みなさまもお判りにならないかと懸念しますが、佐賀県の半分でございます。そして香川県7割から8割分、阿蘇郡はでございます。まあそういう中で76,000人ほどの住民が生活をいたしております。そして阿蘇の草原でございますけれども22,900ヘクタール。御地秋吉台が1,300ヘクタールでございますので、約17倍の草原でございます。

先程いろいろなご討議の中にもございましたように、これは私の私見も含めてでございますけれども、ここに地域の町長さんもお見えでございますが、本業ならば、畜産、林業、等々がですね、ペイすれば野焼きボランティアも必要ない訳でございますけれども、現在はそういうのがまともにまわっておられません。従いまして5年程前に、私共の集落の野焼きの中で、草帯という集落の野焼きに、消防団も含めまして4名の方が大火傷をしました。

そのときから、今グリーンスタッフの専務もお見えでございますけれども、地元の火消しのプロの消防団でさえ火傷をするときもあるんだと、これで野焼きのボランティアなんて考えられないと懸念しておりましたけれども、育に懸念がえられませんでした。本当に高齢化して野焼きができません。ならばやはり、先程のお話しにもございましたように、この阿蘇の素晴らしい草原景観は国民の共通の財産だと言うことで、ボランティアも甘んじて、これは変な言い方でございますけれども、受けざるを得ないということで、先程の報告の通り資格者の講習会等々も聞きまして、それぞれ地元の本当の長きものはじめ、地元のプロというプロ、農家の方々もですね、この素晴らしいボランティアの技術、取組む姿勢、本当に敬服して今日までなりました。

来年はいよいよ私共の阿蘇でこのシンポジウムが朝かかります。関係各位の数多くのご参加をいただきまして、今回い

ろいろと討議されましたことが次の阿蘇の地で、問題解決に一步でも近付くようなシンポジウムにさせていただきますと、このように阿蘇郡]2ヶ即村長、そしてまた阿蘇郡民76,000人をお待ちいたしております。皆様方のお越しを心からお待ち申し上げまして、ごあいさつに代えさせていただきますと思います。ありがとうございました。

司会

熱意あられるご挨拶、誠にありがとうございました。

それでは、最後に本大会、閉会のご挨拶を、実行委員長の阿座上昌亮が申し上げます。

阿座上

みなさん、要領間に限り大変お疲れでございました。

私も相当疲れてはおりますが、まあ何とか今日まで持つて参りました。これもスタッフ一同、一生懸命頑張っていたがきて、今日の日を迎えることができました。まあこれで明日の山焼きができれば、本当に「バンザイ」と言いたいところなんです。できますよね、町長さん、是非できるよにお願ひしたいと思います。

こういった大会を、私も初めてこうした委員長という形で経験いたしました。まあ大変なものでございました。まあそういったことで阿蘇町さんにも来年度頑張ってくださいと思いますし、この草原を守る、草原の必要性を説くこの大会がですね、全国に広まり来永く続けられていく、国民の財産としての草原が国民の心の中に植付くことを願って、閉会の言葉とします。

どうもお疲れでございました。ありがとうございました。

司会

以上を持ちまして「秋さ台草原シンポジウム2001」全国山焼きサミット in 秋吉台」閉幕とさせていただきます。

みなさん、今日は朝別時から長い時間、本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました。

また来年は阿蘇でお会いしましょう。

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001

スナップ



スナップ



1. 主会場の秋吉台国際芸術村



2. 受付風景



3. 受付風景



4. 地元特産品販売



5. 参加市町村の展示コーナー



6. 山口県畜産試験場の展示



7. オープニング カルスト草炎太鼓



8. 榊本館長の基調講演



9. 分科会 事例発表者の皆さん



10. 分科会 会場の参加者からもたくさんの意見がありました。



11. 総合司会の岡田さん



12. 秋芳北中学校生徒による郷土芸能披露



13. サミット 8市町村が参加



14. サミット 8市町村が参加



15. シンポジウム



16. シンポジウム パネリストの皆さん



17. シンポジウム コーディネーターの小川さんと
コメンテーターの瀬田さん



18. レセプション



19. レセプション 各開催地の実行委員長のみなさん



20. レセプションを盛り上げる美濃長登太鼓保存会



21. レセプション 「野火」を演奏する風来坊の皆さん



22. 次回開催地のアピール



23. 同時開催された秋吉台に親しむ会による「秋吉台写真展」

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001

資 料



■ 員 料 講師紹介

●基調講演

庫本 正(くらもと ただし)

秋吉台科学博物館館長・農学博士

1936年生まれ。昭和34年に秋吉台科学博物館が開館して以来、秋吉台の研究・自然保護・数回書及活動(インタープリテーション)を続けてきました。現在秋吉台科学博物館・秋吉台管理事務所所長の他、山口県環境教育学会会長・秋吉町地方文化研究会会長・ウバーレフォトクラブ会長・秋吉台パークボランティア世話人・山口県自然保護協議会委員・宇部市環境保全協議会委員・山口朝日放送番組協議会委員などを勤めています。

専門は哺乳類学・動物生態学・沼澤学で、多数の論文がある。著書には「コウモリ―地下で眠る家からの報告」(サンタイ完出版文化賞)など多数。

●シンポジウム

佐藤 誠(さとう まこと)

熊本大学法学部教授

1944年、中畑生まれ。九州大学経済学博士。九州大学法学部、西南大学環境学大学院教授。熊本大学教育学部教授を経て法学部教授。専門はツーリズム・地域経済論。主著は「リゾート利権」芸文新書、「阿蘇グリーンストック」石風社。

国土庁・総合官庁地味環境研究所、湧水審・屋山遊科型リゾート研究会委員、環境庁・屋地づくり研究会委員、九州ツーリズム大学・ツーリズム学科長などを歴任。

1987年から阿蘇の農業復興・環境保全・阿蘇リゾートの三位一体でのグリーンストック運動を担い、95年(財)阿蘇グリーンストック設立を率いる。

高橋 佳孝(たかはし よしたか)

中国農業試験場畜産部主任研究官・農学博士

1954年福岡県生まれ。専門分野は草地生態学。1979年農林水産省に入省。中国農業試験場において草地の持続的維持管理並びに他感作用に関する研究に従事。最近は特に、三瓶山の草地維持、保全管理に関する研究を行っている。1988年より同試験場主任研究官。1997年大田市で開催された「第2回京原サミット」の実行委員を務める。1999年日本草地学会賞を受賞。

著書に「三瓶山牧野の変遷と残された記録」、
「農産物と生物多様性の保全(共著)」など。

宇佐見晃一(うさみ こういち)

山口大学農学部助教授

1956年3月29日生まれ。1978年3月 名古屋大学農学部卒業。専門は農村開発論、農業経営論。《とってまゆかいな秋吉台ミーティング》にて活動3年。

田村 昭雄(たむら あきお)

農 業

昭和4年5月生まれ。子供の頃から秋吉台に深く関わってきた。昭和16年～35年、台上でドリーネ耕作をおこなう。昭和17年～35年、台上で草刈りをおこなう。農業に活用。昭和22年には「草刈り競技会」に参加。昭和37年～平成11年5月まで秋吉台にて貸し馬業に従事。愛馬は4代に至る。時代の變遷と共にTV番組出演も多数。

小川 全夫(おがわ たけお)

九州大学大学院人間環境学研究院 教授

昭和18年台北市生まれ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了、博士(文学)。筑波大学、山口大学を経て平成10年から九州大学大学院教授。人間環境学研究院共生社会学講座初代。地域社会学担当。備前環境整備センター中央委員会(委員)、山口県中山間地域等直接支払制度検討会(会長)、日本学術会議社会学系研究連絡委員会(幹事)など。

著書に
「よださばの世界―包絡の社会学的プロフィール」(福野社)
「都市と農村の交流」ぎょうせい
「地域の活性化と福祉―高齢者のコミュニティ状況」(皇社厚生館)
「農村社会の地域政策―山口県からの提案」ミネルヴァ書房 など

瀬田 信哉(せた のぶや)

(財)自然公園美化管理財団専務理事・
日本環境教育フォーラム理事

1938年大阪市生まれ。1961年、国立公園のレンジャーになりたくて厚生省国立公園部(現在の環境省)に入省。以来環境庁自然保護局等の各課長および官務課課長(自然保護担当)を歴任。1992年に環境庁を退官後現任に至る。

「京原サミット・シンポジウム」の「生みの秘」のひとり。1993年、秋吉台で開催された自然公園大会を支援し、秋吉台保全の市民運動に大きな影響を与えた。

●分科会事例発表

松原 峯夫(まつばら みねお)

秋吉町 わくわく村村長

秋吉町において製づくりを中心の府県農家。《とってまゆかいな秋吉台ミーティング》に早くより参加、活動。平成10年、地元青原地区に地域の入と「わくわく村」を設立、以来代表を務める。

浦田 健作(うらた けんさく)

平尾台の自然を考える会

1958年生まれ。九州大学理学部地質学科卒、広島大学大学院、東京理科大学大学院修了。帰籍。東京都立大学理学部地質学科研究員。専門はカルスト・システム系、河川学。理学博士、日本洞窟学会評議員。平尾台の自然を考える会会長、カマキリ保護隊主催。

主な著書(共著)に
『平尾台の石灰洞』日本洞窟協会
『ケイビング入門とガイド』山と溪谷社
『カルスト その環境と人けとどのががわり』大明堂

春野 義一(はるの よしかず)

防長交通株式会社 取締役観光部長

昭和48年 防長交通 入社、自動車営業課観光課課長
昭和50年 防府営業所営業係長
昭和54年 小郡営業所営業係長
昭和56年 本社観光係長、大府案内所所長
平成元年 山口県観光課副所長
平成2年 防府営業所次長
平成3年 本社観光係長
平成5年 本社観光課 係長
平成10年 本社観光課長
平成12年 取締役観光部長
防長交通観光(株)株式会社 業務取締役兼専務

塩谷 信夫(しおたに のぶお)

秋吉台パークボランティアの会

1958年生まれ。
1994年4月～1997年3月 山口県自然保護協会
2000年10月～秋吉台パークボランティアの会会員

武次 房江(たけつぐ ふさえ)

ナチュラリスト・日本植物学会会員

福岡県立大学校友会、山陰史の会会員。
1992年、ロシアでの熊鷹のルーツを探る調査隊に参加、秋吉台の保全を目的に観光について考える活動を展開。

弘蔵 岳久(ひろくら たけひさ)

坊がつる野焼き実行委員会会長

平成元年、野焼きが行われる坊がつるの北西にある法華院温泉に転居。平成12年4月、同温泉の代表取締役就任。坊がつる野焼き実行委員会会長、現在2期目。

藤井 宏志(ふじい こうじ)

山口県畜産試験場 放牧管理グループ研究員

平成4年度 山口県放牧畜産試験場草地資料課勤務 4年
平成8年度 山口県畜産試験場資料課勤務 4年
平成11年度 畜産試験場放牧管理グループ勤務 2年目
現在研究員

山内 康二(やまうち やすじ)

財団法人 阿蘇グリーンストック専務理事

昭和45年より熊本での市民生協設立活動に参加。昭和52年より平成4年まで熊本のグリーンコープ熊本株式会の専務理事。平成4年より財団法人阿蘇グリーンストック設立準備の取り組みにかけわり、同年秋より準備会専務会長。平成7年財団設立により、初任専務理事に就任。現在に至る。

大滝 典雄(おおたき のりお)

熊本大学非常勤講師・環境省自然公園指導員

元、熊本県畜産試験場阿蘇支場長。熊本県自然環境保全審議会委員、朝霧地区パークボランティア代表、自然公園指導員。

川村 孝信(かわむら たかのぶ)

西の原牧野組合組合長

昭和22年1月生まれ。
大田市三浦牧野委員、昭和40年度卒業、農家に従事。南原牛の飼育冬場方式による繁殖・肥育一貫経営。

佐藤 隆幸(さとう たかゆき)

久住町稲草牧野組合

稲草牧野組合では観光部役員を務めている。地元で米、畜産販売経営を行う。また、冬は千羽鶴巡遊で久住が全国に誇る「美濃千羽鶴」の巡遊にあたってている。



池の近くにいくと、手にした笹竹を突き立てて「この竹を引き掛け」と命じ姿を崩しました。音者が竹を引き抜くと、清らかな水がこんこんと湧きだしました。

これが、井天地の由来です。以後村人は、水口(みなくち)に、井天(べんてん)様などの神々を祭り、神によって与えられた水に感謝し、輝中(こうちゅう)三軒に表えるまで止めないと誓って伝承されてきた踊りが、この別府念仏踊りなのです。

この念仏踊りは、単純素朴で、決して優美でもなければ荘厳(そうげん)でもありませんが、それだけに、祖先の生活の一端や自然の恵みに対する感謝の心を、今に伝えているともいえます。

この踊りは、昭和43年4月5日に山口県無形文化財に指定され、別府念仏踊り保存会の皆さんによって継承されていますが、本郷でも、「ふるさとに学び、ふるさとを愛する心を育てる教育」の一環として、平成3年から学校に取り入れ、今日に至っています。

別府念仏踊り

秋芳北中学校区の中に、「日本の名水百選」にも選ばれ、清らかな水がわき出ている別府井天地があります。この井天地にまつわる伝説の中に、念仏踊りの由来が、次のように記されています。

その昔、うから約1200年前の大同年間にこの村の長者が堅田(かたた)というところの林を切り開きたいと志願していました。

ある夜、夢の中に翁(おきな)があらわれ「二つの鎌で林を切り開く」ようお告げがあり、その通りに試みましたが、今度はその土地に与える水がないので困っていました。

すると、再び夢の中に翁(おきな)があらわれ「自分についてこい」と告げました。そして、今の井天



カルスト草炎太鼓 (秋芳町)

カルスト草炎太鼓グループは、昭和63年4月「地区の伝統芸能」をめぐって発足。以来「地域の伝統」をキャッチフレーズとし、町内外にかかわらす数多くの催事へ参加、委嘱してきた。また平成2年、山口県植樹祭のアトラクションで中学生150名との「百人太鼓」、平成5年、全国自然公園大会式典のアトラクションとして町内保育園児、小学生、中学生、一般の総勢350名で「カルスト草炎千人太鼓」を委嘱(秋吉台の山崩きを表現)、等々の企画、指揮をしてきた。さらに秋吉小学校では学校教育に太鼓を取り入れられ、全校児童に指導も行っている。



美東長登太鼓保存会 (美東町)

町の活性化、若者の定住、相互の親睦などを旨とし、平成2年4月に発足。町内外、県外へと数多くのイベントに参加している。

日本舞古の洞山「長登り洞山」から名前をいただき、持ち曲「那ばやし」、「洞山開眼」、「上り三郎」、「男なら」、「三宅」などがあります。

読売新聞 18年1月14日

山焼きサミット 来月、秋吉台で

北海道九州から参加

【札幌13日電】山焼きの重要性を広く知らせ、関係者の交流を図る「山焼きサミット」が、来月17、18日、秋吉台（秋吉町）で開かれる。北海道、九州、四国、中国地方などから参加者が集まる。主催は秋吉台自然環境センター。山焼きは、自然環境の保全と活用を促進する重要な手段として、国内外から注目を集めている。サミットでは、山焼きの現状や課題、最新の研究成果などを発表し、関係者同士の交流を図る。また、山焼き体験や自然観察なども行われる。参加費は無料。申し込みは秋吉台自然環境センター（電話011-832-1111）まで。

下巻新聞 13年1月20日

草原の保全と活用策をめぐり

来月 秋吉台でシンポジウム

【札幌13日電】山焼きの重要性を広く知らせ、関係者の交流を図る「山焼きサミット」が、来月17、18日、秋吉台（秋吉町）で開かれる。北海道、九州、四国、中国地方などから参加者が集まる。主催は秋吉台自然環境センター。山焼きは、自然環境の保全と活用を促進する重要な手段として、国内外から注目を集めている。サミットでは、山焼きの現状や課題、最新の研究成果などを発表し、関係者同士の交流を図る。また、山焼き体験や自然観察なども行われる。参加費は無料。申し込みは秋吉台自然環境センター（電話011-832-1111）まで。

山口新聞 18年1月23日

「草原」にこそ大きな価値

秋吉台でシンポジウム 阿座上 昌亮さん

【山口22日付】秋吉台で開かれる「山焼きサミット」に、阿座上昌亮さんが参加する。阿座上さんは、山焼きの重要性を広く知らせ、関係者の交流を図る「山焼きサミット」の開催を歓迎し、山焼きは、自然環境の保全と活用を促進する重要な手段として、国内外から注目を集めている。阿座上さんは、山焼きの現状や課題、最新の研究成果などを発表し、関係者同士の交流を図る。また、山焼き体験や自然観察なども行われる。参加費は無料。申し込みは秋吉台自然環境センター（電話011-832-1111）まで。

山口新聞 18年1月23日

草原の保全・活用を考える

秋芳で全国サミット

【山口22日付】秋吉台で開かれる「山焼きサミット」に、阿座上昌亮さんが参加する。阿座上さんは、山焼きの重要性を広く知らせ、関係者の交流を図る「山焼きサミット」の開催を歓迎し、山焼きは、自然環境の保全と活用を促進する重要な手段として、国内外から注目を集めている。阿座上さんは、山焼きの現状や課題、最新の研究成果などを発表し、関係者同士の交流を図る。また、山焼き体験や自然観察なども行われる。参加費は無料。申し込みは秋吉台自然環境センター（電話011-832-1111）まで。

西日本新聞13年2月17日

「秋吉台宣言」発表へ

きよらつ草原シンポ・山焼きサミット

「保全へ、うねり、起こそう」

首長や研究者20人結集

【西日本新聞記者のレポート】
秋吉台の草原を、今後どう保全していくのか、関係者20人が集まり、議論を交わした。16日、秋吉台の草原に、秋吉台宣言の発表を期して、きよらつ草原シンポジウム・山焼きサミットが開催された。出席者は、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人。秋吉台の草原は、かつては、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人が集まり、議論を交わした。出席者は、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人。秋吉台の草原は、かつては、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人が集まり、議論を交わした。出席者は、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人。

西日本新聞13年2月18日



秋吉台草原シンポジウム・山焼きサミットの参加者たち。会場は秋吉台の自治体。



秋吉台草原シンポジウム・山焼きサミットの会場。秋吉台の自治体。

「草原文化」目指そう

維持、保全支援呼びかけ

【西日本新聞記者のレポート】
秋吉台の草原を、今後どう保全していくのか、関係者20人が集まり、議論を交わした。出席者は、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人。秋吉台の草原は、かつては、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人が集まり、議論を交わした。出席者は、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人。秋吉台の草原は、かつては、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人が集まり、議論を交わした。出席者は、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人。

西日本新聞13年2月18日

草原の維持保全を

秋吉台で全国山焼きサミット

報告、意見発表

9自治体参加

【西日本新聞記者のレポート】
秋吉台の草原を、今後どう保全していくのか、関係者20人が集まり、議論を交わした。出席者は、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人。秋吉台の草原は、かつては、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人が集まり、議論を交わした。出席者は、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人。

西日本新聞13年2月18日

「保全に一層努力」

秋吉で全国山焼きサミット

秋吉台宣言を採択

草原は心のいやし場

【西日本新聞記者のレポート】
秋吉台の草原を、今後どう保全していくのか、関係者20人が集まり、議論を交わした。出席者は、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人。秋吉台の草原は、かつては、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人が集まり、議論を交わした。出席者は、秋吉台の自治体首長、関係者、研究者ら20人。

朝日新聞 13年2月18日



秋吉町で全国山焼きサミット 下部 議論を深め、山焼きの重要性を

【秋吉町】山焼きの重要性をめぐり、全国から集った関係者が17日、秋吉町で開かれた山焼きサミットの下部会合で議論を深めた。山焼きは、自然環境の保全や防災に重要な役割を果たしていることが改めて確認された。

下部会合では、山焼きの歴史や現状について話し合った。山焼きは、自然環境の保全や防災に重要な役割を果たしていることが改めて確認された。

朝日新聞 13年2月20日

秋吉町 あの町 この村



秋吉町は、自然環境の保全や防災に重要な役割を果たしていることが改めて確認された。山焼きは、自然環境の保全や防災に重要な役割を果たしていることが改めて確認された。

山口新聞 13年2月27日

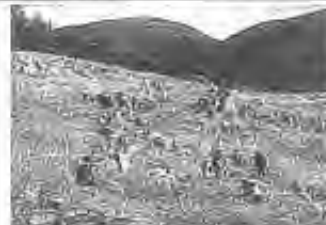


山焼き 立志式で防火帯作り

【秋吉町】山焼きの重要性をめぐり、全国から集った関係者が17日、秋吉町で開かれた山焼きサミットの下部会合で議論を深めた。

防火帯の作成は、山焼きの重要性をめぐり、全国から集った関係者が17日、秋吉町で開かれた山焼きサミットの下部会合で議論を深めた。

山口新聞 13年2月25日



「山焼き準備って大変」 立志式で防火帯作り

防火帯の作成は、山焼きの重要性をめぐり、全国から集った関係者が17日、秋吉町で開かれた山焼きサミットの下部会合で議論を深めた。

山焼きの重要性をめぐり、全国から集った関係者が17日、秋吉町で開かれた山焼きサミットの下部会合で議論を深めた。

山口新聞 13年2月18日

山焼きの重要性をめぐり、全国から集った関係者が17日、秋吉町で開かれた山焼きサミットの下部会合で議論を深めた。山焼きは、自然環境の保全や防災に重要な役割を果たしていることが改めて確認された。

「国の財産」要請へ 草原シンポジウム山焼きサミット | 秋吉台 全国から300人討論



秋吉台で開かれた山焼きサミットの下部会合の様子

山口新聞13年2月13日



草原に春呼ぶ炎

春の訪れを告げる伝統的行事が、山口市の吉田地区で13日、14日の両日、約100人の参加者で実施された。春の訪れを告げる伝統的行事が、山口市の吉田地区で13日、14日の両日、約100人の参加者で実施された。

この行事は、山口市の吉田地区で13日、14日の両日、約100人の参加者で実施された。

山口新聞12年12月18日

秋吉台「山焼き」の防火帯



24日のボランティアを募集

秋吉台「山焼き」の防火帯づくりのボランティアを募集します。期間は12月24日（土）の予定です。お問い合わせ先は、秋吉台「山焼き」実行委員会。電話：083-822-XXXX。お問い合わせ先は、秋吉台「山焼き」実行委員会。電話：083-822-XXXX。

「火道切り」準備は大変

高齢化で人手足らず

美穂・秋芳町

秋吉台「山焼き」の防火帯づくりのボランティアを募集します。期間は12月24日（土）の予定です。お問い合わせ先は、秋吉台「山焼き」実行委員会。電話：083-822-XXXX。

山口新聞13年1月21日

防火帯づくりキツイ、ならば…

牛の舌で草を刈ろう



28日に火入れ実証試験

防火帯づくりキツイ、ならば… 秋吉台野焼き 昨夏から放牧、成功

秋吉台野焼き 昨夏から放牧、成功

西日本新聞13年2月18日

放牧牛が草食へ「防火帯」



山焼き延焼 もく大丈夫

山焼き延焼もく大丈夫

草刈り省力化へ効果実証

草刈り省力化へ効果実証

山口新聞 13年2月5日

秋吉台の道しるべ
秋吉台の道しるべ

「放牧」でも大丈夫

【秋吉台】火入れで実証確認



秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、火入れが行われている様子。

秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、火入れが行われている様子。この取り組みは、地域の自然環境を保護し、観光資源を維持するために実施されている。

山口新聞 13年3月13日

秋吉台の道しるべ 「良悟松」を復活へ

苗木50本を植樹

秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、秋吉台の道しるべ「良悟松」を復活させるべく、苗木50本を植樹した。この取り組みは、地域の自然環境を保護し、観光資源を維持するために実施されている。

秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、秋吉台の道しるべ「良悟松」を復活させるべく、苗木50本を植樹した。この取り組みは、地域の自然環境を保護し、観光資源を維持するために実施されている。



秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、苗木を植樹している様子。

山口新聞 13年2月20日

秋吉台、旧往還の道しるべ

「良悟松」復活させよう

秋吉で住民計画



秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、住民参加による植樹祭が行われている様子。

秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、秋吉台の道しるべ「良悟松」を復活させるべく、住民参加による植樹祭が行われた。この取り組みは、地域の自然環境を保護し、観光資源を維持するために実施されている。

秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、秋吉台の道しるべ「良悟松」を復活させるべく、住民参加による植樹祭が行われた。この取り組みは、地域の自然環境を保護し、観光資源を維持するために実施されている。

中国新聞 13年3月8日

「良悟松」を復元 記念植樹参加を

秋吉のグループ

秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、秋吉台の道しるべ「良悟松」を復活させるべく、記念植樹参加を呼び掛けている。この取り組みは、地域の自然環境を保護し、観光資源を維持するために実施されている。

秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、秋吉台の道しるべ「良悟松」を復活させるべく、記念植樹参加を呼び掛けている。この取り組みは、地域の自然環境を保護し、観光資源を維持するために実施されている。

秋吉台の道しるべを復元する取り組みの一環として、秋吉台の道しるべ「良悟松」を復活させるべく、記念植樹参加を呼び掛けている。この取り組みは、地域の自然環境を保護し、観光資源を維持するために実施されている。

野 火

詞・曲 吉屋康男

※風にあおられ おびになれ
風をはらめ 地を焦がせ

冬枯れの野に 走る炎
春待つ大地の ひとつのいとなみ
芽吹き of 春に 萌えるおもい
うなれよ炎 大地をはって

※(くりかえし)

草木が燃えて 風を起こし
大地が燃えて 雲を呼ぶ
草木が燃えて 雨を起こし
大地が燃えて いのち芽吹く

※(くりかえし)

※(くりかえし)

焼け跡に 白き墓標
太古のいのち この地に眠る
幾千もの 白き墓標
太古の風は 炎によみがえる

※(くりかえし)

※(くりかえし)

秋吉台草原シンポジウム2001/全国山焼きサミットin秋吉台

主 催
秋吉台草原シンポジウム・サミット実行委員会

後 援

環境省、山口県、全労済山口県本部、中・西国環境教育ネットワーク、社団法人 山口県観光連盟、財団法人 山口県文化振興財団、
西日本洞窟潜水研究会、秋吉台エコ・ミュージアム、秋吉台観光協会、美東町観光協会、秋吉台商工会、美東町商工会、
秋吉台科学博物館、財団法人 秋吉台家族旅行村財団、株式会社 防長トラベル、
秋吉台ロイヤルホテル秋吉館、山口秋吉プラザホテル、秋吉台ユースビレッジ、国民宿舎秋吉台、国民宿舎秋吉台若竹山荘、
NHK山口放送局、KRY山口放送、TYSテレビ山口、YAB山口朝日放送、朝日新聞社、共同通信社、産経新聞、時事通信社、
中国新聞社、日本経済新聞社、西日本新聞社、毎日新聞社、山口新聞社、読売新聞西部本社

秋吉台草原シンポジウム 全国山焼きサミットin秋吉台報告書

2002年3月31日発行

発行所 / 秋吉台草原シンポジウム・サミット実行委員会

連絡先 / 山口県美祿郡秋吉町秋吉広谷
<http://www.ymg.urban.ne.jp/home/kanusuto/index.html>

印刷所 / 瞬報社写真印刷株式会社

(本書子を引用する時には出典を明記して下さい)

秋吉台草原シンポジウム2001
全国山焼きサミットin秋吉台

AKIYOSHIDAI
GRASSLAND
SYMPOSIUM
2001 2.16^{Fri.}~18^{Sun.}

報告書